

高齢化社会における
サラリーマンシニアの社会参加に関する研究

平成16年3月

財団法人 シニアプラン開発機構

はじめに

財団法人シニアプラン開発機構はサラリーマンの生活と生きがい、およびサラリーマンの生活のベースとなる企業の雇用制度に関する各種の調査研究を行なっている。

当財団では過去 10 年間に於いて「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」を実施したが、そこでは少子高齢化の進展、雇用環境の変動等による社会・経済環境の変化は、そのライフスタイル、時代環境の変化とともにサラリーマンの生活と生きがいの多様化の進展を予測させた。

そのような多様化の中で、家族、職場、地域社会などといった「場」に帰属する個人のかかわり方にも変化が見られている。少子化・高齢化は家族の世帯構造に変化をもたらし、また終身雇用や年功制を柱とする日本型雇用慣行の変動は会社と個人の関係にも影響を与えた。そうして個人は新たな社会とのかかわりを求め、その中で自己実現を見出そうとしているように思われる。

今回、そのような観点から社会参加を新たなネットワークの場として捉え、個人のライフコースを念頭に高齢社会におけるサラリーマンシニアの社会参加に関する研究を立ち上げることとした。

当財団の「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」では、「長寿化により、より長くなる壮年期を前提とした仕事、家庭、その他の活動を並列できる自己実現性の高いライフコース形成」、「仕事・会社、家族・家庭以外の新しい社会のネットワーク形成」の方向性が示唆された。それは、伝統的な地域社会での個人と地域のかかわりが薄れる一方で、職場を離れた新たな人間関係の場として、NPO、ボランティア活動など自らの嗜好と意識、価値観を軸とした社会が近年急速に拡大していることなどに認められる。

高齢化社会のもとで、より長くなる壮年期、生活・就業面の多様性を前提に個人化志向が高まる中、個人はより自己実現に向けた自立とともに、新たな連帯が求められるようになった。今回の研究では、当財団の一連の「生きがい研究」に続き、今後サラリーマンシニアが社会の一員として生き生きとした人生を送る為、社会参加がサラリーマンシニアにとって新たな自己実現の場としての可能性を検証したい。

最後に当研究、調査に多大なご協力を頂いた方々に改めて感謝の辞を捧げる次第である。

平成 16 年 3 月

財団法人シニアプラン開発機構

**「高齢化社会におけるサラリーマンシニアの社会参加に関する研究」
研究会メンバー**

- | | | |
|-----|-------|-------------------------------------|
| 座長 | 前田 信彦 | 立命館大学産業社会学部 助教授 |
| 副座長 | 安藤 究 | 鹿児島国際大学福祉社会学部 助教授 |
| | 藤本 隆史 | 立教女学院短期大学 非常勤講師 |
| | 斉藤 真緒 | 立命館大学 衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー |
| | 福地 潮人 | 立命館大学 産業社会学部 非常勤講師 |
| | 池田 心豪 | 東京工業大学大学院博士後期課程 (社会理工学研究科) |
| | 河野 望 | 立命館大学大学院博士後期課程 (社会学研究科) |
| | 佐藤 仁之 | 厚生年金基金連合会 上席調査役 |
| | 田村 健一 | 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員 |
| | 吉岡 徹翁 | 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員 |
| | 喜田 勇作 | 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員(～平成 15 年 9 月) |
| | 沖 輝久 | 財団法人シニアプラン開発機構 主任研究員(平成 15 年 10 月～) |

目次

はじめに

目次

第1部 研究の概要	1
1. 研究の目的と枠組み	3
2. 要約と示唆	6
第2部 シニア期の社会参加	13
第1章 家族と社会参加	
1. NPO活動と家族	15
(執筆：鹿児島国際大学福祉社会学部 助教授 安藤 究)	
2. 子育てと世代間関係の変容	25
(執筆：立命館大学 衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー 斉藤 真緒)	
第2章 仕事と社会参加	
1. 働き方の変容とボランティア活動	39
(執筆：立命館大学産業社会学部 助教授 前田 信彦)	
2. 職業生活とボランティア・ワーク	45
(執筆：東京工業大学大学院博士後期課程 池田 心豪)	
第3章 社会参加と地域社会	
1. 社会参加活動とパーソナル・ネットワーク	67
(執筆：立教女学院短期大学 非常勤講師 藤本 隆史)	
2. 子育て期女性の社会参加	87
(執筆：立命館大学大学院博士後期課程 河野 望)	
第3部 アンケート調査結果	103
グループインタビュー記録	137
調査データ	195

第 1 部 研究の概要

1. 研究の目的と枠組み

2. 要約と示唆

第1部 研究の概要

1 研究の目的と枠組み

(1) 研究の目的

日本の社会は、戦前の農村型「地域」を中心としたものから、戦後の高度成長期を境に「職域」を中心とするものに移行したが、近年、終身雇用と年功序列を柱とする日本型雇用慣行の動揺や生活意識の変化により、個人と職場との関わり方についても変化の時期にさしかかっている。それともなあって、人々の働き方やライフスタイルにも変化が見え始めており、従来のように仕事のためのキャリアを追及するよりも、むしろ仕事も生活も大事にしながら積極的に社会に参加しようとする傾向も見られる。また一方では、都市型の生活スタイルは、従来の伝統的な地域社会との関わりを希薄化させた。より長くなる壮年期、生活就業面の多様性の中で、個人は自己実現に向けた自立とともに新たな連帯を求め、そこでは、従来の地域、職域を越えたNPO、ボランティア活動など自らの志向と価値観を軸とした新たなネットワークに基づいた社会参加が行われようとしている。

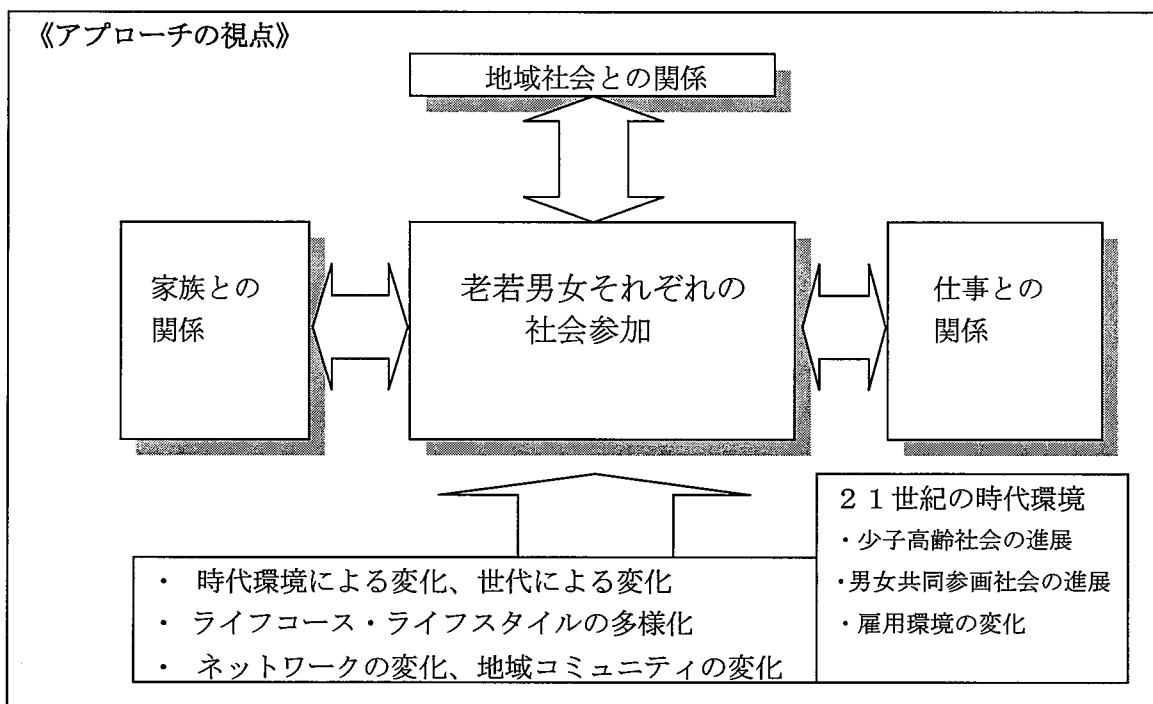
平成16年2月には、NPO法人は15,000団体を超え、ボランティア活動団体は全国的な広がりを見せている。少子化、高齢化による社会の環境の変化は顕著であり、世帯の家族人数の減少は、従来では各家庭内での問題として捉えられていた介護や育児についても外部のケアを必要とする社会になろうとしている。急速な変化を迎える社会の中で、NPO団体を始めとして新たなコミュニティの発生は、新たな可能性をもたらす社会の関わり方を生み出したといえる。

当研究では、老若男女それぞれの社会参加活動の実態を捉え、彼らの活動がどのような状況、ネットワークの下で始められ、周りとの関係の変化を通じその担い手である個人が新たなコミュニティの活性化にどのように結びついていくのか検証するとともに、シニアの社会活動のあり方を研究することを意図するものである。

(2) 研究の枠組み

シニアの社会参加を考えるにあたり、まず、老若男女それぞれの社会参加の実態を「家族との関係」、「仕事との関係」、「地域社会との関係」の各側面からみる。さらに時代や世代及びライフコース・ライフスタイルを視点にその変化を捉え、ネットワークの変化、地域コミュニティへの影響を検証する。社会参加する人々の行動、意識、周りとの関わり方を捉えることで、彼らの生き方がどのように変わってきたのか、また、社会参加を行うことで、周りとの関係がどのように変化したかなどの実態を捉える。そして、生きがいや働くことの意味を考えながら社会参加を可能にする条件を探っていきたいと考える。

サラリーマンにとって「定年退職」は一つのターニングポイントであるが、高齢化、長寿化とともに定年後は人生の余禄ではなく、新たな通過点であるとも言われている。個人と地域の関わりが薄れる一方、個人がそれぞれの好み、関心に応じて主体的に活動したいという志向や社会の一員として役立ちたいという意識の高まりとともに、今後ますますシニアの社会参加が注目されていくのではないかとと思われる。



<1> 調査の枠組み

前述の目的と枠組みに基づき、本調査においては下記に示すとおり「家族との関係」「会社との関係」「地域社会との関係」のそれぞれの関係の側面からアプローチをおこなう。

①家族との関係

社会参加した動機、活動を通じ自分自身の変化、活動に対する家族、親族、地域の理解などを調べることにより従来の家族関係、地域関係がどう変化しているのかを考える。

特に子育てをめぐる環境を捉えながら、子育てをめぐる祖父母と家族の関係、役割の変化、また、子育ての家内的分業から社会的分業という観点から、子育て支援の担い手としてシニアの次世代育成への主体的関与の可能性を考える。

②仕事との関係

今日、生活の中で「働く」ということについて考えるとき、従来の市場労働もボランティア活動やNPO活動も、社会で何らかの役割を担う活動という意味では、同じ「労働」と見ることができる。ここでは、今日芽生えつつある新たな職業意識に着目し、この意識と社会参加活動との関係を分析、社会参加活動が職業生活においてもつ意味を考える。また、さらにこのような社会参加活動としての「労働」が個人のライフコースの中に、一つの選択肢として組み込まれていく可能性も検討する。

③地域社会との関係

地縁に基づく従来型の地域社会の関係は希薄化しており、代わって自分の好みや関心、価値観を同じくする新たなネットワークに基づくボランティア団体やNPO団体などの連帯関係は、地域社会でのネットワークの橋渡しの機能を果たし、それは新たな公共性の意識を生み出そうとしていると思われる。そこにおけるボランティア団体やNPO団体の役割、社会活動参加者のパーソナル・ネットワークの関り方を通じ、社会参加活動の地域社会における新たな位置づけを考える。

< 2 > 調査方法

調査の枠組みに基づき、以下の①アンケート及び②グループインタビューから個人の社会活動の実態と意識の調査を行なった。アンケート調査では社会参加活動の現状を定量的に把握するために、また、インタビュー調査では、アンケートの枠組みでは捉え切れなかったリアリティを取り出すことを目的とした。

①アンケート調査

a. 調査対象者と標本数

特定非営利活動法人（NPO法人）ニッポン・アクティブライフ・クラブ（NALC）のスタッフ、活動会員 11,518 人に対し、2,400 人を抽出した。（団体の内容、特性等については、第 3 部アンケート調査結果をご参照）

NALC は、全国に 89 ヶ所の拠点をもつ高齢者を中心とした時間預託制度を活用した会員相互扶助のボランティア団体である。その構成上年齢構成に偏りが見られるものの、全国規模で多様な参加者を含んでおり、男女の比率にも極端な偏りはない。本調査の目的である NPO 団体の参加者に対する生活や意識、ライフスタイルを把握できるとして選定した。

- b. 調査実施方法 郵送配布・郵送回収法（無記名）
 c. 調査実施時期 平成 16 年 1 月 5 日～平成 16 年 1 月 19 日
 d. 調査実施協力 特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ
 e. 調査分析委託 社団法人 中央調査社
 f. 回収結果 有効回収数 1,351 件、有効回収率 56.3%

②グループインタビュー調査

- a. 実施時期 平成 15 年 10 月～平成 16 年 1 月

〔1 回 2～3 時間のグループインタビューを計 6 回（36 名）実施〕
 代表的な活動目的の団体を選定し、それぞれの社会参加の実態を調査した。

b. 対象先

	グループ団体名	主な活動	インタビュー対象
1	団体リーダー対象		・NPO 法人手をつなご（子育て支援） 1 名 ・NPO 法人じょいんと（障害児支援） 2 名 ・NPO 法人生きがいの会（介護・介助） 1 名 ・子育てたんぽぽ（子育て支援） 1 名 対象：団体リーダー 計 5 名
2	NPO 法人びーのびーの	子育て支援	代表、スタッフ 7 名 対象：女性（30～40 代）－子育て活動
3	NPO 法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ	介助・子育て支援 時間預託	本部 常務理事他 3 名 対象：団体本部スタッフ－理念、組織、
4	NALC 丹波	子育て支援	事務局長、スタッフ 7 名 対象：男女（50～70 代）－地方の活動
5	NPO 法人流山ユー・アイネット	介助・介護 家事支援	事務局長、スタッフ 7 名 対象：男性（50～60 代）－退職サラリーマン
6	川崎おやじ連	地域活性	・おやじの会「いたか」代表他 3 名 ・「おやじ考」代表他 2 名 ・「ま・いい会」代表 1 名 ・なごみ中野島おやじの会 1 名 計 7 名 対象：男性（40～60 代）－現役サラリーマン

*各団体の紹介、及びインタビューの内容は、後記グループインタビュー記録をご参照。

2 要約と示唆

(1) 家族と社会参加

少子化、高齢化による社会環境の変化は顕著であり、人口構成の高齢化は、従来の世代関係にも変化をもたらしている。ここでは、社会参加活動が世代間関係に与える影響を考察する。特に子育てをめぐる環境を捉えながら、子育てをめぐる祖父母と家族の関係、役割の変化、また、子育ての家内的分業から社会的分業という観点から、子育て支援の担い手としてシニアの次世代育成への主体的関与の可能性を考える。

<1>NPO活動と家族

本稿では、NPO活動と家族の関係を考える一つの基礎的資料として、「NPO活動のための時間」と「孫と過ごす時間」の配分に関する検討をおこなった。

調査対象者が実際にNPO活動に参加しているという条件を考慮しなければならないものの、「孫と過ごしていれば幸せ」という典型的な祖父母のイメージとは異なり、約60%のインフォーマントが、孫と過ごす時間よりもNPO活動の時間を優先するという回答をおこなった。

「NPO活動のための時間」を「孫と過ごす時間」よりも優先するという志向は、何らかの要因で孫との関係が希薄であることの結果という解釈も、可能性としてはあり得るだろう。「孫と過ごす時間」に実質的な意味を見出せないのが、結果的に、「NPO活動のための時間」を優先しているということである。この場合の祖父母像は、「孫と一緒にいれば幸せ」といった、伝統的なそれとなる。

しかし分析の結果、伝統的なイメージとは異なった祖父母のスタイルが浮かび上がってきた。「NPO活動のための時間」を「孫と過ごす時間」よりも優先している祖父母は、孫との充実した関係が行動レベルで存在しており、孫に対する主観的な親密感も高い。「孫との関係に意味をみいだせず、その代替としてNPO活動にコミットする」ということではなく、「孫は可愛く、孫と一緒に過ごす時間は有意義であるが、『孫と一緒にいられれば十分である』というわけではない」という祖父母像を読み取ることができる、ということである。

それゆえ、就業女性の子育て支援の1つの方策として高齢者の「活用」を試みる場合にも、伝統的な祖父母のイメージの下で、高齢者自身の「孫育児」への限定が生じないように注意する必要があるだろう。現実にはこれまでの祖父母像とは異なったスタイルの祖父母が層として出現しつつあり、また、特に女性に関しては、「自身の孫育て」ばかりを促進する試みは、生産労働人口の女性の家族外での活動の促進（＝娘の就業）を、非生産労働人口の女性（＝母親）の家族領域への封じ込めにおいて実現するという性格を帯びる可能性がある。この可能性に関しては、これまで行われてきた高齢者の社会参加を促進する多くの努力と対立する危険性という点で、留意が必要であると思われる。

<2>子育てと世代間関係の変容

人口構成の高齢化に伴って、今後世代間関係の問題はますます重要になってくると予想される。高齢者は、一方的な支援を受ける側ではなく、他世代を支える担い手になりつつある。ここでは、シニアの社会参加活動を通じて、そこでの人間関係、とりわけ他世代との関係―世代間関係―がどのように変化しつつあるのかに注目する。

中高年層を中心とするボランティアの全国組織であるナルク（ニッポン・アクティブライフ・クラブ）の一支部（ナルク丹波）でのグループインタビュー調査を手がかりとしながら、地域子

育て支援を通じた新たな世代間関係創出の試みが、これからの世代間関係の有り様にどのようなインプリケーションをもちうるのか、検討を行なった。

子育てを通じた世代間関係は、地域社会を基盤とする世代間関係が脆弱化し、家族内へと縮小化する傾向にあり、手段的援助だけではなく情緒的援助という点においても、祖父母は重要な育児資源としての役割を果たしている。しかしその一方で、〈家族内の世代間関係〉固有の関係の難しさや、実際の資源ネットワークの空洞化の進行という問題も浮上している。ここに再度、〈地域の世代間関係〉が子育て資源として登場するポテンシャルがある。本稿では、〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉とを、一義的な互換関係として捉えるのではなく、〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉との間の相互作用に焦点をあてた。

調査対象となったナルク丹波は、農村部初の支部として設立された。伝統的な地縁・血縁に基づくネットワークの拘束力の強い農村部において、ナルクのようなボランティアや NPO を通じた社会参加活動が、従来のネットワークとは異なる新たな人間関係の創出を試みる場合、多くの障害に直面する。しかし、こうした農村部において先鋭化している伝統的なネットワークとの軋轢は、農村という地域固有の問題として矮小化されるべきではない。むしろ、ボランティアや NPO 活動といった新しいネットワークが直面する、「ニューシステムとオールドシステム」の併存あるいは協働の模索に通底する課題として位置づける必要がある。

ナルク丹波は、丹波地域でも増加傾向にある核家族を中心とした子育てニーズに目を向けた活動として、三世代交流・子育て支援活動「あそびのひろば」を開始した。またそのほかにも、児童の送迎活動など、伝統的なネットワークが強力な農村部において、ニッチニーズとなっている子育てに関して、〈地域の世代間関係〉を発揮した活動に取り組んでいる。こうした〈地域の世代間関係〉を基盤とする子育て支援は、ナルク丹波の参加者の楽しみの一つとなっていると同時に、自分自身の子育ての振り返り・相対化のきっかけともなっている。ナルク丹波での活動が、実際の孫や子どもとの関係—〈家族内の世代間関係〉—にも影響を及ぼしている様子が確認できる。しかしその一方で、インタビューの参加者たちは、今日の子どもや子育てに対する懸念・不安も同時に感じている。ここに、世代間における価値観のズレの問題が浮上する。近年、祖父母を対象にした「祖父母学級」が登場してきているが、こうした子育てに関する世代間のズレ・対立を、〈家族内の世代間関係〉、とりわけ祖父母の側の関わり方（スキル）の問題としてのみ捉えるのではなく、むしろ、子育てに関する世代間の協力関係の新しい萌芽として捉える必要性がある。〈地域の世代間関係〉が、〈家庭内の世代間関係〉の「緩衝剤」としての機能を担っている場合がある。そう言う意味においても、子育てにおける〈地域の世代間関係〉が今後果たしうる可能性は非常に大きいと言えるだろう。

(2) 仕事と社会参加

右肩上がりの高度経済成長を支えてきた経済・社会の枠組みは大きな変化を余儀なくされており、とりわけ年功序列や終身雇用などの日本型雇用慣行の変化は顕著であり働き方に対する価値観にも変化の兆しが見え始めている。ここでは、働き方の変容と社会活動の位置づけ、および今日の職業生活における社会参加活動のもつ意義について考察した。

<1>働き方の変容とボランティア活動

これまでの日本的雇用慣行においては、会社中心の人間関係があり、サラリーマンの多くは会社を基盤とする共同性に組み込まれ、家庭生活や地域生活の形成と切り離されてきた。しかし近

年の日本的な雇用慣行の「ゆらぎ」の過程でサラリーマンの多くは、会社・職場以外の新たな共同の場の構築を必要としている。日本的雇用が変化し「個」としての労働者が出現する中で、人々の生活の「共同性」は果たしてどのように再構築されるのであろうか。

共同性再構築の一つの可能性は、NPO（非営利組織）活動を通じた人々との出会いや「つながり」である。実際、サラリーマンであっても、自分と社会とのつながりを、「会社」の人間関係ではなく、ボランティア活動を通して地域生活におけるネットワークの中に見いだす人々が増えている。NPOは経済的報酬のない（少ない）ボランティア活動によって支えられるものであるが、やりがいや人々のつながりを生み出す社会参加の手段として広く市民に受け入れられつつある。

このようなNPO活動を通じた人々のネットワークや共同性の構築の条件の一つは、ライフコースにおける多様性であろう。実際すでにEU主要国においては、子育て期においては家庭生活との調和のとれた働き方、高齢期への移行期においては、早期引退の廃止と部分的・選択的引退という、新たな働き方が制度的にも構築されつつあり、多様なライフコースを選択可能にする政策展開がみられる。これは性別や年齢あるいは育児や介護などの家族的責任(family responsibilities)の有無にかかわらず、すべての人が仕事(work)を通して社会参加できるよう、ライフコースの中で余暇、教育、ケアといった生活課題に対応した労働時間の再構築・再配分を目指すものである。

一方、日本における中高年の労働の諸相を振り返ってみると、政策レベルにおいては、高齢労働者の転籍や雇用延長などが促進され、企業を高齢者就業の受け皿とする傾向が強い。しかし、日本的雇用が変化をとげる中で、働き方やその意味をより包括的に捉え直し、企業で雇用される働き方のみならず、アクティブ・エイジングを前提とした若年期から高齢期までの多様なキャリア形成を支援する必要があるだろう。具体的には、欧州の労働市場政策の改革にみられるように、教育、訓練、労働、ボランティア、ケア（育児・介護）のバランスを考慮し、個人のライフコースにおける時間の再編成を念頭に置いた労働市場政策が必要である。これは学校卒業から定年退職まで一つの企業で働く職業生涯のみならず、NPOにおけるボランティア活動をライフコースの中に積極的に位置づけていくことをも意味している。とりわけ高齢者の生活・職業キャリアを考える上での重要な政策的視点は、雇用（会社で雇われて働くこと）だけが仕事ではなく、NPOや起業家などのもう一つの（オルタナティブな）働き方を、制度的にも積極的に位置づけるということであろう。

このような議論を踏まえて、ライフコース＝職業生涯における働き方の見直しを念頭に、労働時間の短縮を進めること、またペイド・ワークとアンペイド・ワークとの調整が可能な労働時間の選択の柔軟化、新しい労働観に対応した制度の構築、さらに柔軟な働き方（の組み合わせ）への支援という福祉国家の枠組みの再構築が提案される。

<2> 職業生活とボランタリー・ワーク

「労働」という観点から社会参加活動をとらえることにより、今日の職業生活において社会参加活動がもつ意義を考察した。考察にあたり、NALCのアンケート調査と「流山ユー・アイネット」及び「川崎おやじ連」のインタビュー調査から、それぞれに知見を得た。

NALCアンケート調査から得た知見は次のように要約できる。

① 《職業意識の基本的傾向》

男性を一家の稼得者とする「男性役割」への支持が82.9%でもっとも支持されている。その一方で、賃金や報酬よりも仕事のやりがいを重視する「脱経済主義」、企業や組織に依存しない働き方を重視する「脱組織主義」、高い社会的地位や収入の獲得よりも社会に役立つことを重視する「社

会貢献志向」といった、新しい職業意識もそれぞれ約70%あり、高い水準で支持されている。

② 《職業意識の構造》

性別・職業の有無を問わず、「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」は相互に正の相関がある。その一方で、「男性役割」は、男性や無職女性において、就業を社会の一員として「一人前」の資格とみる「職業市民主義」と正の相関がある。有職女性では、「男性役割」と「脱経済主義」が正に相関し、「職業市民主義」と「脱組織主義」と正の相関がある。相関係数は性別や職業の有無により異なるが、「男性役割」と「職業市民主義」を軸とする、旧来型の職業意識と「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」を軸とする新しい職業意識が並存している。

③ 《職業意識と活動の意味づけ》

性別・職業の有無にかかわらず、活動を「社会的責任」を果たすものとする意識と職業意識の「社会貢献志向」に正の相関がある。職業において他人や社会に役立つことを重視する意識が、NALCの活動においても社会的責任感と結びついている。また、性別・職業の有無によって、それぞれ異なった側面で職業意識と「活動の意味」は相関している。このとき、無職女性はやや異なる傾向をもっており、「男性役割」と「関係形成」・「個性発揮」に正の相関がある。その一方で、無職女性も含めてどの層でも、「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」といった新しい職業意識が、活動の意味づけと結びついている。

④ 《職業意識とNALCへのコミットメント》

性別と職業の有無によって違いがある。無職女性は、ここでも他とやや異なる傾向をもっており、「男性役割」と「活動内容のやりがい」に正の相関がある。しかしその一方で、無職女性も含めて、どの層においても、新しい職業意識がNALCへのコミットメントと結びついている。

また、「流山ユニー・アイネット」・「川崎おやじ連」調査からの知見は次のように要約できる。

① 《家族がきっかけ》

家族との関係が参加する重要なきっかけとなっており、家庭生活が無視できない生活関心であることを示唆している。また、活動への参加によって家事参加が高まるなど、家族との関係にも良い影響を及ぼすこともある。しかしそれだけでなく、人的ネットワークが主たる参加経路となっていることを考えるなら、男性は、家族を除くと仕事を離れた社会的ネットワークがないことも関係していると考えられる。

② 《「やらされる忙しさ」から「やる忙しさ」へ》

有職者においては、仕事にも社会参加活動にも積極的に取り組むマルチな生活関心が、生活にメリハリを生んでいる。そして、退職者も含めて、仕事を離れても「忙しい」ことは、参加者の生活の特徴づけるキーワードである。そして、自ら進んで役割を担う「やる忙しさ」にもとづく生活を構築するうえで、自発的に社会的役割を担う、ボランティアな活動は重要な機能を担っている。

③ 《企業社会の論理の相対化》

活動が企業と異なる論理をもつことを積極的に評価し、企業社会の論理を相対化する視点が養われる。そして、自由で自発的な参加というボランティアの論理を重視しながらも、社会的責任という点では企業での仕事と同等なものとして活動をとらえる意識もある。

(3) 社会参加と地域社会

ボランティア活動の活性化は、地域社会における人的ネットワークとその社会的な連携力を豊かなものにする効果をもち、それは地域社会の安心・安全・安定などの各面に好ましい成果をもたらすと共に新たな公共性の意識を生み出そうとすると思われる。そこにおけるボランティア団体や NPO 団体の役割、社会活動参加者のパーソナル・ネットワークの関り方を通じ、社会参加活動の地域社会における新たな位置づけを考える。

<1> 社会参加とパーソナル・ネットワーク

ここでは、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高める」ソーシャル・キャピタルの議論をベースに、社会参加活動への参加と参加者のパーソナル・ネットワークの関係を中心として、NPO 法人 NALC を対象とした調査データと、NPO 法人流山ユニー・アイネットと川崎おやじ連を対象としたグループインタビューの記録を用いて、様々な側面から検討を加えた。

その結果、参加者の属性によって入会の経緯に違いが見られ、それは参加している活動の種類とも関係していた。特に男性の場合、NALC で活動する前に、参加する NPO を探していた人は、NALC で主に高齢者の介護などに従事している人が相対的に多かった。つまり、もともと高齢者の介護などに関心があり、目的のある程度明確な男性がそこで活動していたということになる。

また、個人の参加動機のみならず、一緒に活動する仲間として、活動に対する価値観をある程度共有しているという、文化的要素も社会活動の継続に重要な役割を果たしていることが分かった。特に、高齢者の介護などの活動に従事している人の場合、人あるいは社会の役に立つことがしたいという意識が高いという結果が得られた。

社会活動に参加することは、参加者個人の満足度や達成感などだけではなく、個人のパーソナル・ネットワークの活性化にも寄与すると考えられる。

例えば、もともと持っていたネットワークについて、配偶者がともに活動に参加することと、配偶者との良好な関係とのつながりも確認できた。

また、NALC を紹介した人と参加者の関係について、紹介者の関係との密度と、参加している活動への評価の関係から、比較的弱い関係で入会した人のほうが、参加している活動をより評価する傾向が見られた。そして、困ったときに相談する人の中に占める NALC のメンバーの割合との関係から、メンバーの割合が高いほうが参加している活動をより評価する傾向が見られた。今後の活動意向についても、メンバーの割合が高いほうが NALC で長く続けようと考え、家庭生活や地域活動に NALC での経験を活かしたいと考えている傾向が見られた。入会時にはメンバーと強い関係がなくても、活動を通じて関わりが強まることで、NALC へのコミットメントが強まり、NALC で得た知識や技術を家庭生活に生かし、また町内会や自治会などの地域活動への参加意欲も高まるという結果となった。

社会関係の広がりのひとつとして自治会活動があげられるが、硬直化してしまっているところが多い。しかし、自治会のような地縁組織とは異なる社会参加組織が地域社会と橋渡しをするような形がかかわることによって、地域社会の活性化にもつながると考えられる。これには、場や機会の提供の面で、行政の役割が大きいと思われる。

<2> 子育て期女性の社会参加

本稿では、主に家庭で子育て中心の生活を送っていた子育て中の母親たちが立ち上げ、シニアや学生など地域の多種多様な人のつながりをつくりながら、地域三世代子育て支援活動を行なっている NPO 団体に焦点を当て、この NPO 団体の代表・副代表を含めたスタッフへのグループイ

インタビューから、参加の経緯、活動を可能とする要因、NPO としての社会活動の可能性等を明らかにしながら、子育て期女性にとっての社会参加の持つ意味について、多種多様な人を巻き込んだ地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いという視点から検討を行うことを目的とする。

この NPO 団体が拠点とする地域には、乳幼児と親のための育児施設がなかったため、その地域に住む子育て中の女性たちを中心に、地域での支えあいの子育てを目的として、2000年に NPO 法人として設立された。スタッフは現在約 30 名で、乳幼児や小学生の子どもを持つ、子育て当事者である女性たちで構成されている。スタッフの他に、老若男女のサポーター（シニアサポーター・学生サポーター）が存在している。

グループインタビューの対象者は、この NPO 団体の代表・副代表・スタッフの計 7 名であった。対象者の年齢は、平均 39.1 歳（35-45 歳）、家族形態は、7 名とも夫婦と未婚のこどもで暮らしている核家族で、子どもの年齢は、平均 6.9 歳（0 歳 2 か月-15 歳）であった。

グループインタビューから以下の 5 点がみえてきた。第 1 に、子育て期女性の社会参加を促している要因として、地域とのつながりがなく子育てが大変だったという自らの経験から、地域で育ち合う子育てをと自主的な活動であることと、この活動が女性の能力、キャリア、特技などをいかして社会的な活動を行える自己実現の場となっていることが考えられる。第 2 に、子育て期女性の社会参加を可能としている要因として、家族、特に夫の理解と精神的・物理的サポートと、子どもを連れて活動ができることで子どもと共に育つ感覚があることが考えられる。これらの 2 つのことは、家族を犠牲にしてまで働きたくないという女性の考え方と一致し、社会活動を可能としている。第 3 に、子育て期女性が、活動していく上で直面しやすい課題として、活動と自分の生活とのバランスに葛藤することと、いざという時の頼れるところが親になっているというシステムが考えられる。第 4 に、ここでの活動は、「育てる」から「育つ」への発想の転換がなされ、子ども、子育て当事者の男女、学生の男女・シニアの男女など多種多様な人が「地域で共に育つ場」となっている。地域の多種多様な人たちも巻き込んでの活動がうまく機能している理由として、子育て期女性の子育て活動が「地域での育ち合いの子育て」を求めた地域に開かれた活動になっており、多世代の人々が入りやすい環境だったことが考えられる。第 5 に、地域三世代子育てが持つ意味を、NPO としての活動の可能性と併せて検証する必要があることである。

本稿では、子育て期の女性であるスタッフのグループインタビューを通して、子育て期女性にとっての社会参加と、地域三世代子育ての可能性についてまとめてきたが、今後は、この団体に関っている多種多様な人々を対象にした調査を行い、どのような経緯でこの子育て支援の活動に参加し、どのように育ち合っていると自覚しているか等を明らかにすることで、地域の人々をどうして巻き込んで活動を行なうことが可能であったかをさらに追求することができるのではないかと考えている。

第2部 シニア期の社会参加

第1章 家族と社会参加

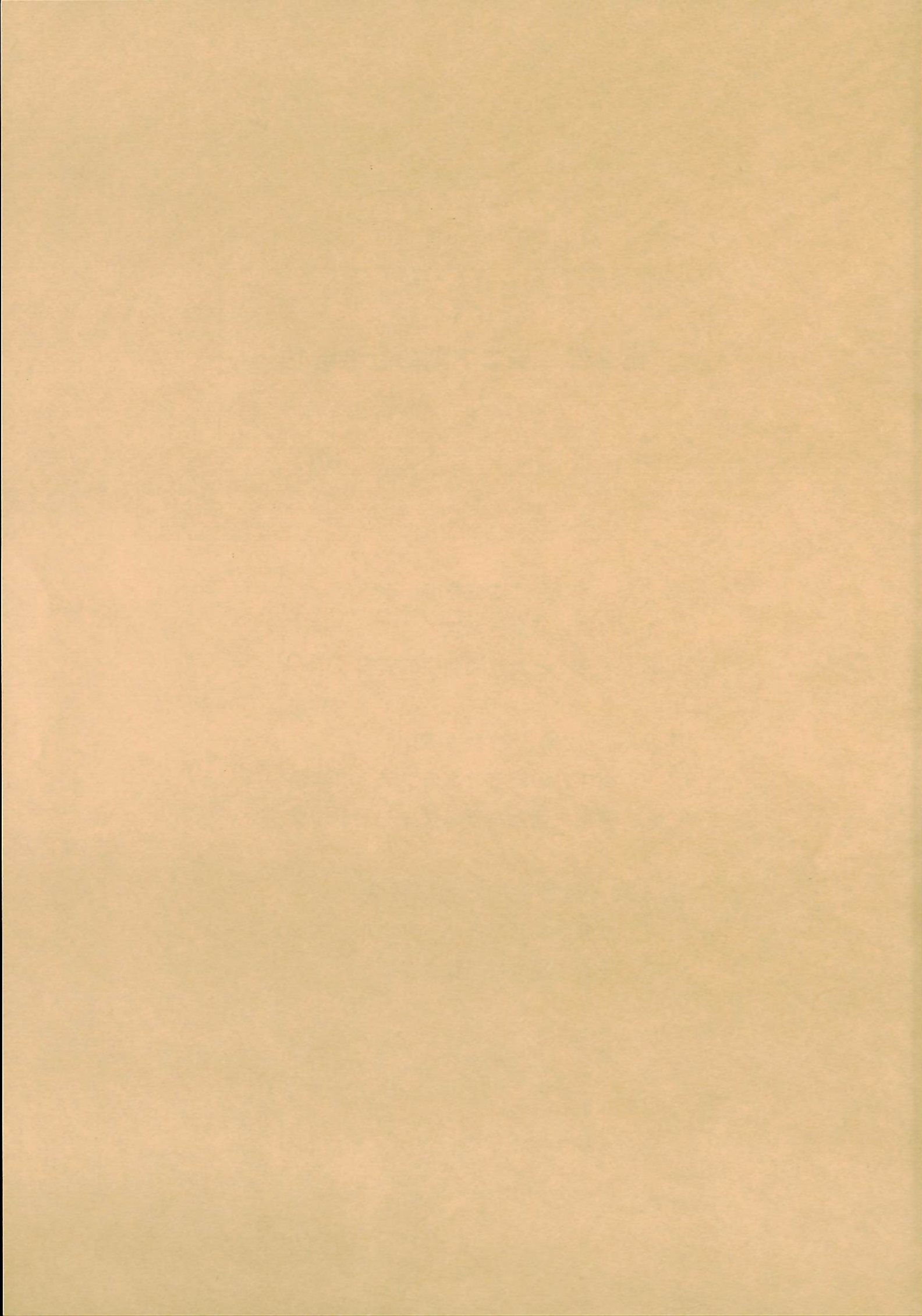
1. NPO活動と家族
2. 子育てと世代間関係の変容

第2章 仕事と社会参加

1. 働き方の変容とボランティア活動
2. 職業生活とボランティア・ワーク

第3章 社会参加と地域社会

1. 社会参加活動とパーソナル・ネットワーク
2. 子育て期女性の社会参加



第2部 シニア期の社会参加

第1章 家族と社会参加

NPO 活動と家族

—「NPO 活動のための時間」と「孫と過ごす時間」の配分をめぐる—

安藤 究

1 はじめに

シニア期、特に高齢期に関する「問題」は、まず「非高齢者による高齢者の扶養」という視角のもとで登場した。この視角における高齢者の位置づけは、「老化によって身体的能力が衰退して世話を受ける存在」というものであり、また「定年退職によって収入が減り経済的にも世話を受ける存在」というものでもあった。そのため、ミクロなレベルでは高齢者を抱えた家族の日常生活における困難が「問題」として議論され、マクロなレベルでは年金や税金をはじめとする様々な社会福祉制度の整備が「問題」として検討されてきた(副田, 1978; 安藤, 1999)。

こうした客体としての高齢者という議論に対して、主体としての高齢者という観点からの議論も行われるようになった。「ひとが人間らしく生きるということは、自らの意志・意欲によって自律的に生きるという側面をもっている。老人の場合でも、それは例外ではない。かれは社会の客体としてのみならず、主体としても位置付けられることができるし、かれ自身がそれを望むことがしばしばある」(副田, 1978:6)といった議論は、臨床医学においても、器官しかみない医師の視線を改め、主体的な市民として生きることが老人医療に必要なだという議論をひきおこすようになった(松田, 1986:40-59)。

このような客体としての高齢者から主体としての高齢者という視点の変化にともなって、「主体的な高齢者」像が調査データにもとづいて描かれ、高齢者の社会参加を容易にする社会的方策が検討されるようになり、また、家族と高齢者との関係においても、「『家族に含まれた高齢者』としてではなく、『個としての高齢者』という視点が示されるようになった(安達, 1999)。

他方、就業女性の子育て支援の1つの方策として、高齢者の「活用」を試みる動きも顕著になってきた。就労女性の就労という点で親との同居が効果的であることを示す研究だけでなく(eg. 加藤, 1988; Morgan & Hiroshima, 1983)、一般的な言説のレベルでも、子育て支援の担い手としてのシニア期の親に注目が集まるようになった(eg. 「おばあちゃんパワー」)。

ただし、ここで留意しなければならないことがあるだろう。この高齢者の「活用」が高齢者自身の「孫育児」に限定されるならば、この「活用」は、高齢者の活動領域を再び「家族」領域に限定するという作用を持ちうる、ということである。特に女性に関しては、生産労働人口の女性の家族外での活動の促進(=娘の就業)を、非生産労働人口の女性(=母親)の家族領域への封じ込めにおいて実現するという性格を帯びる可能性がある。後者の議論の背景には、伝統的な世代間関係のイメージが強く影響している(=高齢者は孫の世話をしていれば幸せ)、本章では、NPO 活動と孫との係わり合いとの関係を検討することで、高齢者の社会参加と育児支援における高齢者の活用についての基礎的資料の一つとしたい。

2 データと方法

本章で用いたデータは、「研究の概要」で述べられている NPO 法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ(NALC)のスタッフ・活動会員に対する質問紙調査で得られたものである。調査の概要に関しては「研究の概要」の通りであるが、有効回答 1,351 のうち、ここでの分析は、孫がいる

ケースに限定して行われている。

NPO活動と孫との係わり合いの関係に関しては、NPO活動にあてる時間と孫との接触にあてる時間の配分について問い、NPO優先度尺度を作成した。具体的には4つの選択肢を用意し、「孫と過ごす時間は、NPO活動の時間を削っても、出来る限り多くしたい」(=4点)「孫と過ごす時間は、どちらかというと、NPO活動の時間よりも多くしたい」(=3点)「孫と過ごす時間よりも、どちらかというと、NPO活動の時間を多くしたい」(=2点)「孫と過ごす時間を削っても、出来る限り、NPO活動の時間を多くしたい」(=1点)である。

孫との接触の頻度は、一番小さい孫の接触について、「ほとんど毎日」「週に3～4回」「週に1～2回」「月に1～2回」「年に数回」「まったく会わなかった」という6つの選択肢を用意して尋ねた。最年少の孫との接触頻度を検討要因としたのは、「孫との接触の時間」が「やりたいことの為の時間」を確保する上で障害となる場合、それは幼い子どもにおいて、より顕著となって現れると考えられるからである。回答は、接触頻度が高いほうから順に、6点から1点を割り当てた。

孫の世話に関しても、上記と同様な理由で、最年少の孫に関して尋ねた。具体的には、「一番小さいお孫さんの日常的な世話をしたり、預かったりしたことはどれぐらいありますか」という問いに、接触頻度の場合と同じく、「ほとんど毎日」から「まったく会わなかった」までの6つの選択肢を用意し、順に6点から1点を与えた。

具体的な孫との行動レベルの関係については、ここ1年の間で、最年少の孫に「助言を与えた」「自分の子どもの頃のことを話した」「友達や仲間のように遊んだ」という行動の頻度を尋ね、回答には「しばしばあった」「たまにあった」「全くなかった」の3つの選択肢を用意し、順に3点から1点を割り当てた。

また、「一緒に買い物や食事などに出かけた」「学校の行事や習い事の発表会、試合などを見に行った」「一緒に泊りがけの旅行に行った」という同伴行動の頻度についても尋ね、ここ1年の間で、「2回以上行った」「1回は行った」「1度もない」という選択肢とし、順に3点から1点を与えた。

最年少の孫との情緒的関係に関しては、当該の孫に対する親密感について尋ねた。選択肢は、「非常に親密」「まあ親密」「あまり親密ではない」「全く疎遠」の4つであり、順に4点から1点を割り当て、親密度に関する得点とした。

3 分析

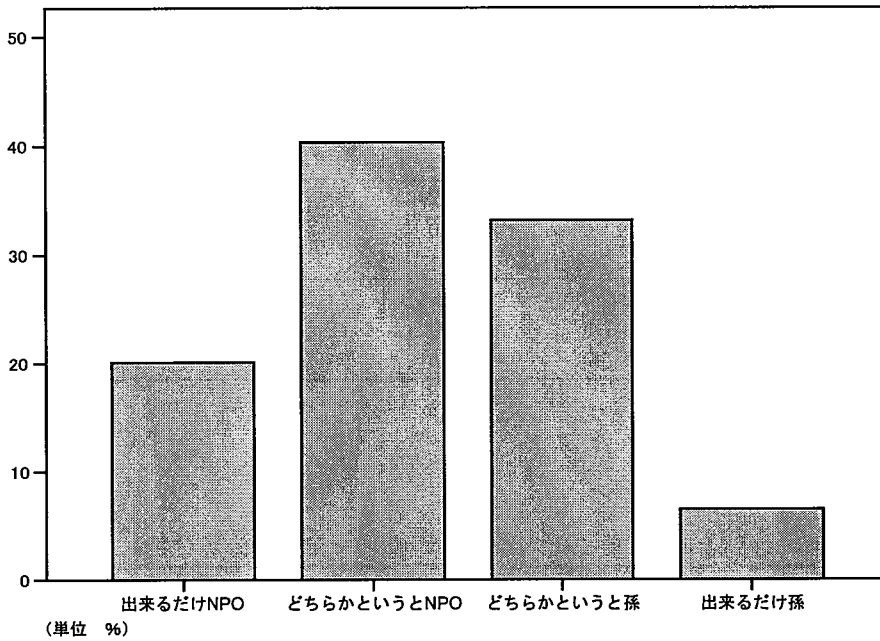
3-1. 基本的属性とNPO優先度

NPO活動と孫との係わり合いの関係に関する単純集計の結果は、表1・図1の通りである。

表1 孫と過ごす時間とNPO活動の時間の配分について

	度数	有効パーセント
出来るだけNPO	143	20.1
どちらかといとNPO	287	40.3
どちらかといと孫	236	33.1
出来るだけ孫	46	6.5
合計	712	100.0

図1 孫と過ごす時間とNPO活動の時間の配分について



「孫と一緒にいれば、高齢者は幸せ」という一般的なイメージと異なって、「できるだけNPO」「どちらかというとなPO」という回答で、全体の6割が占められている。ただしこの結果は、NALCというNPO団体に所属している人に対して行われた調査結果であるので、高齢者全体に一般化することには注意しなければならない。

表2・表3は、基本的な属性によって、NPO得点の平均に相違があるかどうかを検討した結果である。インフォーマント本人の年齢、最年長の孫の年齢、最年少の孫の年齢は、いずれもNPO優先度得点と有意な相関はない。教育程度、孫との同別居ではNPO優先得点の平均に、有意な差はない。性別に関しては、統計的には厳密には有意な差はないものの、女性のほうが男性よりもNPO優先得点が高い傾向がややうかがわれる。

表2 NPO 優先度と年齢（本人・孫）の相関係数

		NPO優先度	本人年齢	最年長の孫年齢	最年少の孫年齢
NPO優先度	Pearson の相関係数	1	-.003	-.050	-.049
	有意確率 (両側)		.939	.185	.246
	N	712	712	708	558
本人年齢	Pearson の相関係数	-.003	1	.652**	.570**
	有意確率 (両側)	.939		.000	.000
	N	712	1351	791	626
最年長の孫年齢	Pearson の相関係数	-.050	.652**	1	.749**
	有意確率 (両側)	.185	.000		.000
	N	708	791	791	625
最年少の孫年齢	Pearson の相関係数	-.049	.570**	.749**	1
	有意確率 (両側)	.246	.000	.000	
	N	558	626	625	626

**、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

表3 教育程度・同居の孫の有無・性別と NPO 優先度得点の平均値 (一元配置分散分析)

	教育程度			同居の孫の有無		性別	
	高	中	低	有り	なし	男性	女性
NPO得点の平均値	2.67	2.76	2.84	2.73	2.74	2.68	2.80
F値	1.044			0.003		3.606	
有意確率	N.S(p=.352)			N.S(p=.957)		N.S(p=.058)	

3-2. 孫との接触と NPO 優先度

表4・図2は、最年少の孫との接触頻度及び最年少の孫の世話(日常的な世話や預かり)の頻度と、NPO 優先度の関係を検討した結果である。最年少の孫との接触頻度を検討要因としたのは、先に述べたように、「孫との接触の時間」が「やりたいことの為の時間」を確保する上で障害となる場合、それは幼い子どもにおいてより顕著となって現れると考えられるからである。

孫との接触頻度は NPO 優先度得点に有意な影響を及ぼしており、「ほぼ毎日」「週に3~4回」「週に1~2回」という孫に会う頻度が相対的に高い人は、「月に1~2回」「年に数回」「まったく会わなかった」という孫との接触頻度が低い人よりも、NPO 優先度得点が高くなる傾向がみられる。最年少の孫との同別居は、その孫との接触頻度と有意な関連があり (カイ自乗検定 $p < .01$ 表は省略)、最年少の孫と同居している場合に「ほとんど毎日」という接触が多くなる。したがって、接触頻度と NPO 優先度との関連を考える場合、「月に1~2回」「週に1~2回」「週に3~4回」と接触頻度が大きくなるにつれて、NPO 優先度得点の平均も高くなるという点に留意して考察をおこなう必要があるだろう。

表4 孫との接触頻度とNPO優先度の平均値(一元配置分散分析)

NPO優先度				
	度数	平均値	F値	有意確率
ほぼ毎日	64	2.8438	3.058	p<.01 ** (p=.009)
週に3~4回	36	3.0833		
週に1~2回	102	2.9020		
月に1~2回	183	2.6503		
年に数回	292	2.6884		
全くなかった	18	2.5000		
合計	695	2.7396		

図2 孫との接触頻度とNPO優先度得点の平均

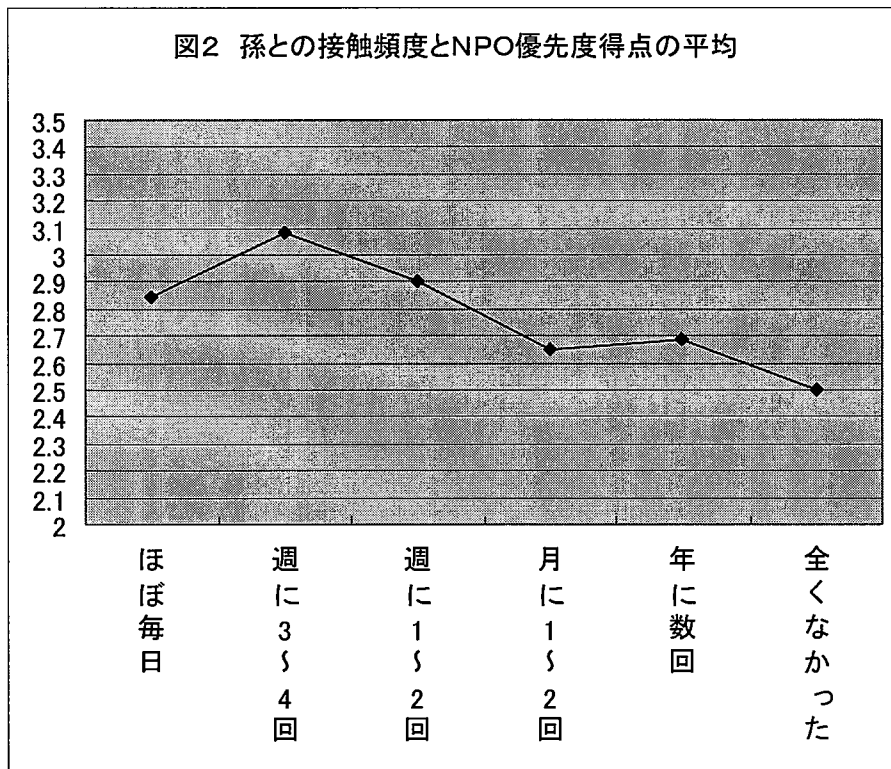


表5・図3は、最年少の孫の世話(日常的な世話や預かったりする)の頻度と、NPO 優先度得点の平均の関連を検討した結果である。この分析は、単に「孫の顔を見る」という場合もあり得る「孫との接触」に比較して、より NPO 活動に配分する時間との拮抗の可能性を考慮して行われた。

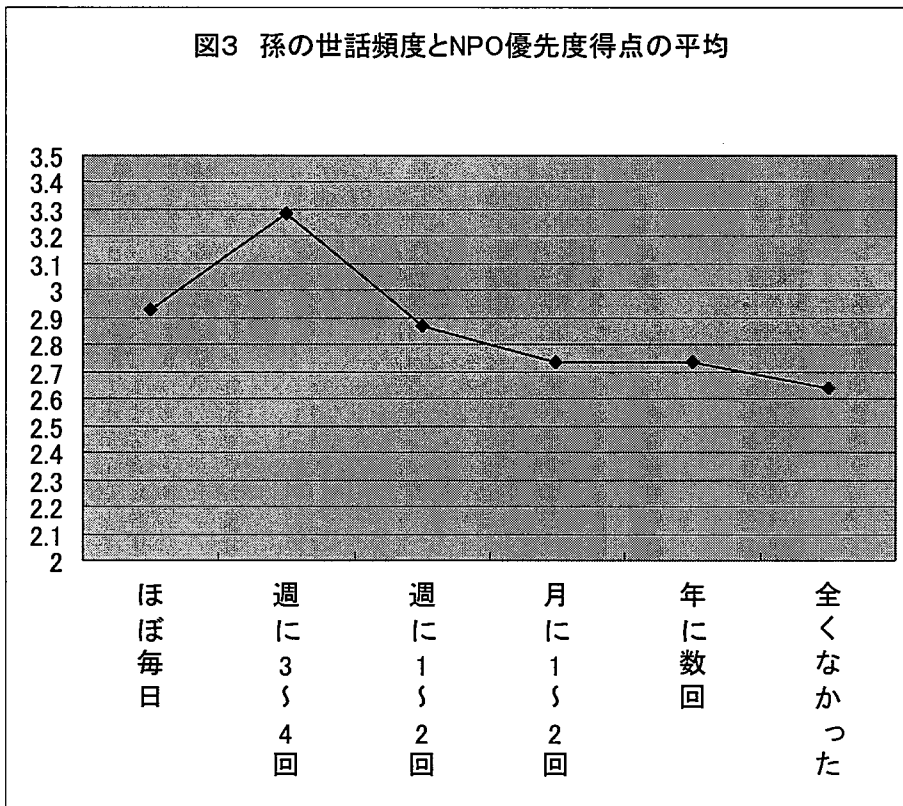
「孫との接触頻度」の場合と同様に、孫の世話頻度が高い人は、そうでない人よりも、全体的には NPO 優先度得点が高くなる傾向がみられる。最年少の孫との同居は、世話の頻度に関しては

やはり「ほぼ毎日」となりやすいので（カイ自乗検定 $p < .01$ 表は省略）、特に当該の孫と別居している祖父母で、「月に1～2回」「週に1～2回」「週に3～4回」と孫の世話頻度が大きくなるにつれてNPO優先度が高まることに留意する必要があるだろう。

表5 孫の世話の頻度とNPO優先度の平均値（一元配置分散分析）

NPO優先度				
	度数	平均値	F値	有意確率
ほぼ毎日	40	2.9250	2.49700	p < .05 * (p = .0297)
週に3～4回	14	3.2857		
週に1～2回	67	2.8657		
月に1～2回	97	2.7320		
年に数回	254	2.7323		
全くなかった	220	2.6364		
合計	692	2.7370		

図3 孫の世話頻度とNPO優先度得点の平均



3-3. 孫との関係とNPO優先度

これまでの分析で、孫と過ごす時間よりもNPO活動の時間を優先するという志向は、孫との接触頻度や世話頻度が相対的に多い祖父母に見られるという結果が得られた。この結果の意味を考察するために、単に接触頻度や世話の頻度との関連だけでなく、具体的な行動レベルでの孫との関係とNPO活動の優先度、および親密度とNPO活動の優先度の関連を検討する。

表6は、孫との行動レベルでの幾つかの関係とNPO活動の優先度の関連、および孫との親密性とNPO活動の優先度の関連を検討した結果である。「子どもの頃の話を話した」以外は有意な相関がみられた。助言を与える頻度が高いほど、友達のように遊ぶ頻度が高いほど、NPO活動のための時間を優先したいという度合いが大きくなる。また、「一緒に買い物に行く」といった日常的な同伴行動から、「泊りがけの旅行」といった非日常的な同伴行動まで、同伴行動の頻度が大きくなると、やはりNPO活動の優先志向が高まる。

孫との親密度との関連に関しても、親密度が高いほど、NPO活動の為の時間を重視するようになる傾向が確認される。また、容易に推定されるように、ここでの分析に用いた孫との行動レベルの関係は、どれも頻度が高くなるにつれて、孫に対する高い親密感を導いている(表7参照)。

すなわち、基本的には、NPO活動の時間を優先するという志向は、孫との関係が希薄で親密ではないことの結果ではなく、孫との充実した関係が行動レベルで存在し、孫に対する親密感も高い祖父母においてみられる、ということである。

表6 孫との関係とNPO活動の優先度(相関係数)

		NPO優先度
助言を与える	Pearsonの相関係数	.106 **
	有意確率(両側)	.006
	N	660
子どもの頃の話を話す	Pearsonの相関係数	.071
	有意確率(両側)	.067
	N	662
友達のように遊ぶ	Pearsonの相関係数	.161 **
	有意確率(両側)	.000
	N	677
一緒に買い物や食事に行く	Pearsonの相関係数	.096 *
	有意確率(両側)	.012
	N	684
学校行事等に出席	Pearsonの相関係数	.083 *
	有意確率(両側)	.034
	N	652
泊りがけの旅行	Pearsonの相関係数	.123 **
	有意確率(両側)	.001
	N	666
孫との親密度	Pearsonの相関係数	.189 **
	有意確率(両側)	.000
	N	692

** 相関係数は1%水準で有意(両側)

* 相関係数は5%水準で有意(両側)

表7 孫との関係と親密度(相関係数)

		孫との親密度
助言を与える	Pearson の相関係数	. 241 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	743
子どもの頃の話を話す	Pearson の相関係数	. 264 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	741
友達のように遊ぶ	Pearson の相関係数	. 416 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	758
一緒に買い物や食事に行く	Pearson の相関係数	. 332 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	768
学校行事等に出席	Pearson の相関係数	. 223 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	733
泊りがけの旅行	Pearson の相関係数	. 209 **
	有意確率(両側)	. 000
	N	748

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意(両側)

4 まとめ

本節では、NPO 活動と家族の関係を考える一つの基礎的資料として、「NPO 活動のための時間」と「孫と過ごす時間」の配分に関する検討をおこなった。

調査対象者が実際に NPO 活動に参加しているという条件を考慮しなければならないものの、「孫と過ごしていれば幸せ」という典型的な祖父母のイメージとは異なり、約 60% のインフォーマントが、孫と過ごす時間よりも NPO 活動の時間を優先するという回答をおこなった。

対象者の年齢、最年長と最年少の孫年齢、教育程度、同居の孫の有無、性別という基本的な属性は、NPO 活動の優先度に有意な影響をもっていなかった。それに対して、最年少の孫との接触頻度や世話をする頻度は、NPO 活動の優先度に有意な影響を及ぼしていた。全体的には、接触や世話をする頻度が大きくなるにつれて NPO 優先度が高まる傾向が確認され、この傾向は、特に当該の孫と別居している祖父母に典型的と考えられた。

この傾向の意味を考察するために、単なる接触頻度や世話の頻度の影響だけでなく、さらに、具体的な行動レベルでの孫との関係や親密度の影響についても検討をおこなった。その結果、ほとんどの種類の行動において、その行動の頻度が大きくなると、NPO 活動の優先度も増大するという結果が得られた。親密性に関しては、孫との親密度が高まると、やはり NPO 活動の時間を優先するという傾向が見られ、また、分析に用いた孫との行動レベルの接触のすべての種類において、接触頻度が多くなると親密性も増大するという結果が得られた。

「NPO 活動のための時間」を「孫と過ごす時間」よりも優先するという志向は、何らかの要因で孫との関係が希薄であることの結果という解釈も、可能性としてはあり得るだろう。「孫と過ごす時間」に実質的な意味を見出せないの、結果的に、「NPO 活動のための時間」を優先しているということである。この場合の祖父母像は、「孫と一緒にいれば幸せ」といった、伝統的なそれと

なる。

しかし、本節でおこなってきた分析からは、伝統的なイメージとは異なった祖父母のスタイルが浮かび上がってくる。「NPO 活動のための時間」を「孫と過ごす時間」よりも優先している祖父母は、孫との充実した関係が行動レベルで存在しており、孫に対する主観的な親密感も高くなっている。すなわち、「孫は可愛く、孫と一緒に過ごす時間は有意義であるが、『孫と一緒にいられれば十分である』というわけではない」という祖父母像を読み取ることができる、ということである。

戦後日本の平均寿命の急速な伸長や出生率の減少という人口学的変動は、高齢者に関する「問題」をもたらしたのみならず、我々のライフコース・ダイナミクスに大きな変化をもたらしている。平均寿命の伸長によって、我々のライフコースにおける年齢を軸とした出来事や役割相互の関係が急速に変化してきており、「祖父母であること」と「高齢者であること」の関係性の変化も変化している。また戦後進行した家族変動は、「祖父母-孫」関係という世代間関係の変容も促している可能性がある（安藤，2003）。

実際、祖母に関しては、孫への関心をあからさまには表明しないというスタイルが、地方都市においても出現しつつあるという結果も得られている（安藤，2003）。そうした新しいスタイルの祖母は、「家族・近隣」といった女性に割り当てられてきた典型的な社会的空間ではなく、その外にある、女性の非典型的空間での活動が優位となっており、そうしたスタイルを積極的に選択していると解釈された。

今回の分析結果も、このような新しい祖父母のスタイルが出現しつつあることを支持していると思われる。「NPO 活動のための時間」を「孫と過ごす時間」よりも優先している祖父母は、孫との充実した関係が行動レベルで存在しており、「孫との関係に意味をみいだせず、その代替としてNPO 活動にコミットする」ということではないからである。

それゆえ、就業女性の子育て支援の1つの方策として高齢者の「活用」を試みる場合にも、伝統的な祖父母のイメージの下で、高齢者自身の「孫育児」への限定が生じないように注意する必要があるだろう。現実にはこれまでの祖父母像とは異なったスタイルの祖父母が層として出現しつつあり、また、高齢者の社会参加を目的とする一連の方策と対立する可能性があるからである。特に女性に関しては、「自身の孫育て」ばかりを支援する試みは、生産労働人口の女性の家族外での活動の促進（＝娘の就業）を、非生産労働人口の女性（＝母親）の家族領域への封じ込めにおいて実現するという性格を帯びる可能性があり、これまで行われてきた高齢者の社会参加を促進する多くの努力と対立する危険性という点で、留意が必要であると思われる。

参考文献

- 安藤究 2001 「祖親性（Grandparenthood）の国際比較における課題」『鹿児島国際大学 福祉社会学部論集』第20巻第2号、pp.1-15
- 安藤究 2003. 「『祖母であること』の変容の可能性－鹿児島市の場合」鹿児島国際大学附属地域総合研究所編『時代転換の諸断層』日本経済評論社 pp.101-129
- 加藤喜久子（1988） 「親子同居の家族発達論的考察」『社会学評論』No. 155, pp. 284-298
- 松田道雄 1986. 「市民的自由としての生死の選択」『老いの発見2 老いのパラダイム』岩波書店, pp.39-59
- Morgan, P., K., Hiroshima (1983) "The Persistence of Extended Family Residence in Japan: Anachronism or Alternative Strategy?", *American Sociological Review*, vol.48, pp.269-281
- 副田義也 1978. 「主体的な老年像を求めて」『現代のエスプリ』n. 126, pp. 5-23

1 はじめに—問題の所在と研究課題

エイジズム研究の進展は、高齢社会の到来にあたって、「老い」という問題を根底から捉え直す大きな転機となった(Erdman, 1999=2002)。日本でも、2001年に閣議決定された「新しい高齢社会対策大綱」において、多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援、年齢だけで高齢者を別扱いする制度・慣行等の見直し、世代間の連帯強化、地域社会への参画促進が、領域横断的な課題として提起された。ここでは、高齢者の多様性を踏まえ、「一人暮らしの高齢者」「要介護の高齢者」と並んで、「活動的な高齢者」あるいは「元気な高齢者」*1という類型化が行われている。年金をはじめ、社会保障制度における世代間連帯の問題が、焦眉の課題として論議される一方で、「活動的な高齢者」「元気な高齢者」といった分類による新しい高齢者イメージの析出は、従来の「弱者」としての高齢者の画一的なイメージの書き換えの一翼を担っている。新しい定義と実際の高齢者の生活実態や生活水準との間のズレに関する指摘はあるにせよ(渋谷, 2002)、今後、ますます多くの高齢者が、様々な社会活動の担い手になると考えられる。すでに実際アメリカでは、政治やボランティアといった分野における高齢者の影響力はますます拡大している。

職場、地域、政治といったあらゆる生活領域に、高齢者が今後どのようにかかわっていくのだろうか。それによって、社会はどのように様変わりするだろうか。

本稿では、シニアの社会参加活動を通じて、そこでの人間関係、とりわけ他世代との関係—世代間関係—がどのように変化しつつあるのかに着目する。人口構成の高齢化に伴って、今後世代間関係の問題はますます重要になると予想される。世代間関係において、高齢者は、一方的に支援を受ける側ではなく、他世代を支える担い手にもなりうる。今回は、中高年層を中心とするボランティアの全国組織であるナルク(ニッポン・アクティブライフ・クラブ)の支部(ナルク丹波)が行っている子育て支援活動を一つの事例として取り上げる。ナルク丹波でのグループインタビュー調査を手がかりとしながら、地域子育て支援を通じた新たな世代間関係創出の試みが、これからの世代間関係の有り様にどのようなインプリケーションをもちうるのか、事例研究を通じて検討してみたい。

2 分析視角—〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉—

子育てを通じた世代間関係は、地域社会を基盤とする世代間関係が脆弱化し、家族内へと縮小化する傾向にある。本稿では、〈家族内の世代間関係〉と、家族外の世代間関係の一つとしての〈地域の世代間関係〉という二つの世代間関係を分析の指標として、二つの世代間関係が、地域の子育て支援を通じてどのように変容しているのかを検討する。

グループインタビューの分析に入る前に、子育てに関する〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉に関する先行研究を簡単に振り返ってみたい。

*1その定義は必ずしも明確ではないが、大綱等では主に日常生活を営む上での機能障害等の有無に着目している。具体的には、「実際に活動的である者(就業や社会参加等の活動に従事している者)に限らず、日常生活に支障があるような健康上の問題がなく活動的な生活を送ることが可能な高齢者」が含まれる。

2-1. 祖父母になるということ—Transition to Grandparenthood

高齢化が人間関係、とりわけ世代間関係に及ぼす影響の一つとして、介護の問題がある。〈家庭内の世代間関係〉は、主に老親介護の問題として従来論じられてきたが、高齢者を一方的なケアの受け手として捉える画一的な理解には限界がある。今後ますます「元気な高齢者」が増加するとすれば、高齢者による〈家庭内の世代間関係〉への主体的関与、参加を念頭に置く必要がある。そのひとつとして、祖父母としての子育てへの参加があり、祖父母の孫育てに関する研究も、少しずつではあるが注目されるようになってきている。長寿化の影響で、祖父母になるということは、ライフコースにおける一般的な経験となり、さらにその期間も長期化の一途をたどっている。ここではまず、祖父母になるということ(*grandparenthood*)に着目し、〈家庭内の世代間関係〉をめぐる状況を先行研究から整理してみたい。

子育てをめぐる〈家庭内の世代間関係〉について、ここでは祖父母—親—子どもという三者関係に限定して考えたい。この三者から構成される〈家庭内の世代間関係〉には、祖父母と孫との直接的関係(接触頻度や、親の代理としての子育て)もあれば、養育責任を負っている親世代と祖父母世代との関係もある。

Smith and Drew によれば、古典的な祖父母に関する調査研究は、1930年代から1940年代にさかのぼるが、そこでは主に、祖父母による子どもの養育に対する影響が主要な研究課題となっている。とりわけ、権威主義や形式主義といった古い世代の価値観やそれに基づく態度・行動は、しばしば子どもの養育にとってのマイナス要因として捉えられていた。しかしながら、1960年代以降、祖父母としての子育てへの関わり方とそれに対する評価は大きく転換する。〈家庭内の世代間関係〉に基づく子育ては、老後の世話を見据えた、生涯にわたる世代間の強力な互恵の関係の一環ではなく、子どもの自律的な成長を側面的に支える関係へと変化しつつあると Smith and Drew は指摘している。さらに今後、家族関係の変化に伴って、〈家庭内の世代間関係〉は、ますます複雑化することも予想される²。安達が「ひとつの選択的な関係」(安達、1999: 37頁)として、これからの祖父母—孫関係を位置づけているように、子育てにおける〈家庭内の世代間関係〉は、強制的な相互支援関係から、より自発的な関係へと移行しつつある。

では、子育てにおいて祖父母の果たす役割がどのように変わりつつあるのか、あるいは、祖父母になるということが、高齢者個人にとってどのような意味をもっているのか、あるいはその意味がどのように変わろうとしてきているのだろうか？

先行研究によれば、祖父母は依然として、子育てにおける重要な資源、あるいは社会化のひとつのエージェントとしての役割を担っているという指摘が多い。国立社会保障・人口問題研究所が2002年に行った第12回出生動向基本調査でも、親からの援助は、妻の就業継続やその後の子供の産み方に影響を及ぼしているということが指摘されている。そして祖父母からの援助の中でも、とりわけ妻方親族からの援助が果たしている役割が非常に大きい。例えば久保は、働く母親の子育てを母親の個人ネットワークに着目し調査しているが、母親の個人ネットワークの中で、妻方親族は、手段的援助でも情緒的援助でも非常に高い位置を占めている(久保、2001)³。

2 最近のアメリカの祖父母に関する研究動向を見ると、子どもの別居あるいは離婚による孫との別離や面会権の問題、ステップグランドペアレント、さらには障害を持つ孫のケアにおける祖父母の位置など、家族の変化に伴って、次々に新たな課題が顕在化していることが分かる(Smith and Drew, 2002)。

3 久保は、手段的援助(育児労働そのものへの援助)と情緒的援助(精神的な援助)に分類した上で、妻方親族、夫方親族、保育園・学校の友人、近所の友人、職場の友人、その他の友人の分布を分析している(久保、2001)。

2-2. 子育て資源としての〈家族内の世代間関係〉の行き詰まり

落合は、子育てネットワークに関する調査研究から、いかなる時代も子育てや介護を家族が独自に達成したことはなく、常に近隣や親族といったサポートネットワークが必要不可欠であったと指摘している（落合、1993）。

久保が示しているように、養育責任を負っている親の立場からすれば、「実家」は援助資源としての融通がききやすくまた精神的負担も少ない。それだけではなく、資源として位置づけられている祖父母の側からしても、孫との関わりが大きな生きがいを占めている場合が多い。こうした両者の利害の符合が、子育て資源としての祖父母に不動の地位を与えているともいえる。

しかし現実には、実家からのサポートは、必ずしも親にとってプラスの要素だけとは限らない。「実の母娘の場合、遠慮がない分すっかり頼り切りで、生活リズムがルーズになったり、やりとりがストレートすぎたり・・・」（新座子育てネットワーク代表：坂本純子、読売新聞2003年10月21日朝刊）という言葉にも示されているように、子育てに対する家族内の世代間の考え方の違いは、情緒的関係がからむ分、その解消は難しくなる。また、こうした〈家族内の世代間関係〉固有の難しさだけではなく、さらに、祖父母に依拠した子育て資源は、その基盤を失いつつある。国立社会保障・人口問題研究所が1998年に行った第2回全国家庭動向調査でも、親との同居率は、人口集中地域と非人口集中地域いずれにおいても、低下傾向にあることが指摘されており、とりわけ人口集中地域では、親との同居率は2割を下回る結果となっている⁴。

このように、〈家族内の世代間関係〉固有の関係の難しさや、実際の資源ネットワークの空洞化の進行という事態に対して、落合は、祖父母を中心とする親族ネットワークに代わって、地域の子育てサークルの台頭に注目している。子育てサークルは今、当事者である母親自身が作るネットワークであると同時に、父親や地域の先輩ママ、あるいは専門職といった多様な立場・世代の人々を巻き込むことができる、新しい「次世代育成力」の原動力として注目を集めている（津止・藤本・斎藤編、2003）。ここに再度、〈地域の世代間関係〉が子育て資源として登場するポテンシャルがある。しかし、落合が、〈家族内の世代間関係〉との互換性において、〈地域の世代間関係〉を含む地縁ネットワークを基盤とした子育てネットワークに注目しているのに対して、久保は、自らの調査を通じて、こうした親族と地域の代替性を確認できないとしている。

こうした久保の見解は、地域での子育てネットワークが不必要であるということを意味しない。世代間関係を検討する際にむしろここで目を向ける必要があるのは、〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉とが、一義的な互換関係にはないという久保の示唆を踏まえた上で、〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉との間に、どのような関係性があるのか、その相互作用の有り様であろう。

以下では、ナルク丹波の地域子育て支援による〈地域の世代間関係〉創出の取り組みを事例としながら、この問題について検討してみたい。

3 子育てと〈地域の世代間関係〉—ナルク丹波の挑戦

3-1. 地域の子育て支援とナルク

なぜ今日、子育てにおいて、あらためて地域が見直されているのだろうか。

政策レベルで見ると、少子化対策の一環として、「少子化対策プラスワン」が提出され、男

⁴ ただし、別居の場合でも、30代前半までは、移動が30分以内の範囲内に親が居住している「近居」が4割以上を占めている。しかし人口集中地域だと、30分以内に親が居住する割合は、1/3にとどまっている。

性を含めた働き方の見直し、社会保障における次世代育成、子どもの社会性の向上や自立の促進と並んで、地域における子育て支援がその柱のひとつとなっている。とりわけ「つどいの広場事業」は、中小企業庁における、商店街の空き店舗を活用したコミュニティ施設活用商店街活性化事業との連携事業のひとつであり、公共施設や商店街の空き店舗などの社会資源を活用しながら、子育て中の母親達が気軽に集まり交流する場の提供を行うこととなっている。この事業は、自治体だけではなく、NPO等も実施主体として位置づけられており、地域に根ざした幅広いネットワークがこの事業の実現にとってのポイントとなっており、その担い手としては、「元気な高齢者」層も含まれている。

今回の調査対象であるナルクは、1994年にWACアクティブクラブとして設立された。1998年に名称を現在のニッポン・アクティブライフクラブに変更し、「自立・奉仕・助け合い」という理念に基づいたボランティア活動を行っている。会員の経験や特技や能力をうまく活用しながら、地域社会での新たな人間関係の創出を目指しており、特に、時間預託制度に基づく全国ネットの会員の相互扶助ボランティア活動が広く知られている。こうしたボランティア活動の裾野を広げていくためには、時間軸によるタテのつながりと、空間軸によるヨコのつながりが必要である。このタテとヨコのつながりを、よりきめ細やかなネットワークに高めていくひとつのキーワードは、「世代間交流」である⁵。介護保険導入以降、ナルクでも、介護だけでなく、子育て支援を通じた「世代間交流」が活動領域として重視されるようになってきている。以下では、ナルクの子育て支援活動の先駆的事例として位置づけられている、ナルク丹波での三世代交流事業を取り上げ、子育てにおける<地域の世代間関係>が果たしうる役割と今後の課題、あるいは<家族内の世代間関係>に及ぼしうる影響等について検討する。

3-2. ナルク丹波の設立経緯

ナルク丹波は、2001年9月に、全国で75番目となるナルクの活動拠点として、そして農村部で初めての支部として設立された（代表：和田道春さん66才、事務局長：笹倉武史さん63才）。兵庫県では7番目の支部となり、活動拠点は兵庫県の中東部に位置する丹波地域（篠山市および氷上郡）である。

篠山市は、1999年4月に、篠山町、西紀町、丹南町、今田町の4町が合併して誕生した新しい市であり、神戸市に次いで2番目に大きな市である（377.6k㎡）。また氷上郡は、氷上町、青垣町、市島町、春日町、柏原町、山南町から構成されている（493.28k㎡）。この氷上郡6町は2005年11月に合併され「丹波市」となる。

丹波地域は、高齢化が急速に進行しており、2000年の調査では年少人口と老年人口が逆転した（表1）。また、世帯構成を見てみると、三世代家族が減少しつつあり、単独世帯、核家族世帯が増加傾向にあり、一世帯あたりの人員は、3.73(1985年)から3.22(2000年)にまで減ってきている（表2）。「たんばKosodate夢プラン（丹波少子化対策アクションプラン）」（丹波県民局）でも、仕事と家庭の両立支援や、子育て支援、若者の定住促進などが、丹波地域の焦眉の課題として位置づけられている。

⁵ 最近では、このタテとヨコのつながりというナルクならではの魅力を存分に発揮しうる取り組みとして、時間預託制度を活用した「遠距離介護」がテレビ等でも取り上げられ、注目を集めている。

表1 総人口と人口構成の推移

項目		区分	1985年	1990年	1995年	2000年
総人口		丹波地域 兵庫県	115,247 5,278,050	115,461 5,405,040	118,740 5,401,877	119,187 5,550,574
人口構成	年少人口 (0～14才)	丹波地域 兵庫県	23,517 1,149,105	21,804 991,045	20,522 880,094	18,962 830,112
	生産者年齢人口 (15～64才)	丹波地域 兵庫県	72,115 3,581,543	71,355 3,752,880	71,971 3,755,500	70,896 3,776,483
	老年人口 (65才以上)	丹波地域 兵庫県	19,615 545,382	22,259 642,401	26,243 763,752	29,304 939,950

表2 世帯類型の推移

区分		単独世帯	核家族	夫婦と親	夫婦と親と子	その他
兵庫県	1985年	310,593	1,069,301	28,589	175,960	76,472
	1990年	366,156	1,140,812	31,170	165,239	71,548
	1995年	417,669	1,189,321	34,195	152,924	72,922
	2000年	507,753	1,286,413	35,841	130,531	74,559
丹波地方	1985年	3,185	14,105	1,660	8,844	2,650
	1990年	3,927	14,759	1,713	8,609	2,479
	1995年	5,119	16,656	1,758	8,129	2,396
	2000年	6,185	18,708	1,929	7,021	2,366

資料:総務省統計局「国勢調査報告」

ナルク丹波の設立に関わったのは、兵庫県「心豊かな人づくり 500 人委員会」の第 6 期生「老人問題研究グループ」のOBら 9 名である。2001 年 3 月に最初の会合が開かれ、その 6 ヶ月後に設立された。その後 2 年間会員拡大が進み、調査時（2003 年 11 月）の会員数は 116 人であった（春日町 12 人、市島町 22 人、柏原町 6 人、氷上町 9 人、青垣町 1 人、篠山市 54 人、その他の地域 12 人）。そのうち、定期的に活動に関わっている会員は 25～30 名程度である。また、ナルク丹波の会報誌「里山だより」は月 1 回の発行で 1 千部を発行、会員および自治体や支援団体（社会福祉協議会、子育て学習センター、丹波県民局など）や一般の人、他の 82 のナルク支部に送付されている。

3-3. グループインタビュー調査結果

ナルク丹波でのグループインタビュー調査の実施概要は以下の通りである。

1. 日時 2003 年 11 月 22 日 15:00～17:00
2. 場所 丹波の森公苑（兵庫県氷上郡柏原町）
3. 目的
 - (1) ナルクの活動に参加したきっかけ
 - (2) ナルクの活動を通じた人間関係の変化（家族や地域との関係）
 - (3) 三世代交流・子育て支援活動と、自分自身の子育て・今の子育て
 - (4) 今後の活動について
4. 対象 ナルク丹波の活動に日常的にかかわっている会員（表 3）

表3 グループインタビュー参加者の属性

	性別	年齢	居住歴	結婚の有無	家族形態	子どもの有無	職業の有無	NPO・ボランティア活動歴
Aさん	男性	63才	5年未満	既婚	夫婦のみ2人暮らし	2人(別居)	無職	5年以上
Bさん	男性	78才	10～20年未満	既婚	夫婦のみ2人暮らし	なし	無職	1～3年未満
Cさん	男性	58才	30年以上	既婚	夫婦のみ2人暮らし	2人(別居)	正規の社員・従業員	5年以上
Dさん	女性	67才	5年以上～10年未満	既婚	夫婦のみ2人暮らし	2人(別居)	派遣・嘱託・パートタイマー	3～5年未満
Eさん	女性	65才	5年以上～10年未満	既婚	親と2人暮らし	2人(別居)	無職	1～3年未満
Fさん	女性	59才	5年未満	既婚	夫婦のみ2人暮らし	2人(別居)	無職	5年以上
Gさん	女性	53才	30年以上	未婚	親と2人暮らし	なし	正規の社員・従業員	1～3年未満

(1)参加のきっかけ

グループインタビューに参加した7名のうち4名が退職を契機とした地元へのUターン組である。第二の人生の模索、新たな自分の居場所探しの過程でナルクと出会っている、あるいは以前からナルクを知っており、自分の老後に対する不安などから丹波地域での設立を求める人もいた。

(Aさん)「実家が丹波篠山でして、定年と同時に篠山に帰って農業をしようという希望でいたわけです。農業をするのはいいけれど、篠山へ帰って一体何をやるのだと、農業だけではつまらないと思ったときに、新聞でNALCの活動というのを知ったわけです。これは面白いなど、全国的にこういうボランティアのネットを作ろうとしている。これは定年後ひとつ丹波に作って、そこでボランティア活動をしようかなと思ったのがきっかけです」

(Dさん)「そのままぼけるような気がして、何か地域に役立つことはないかなという感じから・・・」

(Eさん)「仕事をしているときも、企業側のボランティアとか、近隣の地域のボランティアを40代ぐらいからしていたのですけれども、こちらへ帰ってきて、それこそぼーっとしていたら、うつ病とか、ぼけそうで、何かしたいなというときに、ちょうどこのNALCの設立者のメンバーの一人に誘われまして」

(Fさん)「こちらの田舎というか、こちらの方には支部も当時なかったので、どうしようかなと思ったのですけれども、やはり情報だけでも欲しいなと思って、脱会しないで、そのまま引越してきたのです。そうしたらDさんの方からお電話をいただいて、こちらでNALCを立ち上げるので、本部の方から紹介されたからといって訪ねてきてくださって」「私は本当に40過ぎぐらいから老後のことがいろいろ関心がありまして、年を取ったら、やはり元気な年寄りが弱っておられる方の世話をするというふうになっていかないと、高齢社会がどんどん進んでいくので無理だろうなと思って、ヘルパーの3級の講習を受けたりとか、そういう準備だけはしていたのですけれども・・・」

(2)さらなる困難

ナルク丹波は、農村部初の支部として設立された。伝統的な地縁・血縁に基づくネットワークの拘束力の強い農村部において、ナルクのようなボランティアやNPOを通じた社会参加活動が、従来のネットワークとは異なる新たな人間関係の創出を試みる場合、多くの障害に直面する。

今回のグループインタビューの対象者のうち、その地域に住み始めて10年未満の方が4名を占めた。また家族形態もほとんどが夫婦のみの核家族世帯であった(5名)。したがって、ナルク丹波の設立時、さらには現在の活動やナルクの活動に対する地域の理解といった点に関する困難がインタビューの中から見て取れる。

(Dさん)「だから今NALCの方で、そこで活躍をしてもらっている人たちも、地域のずっと地元从前からいた人というのは少ないのです。私はそこに少し壁があるかなという感じがします」
「根からそこにいらっしやると、もう少し入ってもらえば、その辺が少し混ざるかなということはあるのではないかなと。ちょっと難しいですね」「助け合いといっても、なかなか田舎の方で人間関係の難しいように感じるんです。すごく排他的なところがあって。だからそういうこともあって、お互いに仲間同士でやったらいいかなというのもあったのです。今、地元でもボランティアをやっているのですけれども、私たちがやっているボランティアとは違うのよという感じを受けることがあるのです」

(Eさん)「(地域の婦人会の活動について:筆者補足)・・・NALCに入っているのもちょっと無理だからということでお断りしたのですけれども、そのときバッシングですね。やはり地域のことに力を入れずに、そんなわけの分からない、NALCというのがまだ皆さんご存じなくて、それでこれもちよっとNALCの方に力をいれて、PRして理解してもらわないと思ひまして動き出したのですけれども、やはりNALCという名称が、昔からの本当に農村地帯というのか、割と閉鎖的な地域なのです。いわゆる町ではなくて村的な、私の地域の住んでいるところは。だから昔から冠婚葬祭とか何とかいうことは、全部地域でしないと、やはり近隣でかちっと固めてしてしまいますので、そんなのは必要ないとおっしゃるのです。」

こうした農村部において先鋭化している伝統的なネットワークとの軋轢は、農村という地域固有の問題として矮小化されるべきではない。むしろ、ボランティアやNPO活動といった新しいネットワークが直面する、「ニューシステムとオールドシステム」の併存あるいは協働の模索に通底する課題として位置づける必要がある(社団法人長寿社会文化協会、2002、5頁)。

(3) 三世代交流事業「あそびのひろば」の位置づけ

ナルク丹波の活動は、会員のもつ経験・資格・特技・趣味等を生かした地域社会への貢献に基づいた内容となっている。ナルクの活動の中軸となっている時間預託活動としては、家事援助、通院支援、児童送迎、事務所当番および事務所提供などが含まれている。そして、ナルク丹波が現在最も力を入れている活動が、毎月1回(第4土曜日)に開催している三世代交流・子育て支援活動「あそびのひろば」である。「あそびのひろば」とは、会員のもつ経験や趣味をうまく生かしながら、昔の遊び、手作りおもちゃ、自然探索、野遊びといったあそびの活動を通じて、子どもたちとその親の世代、さらには中高年のナルク会員の交流しながら行う子育て支援である(2003年度の年間活動については表4を参照)。参加対象者は、保育園児以上の子どもたち、父母・保護者、ナルクの会員、一般高齢者とされ、参加費用(材料費)は毎回100~200円で設定されている。

表4 [あそびのひろば]年間計画書

平成15年度[三世代交流子育て支援]活動					
実施日		遊びの内容	会場	講師	
4	26	土	野外活動「春の小川の探検」 『新しい発見と手作り遊び』	丹波年輪の里 (小川と広場で)	宮端保さん他 10:30～14:00
5	17	土	自然観察「探鳥会」 「水辺で暮らす野鳥の観察」	氷上町・南小付近 「佐野鳥獣保護区」	梅津節雄さん 10時～13:30
6	28	土	「手作り遊び」 『牛乳パックの小物入れ作り』 (室内と広い広場を利用して)	丹波の森公苑 会議室3 13:00～15:30	岩垣加代子さん 木下裕子さん他
7	26	土	「野外活動・里山探索」 『ネイチャーキムスゲーム』 (自然を相手に集団での遊び)	丹波の森公苑 「里山と水辺で」 11:00～15:00	宮端保さん 川口先生他
8	23	土	野外活動・水辺の探検 『水辺の住人たち』その習性と 生活を「遊び」を交えて探検	柏原町 「水別れ公園」 11:00～15:00	西義信さん 笹倉武史さん他
9	20	土	「親子のお菓子教室」 懐かしい昔のお菓子づくり 『月見団子で秋を満喫』	丹波の森公苑 (創作工房室) 10:00～14:00	荻野靖夫さん
10	18	土	『アートフラワー教室』 自然の素材を利用した 親子が楽しめるアートフラワー	丹波の森公苑 (創作工房室) 10:00～14:00	土井徳子さん他
11	22	土	多世代交流『野遊び広場』 「地雷回収作戦ゲーム」	丹波の森公苑 (創作工房室と芝生の広場)	宮端保さん他 10:30～14:00
12	20	土	親子の手芸教室 「クリスマスとお正月準備」 (私と僕だけの手作り宝物)	丹波の森公苑 (創作工房室)	柳川咲笑子さん他 13:00～15:00
1	10	土	凧づくり・凧あげ大会 (創作工房室と広場を利用して)	丹波の森公苑 (創作工房室と広場)	郷土の凧作り名人
2	21	土	親子の陶芸・木工教室 「山野草を活ける・陶器づくり」 (木工と粘土細工)	篠山市新庄地区 丹波の森公苑	プロの陶芸家と 西義信さん他
3	20	土	「野外での集団遊び」体験 (ルールを守って勇敢に機知を 働かせた、いろんな遊び体験)	(室内と広場で)	笹倉武史さん 宮端保さん他

ナルク丹波における三世代交流事業の位置づけは、ナルク丹波の設立経過と深く関連している。

(Aさん)「何かしなければいけないねと思って、そこから立ち上がるまで6か月かかった。その6か月、なぜすぐに立ち上がらなかったかといいますと、ボランティア団体を作ったけれど、何を一体するのだというので、そこから動かなかったわけです。時間預託活動ということをやっ

ていますので、自分が元気なうちにボランティアをして、ボランティアした時間を預託しておき、自分や将来だれかが困ったときに、その時間を出して支援をやるという活動をしようとしていましたので、一体NALC丹波を立ち上げて何をやるのだということ、そこから動かなかったわけ、車いすを押すといったって、どこの車いすを押すのだと、あるいはどこの公園を掃除するといったって、公園はどこかのお年寄りの老人会がやっている。それを楽しみにしておられるのに、その仕事を取れないというようなことで、なかなか立ち上がれなかったわけ、

ここにも先述したような、伝統的ネットワークとの軋轢—境界設定—をめぐる苦労がある。その際、丹波地域でも増加傾向にある核家族を中心とした子育てニーズに目を向けた活動が三世代交流・子育て支援活動「あそびのひろば」なのである。なお、社団法人長寿社会文化協会（WAC）主催の研修会（「多世代が共に生きる社会をめざして」）での事例発表をきっかけとして、2003年度には、WACが全国のシルバー人材センターを通じて、ナルク丹波の「あそびのひろば」を「多世代交流型・子育て支援活動」のモデルとして全国的に普及することとなった⁶。さらに、ナルク丹波が行っている、伝統的なネットワークにはなじみにくいニッチニーズに向けた活動としては、児童の送迎活動（2002年7月開始）もある。送迎活動についても、調査時点において行っている支部はナルク丹波のみであり、全国のモデルケースとして注目を集めている。こうしたナルク丹波の活動の広がり、伝統的な地縁ネットワークが強力な農村部において、他のサポートネットワークが枯渇している分、ニッチニーズが深刻化する可能性を示唆しているとも言えるのではないだろうか。

(4) 多世代交流の可能性と課題—世代間コンフリクトの新しい地平

では、多世代交流としての子育てがシニア世代にどういう意味を持っているのだろうか。グループインタビューからは、①自分自身にとっての喜び、②自分の子育ての振り返りと同時に、③今日の子どもおよび子育てへの懸念・不安についての言及を確認することができる。

①自分自身にとっての喜び

（Cさん）「さっきも最も楽しいことというのは、みんながやってくれて、みんなが喜んでくれたら、よかったなと、私らはそれがみやげなのです。そういうところを気をつけて参加させてもらっています」

（Eさん）「今、こういう広場で子供と接していたり、それから送迎で子供を送り迎えしている中で、やはり会話が楽しいですね。やはり子供というのはさっきもおっしゃったように、自分も子供の目線になってつきあうというか、それが大事なのだなということが分かります。そして子供の気持ちとか感情というのを大事にして、そのとき悲しかったねとか、そのときうれしかったのだねとか言うと、話が盛り上がってくるというようなことを経験しています。それはすごく私にとっては楽しいことです」

②自分の子育ての振り返り

（Eさん）「仕事を長年やってきていましたので、育児を楽しむという気持ちのゆとりがなかったのです。だからNALCへ入会して、一緒に、私も先ほどお話ししましたみたいに、本当に回

6 社団法人長寿社会文化協会、2003、『ミニデイを活用した地域三世代子育て支援事業報告書』74-81頁にも、ナルク丹波の「あそびのひろば」活動がまとめられている。

数的には限られているのですけれども、たまにご一緒させていただいたときは、私自身が楽しいのです。私がかもし育てていたとき、手後れですけれども、こういう育て方、こういうことを教えてやったら、どれだけ精神的にふっくらした子供にでき上がったのに・・・」

インタビュー対象者全員が子どもと同居しておらず、さらに孫との接触頻度も非常に低い。そういう意味でも、同じ地域に居住する孫世代との交流は、参加者の楽しみの一つとなっている。また、自分自身の子育ての振り返り・相対化のきっかけともなっており、新たな気づきを得ているのが分かる。さらにインタビューの中には、「あそびのひろば」の活動でいろいろな遊びを学んで、実際に自分の孫といっしょにやってみているという意見もあり、＜地域の世代間関係＞と＜家族内の世代間関係＞との相互作用を確認することができる。

しかしその一方で、インタビューの参加者たちは、今日の子どもや子育てに対する懸念・不安も同時に感じている。

③今日の子どもおよび子育てへの懸念・不安

(Bさん)「私ら子供時分は、昼は親の手伝いをしたり、子供はみんな遊んでやっておりまして、昼は自発的に勉強しておりましたが、今の子は本当にかわいそうで、勉強ばかりで。遊びたい場を作ってから、喜んで遊ぶようになってくれました。それで地域でもそれを活用させて遊ばしているのです」

(Cさん)「気になることは自分も56歳ですが、坂で自分自身がゴロゴロと転がったら、転がったら面白いからやれと、自分がさあやんなさいというたれもしない。自分から体験してやって、それでもやはり大人はしないで見ていただけですね。本当は大人もみんな一緒になってやってほしいというようなことは、前回もここでネーチャーゲーム的なことをやったのですけれども、子供と私は一緒になって、ありさんをやったりするのだけれども、大人はやはり面白いなど見ていただけというか、傍観者でいるというのか。本当は全体的に三世代交流といったら、みんなができるようなゲームというようなことを、いろいろ考えてはしているのですけれども」

(Dさん)「今児童の送迎をやっているときに、子供たちと接したりするのですけれども、何だか皆さん今の子供は大人っぽいですね。そんな感じです。子供らしさが無いというか。言葉遣いがすごく乱れているというか、そんなことを感じます」

近年、両親学級だけではなく、祖父母向けの教育プログラム「祖父母学級 Grandparenting Education」が、地方自治体や病院等のプログラムとして提供されるようになってきた(Kornhaber, 1996)。この背景には、従来自明の家族機能と見なされてきた子どもの養育機能の弱体化、意識的な伝達・継承の必要性という社会的背景が存在する(小嶋・斎藤, 2003)。こうしたプログラムでは、子育てに関する世代間の意見や価値観のズレといったジェネレーションギャップを踏まえた「世代間コミュニケーション能力」(安達, 1999, 76-78頁)が問題となっており、祖父母が孫育てに関わる際の心得、たとえば「ぐっところえる」とか「一歩引く」といった祖父母の関わり方が強調される。ナルクのインタビューで語られた今日の子どものしつけに対する懸念も、おそらくこうした世代間のズレと深く関わっていると思われる。今後、ナルクの世代間交流活動を通じて、シニア世代がいかにか、親世代、あるいは孫世代と関わっていくのかを考える場合に、こうした実践的な教育プログラムはひとつの手がかりになるだろう。

しかしその一方で、こうした世代間の価値観の相違を、シニア世代の関わり方の問題として捉えるだけでいいのだろうか? 渋谷は、今日における「世代間コンフリクト」に着目し、それを「個

人間問題化された世代間の格差を、歴史的な文脈で社会問題として規定し直す」契機として捉えている。この問題提起を、子育てをめぐる世代間の価値観の相違という問題に応用するならば、子育てに関する世代間のズレ・対立を、〈家族内の世代間関係〉、とりわけ祖父母の側の関わり方（スキル）の問題としてのみ捉えるのではなく、むしろ、子育てに関する世代間の協力関係の新しい萌芽として捉えることはできないだろうか。こうした意味においても、子育てをめぐる世代間関係が家族内にとどまらず、地域にひろく開かれた関係—〈地域の世代間関係〉—に拡大していくことには大きな意味があると思われる。

なお、今回のナルク丹波のグループインタビューは、シニア世代のみが対象となっており、親世代の意見、あるいは孫世代の意見を集めることはできなかった。今後、新しい共生の萌芽として「世代間コンフリクト」を積極的に捉えたとすれば、シニア以外の世代が、子育てを通じた多世代交流をどのように捉えているのか、さらに詳細に調査していく必要がある。最後に、今回の調査の一環として、NPO法人「びーのびーの」に対して行ったグループインタビュー⁷の中から、断片的ではあるが、親世代が世代間交流という問題をどう捉えているのか、〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉の相互作用という点から見て非常に示唆的な発言があったので、参照してみたい。

(Fさん)「今の60歳近くくらいの人たちと、自分の子育ての話と一緒にしてみると面白いなと思いました。・・・(中略)大体20年くらいしか変わらないのだけれども、子育ての状況もとらえ方も夫婦関係もだいぶ違います。そういう話をもうちょっとじっくりしたら面白いだろうなと・・・」

(Gさん)「親以外のそういう世代の人と、子育てについて話し合えたりというのは、とてもありがたい環境で、「私はこういうふう育てられたけれども、こういう考え方もあるのだな」など、いろいろと教えていただいています」

(Cさん)「自分の息子たちも結婚して、お嫁さんがいたりすると、いろいろと言いたいこともあるのだけれども、「こういうところが信じられないのよね」とかいうことを私たちにおっしゃられて、「でも、気持ち的には分かります」と言う、「そうかしらね」という感じで、自分たちも親に直接言えないようなことを、お聞きしたりして、「そういう思いもあるのか」ということがあったりします。なかなか親族的に直接言えないようなことをこういうところで言って、お互いの気持ちをなだめたりしています。ワンクッションを置くということでしょうか」

こうした発言は、親世代にとっても、〈地域の世代間関係〉が〈家族内の世代間関係〉にとっての「緩衝剤」としての役割を果たしうることを示している。祖父母が、今後も依然として子育てにとって大きな役割を果たすことが想定されることを踏まえれば、「祖父母学級」のような、子育てを通じた「世代間コンフリクト」を、〈家族内の世代間関係〉における個人のスキルの問題としてのみ捉えるのではなく、〈地域の世代間関係〉との相互作用という点から、「世代間コンフリクト」の積極的側面—新しい関係性の萌芽—を再評価していくことも必要ではないだろうか。おそらく集合的アイデンティティに基づくコンフリクトは、世代間のみならず、地域における「オールドシステム」と「ニューシステム」との間の軋轢の問題にも応用しうると思われる。ナルク丹波の挑戦がもっている意味は、非常に大きいと言えるだろう。

⁷ 「びーのびーの」の活動およびグループインタビュー結果については、本報告書河野論文を参照。

4 おわりに—今後の課題

本稿では、ナルク丹波へのグループインタビュー調査を手がかりに、地域における子育てを通じた多世代交流がもたらせる可能性を検討してきた。あくまでも今回の分析は事例研究であり、今後さらなる検証が必要となることはいまでもない。

今回のグループインタビュー調査を踏まえ、子育てにおける〈家族内の世代間関係〉と〈地域の世代間関係〉の相互作用にかかわる今後の研究課題を整理しておきたい。

一つは、ネットワークの中軸にかかわる問題である。〈家族内の世代間関係〉、〈地域の世代間関係〉、そして伝統的なネットワーク、ボランティアが生み出す新しいネットワーク、これらが、子育てというひとつの活動の中で複雑に交差している。ナルク丹波は、シニア世代主導型の取り組みであり、びーのびーのは親世代主導の取り組みという違いがある。こうした違いが、多世代交流においてどのように影響しているのか、あるいは共通性はどこにあるのか。近年の母親の当時者性に依拠した「子育てサークル」(津止・藤本・斎藤、2003)がもっているポテンシャルと、世代間関係の問題がどのように関連するのか、今後さらなる検討を要する。

また、子育てを通じた世代間関係の問題を検討する際に、父親の育児参加という問題を視野に入れる必要があると思われる。たとえば、妻方の実家での「里帰り出産」が、出産後の子育てにおける妻方親族への依存を助長する一つの要因となっており、こうした強力な母娘関係は、出産後の夫婦関係や夫の育児参加の阻害要因となっているという指摘もある(読売新聞2003年10月21日朝刊)。「里帰り出産」の実態や家族関係への影響に関する調査研究はほとんど存在しない。しかし、〈家族内の世代間関係〉と夫婦関係との相互作用、あるいはジェンダーという観点からも、この問題について検討していく必要があると思われる。子育ては、出産後から始まるのではない。妊娠・出産期をも射程に入れた子育てネットワークの時系列の変遷の把握、それを踏まえた包括的な子育て支援が今後一層求められるであろう。

【参考文献】

- Beck, Ulrich , 1997, *The Reinvention of Politics: Rethinking Modernity in the Global Social Order*, Polity Press.
- Erdman B . Palmore, 1999, *Ageism: negative and positive*, second edition, Springer Publishing Company: New York. (=鈴木研一訳、2002、『エイジズム：高齢者差別の実相と克服の展望』明石書店)
- Kornhaber, Arthur, 1996, *Contemporary grandparenting*, Sage Publications:Thousand Oaks.
- Rossi Alice S., and Peter H. Rossi, 1990, *Of human bonding: parent-child relations across the life course*, A. de Gruyter: New York.
- Smith, Peter K., Linda M. Drew, 2002, Grandparenthood, in: Bornstein, Marc H.(ed.), *Handbook of Parenting, Scnd Edition: Volume3 Being and Becoming a Parent*, Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 141-172
- 安達正嗣、1999、『高齢期家族の社会学』世界思想社
- 落合恵美子、1993、「家族の社会的ネットワークと人口学的世代」蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会、101-130頁
- 北村安樹子、1999、「家族における世代間交流—祖父母にとっての孫の存在」『LDI report』9: 27-53頁
- 久保桂子、2001、「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」『日本家政学会誌』52[2]: 135-145頁
- 小嶋理恵子・斎藤真緒、2003、「ワークショップ『ペアレントエデュケーションの理論と実際』—日本におけるペアレンティングエデュケーションの可能性」『人間科学研究』5: 237-246頁
- 斎藤真緒、2003、「5章 子育て社会をつくる—「子ども」という選択をする時」津止正敏・斎藤真緒・藤本明美編『子育てサークル共同のチカラ—京都の子育てネットワーク 当事者性と地域福祉の視点から』文理閣、213-239頁
- 渋谷望、2002、「高齢者アイデンティティをめぐるポリティクス」渋谷望・空閑厚樹編『エイジングと公共性』コロナ社、184-214頁
- 杉井潤子、1996、「祖母の「孫育て」に関する研究—主観的幸福感との関連において」『家族関係学』15: 89-102頁
- 社団法人長寿社会文化協会、2002、『三世代交流型子育て支援ドロップインモデル事業報告書』
- 社団法人長寿社会文化協会、2003、『ミニデイを活用した地域三世代子育て支援事業報告書』
- 丹波県民局、「たんば Kosodate 夢プラン（丹波少子化対策アクションプラン）」
- ベネッセ教育研究所、1998、『子育て生活基本調査報告書—園児、奨学1・2年生の母親を対象に』ベネッセコーポレーション

第2章 仕事と社会参加

働き方の変容とボランティア活動

前田信彦

1 働き方の変容

近年、とりわけ若いコーホートに働き方に対する価値観の変化の兆しが見え、また企業も従来のような古典的なシステムを変革する動きが出てきている。これまでの日本の雇用慣行の古典的モデルの根本原理は「生活保障」という点にあったが、それは年功賃金にみられるように標準的な生計費の上昇を長期に渡って担保するというメリットと同時に、従業員の会社への依存度を高めるという性格を持ち合わせていた（稲上,1992）。このような雇用慣行の根本原理は、戦後のたぐいまれなる経済成長の要因となってきたことも事実であるし、またそれによって多くの労働者が生活の経済的安定を維持することができたともいえる。しかし同時に、それは、会社のためならば家族や地域生活をも犠牲にして働くということも厭わない社会風土を生み出してきた。換言すれば、労働者の家族、地域生活、職場とともに、企業を中心に一つの共同体として機能している、というのが日本の古典的な雇用システムの特徴でもあったといえるだろう。

しかし今、このような古典的な日本の雇用慣行あるいは労働者の共同性に「ゆらぎ」が生じている。この「ゆらぎ」の底流に存在するのが「個」を尊重する働き方への肯定的な評価であろう。このような「個」を尊重するような働き方は、若者のフリーターやパートタイム労働、あるいは高齢労働者の増加によっていっそう拍車がかかり、従来の雇用慣行、あるいは職場を中心とする共同性のゆらぎは増幅する。なぜなら、彼らの働き方はその個々人の多様な価値観、あるいは能力、身体や生活スタイルに見あった多様な就業形態を必要とするからである。さらに、最近の労働者意識の分析結果では若い世代ほど「会社・仕事への限定的関与の傾向」が強まっていることが指摘されている（佐藤、2000）。つまり「個」を優先した労働、あるいは自立的な働き方への意識の傾斜は、現在の高齢者世代よりも、より若い中年世代のほうにより顕著である。このような労働者の価値志向や働き方のニーズの動向をみると、この趨勢は若いコーホートに顕著であることから、日本的雇用はいっそう「個」を重視した方向へ向かうことが予想される¹⁾。もっとも、個人を軸とした働き方の登場に対しては、社会学の議論でもその評価が分かれるところである。そこで本稿ではひとまず「個」を重視する働き方の出現を生活変動の一つの流れとして位置づけつつ、「『個』が強調される社会において『共同性』がどのように再構築されうるのか」という視点から仮説的な考察を提示してみたい。

2 新たな共同性の構築

「個」としての労働者が出現する中で、人々の生活の「共同性」は果たしてどのように再構築されうるのだろうか。上述のように、これまでの日本的雇用慣行においては、会社中心の人間関係があり、サラリーマンの多くは会社を基盤とする共同性に組み込まれ、家庭生活や地域生活の形成と切り離されてきた。しかし近年の日本的な雇用慣行の「ゆらぎ」の過程でサラリーマンの多くは、会社・職場以外の新たな共同の場の構築を必要としている。

共同性の再構築の一つの可能性はNPO（非営利組織）活動を通じた人々との新たな出会いや「つながり」であろう。実際、サラリーマンであっても、自分と社会とのつながりを、「会社」の人間関係ではなく、ボランティア活動を通して地域生活におけるネットワークの中に見いだす人々

が増えている。NPOは経済的報酬のない(少ない)ボランティア活動によって支えられるものであるが、やりがいや人々のつながりを生み出す社会参加の手段として広く市民に受け入れられつつある。いわば「企業労働」とは異なる「市民労働(Bürgerarbeit)」ともいえる(ユルゲンコック,2000)。企業の肩書きを必要としない「市民」としての社会参加は、企業を中心とする人々の共同性から、企業-地域-家庭を横断的に結びつける市民としての共同性への移行の可能性を持っているといえるであろう。NPO活動の出現は、企業を中心とする共同性から脱却し、市民としての共同性への道を切り開いたといえる。しかし、NPO活動にみられる市民としての無償の活動・労働の出現は、同時に人々の「働くことの意味」を問い直す契機ともなっている。つまり「無償の労働」すなわち「アンペイド・ワーク」をどう評価するか、という問いにもつながっている。

3 アンペイド・ワークへの評価

ここで「アンペイド・ワーク」を企業労働よりもより包括的な概念としての「社会にとっての有用な労働」として考えてみたい²⁾。

企業労働から切り離されるということは、人々にとって、「有用な仕事」が無くなることではない。地域で一人ではできない問題の住民による解決、困った人の話し相手、あるいは育児、介護などは自分の血族でなくても必要とされる「有用な仕事」であるだろう。山や川縁に捨てられたゴミ拾い、自分で作り自分で食べられるだけの農作業、お金にならない政治活動、等々。実は、我々の社会は企業の賃労働でカバーされる仕事のみならず、アンペイド・ワークを含む「社会にとっては有用な仕事」によっても支えられている。このような「社会にとっての有用な仕事」は無償であっても、社会にとってはなくてはならないものとして機能している。しかし、社会にとっての有用な仕事としての「アンペイド・ワーク」は、単に賃金が支払われないということのみならず、社会から評価されにくい、という性格を持ち合わせている。つまり、企業にとって「お金」になる仕事は重視されるが、「お金」にならない仕事は企業からも社会からも評価されにくいというのが現状であろう。

NPO活動の新しさは、そういう目に見えなかった仕事を、多くの人と共有しあって、公の場にさらして、そして社会にとっての「有用な労働」として再評価する点にある。無報酬のボランティア、あるいは有償ボランティアは、賃金の実入りは少ないが、信頼と貢献による仕事の満足度は高い。そして地域住民に共有された仕事として意識され始めている。

同時に、私たちは企業の求める仕事だけが社会にとって有用な仕事ではないことにも気づき始めている。働きたいけど子育てもしたい。ゆとりのある時間がほしい。会社の仕事も大事だけど、ボランティアもしてみたいし、近所づきあいもしたい。ゆっくり縁側でおばあちゃんと話がしたい。もう一度学校で勉強したい。そんなライフスタイルを望んでいる女性も多い。男性もそういう生活の場の有用性に気づくチャンスは増えている。実際、今回の調査対象となったNPOのNALCは、高齢期になって他人の子どものケアをしてみたいという人々によって生み出された、いわば社会にとって有用な仕事を共有する「共同の場」ともいえるであろう。

生涯、一人がボランティア活動や無償労働を続けることは、現実的な選択ではないが、しかし、人生80年時代を考えれば、個々人の時間のテンポに歩調を合わせて、じっくりと働ける可能性を探る時間も今の私たちには必要だろう。失業が増え、先が見えない不透明な時代にあってこそ、「企業にとって有用な仕事」=企業労働のみならず、NPOのようなアンペイドワーク=「社会にとって有用な仕事」を可能にする多様な生き方・働き方を選択できる道を、私たちの社会はもっと真剣に探るべきではないかと考える。

4 ライフコースの視点

では、NPO活動のような、「社会的に有用な働き方」を自分の人生の中に積極的に位置づけて行くにはどのような視点が必要であろうか。手がかかりとなる一つの有効な社会学の概念に「ライフコース」がある。ライフコースとは、「個人がたどる、生涯にわたる各種役割経歴の束としての軌跡」（岩上、2003:P.34）と定義される。当該の社会で人々に共有された人生軌道の青写真ともいえるが、従来のライフサイクルの概念とは異なり、発達の多方向性・可変性が強調される（岩上、2003）。したがって、ライフコースという概念に依拠しながら人々の人生の軌道を捉えることによって、賃金が支払われる仕事のみならず、ボランティア活動のように「無報酬だが社会にとって有用な仕事」を人生の中に位置づけて、彼らのライフコース＝職業生涯の多様性を捉えることが可能となる。

職業生涯を考えた場合、「ライフコースの多様性」という発想は、多様なライフスタイルをもつ人々がその職業生涯において、「働く」ことを通しての社会参加を実現する条件とは何か、「働く」ことを通した参加型福祉社会の実現のためにはどのようなデザインが必要か、といった理念に支えられるものである。繰り返しになるが、この場合「働くこと」には、従来の企業労働のみならず、ボランティアやNPO活動・社会的起業家なども含まれている。ライフコース＝人生の軌跡における「ペイド・ワーク」と「アンペイド・ワーク」の柔軟な組み合わせを可能とする発想でもある。このように「ライフコースの多様性」という発想からペイド・ワークとアンペイド・ワークの柔軟な組み合わせを考えると、以下のようなモデルが想定されるだろう。

Aさん 学校教育→パートタイム→フルタイム→NPO→独立・開業→引退

Bさん 学校教育→フルタイム→失業→教育訓練（再教育）→パートタイム→フルタイム→引退

Cさん 学校教育→フルタイム→退職・出産・育児→NPO→教育訓練→独立開業→引退

これはライフコースの中での多様な働き方の組み合わせともいえるが、もちろん多様な組み合わせの数例に過ぎない。人生の軌跡における仕事やボランティア活動、あるいは教育訓練、家事・育児などのライフ・イベントの組み合わせは無限であり、それは当該の社会制度あるいは特定の時代によってと強く規定されるだろう。しかし、学校教育、結婚、出産、働き方などの発生する時期（タイミング）、順序、発生の有無に関しては、「あるべき姿」として存在していた社会の規範が揺らいでいる現在、ライフ・イベントの組み合わせは個人の選択によって組み合わせる自由度は増加しているといえるだろう。広井良典は「人生の中でのワークシェアリング」（p.94）をとりあげ、「社会政策におけるライフコースアプローチ（の考え方の重要性）」を指摘しているが、このような発想は、これまでの「アンペイド・ワーク」vs「ペイド・ワーク」といった図式ではなく、生涯におけるアンペイド・ワークとペイド・ワークのバランスを、ライフコースの設計に応じて組み合わせる可能性が登場していることを示唆している。同時に、われわれは個人で選択できる自由との引き替えに、個人の人生設計のリスクを背負うということでもあり、ライフコースの多様化は、同時に自己選択にともなうリスク・マネジメントが要求されるともいえるだろう。

5 ライフコース政策の展開

ライフコースの多様性に応じた職業キャリアの再編成という視点は、既に EU の労働市場の理論にも登場しつつある。例えばドイツの経済学者ギュンター・シュミットは「芸術家労働市場に特徴的なように、労働が意味あるものであり、稼得労働以外にも自分の人生があり、その両者が相互に関連しているなら、それが現代における福祉である。多様な生産的労働形態（有償もしくは無償、従属もしくは自営）の中から選択する可能性が高まるなら、移行労働市場は福祉を豊かにするのである。福祉の目標をこのように拡大するなら、完全雇用の目標も、持続的かつ従属的フルタイム就業の状態ではなく、「流動的 (fließgleichgewicht)」だと理解すべきである。そこには多数の労働形態が存在し、生活状況と経済状態に応じた自由な選択が可能となる。多様な就業・活動形態の間の移行を制度的に演出し、労働法と社会保障法を拡げて社会的安全を確保するのが、最新の労働市場・就業政策である。(p.29-30)」と述べ、福祉社会の構築にとって、多様な職業キャリアと生活の調整システムが重要であることを指摘している (ギュンター・シュミット 2000)。

また、ドイツの社会学者であるユルゲン・コッカは「われわれは、「労働」をもっと広義に、別様に定義すべきではないだろうか。「稼得労働」に限定すべきではないのではないだろうか。稼得労働と他の活動、労働と自由時間、職業と家族（とくに両性相互の関係で）、これらを結びつける新たな可能性が開かれている。(p.15)」と述べ、NPO などの働き方を「市民労働」として位置づけて、稼得労働以外の働き方の可能性を指摘している (ユルゲン・コッカ 2000)。

このような指摘は、職業生涯＝ライフコースという長期の時間のスパンを視野に入れながら、労働市場の流動性を高めて、有償労働 無償労働 教育 家庭的責任との間を行き来できる保障、すなわち職業生涯の自由な移動とそれに対応するリスク・マネジメントが制度的に必要であることを示唆している。

実際すでに EU 主要国においては、子育て期においては家庭生活との調和のとれた働き方、高齢期への移行期においては、早期引退の廃止と部分的・選択的引退という、新たな働き方が制度的にも構築されつつあり、多様なライフコースを選択可能にする政策展開がみられる (Vroom and Guilemard,2002, 濱口 1999,2000、前田,2000a,2000b,2002, 正木・前田,2003)。これは性別や年齢あるいは育児や介護などの家族的責任 (family responsibilities) の有無にかかわらず、すべての人が仕事 (work) を通して社会参加できるよう、ライフコースの中で余暇、教育、ケアといった生活課題に対応した労働時間の再構築・再配分を目指すものである。

具体的にそのポイントを整理すると、①労働者のライフコースにおける労働時間と所得の再配分 ②ケア（育児・介護）する責任と自由を確保するための時間と所得保障 ③長期的な職業生涯を前提とした生涯学習のための時間と所得の保障 ④生活との調整を考慮してパートタイムになる権利の保障 ⑤使用者と労働者のニーズを両立するための新たな労使関係の構築、といった政策によって具体化されるものである。とりわけ、男女労働者の仕事とケアの両立およびジェンダーによる雇用差別の撤廃、および高齢者への年齢差別の撤廃と早期退職慣行の是正、および長期の職業生涯のための年金制度の再設計は、欧州主要国が重視する政策課題となっている (European Foundation for the Improvement of Living and Working Conditions,2003)。

つまり、働き方の多様化やその意味の問い直しの中で、「働くこと」を一つのキー概念としながら福祉国家の再編が進んでいるのが欧州の現状である。また、高齢者についてみれば、60才（あるいは65才）に一律に労働市場から排除 (exclusion) するのでなく、雇用の継続や起業、あるいはボランティア活動など、広い意味での「働く」ことを通しての社会参加によって、福祉社会の担い手となって社会に包摂 (inclusion) するという理念にも結びついている (Commission of the

European Communities 1999、濱口、1999)。

6 我が国への示唆

我が国の政策レベルにおいては、高齢労働者の転籍や雇用延長などが促進され、企業を高齢者就業の受け皿とする傾向が強い。しかし、日本的雇用が変化をとげる中で、働き方やその意味をより包括的に捉え直し、企業で雇用される働き方のみならず、アクティブ・エイジングを前提とした若年期から高齢期までの多様なキャリア形成を支援する必要があるだろう。

具体的には、欧州の労働市場政策の改革にみられるように、教育、訓練、労働、ボランティア活動、ケアのバランスを考慮し、個人のライフコースにおける時間の再編成を念頭に置いた労働市場政策が必要である。これは学校卒業から定年退職まで一つの企業で働く職業生涯のみならず、NPOにおけるボランティア活動をライフコースの中に積極的に位置づけていくことをも意味している(前田,2003)。とりわけ高齢者の生活・職業キャリアを考える上での重要な政策的視点は、雇用(会社で雇われて働くこと)だけが仕事ではなく、NPOや起業家などのもう一つの(オルタナティブな)働き方を、制度的にも積極的に位置づけるということであろう。

このようなライフコース=職業生涯における働き方の見直しのためには、労働時間の短縮を進めながら、ペイド・ワークとアンペイド・ワークとの調整が可能な労働時間の選択の柔軟化、新しい労働観に対応した制度の構築が必要であろう。それはまた、若年期から高齢期までのライフコースを射程に入れた柔軟な働き方(の組み合わせ)への支援、という福祉国家の枠組みによって支えられるものである。

7 今後の研究の視点

以上、働き方の変容とボランティア活動の位置づけに関する若干の考察を試みたが、最後に今後の研究に必要な視点を整理すると以下になるだろう。

第一は「個」と「多様性」の発想である。これは個々の労働者が、斉一的なライフサイクルではなく多様なライフコースを持っており、職業生涯において多様な家族・地域生活を展開するという視点である。これはまた、職業生涯における時間の再配分という政策にも結びつくことが示唆される。ライフコース概念を軸としながら教育、仕事、家庭、地域生活、ボランティア活動などの多様な組み合わせを捉え、柔軟なライフコースを可能にする働き方について検討を進めていくことが必要であろう。

第二に、労働者の「共同性」の再構築という視点である。従来、サラリーマンの多くは会社中心の人間関係が構築され、地域生活との関わりは希薄であった。会社と個人との関係が変化し、新たな共同性が模索される中で、個としての労働者が、企業、家族、地域の中で、あるいはNPO活動を通じたネットワークとしての共同性を構築する可能性を追求する視点が必要であろう。最近では社会関係資本(social capital)という経済的資本とは異なった資源の重要性が指摘されているが、社会関係資本をソーシャル・ネットワーク概念から捉えて、労働者生活の社会関係の構図を描き出すことも一つの有力な方法であろう。

第三に、これらの仕事と生活の変容はまた、働くことの意味の再考・問い直しにもつながっている。NPO、ボランティア、コミュニティビジネスといった新しい働き方の出現と、それを支える新たな「労働倫理(work ethics)」とは何かを明らかにすることが必要となるであろう。

注1) 同時に近年の労働者の政策へのニーズの変化に注意するべきであろう。例えば2004年の春闘においてはこれまでの「賃金闘争」から「脱賃金」という流れが明確である。電機連合の代表は「すべてカネ、カネ、カネという時代は終わった。雇用延長や労働時間短縮など、総合労働条件の課題がいくつもある」（金属労組の討論集会での発言）と述べ、賃上げにこだわらない生活改善のための春闘にシフトすることを示唆している（朝日新聞「『脱賃金』流れ加速」2004年1月17日朝刊）。生活水準の維持から、労働時間の短縮を念頭にしたゆとりある生活へ政策が転換しつつあることを示しているといえるだろう。

注2) 労働における「アンペイド・ワーク」への積極的な評価については野川(2003)、前田(2003)を参照。

参考文献

- Bert de Vroom and Anne Marie Guillemard, 2002. From externalization to integration of older workers :institutional changes at the end of the worklife. Goul Andersen and Jensen.H (eds.) Changing labour markets, welfare policies and citizenship. The Policy Press. 183-207.
- Commission of the European Communities, 1999. Towards a Europe for All Ages : Promoting Prosperity and Intergenerational Solidarity.
- European Foundation for the Improvement of Living and Working Conditions, 2003
A new organization of time over working life (Info Sheet).
- ギンター・シュミット 2000 「労働の未来－工業社会から情報社会へ」季刊労働法 17-36 頁
- 濱口桂一郎 1999 「EUにおける雇用政策と社会保障」『海外社会保障情報』
国立社会保障・人口問題研究所 62-74 頁
- 濱口桂一郎 2000 「EU 社会政策思想の転換」『季刊労働法』194号 総合労働研究所 105-128 頁
- 広井良典 2003 『生命の政治学－福祉国家・エコロジー・生命倫理』 岩波書店
- 稲上毅 1992 「現代日本の雇用慣行－いくつかの変動局面とその示唆－」
『これからの働き方を考える (Part1)』日本労働研究機構
- 岩上真珠 2003 『ライフコースとジェンダーで読む家族』 有斐閣
- 前田信彦 2000a 『仕事と家庭生活の調和－日本・オランダ・アメリカの国際比較』
日本労働研究機構
- 前田信彦 2000b 「子育てと調和する働き方と政策ニーズ」『季刊社会保障研究』
Vol. 36 No.4, 国立社会保障・人口問題研究所 423-434 頁
- 前田信彦 2002 「男性の労働時間と家庭生活－労働時間の再編成に向けて」
『家族と職業－統合と調整』 ミネルヴァ書房 158-181 頁
- 前田信彦 2003 「高齢期における多様な働き方とアンペイド・ワークへの評価
－男性定年退職者の分析」『国立女性教育会館研究紀要』 第7号 21-31 頁
- 正木祐司・前田信彦 2003 「オランダにおける働き方の多様化とパートタイム労働」
『大原社会問題研究所雑誌』 No.535, 1-13 頁
- 野川忍 2003 「アンペイド・ワーク論の再検討」『ジュリスト』No.1237, 117-125 頁
- 佐藤厚 2000 「日本の労働者の労働意識－これまでとこれから」 季刊労働法 55-70 頁
- ユルゲン・コッカ 2000 「労働の歴史と未来－ヨーロッパの視点」 季刊労働法 6-16 頁

1 問題意識

NPO やボランティア活動など、近年の社会参加活動の活発化は、生活のなかで「働く」ということについて考えるうえで示唆に富む現象である¹。

近代産業社会において「労働」とは、経済的対価を得るために市場で行う労働（ペイドワーク）を意味していた。そして、この労働は生計を維持する経済活動に留まらず、人びとの生活を秩序づけ、社会の統合を図るうえでも中心的活動であった。（少なくともそうあるべきとされていた。）この意味で、近代産業社会は「労働社会」と呼ぶことができる。しかしながら、今日ではこうした労働観を自明視することが難しくなりつつある。

一つには、市場外部の無償労働（不払い労働、アンペイドワーク）に対する認識の高まりがある。市場労働を正しい意味での「労働」とする近代的労働観に対して、アンペイドワーク論は、家族領域で行われる家事、育児、介護のように、市場の外で行われ、経済的対価を伴わなくても、市場労働に劣らず重要な労働があることを示した。言うまでもなく、ボランティア活動や地域活動も無償労働である。そして、公的社会領域において人びとが自発的に担う無償労働は、「ボランティア・ワーク」と呼ばれ、市場でも家族でも充足することが難しい、生活の必要性にかかわる労働として、近年重要な社会的位置を占めつつある²。そして、個人にとっても、市場外の公的社会領域に参加し、自己の居場所を得る活動として重要な意義をもつ。

もう一つは、市場労働の変化である。企業がコスト削減のために人件費の抑制に努める今日では、もはや高度成長期のような賃金の上昇を期待できない。そればかりか、雇用不安や経済不安も社会に蔓延している。それにもかかわらず、人びとの価値志向においては、「物の豊かさ」の追求よりも「心の豊かさ」を重視する意識が浸透しつつある。そして、労働にも仕事のやりがいなど、非経済的充足感を求める職業意識が高まりつつある。市場労働についても、「何のために働くのか」という問いに対して、非経済的な答えが求められていると言える。

こうした変化をポジティブに引き受けるなら、経済的豊かさを追求する<市場労働社会>から、労働を社会参加の重要な機会とみる<参加型労働社会>への転換が、今後の労働社会の重要な方向性となるであろう³。そして、このとき、市場労働もボランティア・ワークも、公的社会領域で何らかの役割を担う活動と意味では、同じ「労働」と見ることができる⁴。

そこで、本稿では、今日芽生えつつある職業意識に着目して、ボランティアや地域活動などの社会参加活動が職業生活においてもつ意義を考察したい。

1 「社会参加」は、広義には市場労働もそのなかを含む概念であるが、ここでは「社会参加活動」というときには賃金労働を含まない活動とすることにしたい。

2 武川（1999a）・武川（1999b）によれば、「ボランティア・ワーク」は、自発性や無償性という点で市場労働と異なるだけでなく、社会性という点で家事労働とも異なる。その意味で、市場労働・家事労働に対して「第3の労働」と位置づけられている。

3 労働を社会参加の重要な機会とみる思想は、EU 社会政策の基礎にもなっている。濱口（2000）などを参照。

4 野川忍は、労働を「有償労働－無償労働」・「組織労働－独立労働」の2系列4類型でとらえ、「人間にとって有益な労働」という観点から、従来の「労働」とらわれない働き方の可能性を論じている。野川（1999）及び野川（2003）を参照。

2 調査と分析方法

本研究プロジェクトは、社会参加活動のなかでも、人びとが自発的に参加し、一定の社会貢献を果たすことを目的とした団体の活動に焦点を当てている。つまり、社会参加活動のなかでも、「ボランティア・ワーク」と呼ぶ活動に焦点を当てている。そして、調査は、NALC（ニッポン・アクティブライフ・クラブ）のメンバーを対象としたアンケート調査と、個々の研究委員が独自の観点から選んだ社会活動団体に対するグループインタビュー調査の2本立てで行った。

本稿でも、まずボランティアな社会参加活動の現状を定量的に把握するために、アンケート調査を分析し、後半において「流山ユウ・アイネット」（以下「ユウ・アイネット」）と「川崎おやじ連」（以下「おやじ連」）でのグループインタビューから得られる知見を報告する⁵。このとき、インタビュー調査ではアンケート調査ではとらえ切れなかったリアリティを取り出すことを目的とし、即興性を重視して、対象者の発言に依拠しながら質問を展開する手法を採用した。そのため、アンケート調査とインタビュー調査は、基本的枠組みにおいて問いを共有しているが、得られた結果には重複しないところも多い。そこで、アンケート調査とインタビュー調査は別個に検討したい。そのため、本稿は、一定の仮説に基づきながらも、仮説演繹的研究というよりは、今後の研究に向けた仮説構築的研究という色彩が強いものとなっている。

ここでは、データの分析・検討に先立って、調査対象である3つの団体の特徴を簡単に整理しておきたい⁶。本研究の目的は、個別の社会活動団体の実態把握ではなく、そこからボランティア・ワークに関して一般化可能なインプリケーションを得ることにある。そのためには、各団体がもつ特性を把握しておくことが肝要である。

まず、アンケート調査の対象であるNALCの特徴は次のように要約することができる。

- ① 1994年に「WAC アクティブ・クラブ」として設立され、1998年にWACから独立。2004年で設立10年となる。こうした組織の歴史を反映してか、サンプルの継続年数の平均は4.55年であり、最頻値は3年である。
- ② 関東と近畿を中心に、北は北海道から南は鹿児島まで、全国各地に活動団体をもつ。それぞれの活動団体は地域に密着した活動を行っている。その主な活動内容は「高齢者の介護、介助、家事援助」、「子育て支援」、「会員による相互扶助のボランティア」、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」の4つに大別できる⁷。
- ③ ボランティアの報酬は時間預託制度を採用しており、金銭報酬を得ている会員はいない。
- ④ 高齢者の社会参加を目的に設立された団体であり、若いメンバーもいるが、主な参加者は60歳以上の高齢者である。サンプルの77.4%が60歳以上であり、平均年齢は63.8歳。
- ⑤ サンプルの60.5%は収入を得る仕事に就いていない。参加者の多くが高齢者であることを踏まえるなら、ここでの無職者とは主として職業生活からの引退者と見ることができる。
- ⑥ サンプルの男女比は、男性42.6%・女性57.4%と、ほぼ半々の比率である。

NALCのデータは、高齢期を中心とした社会参加活動を対象としているため、「働き盛り」とされ労働時間も長い壮年期も含めたボランティアの実態をとらえるには十分ではない⁸。また有給ス

5 「川崎おやじ連」は、「いたか」、「おやじ考」、「おやじの会」、「なごみ中野島おやじの会」から形成されるネットワークであるが、本稿では一括して「おやじ連」と呼ぶことにする。

6 調査の概要については、本書第1部を参照。

7 「子育て支援」は最近始まったため、他の3つの活動に比べて、行っている団体はまだ少ない。

8 しかし、NALCの活動に限定すれば、週1回以上の参加者は少数であり、ライフステージによる労働時間の差は、活動への参加に大きな影響を及ぼすものではないとも考えられる。

タッフはほとんどいないため、NPO からの収入で生計を立てる際に生じる、職業意識の葛藤は考察の対象外である⁹。

その一方で、活動分野が福祉にかかわる活動から趣味・交流的活動まで多岐にわたっていることや、参加者の男女比率・有職／無職の比率に極端な偏りがいないことは、地域社会を拠点に、男性や有職者も含めて多様な参加者が、様々な活動に参加するボランティア活動に関して、一般化可能なインプリケーションを得るに適したデータと言える。

こうしたデータの特徴を踏まえたうえで、本章では NALC への参加に対する意識のうち、「活動の意味づけ」と「団体へのコミットメント」とを取り上げる。

社会生活において、職業には生計の手段という経済的意味のみならず、他人との関係形成や自己の個性発揮という意味もある。また、何らかの社会的責任が伴うという点で、本人の自発性とは別に強制的側面もある。ボランティア・ワークもまた、関係形成・個性発揮・社会的責任においては、職業と同様の意味をもつと考えられる。また、自発性と無償性を基本とするボランティア・ワークにおいて、参加者のコミットメントは活動を支える中心的要件である。そして、言うまでもなく、そのコミットメントを生む要因は、経済的対価ではなく、理念への共感や、活動内容のやりがい、メンバー同士の人間関係などの非経済的要因である。

ここから、NALC での活動を、その非経済的次元において職業と同じ意味で「労働」とみなすことができるのであれば、NALC の活動への意味づけや、NALC へのコミットメントは、非経済的要素の重視を中心とした、新しい職業意識と親和的であると考えられる。この点をアンケート調査のデータ分析によって検証したい。

また、インタビュー調査の対象である 2 つの団体は、次のような特徴をもっている。「流山ユー・アイネット」は自治会を母体とした NPO 法人であり、点数預託制度による会員同士のボランティアを初め、介護保険事業や子育て支援（ファミリーサポート事業）など、福祉関連事業も行っている。これに対して、「川崎おやじ連」は NPO 法人ではなく、メンバー同士の交流を目的に、講演会、趣味の活動、地域行事への参加を主な活動としており、「ユー・アイネット」のような事業は行っていない。つまり、「ユー・アイネット」は地域社会に貢献する「事業体」の色彩が強いものに対して、「おやじ連」は交流そのものを目的とした「サークル」の色彩が強い。このように、両者は活動内容も組織形態も異なる。またインタビューに参加した「ユー・アイネット」のメンバーは、多くが職業生活からの引退を機に参加し始めているのに対し、「おやじ連」は壮年期から参加しており、現在も就業している。インタビュー対象者の年齢層や参加に至る経緯も異なる。

しかし、壮年男性が企業社会で置かれている状況に目を向けるとき共通点も多く、この二つの事例から、男性労働者が社会参加活動に参加する意義と、今後の職業生活の展望について、重要な示唆を得ることができる。

もちろん、本稿では、参加者が活動を明示的に「労働」とみなしているかどうかは問題ではない。それよりも、活動の意味するところにおいて職業とボランティア・ワークが、同じ「労働」とみなすことができるか、またできるのであれば、どの側面においてか、ということに焦点を当てている。ボランティア・ワークを労働社会の今日的状況と結びつけ、新しい「労働」の一つとみる議論は、理論的・思想的なレベルで幾度となくされてきたが、実証的な検討は十分に行われていない。そこで、この問題を調査結果に基づいて考察することが本稿の目的である。

⁹ NPO での就業が孕む葛藤については、後半のインタビュー調査において、「ユー・アイネット」のメンバーが指摘している。

3 職業意識とNPO参加 — NALC アンケート調査より

(1) 岐路に立つ労働社会と職業意識の新次元

近代産業社会において、労働は生計を維持するための経済活動であるとともに、社会生活の本質的活動とみなされてきた。そのため、職業に就くことは、「一人前の人間」として社会の公的領域に参入し、「市民」となることを意味してきた（Gorz 1997）。言うまでもなく、ここでの「労働」とは「有償労働」を意味し、「公的社会領域」とは「市場」を意味している。

この市場労働社会は、歴史的にいくつかの局面に分けることができるが、ここでは第二次世界大戦後の高度経済成長を背景に、一つの標準モデル（範型）となった労働社会の編成原理に焦点を当てたい。この標準モデルは、様々な批判を浴び、幾度となく改革を迫られながらも、今日に至るまで労働社会の基本枠組みを形成している。その特徴は次のように要約することができる。

第一に、雇用労働を主要な就業形態とする。近代産業社会は、農業・自営業中心から雇用労働中心へと就業構造を転換させたが、戦後の高度成長期にこの構造転換は急速に進み、雇用労働が主要な就業形態となった。そして、高い経済成長率を背景に雇用の安定した社会が形成された。日本の企業においては、「終身雇用」・「年功賃金」・「企業別組合」を柱とする「日本型雇用システム」が成立した時期でもある。当初、この雇用システムは大企業のホワイトカラーに限定されたものだったが、その後、中小企業やブルーカラーにも準拠・参照すべきモデルとして浸透した。これにより、一つの企業組織に定着して働くことが標準的な生活様式となった。

第二に、高い経済成長率により生活水準の上昇が強く実感され、とりわけ日本では、物質的豊かさの獲得を目的とした労働へのコミットメントが高まった。「フォーディズム」(Fordism) と呼ばれる生産システムのもと、大量生産—大量消費のサイクルが成立し、経済は飛躍的に成長したが、そのなかで、労働者の賃金は大幅に上昇し、物質的豊かさの獲得が更なる労働意欲を生み出した。「所得倍増」、「三種の神器」、「3C」という言葉は、当時の日本の経済的生活水準の向上を象徴するものである。

第三に、日本では、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に立脚した専業主婦世帯が一般化した（落合 1994）。近代産業社会において「労働者」とはすぐれて男性を意味する（大沢 1995）。しかし、自営業や農業など、職住近接の就業形態では、生活における市場労働領域と家事労働領域の区別は曖昧である。また、雇用労働であっても、夫の所得が低ければ、妻も働かなければ生計を維持できない。雇用中心の就業構造にもとづく職住分離型生活様式の一般化と、高い経済成長率をもたらす賃金の上昇によって、男性が一家の稼得者（breadwinner）として市場労働に専念し、家事労働は女性が担う役割分業が標準的な生活様式として定着した。

要するに、戦後の高度経済成長がもたらした労働社会とは「高い収入や社会的地位を獲得するために、企業に雇用されて得た賃金で家族を養う男性を一人前とする社会」であったといえる。

ところが、今日、こうしたモデルに立脚した労働社会は岐路に立っている。経済成長が鈍化すると、上昇した賃金や安定した雇用保障が企業にとって負担となり、労働力は最小限に抑えるべきコストとみなされるようになった。経済のグローバル化は資本の移動を促進し、企業は生産拠点を人件費の高い先進国から、労働力の質が高く人件費は安い地域へと移している。またサービス労働の需要は増加しているが、その多くでは、製造業と同等の経済的対価を期待することが難しい。その結果、低賃金で雇用も不安定な非正規雇用が増加する一方で正規雇用は減少し、全体として雇用の縮小が進んでいる。つまり、賃金労働において、かつてのような賃金上昇や雇用の安定を期待することが難しくなっている。

このような状況では、家計を男性の所得にのみ依存することは、家族にとって経済的にリスクの高い戦略となる。片働きよりも男女がともに家計を支え合う夫婦共働きの方がリスクは分散される。もちろん、今日では、女性の就業率は上昇し、共働き世帯も増加している。しかし、日本では、既婚女性の多くが出産・育児を機に退職し、育児が一段落した後に就業を再開する「M字構造」が維持されている。そして、育児後の女性ではパートなどの就業形態が主流であり、妻の収入は家計補助的な位置づけを越えていない。つまり、現状は夫を主たる稼得者とする役割構造から抜け出していない。

その一方で、今日の人びとの価値志向に目を向けると、経済的豊かさの追求よりも精神的な幸福を重視する方向へと生活の力点がシフトしつつある。この変化は、景気の良し悪しに関係なく、社会意識の底流で起きている。今日のボランティアや地域活動といった社会参加活動の広がりもまた、こうした価値志向の変化と無関係ではない。これらの活動は、地域や社会の一員としての責任を果たすものであるばかりでなく、参加者にとって、他人との交流を深めたり、個性を発揮したりする契機として大きな価値をもつ。経済的には無償であっても、他人や社会の役に立つことで関係形成や自己実現といった非経済的対価を得ることができる。そして、このことは、市場労働についても例外ではなく、社会的地位や収入の獲得よりも、仕事自体のやりがいなどの非経済的要素を重視する意識が高まりつつある。

要するに、厳しい雇用情勢のもと、人びとの生活は高い経済的リスクにさらされており、雇用不安や経済不安が社会に蔓延しているが、だからと言って、人びとは更なる経済的豊かさの獲得に執着していない。したがって、旧来の労働社会の標準モデルから脱却した職業意識を把握することを通じて、労働社会のゆくえを占うに当たり、重要な示唆を得ることができる。具体的には、経済的対価を労働の主な目的とする経済主義からの脱却、安定雇用を前提とした企業や組織への依存からの脱却、男性を主たる稼得者とする男性中心主義からの脱却がキーワードとなろう。また、ボランティア・ワークが人びとの社会生活において重要な「労働」として意義をもつならば、職業に就いている人間を「一人前」とする職業中心的な市民観からの脱却や、自己利益の追求に終始せず社会に役立つことを重視する価値志向も重要である。

そこで、次のような質問により、人びとの職業意識を探った。

質問：あなたは、職業（収入を得るための仕事）についてどのような考えをお持ちですか。

次の（ア）～（オ）について、あなたのお気持ちに近い番号1つに○をつけてください。

- （ア） 男性には自分の収入で家族を養う義務がある（以下「男性役割」）
- （イ） 組織や企業に頼らず、自分の職業キャリアは自分自身で切り開くべきである
(以下「脱組織主義」)
- （ウ） 賃金や報酬は低くてもやりがいのある仕事をしたい（以下「脱経済主義」）
- （エ） 職業に就いていない人は人間として一人前とは言えない（以下「職業市民主義」）
- （オ） 高い収入や社会的地位を得るよりも、社会の役に立つ仕事をしたい（以下「社会貢献志向」）

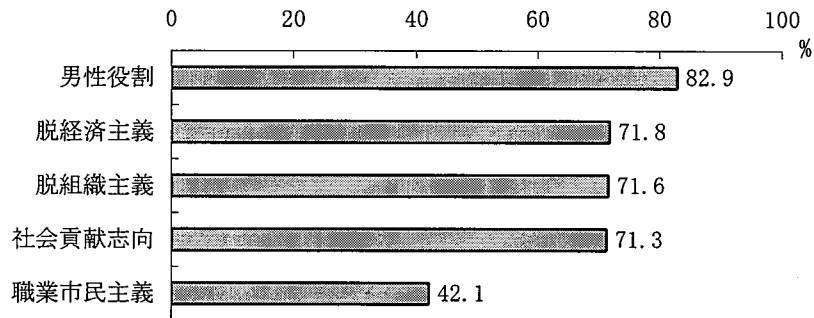
回答形式（括弧内は変数のスコア）：

- 1 そう思う（2点）
- 2 どちらかといえばそう思う（1点）
- 3 あまりそう思わない（-1点）
- 4 そう思わない（-2点）
- 5 どちらともいえない（0点）

「男性役割」と「職業市民主義」は旧来型労働社会の規範を表している。これに対して、「脱経済主義」、「脱組織主義」、「社会貢献志向」は旧来の労働規範から脱した職業意識を表している。

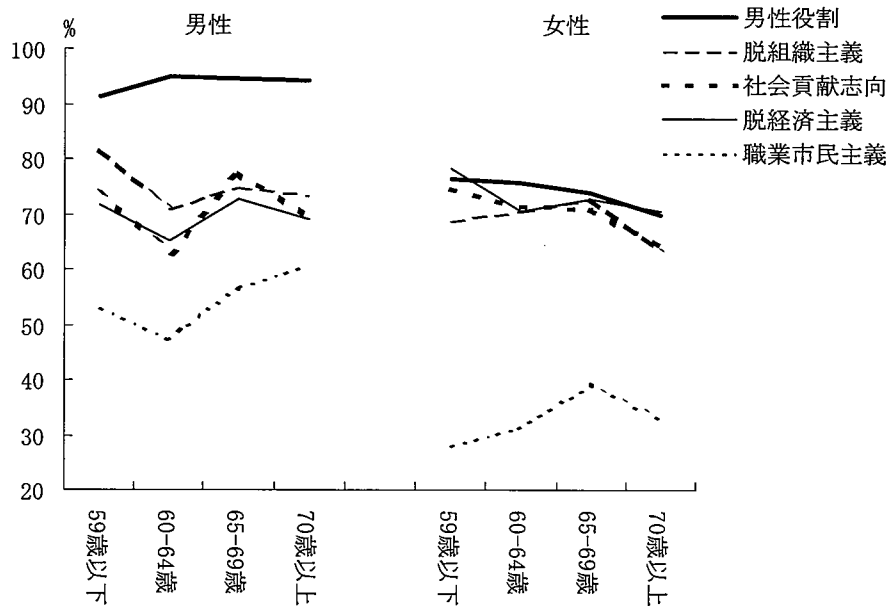
まず単純集計とクロス集計から、NALC参加者の職業意識の基本的傾向を把握しよう。

図1 職業意識（単純集計）



「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計

図2 職業意識（性・年齢別）



「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計

図1は職業意識の単純集計結果である。「男性役割」が82.9%でもっとも支持されている。「男は仕事、女は家庭」という性別役割について、「女は家庭」という規範意識の低下は今日指摘されているが、男性を主たる稼得者とする規範意識は強固に維持されている¹⁰。その一方で、「脱経済主義」、「脱組織主義」、「社会貢献志向」といった、新しい職業意識もそれぞれ約70%あり、高い水準で支持されている。これらの意識に比べて、「職業市民主義」は42.1%とやや低い。

図2は性・年齢別の集計結果である。「男性役割」・「職業市民主義」といった古いタイプの職業意識は女性よりも、これまで主たる労働力とされてきた男性の方が支持している。また「職業市民主義」は男女とも年齢が高いほど支持されている。年齢が高く、高齢層ほど職業生活から引退している割合が高いことを考えれば、職業についていなくてもNALCの活動で社会的役割を担

¹⁰ もっとも、若年層ほど旧来の性別役割は低下する傾向があり、サンプルの年齢層が高いことを考慮する必要がある。今回の対象よりも若い層も含めた意識については今後の課題としたい。

うことにより、「一人前」の感覚を得られると考えられる。しかし、実際は逆である。そこで、この結果は、年齢効果や職業の有無による効果というよりも、コーホート（世代）効果と見ることができる。すなわち、若い世代よりも古い世代の方が古いタイプの職業意識を保持していると見ることができる。

これに対して、「脱経済主義」、「脱組織主義」、「社会貢献志向」については、性別による差はない。また年齢による差も大きくない。今回の調査では、60歳以上が多数であり、すでに定年退職するなど、仕事の第一線からは退いたりしている者が少なくない。新しい職業意識について、性・年齢による差が小さいのは、こうしたライフステージの同質性も関係していると考えられる。

ライフコースにおいて、性別と年齢は生活様式を秩序づける基本的属性要因である。しかし、それだけでなく、人びとの生活様式は、学歴や収入などの階層的要因や、実際の就業の有無によっても影響を受ける。また、NALCの活動を「労働」と見るならば、そこでの活動内容も重要な規定要因である。そこで、性別、年齢、学歴（教育年数）、世帯収入、収入を伴う仕事（就業）の有無、NALCで参加している活動内容を説明変数として、職業意識の規定要因を分析しよう¹¹。

表1は職業意識に関する重回帰分析結果である。性・年齢別集計結果も示していたように、「男性役割」と「職業市民主義」は性別の規定力が強く、男性ほど支持している。「脱組織主義」は有職者ほど支持している。この背景には、定年退職後の就業者や自営業者・自由業・家族従業員など、組織に依拠しない働き方をとする者がサンプルに多く含まれていることがあると考えられる。

他の属性は職業意識を強く規定していないが、注目に値する効果に言及しておきたい。「脱経済主義」は女性ほど、年齢が高いほど、有職者ほど支持されている。男性ほど稼得者として経済的要因を重視するのに対して、女性ほど経済的要因より仕事自体のやりがいを重視するという、対照的な結果が得られた。また、年長ほど「脱経済主義」を支持しているが、これは加齢による年齢効果と見ることができる。有職者ほど「脱経済主義」であり、仕事をもちながらボランティアに参加する人びとにおいて、経済的対価に対するこだわりが低下している。ここに、市場労働もボランティア・ワークも何らかの意味での「労働」とみなし得る意識の萌芽を見ることができる。

ともあれ、近代産業社会において、ペイド／アンペイドの労働配分が性別役割と密接に結びついていることを考えれば、性別と就業の有無が職業意識を規定していることは重要なポイントである。そこで、サンプルを性別と就業の有無で分けて、職業意識の構造を分析しよう。

表2は職業意識同士の相関係数である。男性は就業の有無にかかわらず、「男性役割」と「職業

表1 職業意識の規定要因（重回帰分析）

	男性役割	職業市民主義	脱経済主義	脱組織主義	社会貢献志向
性別	.352**	.198**	-.097**	-.006	-.053
年齢	.020	.086*	.088*	.077*	.042
学歴	-.086**	.006	.035	.071*	.067*
世帯収入	.034	-.048	.027	-.017	-.029
仕事の有無	-.013	-.046	.078*	.109**	.060
高齢者介護	-.056*	-.054	-.040	-.018	-.002
子育て支援	-.047	.046	.030	.003	-.012
相互扶助	.018	.006	.025	.060	.038
趣味・交流	.040	-.008	-.050	-.027	.048
R2	.140	.066	.018	.021	.011
adj-R2	.133	.058	.009	.013	.003
F値	19.646**	8.423**	2.136*	2.545**	1.371
N	1093	1078	1081	1080	1085

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

11 性別は男性を1点、女性を0点とした。また仕事の有無は有職を1点、無職を0点としている。参加している活動内容については、「参加している」を1点、「参加していない」0点とした。

表2. 職業意識の相関係数

		男性役割	職業市民主義	脱経済主義	脱組織主義	社会貢献志向
男性役割	有職	-	.219**	-.043	.065	-.052
	無職	-	.167**	-.009	.068	-.081
職業市民主義	有職	.107	-	-.074	-.003	-.056
	無職	.151**	-	-.015	.040	-.059
脱経済主義	有職	.138*	-.023	-	.284**	.388**
	無職	.023	.015	-	.406**	.494**
脱組織主義	有職	.020	.189**	.189**	-	.138*
	無職	.059	.039	.275**	-	.216**
社会貢献志向	有職	.032	.070	.314**	.140*	-
	無職	-.066	.009	.457**	.097*	-

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意 上段：相関係数 下段：N
 右上三角行列：男性 左下三角行列：女性

市民主義」に正の相関があり、「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」が相互に正の相関をもっている。つまり、古いタイプの職業意識同士に正の相関があり、また新しいタイプの職業意識同士に正の相関がある。

無職の女性においても男性と同様の相関関係が示されている。また有職女性においても、「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」は正に相関している。これに対して、有職女性では、「男性役割」と「脱経済主義」が正に相関し、「職業市民主義」と「脱組織主義」と正の相関がある。この結果は、日本において、女性が組織に依存しにくい雇用環境にあることや、経済的には家計補助的な意味で就業している既婚女性が多いことを反映していると考えられる。つまり、相関係数の示す値こそ違おうが、有職女性の職業意識も旧来型の労働文化を反映していると言える。

要するに、NALC参加者においては、旧来の労働文化を反映した意識と新しい労働文化を志向する意識が並存している。前者は、男性が家族を扶養すべきであると考え、就業を重要な社会的成員資格とみなすのに対して、後者は、高い収入や社会的地位の獲得よりも、仕事自体の充実感や職業を通じた社会貢献を重視し、企業や組織に依存しない働き方を志向している。

前述のように、社会的地位達成や経済的豊かさよりも精神的な豊かさを求める価値志向が人びとに浸透しつつあることを踏まえるなら、このような職業意識の構造は、NALC参加者に限ったものではなく、今日の職業生活をめぐる一般的な傾向を表していると考えられる。

(2)NALC 活動の意味と職業意識

職業には生計の手段として賃金を得るだけでなく、他人との関係形成や自己実現（個性の発揮）の契機としての意味もある（尾高 1941）。しかしながら、他人との関係形成や個性の発揮は、職業を通じてのみ果たされるものではない。近年のボランティア活動に代表される社会参加活動もまた、人びとの社会生活にとって、こうした意味をもつ活動である。さらに、労働には、他人や社会への貢献という側面もあり、何らかの社会的責任が伴うという点で強制的側面もある。ボランティア活動も、やはり参加者本人の自発性とは別に、一定の社会的責任をとらなければならない。

このように、ボランティア活動は人びとの社会生活において職業と同様の意味をもちうる。そこで、ここでは、活動への参加者の意味づけに着目し、NALC活動が参加者にとって職業と等価な意味をもっているか、明らかにしたい。質問文は次のとおりである。

質問：あなたにとってNALCでの活動はどのようなものですか。次の（ア）～（エ）のそれぞれについて、あなたのお考えに近い番号1つに○をつけてください。

（ア）生活にとって重要な収入源である（以下「生計の手段」）

（イ）人とのつながりや関係を得る活動である（以下「関係形成」）

(ウ) 自分の個性を発揮する活動である (以下「個性発揮」)

(エ) 地域や社会における責任を果たす活動である (以下「社会的責任」)

回答形式 (括弧内は変数のスコア) :

- 1 そうである (2点)
- 2 どちらかといえばそうである (1点)
- 3 どちらかといえばそうではない (-1点)
- 4 そうではない (-2点)

なお、「生計の手段」については、0.7%が肯定的回答をしているが、すでに述べたように、参加者のほぼ全員が無償ボランティアであるため、分析から除外する。したがって、ここでは、「関係形成」、「個性発揮」、「社会的責任」の3つの意味に着目する。

まずNALC参加者が活動をどのように意味づけているか、基本的傾向を把握しておきたい。

図3はNALCにおける「活動の意味」の単純集計結果である。71.8%が「関係形成」と意味づけており、3つのなかでもっとも高い。他人との関係重視は日本社会の特徴と言われてきたが、社会参加活動についても他人とのつながりや関係を得る意味合いが強いことがうかがえる。また「社会的責任」も66.8%と高い。これらに比べて「個性発揮」は43.4%とやや低い。

図3 活動の意味

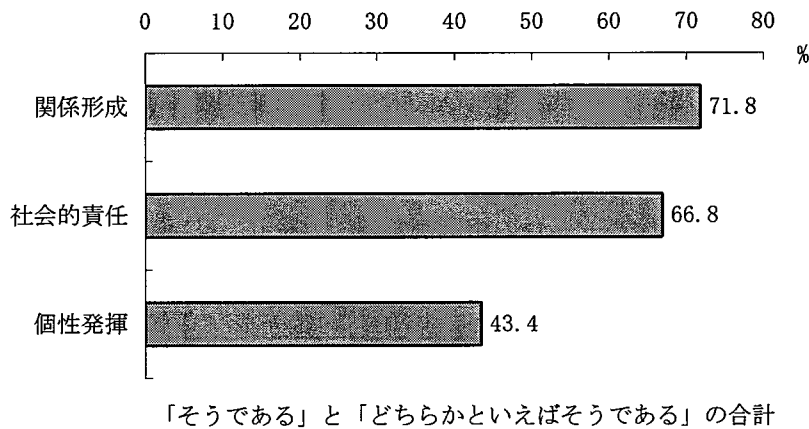


図4 活動の意味 (性・年齢別)

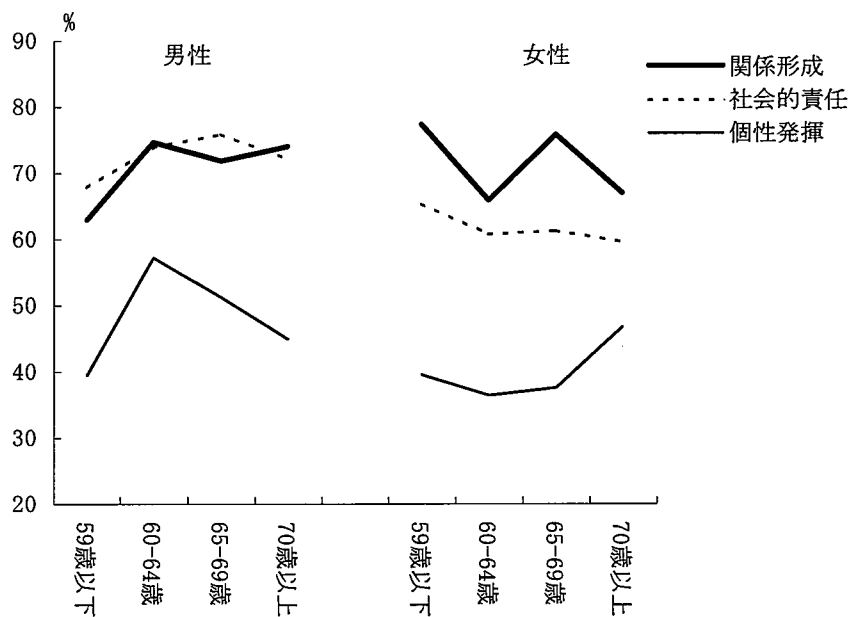


図4は性・年齢別の集計結果である。男女とも「関係形成」が高いが、男性では「社会的責任」が「関係形成」と同水準に高い。また「個性発揮」も女性に比べれば男性の方が高い。

表3は「活動の意味」の規定要因である。クロス集計結果にあったように、男性ほどNALCの活動を「個性発揮」の契機や「社会的責任」を果たす活動とみなしている。

また、参加している活動内容によって活動への意味づけは若干異なる。「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」(趣味・交流)以外の「高齢者の介護・介助・家事援助」(高齢者支援)、「子育て支援」、「会員による相互扶助のボランティア」(相互扶助)に参加しているほど、社会的責任を果たす活動と意味づけている。「高齢者介護」、「相互扶助」、「趣味・交流」に参加しているほど「関係形成」の契機と意味づけている。とりわけ「相互扶助」と「趣味・交流」の規定力は強い。どの活動に参加している人も「個性発揮」と意味づけているが、特に「高齢者介護」と「子育て支援」に参加しているほど「個性発揮」の意味合いは強い。

では、このような「活動の意味」は職業意識とどのように関係づけられているだろうか。表4は職業意識と活動の意味の相関係数である。職業意識同士の相関と同様に、男女別・職業の有無別に分析した。

まず、男女とも有職・無職を問わず「社会的責任」と「社会貢献志向」に正の相関がある。職業で社会に貢献したいとする意識が、NALCの活動についても社会的責任感を生んでいる。ここに、職業にもNALCの活動にも通じる、公共への関心を見出すことができよう。そして、この公共への関心をベースに、職業意識と活動への意味づけは、性別と職業の有無によりそれぞれ異なる側面で結びついている。

「社会的責任」について、「社会貢献志向」以外の職業意識との相関係数を見よう。まず、男女とも有職者では、「職業市民主義」と負の相関がある。つまり、NALCの活動で社会的責任を果た

表3 「NALC活動の意味」の規定要因 (重回帰分析)

	社会的責任	関係形成	個性発揮
性別	.148**	-.008	.103**
年齢	.030	-.014	.062
学歴	-.024	-.091**	.010
世帯収入	-.016	-.011	-.027
仕事の有無	.017	-.002	.050
高齢者支援	.123**	.096**	.117**
子育て支援	.096**	.045	.106**
相互扶助	.113**	.119**	.077*
趣味・交流	.039	.161**	.063*
R2	.067	.064	.057
adj-R2	.059	.056	.049
F値	8.416**	8.115**	7.005**
N	1063	1074	1061

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表4 「NALC活動の意味」と職業意識の相関係数

		社会的責任		関係形成		個性の発揮	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
男性役割	有職	.029	.023	.036	-.007	.025	-.038
	無職	-.018	.082	-.060	.124**	-.098	.126**
職業市民主義	有職	-.151*	-.186**	-.103	-.024	-.057	-.019
	無職	-.025	.084	-.012	.025	-.023	.007
脱経済主義	有職	.148*	.078	.158*	.047	.087	.089
	無職	.033	.056	-.022	.046	.006	.063
脱組織主義	有職	.023	.058	-.048	.014	.044	.016
	無職	.138*	.081	.027	-.055	.091	.121*
社会貢献志向	有職	.192**	.139*	.132*	.066	.159*	.130
	無職	.122*	.153*	.120*	.052	.100	.080

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

していると感じるならば、職業に就いているかどうかは、社会の一員として「一人前」であることの重要な要件ではないと考えているようである。また、有職女性では、「脱経済主義」と正の相関があり、NALC 活動の責任感が経済的豊かさにこだわらない職業意識と結びついている。無職男性では「脱組織主義」と正の相関がある。この無職男性は多くが職業生活からの引退者と見ることができるが、NALC 活動で社会的責任を担うことが、職場からの前向きな離脱に当たり重要な機能を果たしていると考えられる。

「関係形成」と職業意識との相関係数を見ると、まず有職・無職を問わず、男性において、「社会貢献志向」と正の相関がある。就業先の外の社会に関心に向けることは、社会的責任感だけでなく、仕事を離れた社会的つながりを得るという意味でも、男性の NALC 参加を有意義なものにしていると言える。また、有職男性では「脱経済主義」とも正の相関がある。経済的豊かさの追求にこだわらないことが、仕事を離れて他人とのつながりを得るものとして NALC 活動を有意義なものにしている。このような男性に対して、無職女性では「男性役割」と正の相関がある。主として専業主婦の地位にある無職女性では、夫の稼得を経済的基盤に、家庭の外で他人とのつながりを得る活動として NALC 活動を意味づけていることがうかがえる。

こうした無職女性の意味づけは、「個性発揮」においても同様である。「関係形成」と同様に、「個性発揮」と「男性役割」も無職女性では正に相関しており、彼女等が有意義な活動として NALC 活動に参加するにあたり、夫の稼得が重要な経済的条件であることを示唆している。有職男性においては、「社会的責任」・「関係形成」と同様に、「個性発揮」も「社会貢献志向」と正の相関がある。「社会貢献」は、男性が NALC の活動を有意義なものとしてとらえる際に、一つのキーワードになっていると言える。無職女性では、「脱組織主義」と「個性発揮」に正の相関がある。企業組織の外部に生活圏をもつ無職女性では、企業や組織に頼らない意識をもつことにより、自立した個を発揮する契機として、NALC の活動をとらえていることがうかがえる。

このように、職業意識と活動への意味づけは、「社会貢献志向」と「社会的責任」の結びつきを基礎に、性別や職業の有無により、それぞれ異なった側面で相互に関係している。このとき、どの層も共通して、「脱経済主義」・「脱組織主義」・「社会貢献志向」といった、新しい職業意識と NALC 活動への意味づけが結びついている。特に「社会的責任」では顕著である。新たな職業意識の広がりとともに、市場の外で社会的責任を果たし、他人との関係を形成し、個性を発揮する「労働」として、ボランティア・ワークが重要な位置づけをもつと考えることができる。

(3)NALC へのコミットメントと職業意識

自発性と無償性により定義づけられるボランティア活動にとって、非経済的要因による参加者のコミットメントは活動を支える重要な条件である。そして、市場労働においても非経済的要因が労働へのコミットメントの源泉になりつつあるならば、「脱経済主義」を初めとする新しい職業意識は、ボランティア活動へのコミットメントとも結びついていると考えられる。

もちろん、一口に「コミットメント」と言っても、その次元は様々である。ここでは、<組織の理念>、<活動内容>、<人間関係>の3つの次元に着目したい。

特定のミッション（活動目的）をもち、そのミッションの達成を目指す NPO において、組織の理念への共感、参加者のコミットメントの中核を成す次元である。NALC は、その理念として、「自立」、「奉仕」、「助け合い」、「生きがい」を掲げている。「自立」とは、高齢になっても健康で精神的に自立していることを意味する。「奉仕」とは、ボランティアを通じて人と社会に貢献することを意味する。「助け合い」とは、会員同士の時間預託制度による助け合いにより、生活を

図5 NALCへのコミットメント

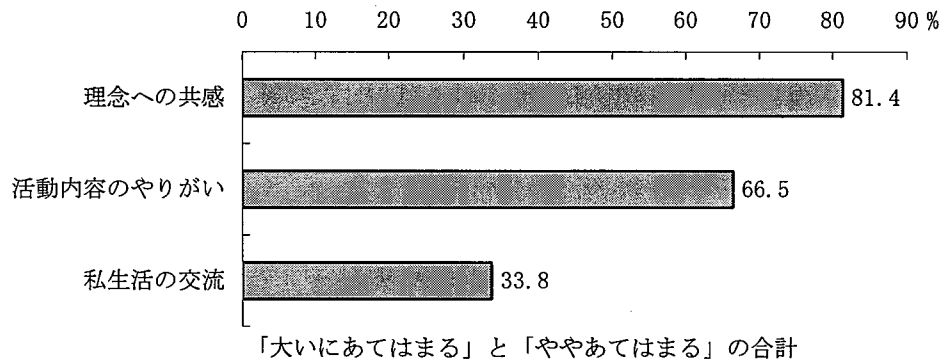
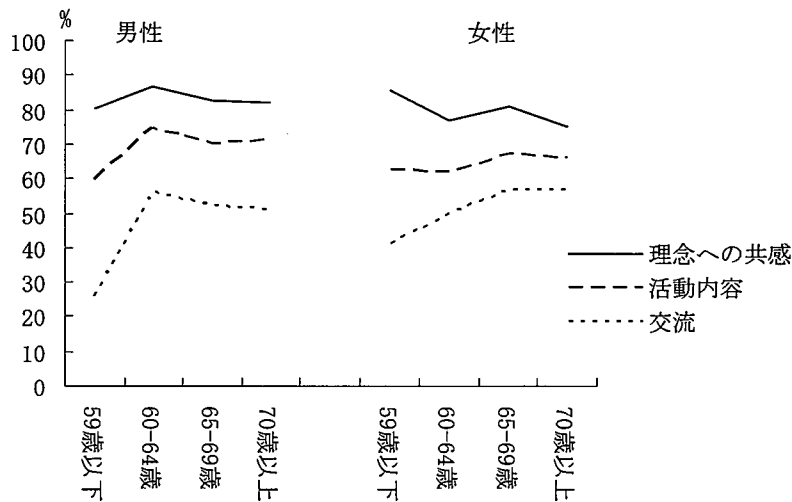


図6 NALCへのコミットメント (性・年齢別)



豊かにすることを意味する。そして、「生きがい」とは NALC への参加を通じて社会と人に尽くす喜びを生きがいとすることを意味する。

また、理念や活動目的とは別に、活動内容のやりがいやメンバー同士の人間関係も組織へのコミットメントを構成する次元である。このとき、NALC の活動内容は、前述のとおり、「高齢者の介護、介助、家事援助」、「子育て支援」、「会員による相互扶助のボランティア」、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」の4つに大別できる。また、「親睦・交流の行事」が一つの柱になっているように、メンバー同士の交流機会も活動内容のなかに組み込まれている。

そこで、NALC へのコミットメントを次のような質問で取り上げた¹²。

質問：あなたが参加している NALC の活動について、次の (ア) ~ (ク) のようなことは、あなた自身にあてはまりますか。それぞれについて1つずつ○をつけてください。

- (ア) 活動内容にやりがいを感じている (以下「活動内容のやりがい」)
- (イ) NALC の理念や活動目的に共感している (以下「理念への共感」)
- (オ) 私生活でもスタッフやメンバーと交流がある (以下「私生活の交流」)

回答形式 (括弧内は変数のスコア) :

- 1 大いにあてはまる (2点)
- 2 ややあてはまる (1点)

¹² 質問の (ウ) ~ (エ) と (カ) ~ (ク) は、NALC での活動の遂行的側面についての評価を聞いている。ここでの考察とは直接関係しないため省略した。質問文は本書掲載の質問票を参照。

3 あまりあてはまらない (-1点)

4 あてはまらない (-2点)

図5は、NALCへのコミットメントの単純集計結果である。「理念への共感」が81.4%ともっとも高い。「活動内容のやりがい」も66.5%が感じており、活動内容へのコミットメントも高い。これらに比べて、「私生活の交流」は33.8%とやや低い。すでに見たように、NALCの活動を「関係形成」の契機ととらえる意識は高いが、私生活でも相互に交流をもつメンバーは一部である。

図6は性・年齢別の集計結果である。性・年齢を問わず、「理念への共感」がもっとも高く、「活動内容のやりがい」がこれに続き、「私生活の交流」はやや低い。男性では、60歳を境に高齢層で、どの次元のコミットメントも高くなっている。女性では年齢が高いほど「理念への共感」はやや低い。また、男女とも「私生活の交流」は年齢が高いほど高い。高齢層においては、ボランティアが私生活の人間関係においても重要な位置を占めていることがうかがえる。

表5は、コミットメントの規定要因である。本人属性の効果では、世帯収入が高いほどNALCの理念に共感しており、クロス集計にも示されていたように、年齢が高いほど私生活でも交流がある。また規定力は小さいものの、男性ほど、学歴が低いほど活動内容にやりがいを感じている。

参加している活動内容によってもコミットメントのあり方は異なる。「理念への共感」に対する活動内容の規定力は強くはないが、「高齢者の介護・介助・家事援助」、「相互扶助のボランティア」、「趣味の会、交流の行事」に参加しているほど高い。「活動内容のやりがい」は、「高齢者の介護・介助・家事援助」、「子育て支援」、「相互扶助のボランティア」に参加しているほど高く、そのなかでも「高齢者の介護・介助・家事援助」と「相互扶助のボランティア」の効果が大きい。他人や社会の役に立つことを実感できる活動に参加しているほど、活動内容にやりがいを感じると言える。「私生活の交流」はどの活動も有意な効果をもつが、とりわけ「相互扶助のボランティア」に参加しているほど、「趣味の会・交流の行事」に参加しているほど高い。「趣味の会・交流の行事」が、私生活でもメンバー同士の交流を生み出していることがわかる。また他の活動もメンバ

表5 「NALCへのコミットメント」の規定要因 (重回帰分析)

	理念への共感	活動内容のやりがい	私生活の交流
性別	-.001	.078*	-.014
年齢	.010	.045	.106**
学歴	.030	-.076*	-.057
世帯収入	.101**	.011	.013
仕事の有無	-.009	.038	-.009
高齢者介護	.076*	.216**	.082**
子育て支援	.042	.089**	.084**
相互扶助	.073*	.120**	.163**
趣味・交流	.068*	.031	.191**
R2	.028	.088	.104
adj-R2	.020	.080	.096
F値	3.387**	11.173**	13.490**
N	1068	1054	1057

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表6 「NALCへのコミットメント」と職業意識の相関係数

		理念への共感		活動内容のやりがい		私生活の交流	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
男性役割	有職	.082	-.033	-.021	-.017	.115	.086
	無職	-.016	-.003	-.052	.157**	-.014	.007
職業市民主義	有職	-.163*	-.116	-.032	-.159*	.035	.028
	無職	-.106	-.081	-.072	.001	.007	-.009
脱経済主義	有職	.156*	.304**	.097	.101	.032	.037
	無職	-.052	.079	.014	.012	-.003	-.020
脱組織主義	有職	-.021	.113	-.059	.008	-.073	.079
	無職	.076	.065	-.020	.036	-.004	.134**
社会貢献志向	有職	.124	.130	.152*	.092	-.009	.082
	無職	.035	.092	.079	.041	.059	.077

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

一同士の関係形成の契機となっているが、そのなかでも「相互扶助のボランティア」の効果が高いことは、特定の目的の共有よりも助け合うことそれ自体がメンバー同士の交流をうながしていることを示唆している。

では、NALC へのコミットメントは、どのような側面で新しい職業意識と結びついているだろうか。表 6 は NALC へのコミットメントと職業意識の相関係数である。ここでも、男女別・職業の有無別に分析した。

まず、「理念への共感」と職業意識の相関関係を見よう。男女とも有職者において「脱経済主義」と正の相関がある。NALC は、「ボランティアを通じて人と社会に貢献することに生きがいを感じ、自立した人生を送ること」を理念に掲げている。経済対価を伴わない貢献活動を「生きがい」とする理念への共感、職業についても経済的対価にこだわらない意識と結びついている。また、有職男性では「職業市民主義」と「理念への共感」も正の相関がある。近代産業社会においては、市場労働を通じた経済的自立が社会の一員として「一人前」になることを意味していた。すでに見たように、とりわけ男性ほどこうした発想が根強い。しかし、「ボランティアでの社会貢献を通じた自立」への共感、有職男性において、こうした発想の否定と結びついている。

「活動のやりがい」と職業意識の相関関係を見ると、有職男性では、「社会貢献志向」と正の相関がある。社会の役に立つことで活動にやりがいを感じ、職業についても社会貢献を重視する有職男性の意識がうかがえる。すでに見たように、有職男性においては、「社会的責任」・「関係形成」・「個性発揮」の何れについても職業意識の「社会貢献志向」と正の相関があったが、ここでも「社会貢献志向」は有職男性の有意義な社会参加と結びついている。有職女性では、「職業市民主義」と「活動のやりがい」に負の相関がある。有職男性同様、NALC へのコミットメントが、職業中心な市民観を否定しているが、男性では理念的なコミットメントと結びついているのに対し、女性は実際の活動にやりがいを感じることで、「職業市民主義」を否定している。その一方で、無職女性は、「男性役割」と「活動のやりがい」が正に相関している。すでに見たように、無職女性においては、「社会的責任」や「個性発揮」など、NALC の活動を有意義なものとして意味づけるにあたり、夫の稼得が経済的条件となっているが、「活動のやりがい」にも同じことが言える。

「私生活の交流」については、男性と有職女性では職業意識と有意な相関関係はない。無職女性において、「脱組織主義」と正の相関がある。無職女性の「脱組織主義」は、「活動の意味」において「個性発揮」と正の相関があったが、私生活の人間関係を形成する意味でも、組織や企業に依存しない態度が、無職女性にとって活動を有意義なものにしているといえる。

このように、性別と職業の有無によって違いがあり、無職女性はやや傾向が異なるものの、どの層においても、新しい職業意識が NALC へのコミットメントと結びついている¹³。

4 企業中心主義からの脱却と社会参加活動

—「流山ユー・アイネット」・「川崎おやじ連」インタビュー調査より

(1) インタビュー調査への視座 — 男性への着目とその意義

日本の労働社会において、企業組織は、「日本型雇用慣行」と呼ばれる雇用システムのもと、人びとの生活にとって大きな影響力をもっている。つまり、日本の労働社会は、企業組織の価値規範が、企業を離れた個人生活にも広範な影響を及ぼす「企業社会」と呼ぶことができる¹⁴。この

13 もちろん、NALC が「社会貢献」や「助け合い」など、市場の論理とは異なる理念掲げ、その理念に沿った活動を展開していることも大きい。しかし、明示的な理念や活動内容は NALC と異なっても、NPO は市場主義に組さない理念のもとで活動している。その意味では NALC も特別ではないと言える。

14 企業社会とは、狭義には企業内部で形成される社会を指すが、広義には企業の論理が外の社会に浸透し、企業

企業社会において、基幹労働力とされる正規雇用労働者は、個人生活でも企業の論理を最優先し、所定外労働や職場のつき合いも含めて、圧倒的に長い時間を企業活動に費やしている。

こうした企業中心的生活様式は、とりわけ男性に特徴的である。そして、「仕事こそが生活」とするような男性労働者は、戦後の高度経済成長を背景に、企業に利益をもたらす「企業戦士」、稼得者として一家を支える「大黒柱」とも言われ、その「勤勉」な生活様式は美德でさえあった。しかしながら、今日では、仕事や企業組織との強い関係性の一方で、「仕事以外にすることがない」、「会社以外に居場所がない」というネガティブな側面が指摘されており、「会社人間」や「濡れ落ち葉」と否定的な表現をされることも珍しくない。男性においても、いや男性こそ、企業主義から脱却した生活様式の確立が、重要な課題になっている。

このとき、「ユー・アイネット」と「おやじ連」は、男性が積極的に参加している社会参加活動の先駆的事例であり、会社や仕事から離れた場所で男性が社会的役割を担ううえで示唆に富む、モデルケースと言える¹⁵。

(2) 調査結果の検討

まず、多くのインタビュー参加者において、参加の動機やきっかけが、社会問題への関心や仕事での経験といった公的社会関心よりも、親の介護問題や妻の褒めなど、家族との関係であることに注目したい。例えば、次のような発言は典型的である。

母親の痴呆が悪化して、特別養護施設に入れ、その後に亡くなりましたが、定年後、福祉に携わりたいという思いがあり、ヘルパーの資格を取りました。そのとき同じ学校にいた方がこの団体に参加していました、その方に誘われたのがきっかけです。

(「ユー・アイネット」・Fさん・63歳)

また、「おやじ連」に設立から参加しているメンバーの多くは、妻の褒めで参加し始めている。

入るきっかけは妻の強烈な後押しですね。最初に市の主催で、会社人間だけではなく地域を見直しましょうということで講演会があったのですが、ほとんど人が集まらず、市が、市民館に集まる奥様たちに働きかけて、父親たちが集まったのが始まりです。

(「おやじ連」・Bさん・50代)

このことは、一つの解釈として、家族との関係が無視できない生活関心であることを示唆している。「ユー・アイネット」は介護関連事業が活動の一つの柱になっている。また「おやじ連」は子育てネットワークが母体となっている。つまり、両者はともに、育児・介護といった家庭生活と密接に関係している。家族との関係が参加の重要なきっかけとなっている、一つの要因としてそうした活動の性質もあると考えられる。今日では、夫婦関係において男女がともに家事労働を担うことが重視されつつある。その意味で、「ユー・アイネット」や「おやじ連」のような、家庭生活にかかわる活動は、「働き盛り」で参加するきっかけがなかなかない壮年男性にとって、社会

の論理を中心に編成された社会を指す。渡辺(1991)、基礎経済科学研究所編(1992)などを参照。本稿では、広義の意味で「企業社会」という語を用いることにしたい。

¹⁵ 「社会参加活動」には、自治会のような、旧来型の地縁にもとづくものもある。また、趣味の活動や学習的活動も、社会参加活動に含まれる。ボランティア活動と他の社会参加活動との関係については、本書所収の藤本論文を参照。

参加活動への第一歩となりうるのではないだろうか。

そして、家族がきっかけとなるばかりでなく、活動がきっかけとなって、家事参加が高まるなど、家族とのかかわり方が変わることもある。

家事や育児も、人並み以上に関わっていたつもりでいましたが、女房に言わせると、ほとんど何もやっていないらしいですね。子供たちも、そう思っているようで。自分の考えていたレベルはかなり低かったのかなという気が、今になってします。ですから、「おやじ考」をやって、周りの人からいろいろな刺激を受けて、料理なんかもかなりやりだしました。家庭への接し方が変わったのは、自然に自分の意思でなったと思いたいですが、入会がきっかけだと思います。（「おやじ連」・Bさん・50代）

しかし、人的ネットワークが活動への主な参加経路となっていることを考えると、男性は家族を除けば、職場の外に参加のきっかけとなるようなネットワークをもっていないということも見逃せない¹⁶。「働いていたときは地域など仕事以外での付き合いもなかった」（「ユー・アイネット」・Eさん・66歳）、「会社に行って帰ってきて隣のおじさんが何してるのか（知らないし）、話をするのもあまりない」（「おやじ連」・Fさん・40代）、「男は普通、地域のつながりがないでしょう」（「おやじ連」・Bさん・50代）というように、活動に参加する以前の生活様式や、一般的な男性の生活様式について、「ユー・アイネット」でも「おやじ連」でも地域との希薄な関係が指摘されている。そして、言うまでもなく、地域との疎遠な関係の裏側には、仕事に圧倒的に時間を割く生活様式がある。

僕にとって会社がすべてだったのではないのでしょうか。自分の生きること即仕事という一本道で、それ以外のことは考えられなかった。こう言っちゃ何だけど、ついでに家族があるみたいな感じで（笑）。そういうところがありました。（「おやじ連」・Dさん・60代）

このように、当初は地域社会と疎遠であっても、家族との関係をきっかけに地域社会に関心が向き、団体の人と出会うなどして参加に至るケースが多い。そして、「最初は渋々」でも、「参加してみたら活動にのめり込んだ」という者も珍しくない。

今までにない習慣のことを始めるだけでも非常に抵抗があったし、きつかったですね。でも（市が主催の父親家庭学級に）行っているうちに、…（中略）…今までと全く違ったことが始まりだしたなという印象が生まれました。これは、何か新しい世界に入っていく感じですかね。…（中略）…仕事を離れておやじたちとつきあうのはとても面白くなり、それでのめり込んでいきました。（「おやじ連」・Dさん・60代）

もちろん、ボランティアのような活動は、他人に押し付けられるものではなく、「自発的に」参加するものである。しかし、今回の調査対象の多くは、仕事が生活の圧倒的割合を占めていたために、職場以外に生活の軸足を置く場所がなく、そもそも「自発的に」参加できる状況になかったと言える。その意味で、最初のきっかけを家族が作り、「渋々」でも参加してみたら「のめり込んだ」というエピソードは、本人の自発性以前に、その自発性が表に出るような環境作りが重要

16 参加経路の詳細については、本書所収の藤本論文を参照。

であることを示唆している。その意味で、行政による環境作りとして、川崎市の「父親家庭学級」は大きな役割を果たしたと言える。

そして、活動に参加した結果、「ユー・アイネット」の参加者も「おやじ連」の参加者も、仕事以外に活動の場を持たず、地域社会と疎遠であったことのデメリットを実感している。特に定年退職後の参加者が多い「ユー・アイネット」では、退職直後のリタイアメント・ショックを振り返って、「毎日、目的が無いのは辛いし、何か自分が惨めに感じましたね」（「ユー・アイネット」・Cさん・62歳）、「私は会社を辞めたら、会社の誰も相手にしてくれないということを自覚するのに2年かかりました」（「ユー・アイネット」・Eさん・66歳）というように、仕事に専念してきた職業生活のデメリットを痛感している意見が目立つ。また「おやじ連」は壮年期からの参加者が多いが、「生きること即仕事」だったというDさんの次のような発言は、やはり「ユー・アイネット」のメンバーの実感と通じるところがある。

僕は思うに、忙しいからこそもう一つあえて持つべきだという気がとことんするんですよ。…（中略）…忙しいからこそ自分を保つためにあえて違う世界を持っておく。バランスをとる。仕事がきつい時はみんなと一緒にやりながら何とか自分を立て直すことができるでしょう。一本だと、きつくなったらそれっきりじゃないですか。そういうことを地域の仲間に教わったような気がします。もう一つのよりどころができたことが大きかったと思います。

しかしながら、現在も仕事をしながら活動に参加している「おやじ連」のメンバーの発言を聞くと、仕事一色の生活から脱しても、仕事へのコミットメントは低下していない。仕事と生活にメリハリをもたせるマルチな生活関心のもと、仕事にも「おやじ連」の活動にも積極的に取り組んでいる。

仕事の拘束時間や仕事の面白さは変わってなくて、のめり込んだりしてやっています。
（「おやじ連」・Dさん・60代）

仕事は仕事というのがはっきりしているからね、その辺できちっとやって。そうじゃないと次のことができないという感じになっているから。メリハリを持っているのですよね。きちっとしないと。（「おやじ連」・Eさん・50代）

あるいは、若い世代には、活動に参加する以前からマルチな生活様式を確立していた者もいる。

子供が寝ている時間に会社に行っていたりして割と接する時間は多かったので、仕事は一生懸命やりますが、だからといって会社人間というくくりにはならない。家事もやりますし、最近ちょっと違うのですが、以前は、週末は多分いちばん先に起きてコーヒーを飲んで、することないからホットケーキでも焼くかなとか。じっとしてられないというか（笑）、貧乏性なのですかね。だから、子供とは割と接するし、家のことも、奥さんいないから言うのですが、割とやっていたかなと（笑）思うのです。（「おやじ連」・Fさん・40代）

ここで、「じっとしてられない」という言葉は象徴的である。「ユー・アイネット」でも「おやじ連」でも、「忙しさ」が仕事を離れても活力ある生活のキーワードとなっている。

少し忙しいくらいの方が良い。そう思っている人が参加していると思います。暇で良いと思
っている人は参加していないと思います。(「ユー・アイネット」・Fさん・63歳)

やはり忙しいほうが面白いというか、無駄なことを考えなくて済むからね(笑)。次から次へ
と何かやらなければいけないと思っているから、計画的というのか、次はこうやろうああや
ろうと考えているから非常に面白いなと思って。(「おやじ連」・Eさん・50代)

「仕事だけ」の生活様式から脱しても、のんびりと時間的ゆとりを楽しむより、忙しく動き回
ることを良しとし、この「忙しさ」を楽しむ意識がうかがえる。こうした「忙しさ」志向は、勤
勉を美德とし、「仕事が趣味」とも言われる日本的勤労文化に通じるところがあるのではないだろ
うか。日本では、男性を中心とした正規雇用労働者において、残業も含めた長時間労働が常態化
し、労働時間の削減が一つの重要な労働政策課題となっている。このとき、「忙しい」ことを楽し
むインタビュー対象者の態度は示唆的である。もちろん、そこでの忙しさは、他人や組織から強
制されて<やらされる>ものではなく、自ら自発的に役割を担って<やる>ものである。つまり、
「仕事こそが生活」という生活様式からの脱却には、<やらされる忙しさ>から<やる忙しさ>
への転換という意味も多分にある。その意味で、次のような発言は示唆に富む。

ここ数年、よく耳にするのは、定年後、自由気ままに過ごせるかと思うと、半年くらいで精
神的、肉体的におかしくなってくるということ。何かするとき、どうせやるなら社会のため
になることをやりたい。(「ユー・アイネット」・Dさん・64歳)

もちろん、同じ社会参加活動でも、<やらされる>活動では、参加者にとって負担以外の何物で
もない。例えば、地域の自治会活動に関する次のような発言は象徴的である。

(自治会活動を) やりたくてやっている人は少ないのですね。そういう方は、浮いています
から。PTAや自治会長に、そういう候補がいればいいですけど、私が見た限りではなかなか
やる方がいないという現象が起きています。やむをえず引き受けて、しょうがなくやって、
誰かにお願いしないと自分が抜けられないというような現象です。

(「おやじ連」・Bさん・50代)

その一方で、自治会のような旧来型のコミュニティ活動であっても、参加者の自発性を引き出す
ことで活性化する例もある。「ユー・アイネット」は、地域の自治会を母体としているが、今日も
「ユー・アイネット」と自治会の相乗効果が、地域の活性化につながっている。

そして、この<やる>という自発性のもとに、ボランティアや地域活動に参加することによっ
て、参加者は、企業社会を相対化する目を持ち、社会参加活動が企業とは違う論理で成り立つこ
とを肯定的に評価している。

(何かをしようと提案をしたときに) 否定がないのですよ。「いいじゃない、やってみようよ」
とどんどん盛り上げてくれる。会社だとまず否定して、「こういう問題があるからもうちょつ
と考えたら？」という話になりますよね。それがいい。(「おやじ連」・Cさん・60代)

上下関係があまりないので、言いたいことが言えます。会社だとそうはいきません。

(「ユー・アイネット」・Cさん・62歳)

仕事では、正直にやるともうからないのでつらいが、NPOでは背伸びしないで活動に参加できます。(「ユー・アイネット」・Aさん・54歳)

会社と違うのに、会社の感覚を引きずっている人もいましたね。驚いたことに、休むときに欠勤届を提出された人がいらっしまったのです。(「ユー・アイネット」・Eさん・66歳)

このような企業社会の相対化のなかで、生活態度や意識の変化を経験したり、企業で働いていたときは異なる自己の一面に気づいたりする者もいる。

仕事では人を押さえつけて引っ張っている部分がありましたが、いわゆる社会的弱者の方に接することが多いので、まず人の話を聞くという姿勢に変わりましたね。

(「ユー・アイネット」・Eさん・66歳)

自分の心が穏やかになりましたね。…(中略)…心の豊かさは確実に増えたと感じています。素直に人に感謝出来るようにもなったのも、心の変化としてありますね。

(「ユー・アイネット」・Aさん・54歳)

利害や上下関係に縛られない人間関係や、自己の意見や能力が肯定的に評価されやすい雰囲気など、競争的でない環境がこうした変化をもたらしていると考えられる。また、二つの団体とも「参加できるときに参加する」ことを方針にしており、活動時間に関する強制がなく、時間的な負担も大きくない。こうした自由な環境が参加者の自発性を生かす土壌になっていると考えられる。

その一方で、企業とは違って「自由」で「自発的」と言っても、社会的役割を担うという意味では責任もある。NALCでも「社会的責任」は、参加者が活動を意味づけるキーワードの一つであった。そして、活動の社会的重要性が高まれば高まるほど、その責任は重くなる。特に、NPO法人として福祉関連事業を行っている「ユー・アイネット」では、有給職員も雇用しており、「自由」で「自発的」という、ボランティアの論理だけを強調できない側面もある。

若い人では、ケアマネージャーを職業としている人もいるので、福祉をやっていくことの意識は変わってくるかもしれないですね。ボランティアでやる人とそれで生活する人とは、違うだろうと思います。(「ユー・アイネット」・Fさん・63歳)

事務局としても勤めている人の社会保障なども考えないといけないので、大変ですよ。

(「ユー・アイネット」・Aさん・54歳)

しかし、活動において職業(市場労働)的要素が無視できなくなっても、企業の論理とは距離を取ろうとしている。「ユー・アイネット」では、介護事業について、「体のケア」と「心のケア」の統合という観点から、次のような試みがされている。

(営利を目的とした) 介護事業者と NPO との違いをはっきり説明することは難しく、外部的にアピール出来るものはないが、現在考えていることは、体のケアは介護保険で行うが、心のケアをNPOなどで行っていくということではと考えています。例えば、介護が終わっても、掃除をしたり話し相手になったりするなど。今、実際にやっている活動としては、用がないときでも、近くを通ったら声をかける「ひと声かけ運動」をしています。このような点で(営利目的の)事業者との差別化を図っていきたいと考えています。

(「ユー・アイネット」・事務局長・Dさん・64歳)

これは、市場労働のメリットとボランティア・ワークのメリットを統合する一つの試みといえる。

またボランティアとして活動に携わるメンバーも、活動が企業の論理と異なることを積極的に評価しながらも、社会的責任という点では、企業での仕事もボランティアも同等であると言う。

やる以上はいい加減なことは出来ないので、(企業での仕事もボランティアも責任は)基本的には同じだと思う。(「ユー・アイネット」・Eさん・66歳)

そして、企業での経験を生かすに当たっても、技術的な職業能力だけでなく、人との接し方や社会性の重要性を指摘する。

不動産に関係する仕事をしていましたので、人との接し方などが役立っているのではないかと思います。どの仕事でも共通するかもしれませんが、トラブルがあったときに、とにかく相手に誠意を見せることが重要なことを、身をもって体験していましたので、それは福祉にも同じことが言えます。(「ユー・アイネット」・Cさん・62歳)

さらに、こうした企業での経験を地域社会で、次世代にも伝えて行くことへの責任感もある。

今後は、若い人の教育もしっかりやらないといけないと思いますね。以前、若い人に亡くなった人の所へ行って頂いたのですが、社会的な経験が少ないのでしょうか、社会一般的な部分での対応が出来ていない部分もありまして。技術的なことについては出来るのですが、社会人としての教育が不十分ですので、若い人への社会人教育もしていかなければなりません。(「ユー・アイネット」・Eさん・66歳)

こうした社会的責任感もつ意義は大きい。日本では「社会人」と言えば、すぐれて企業の正規雇用労働者を意味する。そして、今日では、技術的な職業能力開発のみならず、社会的なマナーやルールなど、社会生活に必要な知識や作法も企業での「社員教育」に負うところが大きい。しかし、NPOを初めとする社会参加活動を通じて、企業に拠らない「社会人」教育ができるならば、それもまた「企業社会」から脱し、(「企業」という冠抜きの)「社会」においてコミュニティの機能を回復する第一歩になるだろう。

5 要約と示唆

本稿の目的は、「労働」という観点から社会参加活動をとらえることにより、職業生活においてボランティア・ワークがもつ意義を考察することにあつた。

まず、NALC のデータ分析から、職業意識と社会参加活動の意味づけ、及び活動へのコミットメントとの関係について、次のような知見を得ることができる。

NALC 参加者の職業意識は、男性を一家の主たる稼得者とし、就業の有無を社会の重要な成員資格とみなす、旧来の労働規範を根強く維持する一方で、社会的地位や経済的豊かさの獲得よりも仕事のやりがいや職業を通じた社会貢献を重視し、企業や組織に依存しない働き方を志向する、新たな職業意識も高まっている。

職業意識と活動の意味との関係に着目するとき、性別・職業の有無にかかわらず、職業において他人や社会に役立つことを重視する意識が、NALC の活動における社会的責任感と結びついている。ここに、職業にも NALC の活動にも通じる、参加者の公共への関心を見出すことができる。そして、職業と NALC の活動とは、この公共への関心を共通の基盤としながら、性別と職業の有無によって、それぞれ異なった側面で結びついている。

男性有職者において、職業での社会貢献を重視する意識は、他人との関係形成や個性発揮の契機としても NALC の活動をとらえ、NALC の活動内容へのコミットメントと結びついている。また、経済的対価よりも仕事のやりがいを重視する職業意識は、NALC の活動を関係形成の契機ととらえ、社会的責任感を持ち、NALC の理念に共感することに結びついている。そして、「一人前の人間」の要件として就業にこだわらない意識は、NALC の活動への社会的責任感や、「ボランティアを通じて社会の役に立つことを生きがいに」という NALC の理念への共感と結びついている。

有職男性と同様に、有職女性においても、NALC の活動への社会的責任感が、社会の一員として、有職者であるという地位を、相対化する意味合いをもつ。また有職女性においては、活動内容へのコミットメントも同様の意味をもつ。さらに、NALC の理念への共感は、経済的対価にこだわらない職業意識とも結びついている。

無職男性においては、NALC の活動を他人との関係形成の契機ととらえる意識と、職業における社会貢献志向が結びついている。社会の役に立つことを重視する職業意識が、無職男性を社会参加へと向かわせ、そのなかで他人とのつながりへの意識をもたらしめていると考えられる。

このように男性や有職女性においては、それぞれ違いはあるものの、NALC 活動の意味づけや NALC へのコミットメントが「脱経済主義」や「社会貢献志向」といった新しい職業意識と結びついている。特に、男女とも有職者では、NALC の活動に何らかの意味を見出し、NALC にコミットすることが、自らの職業的地位を相対化し、職業労働においても経済的対価にこだわらない意識と結びついている。「経済的対価を得るための労働に従事することが、社会の一員として一人前の条件」という労働規範は、NALC とのかかわりのなかで相対化されていると言える。

これに対して、無職女性では、男性を主たる稼得者とする職業意識が、関係形成や個性発揮の契機として活動をとらえる意識や、活動内容へのコミットメントと結びついている。「専業主婦」としての地位にあると考えられる無職女性では、「男はペイドワーク、女はアンペイドワーク」という旧来の性別役割にもとづいて、NALC が一つの生活圏になっていることが読み取れる。

また、旧来の労働文化において主たる労働力とされ、仕事や企業組織に強くコミットしてきたとされる男性の社会参加活動に着目した、「流山ユニー・アイネット」と「川崎おやじ連」のインタビュー調査からは、次のような知見を得ることができた。

第一に、家族との関係が参加の動機やきっかけとして重要な位置を占めている。このことは、家庭生活が無視できない生活関心であることを示唆しており、活動への参加によって家事参加が高まるなど、家族との関係にも良い影響を及ぼすこともある。しかしそれだけでなく、人的ネットワークが主たる参加経路となっていることを考えるなら、男性は、家族を除くと仕事を離れた社会的ネットワークがないことも関係していると考えられる。

第二に、有職者においては、活動に参加するようになっても仕事へのコミットメントは低下しておらず、仕事にも社会参加活動にも積極的に取り組むマルチな生活関心が、生活にメリハリを生み、アクティブな生活の源泉となっている。そして、退職者も含めて、仕事を離れても「忙しい」ことは、参加者の生活を特徴づけるキーワードである。このときの「忙しさ」とは、他人や組織から強制される「やらされる忙しさ」ではなく自ら進んで何らかの役割を担う「やる忙しさ」である。そして、ボランティアな活動は、この「やる忙しさ」にもとづくアクティブな生活を構成する、重要な要素の一つとなっている。

第三に、活動のなかで企業と異なる論理を積極的に評価し、企業社会の論理を相対化する視点が養われる。そして、自由で自発的な参加というボランティアの論理を重視しながらも、社会的責任感という点では企業での仕事と同等なものとして活動をとらえる意識もある。

NALC のデータからも、「ユー・アイネット」・「おやじ連」のインタビューからも、社会参加活動を通じて、市場労働社会・企業社会の論理を相対化する視点が示されたことは重要である。市場労働社会が岐路に立つ今、ボランティア・ワークも含めた観点から、社会参加の契機として「労働」をとらえなおし、職業生活を再構築することが重要と言える。

参考文献

- Gorz, André (1988) *Métamorphoses du travail Quête du sens: Critique de la économique, Galilée, Paris* (=真下俊樹訳, 1997, 『労働のメタモルフォーズ 働くことの意味を求めて — 経済的理性批判』 緑風出版)
- 濱口桂一郎 (2000) 「EU 社会政策思想の転換」『季刊労働法』 No.194:105-128
- 基礎経済科学研究所編 (1992) 『日本型企业社会の構造』 労働旬報社
- Méda, Dominique (1995) *Le travail: Une valeur en voie de disparition*, (=若林章孝・若林文子訳, 2000, 『労働社会の終焉 — 経済学に挑む政治哲学』 法制大学出版局)
- 野川忍・野田進・和田肇 (1999) 『働き方の知恵』 ゆうひかく選書
- 野川忍 (2003) 「アンペイドワーク論の再検討」『ジュリスト』 No.1237:117-25
- 尾高邦雄 (1941) 『職業社会学』 岩波書店
- 落合恵美子 (1994) 『21世紀家族へ — 家族の戦後体制の見かた・超えかた』 有斐閣選書
- 大沢真理 (1993) 『企業中心社会を超えて — 現代日本を〈ジェンダー〉で読む』 時事通信社
- 杉村芳美 (1990) 『脱近代の労働観 — 人間にとって労働とは何か』 ミネルヴァ書房
- 武川正吾 (1999a) 『福祉社会の社会政策 — 続・福祉国家と市民社会』 法律文化社
- 武川正吾 (1999b) 『社会政策のなかの現代』 東京大学出版会
- 渡辺治 (1991) 『企業支配と国家』 青木書店

第3章 社会参加と地域社会

社会参加活動とパーソナル・ネットワーク

藤本隆史

1 はじめに

社会参加活動に参加する人の目的や動機は様々だが、主なものとして必ず挙げられるのが「仲間を増やす（あるいは作る）」といったものであり、活動に参加した結果得られた主なものとして挙げられるものに「たくさんの（あるいは色々な）人と知り合いになれた」ということがある。

例えば、2003年にシニアプラン開発機構が実施した「サラリーマンの生活・就業スタイルに関する研究」の調査においても、社会に役立つ活動に参加した理由（複数回答、10項目¹⁾）のなかで「友人や仲間を増やしたい」（30.7%）と回答した人割合が「地域や社会に貢献したい」（57.2%）に次いで高かった。また、活動に参加して感じること（7項目²⁾）について、「まったくそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」という5つの選択肢でたずねているが、そのうち「まったくそう思う」と回答した人の割合が最も高かったのが「多くの人と知り合いになれた」（32.6%、2番目は「活動をしていて楽しい」の22.3%）であった（p.180-181を参照）。内閣府国民生活局（2003）においても、「ボランティア・NPO・市民活動への参加によって得たこと」として、「地域の様々な人とのつながりができた」や「地域・社会に対する貢献ができた」と回答した割合が9項目³⁾の中で最も高かった（p.47）。

このようなことから、社会参加活動に参加することは、地域・社会における互酬性の規範の実現とともに、参加者のパーソナル・ネットワークを広げるあるいは活性化することに寄与していると言える。しかし、それが具体的にどのようなつながりによるものであるかなどが明らかにされることは少ない。

本稿では、ボランティア活動などの市民活動を通じた社会関係の発展に関するソーシャル・キャピタルの議論をベースに、NPO法人NALC（ニッポン・アクティブライフ・クラブ）を対象とした調査データや、NPO法人流山ユー・アイネットと川崎おやじ連に対しておこなったグループインタビュー（対象者は男性のみ）の結果⁴⁾から、社会参加活動への参加が参加者のパーソナル・ネットワークとどのように関わっているのかを中心に検討する。また、その一端として、転職や就職で使われた人的ネットワークに関する研究を参考に、活動を始めるときの紹介者との関係と活動への関わりについても検討する。

本稿の構成は、ソーシャル・キャピタルの議論について触れた後、入会の経緯について、どのような方法であるいはどのような人を通じて入会したか調べ、メンバーとの関係や活動の内容、活動へのコミットメントなどから、活動参加の意義などについても考察する。

2 ソーシャル・キャピタルについて

内閣府国民生活局（2003）では、ボランティア活動などの市民活動を通じた社会関係の発展について、「ソーシャル・キャピタル」という概念を用いて述べられている⁵⁾。それによると、ソーシャル・キャピタルとは「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴」であるというロバート・パトナムの定義に基づき、「ボランティア活動の活性化は、地域社会における人的ネットワークと

その社会的な連携力を豊かなものにする効果をもち、すなわちソーシャル・キャピタルの蓄積に寄与し、それが地域社会の安心・安全・安定などの各面に好ましい成果をもたらしているという見方も可能となってくるのではないだろうか」と述べている (p.2)。社会参加活動に参加することによって、個人のネットワークが活性化し、それがさらに地域社会の活性化につながっていくことである。ここでは内閣府国民生活局 (2003) に依拠してソーシャル・キャピタルについての議論を簡単に紹介し、本稿での分析との関係を示しておく。

ソーシャル・キャピタルの基本的な類型には「結合型」と「橋渡し型」があり、「結合型」が「組織の内部における人と人との同質的な結びつきで、内部で信頼や協力、結束を生むもの」であるのに対して、「橋渡し型」は「異なる組織間における異質な人や組織を結び付けるネットワーク」としている (同, p.18)。前者の例として家族内や民族グループ内のメンバー間の関係、後者の例として民族グループを越えた間との関係や知人、友人の友人などとのつながりがあげられている。橋渡し型については、「内部結束は弱いものの、外部との関係を強化し、外部の情報や機会へのアクセスを増大させるものであり、より幅広いコミュニティ・レベルでの信頼感や協力の醸成を図っていく上で、その構築は重要である」(同, p.93) とされ、ソーシャル・キャピタルの偏在を少なくするものとして期待されている。本稿では、社会参加活動参加者の自治会活動への関わりから、「橋渡し」機能について若干の考察を行う。

また、その他にも形態によって「フォーマル」なソーシャル・キャピタルと「インフォーマル」なソーシャル・キャピタルに、程度によって「厚い」ソーシャル・キャピタル (強い紐帯) と「薄い」ソーシャル・キャピタル (弱い紐帯) に、志向によって「内部志向」のソーシャル・キャピタルと「外部志向」のソーシャル・キャピタルというふうに、様々な側面から分類される。本稿では、形態や志向については活動の種類との関係から、程度については活動を始めるきっかけとなった紹介者との関係から検討する。

そして、ソーシャル・キャピタルは社会生活に多くの有益な成果をもたらす反面、「ネガティブな側面」として、例えば、強力な結合型ソーシャル・キャピタルには「排他性」が内在していることがあげられている。メンバー間の結合が強くなるほど外部との境界も強まって閉鎖的になり、新たなメンバーが入りにくく、場合によっては他組織との関係を拒み、対立するようなことも考えられる。

ソーシャル・キャピタルの議論は、OECD などで発展途上国の社会開発にまで及んでいるが、本稿では、日本で特に中高年男性が仕事や家庭とは異なる社会関係を築く生活の場として社会参加活動に注目し、ソーシャル・キャピタルのネガティブな側面についても考慮しつつ、ソーシャル・キャピタルの構成要素である「ネットワーク」を中心に検討を進める。

3 入会の経緯

表1 NALC活動の位置づけ (%)

	生活にとって重要な収入源である	人とのつながりや関係を得る活動である	自分の個性を発揮する活動である	地域や社会における責任を果たす活動である
そうである	0.1	26.0	8.4	18.5
どちらかといえばそうである	0.6	45.8	35.1	48.3
どちらかといえばそうでない	4.1	13.5	29.2	15.7
そうでない	87.8	9.6	20.7	11.1
無回答	7.4	5.0	6.7	6.4

NALC のメンバーを対象とした調査では、NALC の活動に参加している人が NALC の活動をどのように位置づけているかについて、表 1 のように 4 つの項目でたずねているが、そのうち「そうである」と回答した割合が最も高いのは「人とのつながりや関係を得る活動である」(26.0%)で、「地域や社会における責任を果たす活動である」(18.5%) がそれに次いでいる。このように、今回の調査対象者も、冒頭で紹介したシニアプラン開発機構 (2003) や内閣府国民生活局 (2003) の調査結果と同様に、社会参加活動に対して対人志向が強いと言える。

社会参加活動を始めるきっかけとしては、人から誘われたという人が多い。山内 (2003) の NPO 団体を対象とした調査でも、スタッフの採用方法として紹介によるものが約半数を占めている。しかし、それが参加者とのどのような関係にある人から誘われたのかはあまり明らかにされていない。そこで、入会の経緯について活動の種類などから検討を加えた後、人からの紹介で活動に参加するようになった場合については、転職や就職の際に利用された人的ネットワークの研究 (日本労働研究機構, 2003) を参考に、活動を始めるきっかけとなった紹介者と参加者の関係を中心に、参加者のパーソナル・ネットワークの構造と活動への関わりについて分析する。

(1) 入会の経緯と活動の種類

NALC に参加している人が、どのようなきっかけで NALC での活動を始めたのか、表 2 を見ると、広告などによる公募 (18.3%) よりも紹介による入会が多い。これは前述のとおり、社会参加活動一般に見られることだが、特に NALC のような地域に根ざした活動の場合はその傾向が強くなると思われる。NALC を紹介した人の種類は、全体でみると「近隣の人、地域での友人・知人」が 19.4% と最も多く、「職場や仕事を通じた友人・知人」が 18.4%、「家族や親戚・縁戚関係」が 16.5% などとなっている。「学生時代の友人・知人」は、回答者の年齢層が高いためか、3.4% と少ない。

表2 入会の経緯 (%)

		家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	公募*	その他	(N)
全体 (NA=23)		16.5 (219)	18.4 (245)	3.4 (45)	19.4 (257)	10.8 (143)	18.3 (243)	13.3 (176)	100 (1328)
性別	男性	18.3	27.2	3.2	16.9	8.3	13.4	12.7	(567)
	女性	15.1	12.0	3.5	21.2	12.6	21.9	13.7	(761)
市郡規模	23区・政令指定都市	15.6	17.1	2.2	13.7	8.7	24.6	18.1	(321)
	その他の市部	17.1	18.9	3.3	20.8	11.5	16.5	11.9	(908)
	郡部	14.1	18.2	8.1	24.2	11.1	14.1	10.1	(99)
年齢	55歳未満	15.7	16.5	0	15.0	8.7	23.6	20.5	(127)
	55-59歳	17.4	14.5	1.2	20.3	7.6	22.1	16.9	(172)
	60-64歳	17.5	18.3	3.4	19.6	9.3	19.8	12.1	(388)
	65-69歳	16.6	21.9	4.2	19.3	9.8	15.6	12.7	(379)
参加するNPOを探していたか	探していた	8.9	13.0	1.9	16.5	14.6	29.2	15.9	(315)
	探していなかった	19.0	19.9	4.0	20.4	9.4	15.0	12.3	(985)
最も重要な活動	高齢者の介護・介助・家事援助	15.4	18.4	3.4	18.4	9.0	21.3	14.2	(267)
	子育て支援	14.3	14.3	2.0	12.2	8.2	18.4	30.6	(49)
	会員による相互扶助のボランティア	14.4	19.6	2.5	20.2	10.4	19.3	13.5	(326)
	学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	14.9	21.2	4.6	19.8	15.1	15.9	8.5	(410)
	その他	20.0	13.3	3.7	17.0	7.4	20.0	18.5	(135)

*「公募」には「地域雑誌や新聞広告などを通じての公募」、「大学や専門機関などを通じての公募」、「ハローワークを通じての公募」、「インターネット上の公募」が含まれる。

さらに入会の経緯について、いくつかの変数によってその傾向を見てみると、まず性別では男性に「職場や仕事を通じた友人・知人」による紹介の割合が女性よりも多く、逆に女性の場合は「近隣の人、地域での友人・知人」の紹介や「公募」による入会が男性よりも多い。公募に関しては、年齢の低い人の割合が多くなっているが、これは男女の年齢分布と関係があり、60歳未満は女性のほうが男性よりも多く、さらに表3のように女性は活動の内容として「高齢者の介護・介助・家事援助」の割合が男性より少し多いことが関係していると考えられる。

表3 男女別・市郡規模別 最も重要な活動の種類 (%)

	男性	女性	23区・政令指定都市	その他の市	郡部
高齢者の介護・介助・家事援助	16.5	22.6	28.7	17.2	17.6
子育て支援	1.9	5.0	4.0	3.0	8.8
会員による相互扶助のボランティア	28.8	20.6	18.3	26.2	24.5
学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	31.8	30.3	23.2	33.8	30.4
その他	11.5	9.2	11.3	10.0	7.8
無回答	9.5	12.3	14.6	9.9	10.8
(N)	(576)	(775)	(328)	(921)	(102)

また、市郡規模別に見た場合、表2で「23区・政令指定都市」で「公募」の割合が24.6%と他の地域と比べて高いのに対して、「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」では「その他の市部」や「郡部」の割合が「23区・政令指定都市」よりも少し高い。表3で活動の内容を市郡規模別に比べてみると、「23区・政令指定都市」で「高齢者の介護・介助・家事援助」の割合が他の地域よりも高いのが分かる。これは、男女別の傾向と同じく「高齢者の介護・介助・家事援助」と「公募」が結びついているものと考えられる。「23区・政令指定都市」と比べて、その他の地域の方が地域での社会関係（近隣での付き合いなど）が多少なりとも充実しているとすれば、それが「高齢者の介護・介助・家事援助」自体の需要に影響し、また「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」か「公募」かというところに違いとなって表れるのであろう。

表2の性別や市郡規模で分けていない「最も重要な活動」による分布では、はっきりした傾向は見られないが、このように、特定の属性によって比べてみると、「公募」と「高齢者の介護・介助・家事援助」の関係が見えてくる。

表2において、NALCで活動を始める前に参加するNPOを探していたかどうかによる比較では、全体としては探していなかった人のほうが多い(n=985、76.1%)が、「探していた」と答えた人の場合、29.2%が公募となっている。一方、探していなかった人の場合、7割以上が家族、職場、近隣などの紹介によって入会していて、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」に主に参加している人の割合が探していた人よりも高い。つまり、「探していた」人の場合は、もともと高齢者の介護などの活動をしたいと考えていてNALCに参加した人が比較的多いが、学習など趣味的な活動に参加している人は、たまたま誘われて、自分の関心に合うことがあったので参加した人が比較的多いということになるだろう。

探していたかどうかを性別で分けた場合(表4)、男性は「探していた」人が29.8%で「探していなかった」人が12.8%と差が大きく、合計と同じ傾向を示すが、女性はそれぞれ28.6%と20.6%で8ポイントの差しかない。つまり男性の場合、積極的に参加するNPOを探していなかった場合は探していた場合と比べて、結果的に高齢者の介護・介助・家事援助に関わるものが少

ないのに対して、女性の場合は探していたかどうかに関わりなく高齢者の介護・介助・家事援助に参加しているということである。

これは、介護・介助・家事援助といった活動が、一般に女性向きの仕事と考えられていることと関係があるだろう。参加する側も採用する側も、そのような考えをもっているためだと思われる。そういう意味では男性の場合、「参加する側」の意思が活動の種類に反映され、より明確な差が出たと考えられる。また「探していなかった」では、「会員による相互扶助のボランティア」で男性の割合（28.8%）が女性（19.2%）よりも高いが、男性は特に参加するところを探していなかった場合、相互扶助という、広い意味でのそしてよりインフォーマルな形での助け合いである社会活動に「結果的に参加することになった」ことが女性よりも多いということを示している。

表4 参加するNPOを探していたか別 最も重要な活動の種類（%）

	探していた			探していなかった		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
高齢者の介護・介助・家事援助	29.1	29.8	28.6	17.2	12.8	20.6
子育て支援	3.5	2.3	4.3	3.9	1.8	5.5
会員による相互扶助のボランティア	25.9	27.5	24.9	23.4	28.8	19.2
学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	26.3	23.7	28.1	32.4	34.2	31.0
その他	10.8	12.2	9.7	10.2	11.4	9.3
無回答	4.4	4.6	4.3	12.8	11.0	14.3
(N)	(316)	(131)	(185)	(1005)	(438)	(567)

グループインタビューをおこなった流山ユー・アイネットは高齢者の介護・介助を主な活動としているが、事務局長によると「NPO なのでボランティアな気持ちがある人（波長が合う人）でないと困るので、公募はしていない」ということである。インタビューに参加していただいた方の中には、事務局長と知り合ったことから入会した人の他に、流山市の市役所や市の関連施設でその存在を知ったり、また専門学校で一緒に学んでいた人を通じて知ったりと様々であるが、共通しているのは、自分の親の介護などを通じて高齢者の介護に関心を持っていたことである。彼らは専門学校へ通ったり、NPO のイベントに参加したりして、積極的に参加の場を求めていたので、事務局長に出会わなかったとしても、流山ユー・アイネットもしくは別の団体に（公募も含めて）参加していた可能性が高い。

実際、自分の親も高齢で、よく考えると地域の世話になっていました。何か社会に役立つことをと思いたち、市役所をたずね、流山ユー・アイネットを紹介されました。

（流山ユー・アイネット・Aさん・54歳）

母親の痴呆が悪化して、特別養護施設に入れ、その後に亡くなりましたが、定年後、福祉に携わりたいという思いがあり、ヘルパーの資格を取りました。そのとき同じ学校にいた方がこの団体に参加してしまして、その方に誘われたのがきっかけです。

（流山ユー・アイネット・Fさん・63歳）

このように、「高齢者の介護・介助・家事援助」や「育児支援」など社会貢献的な活動内容と、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」などの趣味的な活動内容では、前者は他人の

役に立つことを目的としているのに対して、後者は自分自身の生活を豊かにすることを目的としていることから、活動参加へのきっかけやコミットメントの面で多少異なると考えられる。

(2) 配偶者との関係

川崎おやじ連の場合、地域で開催される祭りへの参加や、講演会などのイベントが活動の中心となっていて、NALC 調査での活動の種類で言うと「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」に該当する。グループインタビューには川崎おやじ連の4つのグループから参加していただいた。それぞれのグループの活動が始まる直接のきっかけは、市の家庭学級を通じた交流が中心であるが、そもそもそこへ出席するように仕向けたのは家族である。

Cさんと同じですが、父親家庭教育学級というのに2週間に1回、妻からの勧めで、1回ぐらい行ってみるかなというのが始まりです。

(おやじ連・Dさん・60代)

最初は市のお母さんの教育講座でして、約1年やったのですが、子供は母親だけでは育たないということで、父親も入ることになり、妻に連れてこられたのがきっかけです。

(おやじ連・Eさん・50代)

表5 配偶者のNALCへの参加別 入会の経緯 (%)

	家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	公募*	その他	(N)
定期的に参加している	41.4	14.2	0.7	15.7	6.0	10.4	11.6	(268)
ときどき参加している	18.7	19.4	3.6	19.8	9.5	15.1	13.9	(252)
以前に参加したことがある	10.4	16.4	3.7	23.1	8.2	23.9	14.2	(134)
参加していない	8.1	22.0	4.8	20.0	12.7	20.0	12.3	(455)

NALC のデータでは「家族や親戚・縁戚関係」の誰が紹介者かは分からないが、表5で配偶者の参加状況を見てみると、「定期的に参加している」人が41.4%いるので（どちらが先に始めたのかは分からないが）、その多くが配偶者であった可能性が高い。表には示さないが、活動の種類による配偶者の参加状況には大きな差は見られなかった。

そこで、配偶者の参加状況と夫婦関係について見てみる。

表6 日頃の配偶者との生活と配偶者のNALCへの参加（「よくある」の割合） (%)

	定期的に参加している	ときどき参加している	以前に参加したことがある	参加していない	合計	(N)
(ア) 食事をともにする	95.5	94.1	92.7	86.1	91.0	(1022)
(イ) 配偶者にありのままをみせる	87.0	83.5	77.4	77.9	81.3	(913)
(ウ) 悩みや心配事を話し合う	72.1	67.1	61.3	57.6	63.7	(715)
(エ) いっしょに外出する	67.7	64.7	59.1	47.8	57.8	(649)

まず日頃の配偶者との生活について、表6の4つの項目に対して「よくある」と答えた人の配偶者がNALCの活動にどの程度参加しているか比べてみると、配偶者の参加頻度が高いほうが、

配偶者とより親密な関係にあることがうかがえる。因果関係は特定できないが、NALCの活動に夫婦ともに参加している場合は、夫婦関係もより良いという傾向が見られる。

同様の傾向は、夫婦関係についての意見でも見られる。表7の4項目に対して「そう思う」と回答した人の配偶者のNALCへの参加度を比べると、より参加の度合いの高い人のほうが、それぞれの項目に対して「そう思う」と答えている割合が高い。

表7 夫婦の関係に関する意見と配偶者のNALCへの参加（「そう思う」の割合）（％）

	定期的に参加している	ときどき参加している	以前に参加したことがある	参加していない	合計 (N)
(ア)強い愛情がなければ、夫婦とはいえない	43.5	38.0	27.7	31.4	35.4 (397)
(イ)お互いのことをよく知らなければ、夫婦とはいえない	48.0	40.0	29.9	30.7	36.9 (414)
(ウ)自分を犠牲にしても、相手に何かをしてあげたいと思うのが夫婦というものだ	37.2	35.3	22.6	24.0	29.6 (332)
(エ)夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ	36.1	29.8	21.2	20.1	26.3 (295)

社会活動への参加によって夫婦関係が活性化されたのか、もともと夫婦関係が密な人が一緒に活動に参加しているのかは分からないが、これらの結果から、NALCの活動に夫婦ともに参加している人は、何かと一緒に過ごす時間が長く、また夫婦の関係自体も大事に考えるという傾向が得られた。

川崎おやじ連では、活動への参加と家族関係について、次のようなコメントが得られた。

会社人間ではなかったのですよ。今でもないのですけど。でも、家庭人間ではなかったですね。家庭へは親としてこれでいいだろうという感じで関わっていたのですよ。家事や育児も、人並み以上に関わっていたつもりでいましたが、女房に言わせると、ほとんど何もやっていないらしいですね。子供たちも、そう思っているようで。

自分の考えていたレベルはかなり低かったのかなという気が、今になってします。ですから、「おやじ考」をやって、周りの人からいろいろな刺激を受けて、料理なんかもかなりやりだしました。

家庭への接し方が変わったのは、自然に自分の意思でなったと思いたいですが、入会がきっかけだと思います。

(おやじ連・Bさん・50代)

以上のように、NALCの調査データからは、入会の経緯について、一般には公募よりも紹介による入会が多いが、活動の種類によって、社会的貢献などある程度はっきりとした目的を持って参加しているのか、たまたま誘われて参加してみたら楽しいので続けているのかななどによる違いが、特に男性の場合、参加するNPOを探していた人でNALCで主に高齢者の介護などに従事している人が相対的に多いなど一定の傾向が見られた。また、夫婦で活動に参加することと、良好な夫婦関係とのつながりも確認できた。

(3)活動に対するコミットメント

このような傾向は、参加者の社会活動に対する態度や価値観との関係も考えられる。

社会活動と一緒にやっていくには、価値観の共有が重要である。活動の目的や方針に共感でき

ないと、仲間として活動を続けていくことは困難である。流山ユー・アイネットの事務局長が「NPOなのでボランティアな気持ちがある人（波長が合う人）でないと困るので、公募はしていない」と話していたことを紹介したが、他に次のようなコメントもあった。

NPOで分裂するのは、意識、価値観の違いで分裂することが多いですが、お金の問題で分裂することは殆どありません。ただ、この団体として介護事業での収入が入ってくるようになりましたので、少し変わってくるかもしれませんね。

(流山ユー・アイネット・Dさん・64歳)

また、川崎おやじ連でも、やめていく人は、活動に対する考え方が違っていることが多い。

入ってきて辞めた人ももちろんいます。いろいろなケースがありますが、私が共通点を見出したことは、「いたか」に入るときに過大な期待をして、ここでは何でも出来るし、「かくあるべきだ」という理論を述べられる人ですね。でも「かくあるべきだ」を実現するためには、会員各々が相当の時間を割かないと出来ないのです。でも、皆現役で仕事をしているので無理なのです。期待されることは分かりますが、出来ない。そこにギャップを感じて、辞めることになる。けれども我々の基本は、自分の持ち寄れる時間を持ち寄ってやれることをやろうという、それしかないのです。

(川崎おやじ連・Dさん・60代)

NALCの調査データでも、活動に対して感じていることで「NALCの理念や活動目的に共感している」という項目に対して「大いにあてはまる」と回答した割合が、全体で4割弱と他の項目と比べて割合が高く、活動を継続していく上で重要な要素であることが分かる。

活動分野別に見ると、「活動内容にやりがいを感じている」や「自分が地域や社会の役に立っている実感がある」で、高齢者の介護・介助・家事援助や子育て支援をしている人の割合が相対的に高い。

表8 NALCでの活動で感じていることと最も重要な活動（「大いにあてはまる」の割合）（％）

	高齢者の介護・介助・家事援助	子育て支援	会員による相互扶助のボランティア	学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	その他	無回答	合計 (N)
(ア)活動内容にやりがいを感じている	33.3	40.0	23.0	16.0	35.0	5.3	22.8 (308)
(イ)NALCの理念や活動目的に共感している	42.2	52.0	38.7	35.4	42.3	22.0	37.4 (505)
(ウ)自分の経験や能力が生かされている	14.8	28.0	13.2	10.3	19.0	2.7	12.6 (170)
(エ)新しい知識や技能が身についている	6.3	16.0	5.2	5.7	9.5	1.3	6.0 (81)
(オ)私生活でもスタッフやメンバーと交流がある	12.2	22.0	14.7	16.0	16.8	7.3	14.3 (193)
(カ)活動時間が自分の生活スタイルに合っている	17.0	14.0	12.3	9.1	18.2	4.7	12.1 (163)
(キ)事故やトラブルへの対策が組織できている	12.2	18.0	12.0	8.4	15.3	5.3	10.7 (145)
(ク)自分が地域や社会の役に立っている実感がある	20.0	24.0	12.6	8.1	16.1	5.3	12.7 (171)

流山ユー・アイネットのグループインタビューでは、地域で活動することについて、次のようなコメントがあった。

活動に参加するようになって、地域の知り合いも増えました。NPOの活動の成果が身近で見えるのでやり甲斐があります。

(流山ユー・アイネット・Cさん・62歳)

最終的には自分のためですが、趣味の世界とは違い、人に何かしてあげたことで喜ばれ、自分も嬉しいという活動を続けて行きたいですね。自分や地域の子供たちが自分たちを見て、頑張っているなど感じてほしいです。

(流山ユー・アイネット・Dさん・64歳)

このように、高齢者の介護などの活動に参加する人(特に男性)の場合、地域・社会に対する互酬性の規範をより強く持っていると考えられる。これまで見てきた活動分野別の結果についても、この互酬性の規範による影響が少なからずあると思われる。

表8の「(ク)自分が地域や社会の役に立っている実感がある」について男女別に見たのが表9である。子育て支援については回答数が少ないので参考程度となるが、全体に男性の方があてはまると回答した割合が女性よりも高く(合計で約5ポイントの差がある)、高齢者の介護などについては「ややあてはまる」を含めると大きな差はないが、「大いにあてはまる」では男性が女性よりも約10ポイント高い。表4に関連して述べたように、高齢者の介護などの活動に参加する男性は、活動へのコミットメントが比較的強いと思われる。

表9 男女別・最も重要な活動別「自分が地域や社会の役に立っている実感がある」の割合

		高齢者の介護・介助・家事援助	子育て支援	会員による相互扶助のボランティア	学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	その他	合計
男性	大いにあてはまる	26.3	27.3	16.3	11.5	16.7	15.5
	ややあてはまる	43.2	63.6	48.8	39.9	48.5	41.3
	あまりあてはまらない	20.0	9.1	23.5	35.0	16.7	24.1
	あてはまらない	5.3	0.0	8.4	11.5	12.1	11.6
	無回答	5.3	0.0	3.0	2.2	6.1	7.5
(N)		(95)	(11)	(166)	(183)	(66)	(576)
女性	大いにあてはまる	16.6	23.1	8.8	5.5	15.5	10.6
	ややあてはまる	49.1	43.6	43.8	35.3	35.2	37.3
	あまりあてはまらない	22.3	20.5	32.5	37.0	18.3	27.5
	あてはまらない	6.3	10.3	10.6	16.2	18.3	14.8
	無回答	5.7	2.6	4.4	6.0	12.7	9.8
(N)		(175)	(39)	(160)	(235)	(71)	(775)

表1でNALC活動の位置づけについて全体の割合の分布を見たが、「地域や社会における責任を果たす活動である」について、男女別、活動分野別に分けると、表9と同じような傾向が見られる(表10)。合計で「そうである」と回答した割合が、男性の24.8%に対して女性は13.8%である。特に高齢者の介護などについては、男性で「そうである」と回答した割合が38.9%と高く、「どちらかといえばそうである」を含めても、男性の割合(82.1%)が女性(66.3%)よりも10

ポイント以上高い。

表10 男女別・最も重要な活動別「地域や社会における責任を果たす活動である」の割合

		高齢者の介護・介助・家事援助	子育て支援	会員による相互扶助のボランティア	学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	その他	合計
男性	そうである	38.9	54.5	21.1	19.7	28.8	24.8
	どちらかといえばそうである	43.2	45.5	59.6	47.0	45.5	48.4
	どちらかといえばそうでない	11.6	0	12.7	20.2	9.1	13.9
	そうでない	4.2	0	3.6	10.4	12.1	7.8
	無回答	2.1	0	3.0	2.7	4.5	5.0
		(95)	(11)	(166)	(183)	(66)	(576)
女性	そうである	15.4	15.4	14.4	10.2	16.9	13.8
	どちらかといえばそうである	50.9	59.0	53.1	47.2	49.3	48.3
	どちらかといえばそうでない	21.1	15.4	16.9	18.3	7.0	17.0
	そうでない	6.3	5.1	10.6	18.7	16.9	13.5
	無回答	6.3	5.1	5.0	5.5	9.9	7.4
		(175)	(39)	(160)	(235)	(71)	(775)

4 紹介者との関係

今回は NALC の紹介者との関係など、参加者のパーソナル・ネットワークと社会活動の関係について見てみよう。

表11 NALCを紹介した人別 入会の経緯 (%)

	家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	(N)
NALCの役員	13.2	42.0	8.2	22.3	14.4	(319)
NALCの一般職員	32.4	21.6	0	24.3	21.6	(37)
NALCの会員(一般職員以外)	27.9	14.9	4.5	35.0	17.8	(377)
NALC関係者の知り合い	25.3	26.6	1.3	26.6	20.3	(79)
支援団体や企業の人	20.0	40.0	0	35.0	5.0	(20)
その他	50.8	20.6	1.6	20.6	6.3	(63)

NALC の調査データでは、NALC を紹介した人は、NALC の役員 (35.6%) であるか会員 (42.1%) が大半を占める (表 11)。役員の場合は「職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介」の割合が最も高く、一般職員以外の会員の場合は「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」の割合が最も高い。役員が紹介者になる場合は必ずしも地域内ではなく、会員の場合は多くが地域内ということになる。

NALC を紹介した人と、どの程度会っていたか (表 12) では、紹介者の種類によって分布がかなり異なる。「ほぼ毎日」の 82.1% は同居家族であろう。「週に数回」と「月に 2～3 回」では「近隣の人、地域での友人・知人」の割合がそれぞれ 42.6%、37.9% となっている。「年に 2～3 回以下」では「職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介」が 41.5% と最も多い。

表12 NALCを紹介した人との当時の会う頻度別 入会の経緯 (%)

	家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	(N)
ほぼ毎日	82.1	11.6	0	5.8	0.6	(173)
週に数回*	7.1	22.6	2.6	42.6	25.2	(155)
月に2~3回	7.6	20.0	6.9	37.9	27.6	(145)
月に1回	7.0	30.6	5.7	33.1	23.6	(157)
年に2~3回以下*	15.4	41.5	8.5	25.4	9.2	(260)

*「週に数回」には、「週に2~3回」と「週に1回」を含む。また「年に2~3回以下」は、「年に2~3回以下」と「年に1回」、「年に1回未満」が含まれる。

NALC を紹介した人と、共通の友人・知人がどれくらいいたか (表 13) では、全体では平均値が 16.2 人、中央値が 7 人となっている。紹介者の種類別で見ると、平均値の最も大きいのは「職場や仕事を通じた友人・知人」の 26.4 人で、割合の分布でも人数の多いカテゴリーの割合が高くなる傾向がある。逆に最も平均値の低いのは「近隣の人、地域での友人・知人」の 7.9 人で、中央値の 7 人に近く、割合の分布はちょうど「職場や仕事を通じた友人・知人」反対になっていて、「11人以上」の割合が最も低い。

これらの結果から、「家族や親戚・縁戚関係」以外の関係では、「職場や仕事を通じた友人・知人」のつながりは、共通の知人はたくさんいるがお互いはあまり会わない弱い関係なのに対して、「近隣の人、地域での友人・知人」の場合は共通の知人はそれほど多くないが、接触頻度はそこそこあるという比較的強い関係であることが予想される。また性別で比べると、「近隣の人、地域での友人・知人」以外で男性の値が女性よりも高い。

表13 入会の経緯と共通の友人・知人 (%)

	家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	合計
0人	42.9	14.3	1.2	31.0	10.7	(84)
1~5人	19.2	21.1	4.7	40.1	14.8	(317)
6~10人	18.1	32.1	5.4	27.6	16.7	(221)
11人以上	28.6	33.1	5.9	15.0	17.4	(287)
平均値 (人)	16.1	26.4	14.2	7.9	14.2	16.2
男女計	(197)	(236)	(45)	(244)	(138)	(860)
男性	20.2	35.5	20.9	7.5	19.2	23.0
女性	12.7	10.8	9.8	8.2	11.8	10.5

これを確かめるために、NALC を紹介した人と会う頻度と共通の友人・知人の数を掛け合わせ、関係の密度を表す変数を作成する。その変数の傾向としては、数値が高い方がより広範で弱い関係 (低密度) であり、逆に数値が低い場合はより限定的で強い関係 (高密度) とする。一般に男性よりも女性のパーソナル・ネットワークのほうが密度が高いと考えられている。

結果 (表 14) は、表 12 と表 13 からの推測を裏付けるものとなった。つまり、「職場や仕事を通じた友人・知人」の数値が 132.7 と高く (低密度)、「近隣の人、地域での友人・知人」の数値が 31.8 と低かった (高密度)。「趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人」は 60.3 で両者の間に位置する。男女別では、男性の値が女性よりも高い。つまり、相対的に、男性が低密度で女性

が高密度のネットワークを利用して入会したということだ。

表14 入会の経緯と紹介との関係の密度（平均値）

	家族や親戚・縁戚関係からの紹介	職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	学生時代の友人・知人からの紹介	近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	趣味やサークル・クラブを通じた友人・知人からの紹介	合計
男女計	30.3 (195)	132.7 (234)	81.1 (45)	31.8 (240)	60.3 (136)	66.4 (850)
男性	38.7	182.0	120.7	32.7	77.7	100.2
女性	23.3	49.4	54.7	31.2	51.5	38.1

表 15 では、最も重要な活動の種類別に、紹介者との関係の密度の平均値を比べてみた。すると、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」の値が高く、つまり低密度であり、男女別では男性の値が女性よりも高い。しかし、表 13、14 の平均値については分散分析で差が 1% 水準で統計的有意となったが、表 15 に関しては統計的に有意な差は検出されなかった。

表15 最も重要な活動と紹介者との関係の密度

	高齢者の介護・介助・家事援助	子育て支援	会員による相互扶助のボランティア	学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	その他	合計
平均値	55.4 (161)	51.1 (24)	58.3 (205)	87.6 (291)	60.9 (80)	68.9 (761)
男性	88.8	86.7	73.5	143.3	68.8	102.4
女性	36.5	39.2	40.6	38.7	51.3	39.7

NALC の調査では、日常生活で困ったことが起きたときに、家族以外で信頼して相談できる人がどれくらいいるかたずねている。また、そのうち NALC で活動している人の数もたずねている。

表16 家族以外で相談できる人

	%	(N)
0人	6.9	(90)
1人	5.4	(70)
2人	13.6	(176)
3人	21.1	(274)
4人	5.6	(73)
5人	23.1	(299)
6人以上	24.2	(314)
平均値・男女計	4.8	(1296)
男性	5.3	(555)
女性	4.5	(741)

そのうちNALCで活動している人

	%	(N)
0人	50.3	(631)
1人	23.0	(289)
2人	13.8	(173)
3人以上	12.8	(161)
平均値・男女計	1.1	(1254)
男性	1.4	(537)
女性	1.0	(717)

表 16 のように、家族以外で相談できる人の平均は約 5 人、そのうち NALC で活動している人の平均は約 1 人となり、家族以外で相談できる人の 5 人に 1 人 (20%) は NALC のメンバーという結果になった。男女別では、男性の平均値の方が女性よりも若干高い。これは表 17 にあるように、職場・仕事関係で男性の平均値が高いことの影響によると思われる。その他については、

平均値にあまり差がない。

表17 入会の経緯別 家族以外で相談できる人、そのうちNALCで活動している人 の平均値

		家族や親戚・ 縁戚関係から の紹介	職場や仕事を 通じた友人・知 人からの紹介	学生時代の友 人・知人からの 紹介	近隣の人、地 域での友人・ 知人からの紹 介	趣味やサーク ル・クラブを通 じた友人・知人 からの紹介	公募	その他
家族以外で 相談できる 人	男女計	4.4 (208)	6.1 (242)	4.4 (44)	4.8 (251)	4.6 (135)	4.3 (232)	4.8 (163)
	男性	4.0	7.2	5.0	4.9	4.3	4.8	4.9
	女性	4.8	4.2	3.9	4.7	4.7	4.0	4.7
そのうち NALCで活 動している 人	男女計	0.7 (202)	1.9 (236)	0.8 (43)	1.2 (242)	1.0 (133)	0.8 (223)	1.0 (157)
	男性	0.6	2.4	0.6	1.0	1.1	0.9	1.3
	女性	0.8	1.1	0.9	1.3	1.0	0.8	0.9

さて、このような紹介者との関係は、参加者の活動への評価と関係があるだろうか。紹介者とのネットワークの密度、そして参加者の相談者のうち NALC 活動者である割合との関連を相関係数によって調べる。

表18 NALCでの活動で感じていることと 紹介者との関係の密度の相関関係

	男女計	男性	女性
(ア) 活動内容にやりがいを感じている	-0.078 *	-0.098 +	-0.037 n.s.
(イ) NALCの理念や活動目的に共感している	-0.091 *	-0.124 *	-0.063 n.s.
(ウ) 自分の経験や能力が生かされている	-0.099 **	-0.122 *	-0.059 n.s.
(エ) 新しい知識や技能が身についている	-0.081 *	-0.107 *	-0.100 *
(オ) 私生活でもスタッフやメンバーと交流がある	-0.078 *	-0.108 *	-0.037 n.s.
(カ) 活動時間が自分の生活スタイルに合っている	-0.028 n.s.	-0.047 n.s.	-0.007 n.s.
(キ) 事故やトラブルへの対策が組織でできている	-0.037 n.s.	-0.063 n.s.	0.031 n.s.
(ク) 自分が地域や社会の役に立っている実感がある	-0.054 n.s.	-0.049 n.s.	-0.071 n.s.

** 1% 水準で有意、* 5% 水準で有意、+10%水準で有意傾向

表 18 は、NALC 参加者の活動への評価と、NALC 活動への紹介者との関係の密度の相関関係である。活動の評価は値が小さい方が評価が高く（「あてはまる」と回答）、関係の密度は値が小さい方が密度が高い。したがって、相関係数がマイナスとなっているのは、活動の評価は値が小さい（評価が高い）ときに、関係の密度は値が大きい（密度が低い）ということになるので、統計的に有意な結果が出ている項目は、入会時の紹介者とのネットワークの密度が低かった人は、現在、それぞれの項目についてあてはまると回答する傾向があるということになる。結果は、男女計では5項目、男性は4項目、女性は1項目のみ統計的に有意となった。統計的に有意な結果が得られた相関関係も、係数が非常に小さいが、符号は全部マイナスのため、いわゆる「弱い紐

帯」(weak ties)によって入会した特に男性は、参加している活動について肯定的に捉える傾向があるということになる。

また、日常生活で困ったときに家族以外で相談できる人のうち、NALC 活動者の占める割合と活動の評価の相関関係は、表 19 のとおり、女性の 1 項目を除いてすべての項目が統計的に有意な結果となっている。活動の評価は値が小さい方が評価が高く、NALC 活動者の占める割合は値が大きい方が割合が高い。したがって、係数の符号がマイナスとなっているのは、活動の評価は値が小さい(評価が高い)ときに、NALC 活動者の占める割合が高いということになるので、統計的に有意な結果が出ている項目は、家族以外で相談できる人のうち、NALC 活動者の占める割合の高い人のほうが、それぞれの項目についてあてはまると回答する傾向があるということになる。平均して 5 人に 1 人であっても、NALC 活動者に相談できる人がいるということは、活動の評価に対してそれなりのインパクトがある、つまり重要な存在であるということだ。

表19 日常生活で困ったときに家族以外で相談できるNALC活動者の割合と活動の評価の相関関係

	男女計	男性	女性
(ア)活動内容にやりがいを感じている	-0.211 **	-0.265 **	-0.177 **
(イ)NALCの理念や活動目的に共感している	-0.109 **	-0.173 **	-0.062 n.s.
(ウ)自分の経験や能力が生かされている	-0.200 **	-0.210 **	-0.199 **
(エ)新しい知識や技能が身についている	-0.231 **	-0.254 **	-0.214 **
(オ)私生活でもスタッフやメンバーと交流がある	-0.334 **	-0.307 **	-0.354 **
(カ)活動時間が自分の生活スタイルに合っている	-0.201 **	-0.211 **	-0.193 **
(キ)事故やトラブルへの対策が組織できている	-0.216 **	-0.212 **	-0.218 **
(ク)自分が地域や社会の役に立っている実感がある	-0.198 **	-0.243 **	-0.170 **

** 1% 水準で有意、* 5% 水準で有意

入会からのプロセスが明らかでないため、推測の域を出ないが、入会時には「弱い紐帯」で入ってきても、活動への参加を通じて、メンバーとの信頼関係が深まったということになるだろうか。変数の精度の問題も含めて、より詳細な分析が必要である。

表 20 では、困ったときに家族以外で相談できる人のうち、NALC 活動者の占める割合と今後の活動意向についての項目の相関関係である。係数の符号の傾向は表 19 と同様である。したがって、マイナスとなっているのは、今後の活動意向についてそうしたいと回答したときに、NALC 活動者の占める割合が高いということになるので、統計的に有意な結果が出ている項目は、家族以外で相談できる人のうち、NALC 活動者の占める割合の高い人が、それぞれの項目についてそうしたいと回答する傾向があるということになる。男性については「企業での仕事や自営業など、収入を得る仕事に NALC の経験を生かしたい」も統計的有意となったが、「できるだけ長く NALC に参加し続けたい」、「町内会や自治会など、地域の活動に NALC の経験を生かしたい」、「育児や介護など、家庭生活に NALC の経験を生かしたい」については男女とも共通して統計的有意となっている。NALC のメンバーとの関わりが強まることで、NALC へのコミットメントが強まり、

NALC で得た知識や技術を家庭生活に生かし、また町内会や自治会などの地域活動への参加意欲も高まるという結果となった。

次に、その自治会活動と社会参加活動の関係について、グループインタビューの結果を中心に、地域社会の活性化のために社会参加活動が果たし得る役割について考察する。

表20 今後の活動意向 と 日常生活で困ったときに家族以外で相談できる NALC活動者の割合 の相関関係

	男女計	男性	女性
(ア)できるだけ長くNALCに参加し続けたい	-0.177 **	-0.200 **	-0.171 **
(イ)自分で新しいNPOをつくりたい	-0.037 n.s.	-0.019 n.s.	-0.059 n.s.
(ウ)企業での仕事や自営業など、収入を得る仕事にNALCの経験を生かしたい	-0.065 *	-0.123 **	-0.020 n.s.
(エ)町内会や自治会など、地域の活動にNALCの経験を生かしたい	-0.147 **	-0.137 **	-0.163 **
(オ)育児や介護など、家庭生活にNALCの経験を生かしたい	-0.116 **	-0.115 **	-0.112 **
(カ)議会や政党など、政治にかかわる活動にNALCの経験を生かしたい	-0.057 +	-0.078 +	-0.042 n.s.

** 1% 水準で有意、* 5% 水準で有意、+ 10% 水準で有意傾向

5 自治会との関係

近隣関係を含めて、もともと地域でのネットワークあるいは付き合いといったものがないと、社会参加活動への参加のきっかけがつかめないことが多い。特に男性の場合、そのような機会が少なく、またどのようにしていいのかも分からない。

地域での付き合いを広げる機会のひとつとして自治会などの地縁組織の活動があるが、多くの場合は形骸化していて、義務的に運営されている。内閣府国民生活局（2003）でも、自治会などの地縁活動を「地域におけるソーシャル・キャピタル形成のための『家族関係』に次ぐ基本的な単位であり、『顔の見える関係』を担保するには最適の単位」であるが、「現在その加入率や結成率の低下が指摘されている」と述べられている（p.96）。

川崎おやじ連のグループインタビューでも、「地域活動の泥沼化」ということで、自治会活動の大変さが語られた。

地域活動の泥沼化というのですかね。おやじの会は自主的な参加ですから、興味のないテーマであれば不参加でもよいとの自由がありますが、私も自治会長を何年かやりましたが、なかなか辞められませんね。

（川崎おやじ連・Bさん・50代）

私も、今、自治会の副会長をやって8年になるのですが、抜けられないですね。知り合いが町内にいればお願いすることは出来るのですが。その役員の選考委員会というのがあり、次期役員になって頂きたい方をお願いするのですが、選考委員の方も、周りの方が分からないのでお願いに行けず、結局役員へ逆に相談に来られて。（…中略…）自治会活動はだんだん難しくなってきましたね。言いたいことを言う人は言いたいことだけ言う人、協力する気持ちが全くない

人たちが多くなってきている。皆さんのためと思ったことが逆にお叱りを受けるし。他にも最近、常識や、マナーがすごく曲がってきているのを、ものすごく感じます。明るい町にしようとお互いにやっていますが、人によっては、隣近所のこと、昔で言う向こう三軒両隣ということが、仲良くできないのです。隣は関係ないと。協力が本当に少なくなってきて、すごく寂しい思いをしています。

(川崎おやじ連・Cさん・60代)

しかし、川崎おやじ連の中でも、自治会の役員の引継ぎをするなど、地縁的組織との関わりも出てきている。まだまだ限定的なものであるようだが、このようなことが少しずつ広がっていき、自治会活動の活性化につながっていく可能性もある。おやじ連で醸成された信頼関係が、自治会活動にも移行していくこととなり、地域社会での橋渡しの役割が期待される。

会社に行って帰ってきて隣のお父さんが何をしているのか、話をするのもあまりないし、こういう会に入っていて話せる人で、どういう方だから頼めるなという部分がないと、やはりお願いできないですもんね。

(川崎おやじ連・Fさん・40代)

僕はBさんから引き受けたのですが、マイナスばかりでなく、むしろプラスが多かったのです。というのは、隣近所に知り合いが出来たのです。本当に今まで顔だけは見るけど挨拶はなかった方が、5年間やり去年引き継いだのですが、今も特に奥さんから「おはようございます」と言われ、それが非常にうれしいですね。多くの人と知り合えた。

(川崎おやじ連・Gさん・60代)

内閣府国民生活局（2003）でも、事例分析の中で市民活動（新しいソーシャル・キャピタル）と地縁組織（既存のソーシャル・キャピタル）の関係について触れているが、新しいソーシャル・キャピタルによって、既存のソーシャル・キャピタルが活性化したり、既存のソーシャル・キャピタルを利用することで広がりを持つたりすることがあると紹介されている（p.82）。

一方、流山ユニー・アイネットの場合は、もともと自治会をベースにしていることもあって、自治会に対しては“地域社会への入り口”として肯定的な意見が聞かれた。

NPO等の団体に入るきっかけが見つけないということが言われていますが、そこできっかけをつかむ人は、個人の事情であることが多いです。でも私の持論は、自治会がNPOの原点だと思っていますので、NPOのようなことに触れることが出来る自治会に入ることをきっかけにしたらいと私は話しています。

(流山ユニー・アイネット・Dさん・64歳)

地域社会で何か活動をするなら、地域に住んでいる人との関係を築いていくことになる。それには、最も身近な地域社会である近隣を対象として活動する自治会から始めればよいということだろう。そこから地域での社会関係を広げていけば、その後どのような活動をするにも、そこで得られたネットワークが役に立つことになる。

流山ユニー・アイネットでも、川崎おやじ連でも、地域社会との関わりを持つきっかけとして、子どもの少年野球チームのコーチをあげる人が複数いた。特に男性の場合、仕事を引退してから「さ

あ何か始めよう」というよりは、徐々に何らかの形で地域社会との関わりを持ちつづけることによって、仕事中心の生活からの“ソフト・ランディング”がより容易になる。

私は、定年前より地域は遠くない存在でしたから、変化というものは特にはないですね。最初は、少年野球のコーチをしていたのが地域に関わるきっかけで、それは自治会から誘われました。会社でもボランティア休暇制度があるので、地域と関わりをもって行くことが出来ましたですし。

(流山ユー・アイネット・Bさん・55歳)

また、既存の組織に新たに参加する場合、そこで既に出来上がっている人間関係の中に入っていき難しさもある。平成12年版の『国民生活白書』では、ボランティア活動への参加を妨げる要因として、「時間的制約」、「情報の不足」と並んで、「見知らぬ人の集団に一人で入って行き、新たな人間関係を築くこと」に対する「心理的障壁」があげられている(経済企画庁編, 2001: 70-71)。

やはり地域の繋がりとして、地域での友達はこの年になるとできないのですよ。地域で、僕とかは若手になりますが、一回り二回り上の人たちも肩書きがないので、友達感覚で付き合いくれますし、こちらも同じような言葉づかいでして、この友達付き合いが心地よいのですよね。それがあるので、ずっと続けていくだろうなと感じます。

ただ、非常に難しいのは会が出来上がっているので、新しい人が入ろうとするのですが、仲が良過ぎて入ってこられない。会のメンバーは現役の時代から培っている仲ですから、リタイアしました、入れてくださいとは難しいかもしれませんね。最近では、実際何人か入ってきて、続けている方もいますが、やめていく人が多いのが現状です。

(川崎おやじ連・Bさん・50代)

これは、ソーシャル・キャピタルのネガティブな側面と関係するが、メンバーが固定すると、活動自体がマンネリ化してしまい、組織としても活力を失ってしまうことになる。やはり、ある程度、メンバーの出入りがあることによって活性化を図る必要がある。

僕が思うのは、人数の面で見ると30人を超えると、機動力としては難しいと思います。やり取りが自然体でぱっとできないと思うのです。そういう点では、たくさん出来て横に繋がる、おやじ連というのはいいと思います。「いたか」は今まで見ていると、ちょっと停滞気味、マンネリかなと思ったときに人が入ってきてくれるのです。従来にはない持ち味の人に来て、それで活性化するので。今まで途中で来てくれた人が、皆、これまでにないものを加えてくれています。

(川崎おやじ連・Dさん・60代)

川崎のようにすでに組織がいくつか立ち上がっているところはいいですが、まだそのような組織が存在しない場合、その地域の行政による場の提供がきっかけ作りとして重要な役割を果たしている。川崎おやじ連のグループも、その多くはもともと市が企画した家庭教育学級などを通じて知り合った人々で設立されている。

女性たち、奥さん方は、お子さんがなくても初対面で比較的スムーズに打ち解けたりするのですが、男性は名刺がないと、何していいか分からない。「おやじ考」のいちばん最初の集まりの

ときは、はじめは皆無言でしたが、市民課の人が一通り趣旨を説明された後、これは驚きましたね、アルコールを出されたのですよ。画期的ですよ。それで、皆一口飲むと自己紹介になったのですが、もう止まらない。やはりすごく求めている、自分をアピールしたいのです。会社以外でやっていることなどで盛り上がりまして、非常に成功でしたよ。スタートはそのように行政から指導いただいたのです

あれは恐らく、2～3回で我々にお任せになっていたら駄目でしたでしょうね。やはり2年間、一応面倒みてくれました。市の人が毎月行事を設定してくれて、段取りをしてやってくれた。それが終わりになろうとして、非常に仲のよい状態で、このまま別れたくないという状況までなったから、そのあと続いているのですね。

(川崎おやじ連・Bさん・50代)

地域でのつながりを持つ機会がなかなかない場合、行政がきっかけ作りの場を提供することが重要となる。行政が主導して、組織作りを推進する必要はないと思うが、自発的に活動が立ち上がっていくのをサポートする仕組みがあるということは大事であろう。“おしきせ”的では、自発的な活動の運営は軌道に乗らない。できる範囲で無理のない運営をすることが、活動の継続性につながり、また活動に広がりをもたせることにもなるのだろう。

また、社会参加活動組織の側も自分たちだけで閉鎖的にならずに、流山ユー・アイネットや川崎おやじ連のように、地域の祭りに参加したりして、外部との接触を積極的に持つことによって、地域全体としての活性化につなげていくことが求められる。川崎おやじ連の場合、神奈川県下で「おやじサミット連絡懇談会」(略称「おや懇」)という情報交換会を企画しており、文部科学省も「全国おやじサミット」など「おやじの会」の活動支援に積極的だということだ。ただ、川崎おやじ連のD氏によると、活動を継続していくには「学校介さず子らを結ぶ」ということが重要で、つまり学校による結びつきの場合、子どもが学校を卒業してしまうと活動が続かなくなることが多いそうだ。子どもを通じてというのがきっかけではあっても、結局は“おやじ”同士のつながりが主にならなければ続かないということだろう。

6 まとめ

本稿では、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高める」ソーシャル・キャピタルの議論をベースに、社会参加活動への参加と参加者のパーソナル・ネットワークの関係を中心として、NPO法人NALCを対象とした調査データと、NPO法人流山ユー・アイネットと川崎おやじ連を対象としたグループインタビューの記録を用いて、様々な側面から検討を加えた。

個人が社会参加活動を始める動機として主なものに、もっと多くの人と知り合いたいということや、人の役に立ちたいということがある。個人の社会関係をより充実させ、そこでの相互の関係性から達成感や満足を得るということである。

実際にNALCを対象とした調査データを見てみると、参加者の属性によって入会の経緯に違いが見られ、それは参加している活動の種類とも関係していた。特に男性の場合、NALCで活動する前に、参加するNPOを探していた人は、NALCで主に高齢者の介護などに従事している人が相対的に多かった。つまり、もともと高齢者の介護などに関心があり、目的のある程度明確な男性がそこで活動していたということになる。この結果については、流山ユー・アイネットでのインタビュー結果によって支持されよう。

また、個人の参加動機のみならず、一緒に活動する仲間として、活動に対する価値観をある程

度共有しているという、文化的要素も社会活動の継続に重要な役割を果たしていることが分かった。特に、高齢者の介護などの活動に従事している人の場合、人あるいは社会の役に立つことがしたいという意識が高いという結果が得られた。

社会活動に参加することは、参加者個人の満足度や達成感などだけではなく、個人のパーソナル・ネットワークの活性化にも寄与すると考えられる。

例えば、もともと持っていたネットワークについて、配偶者がとともに活動に参加することと、配偶者との良好な関係とのつながりも確認できた。一緒に活動することで、共有する時間が増え、相手との関係を大事にする傾向が見られた。

NALC を対象としたデータから、NALC を紹介した人と参加者の関係について、親族以外の関係では、職場・仕事関係の人の場合、共通の知り合いが多いが接触頻度はさほど多くない密度の低い関係で、紹介者の立場としては役員が多い。一方、近隣・地域関係の人の場合はその逆で、共通の知り合いはあまり多くなく接触頻度はそこそこ多い密度の高い関係で、紹介者の立場としては一般の会員が多い。

この紹介者の関係との密度と、参加している活動への評価の関係から、比較的弱い関係で入会した人のほうが、参加している活動をより評価する傾向が見られた。そして、困ったときに相談する人の中に占める NALC のメンバーの割合との関係から、メンバーの割合が高いほうが参加している活動をより評価する傾向が見られた。今後の活動意向についても、メンバーの割合が高いほうが NALC で長く続けようと考え、家庭生活や地域活動に NALC での経験を活かしたいと考えている傾向が見られた。入会時にはメンバーと強い関係がなくても、活動を通じて関わりが強まることで、NALC へのコミットメントが強まり、NALC で得た知識や技術を家庭生活に生かし、また町内会や自治会などの地域活動への参加意欲も高まるという結果となった。

社会関係の広がりのひとつとして自治会活動があげられるが、古くからその地域で暮らしてきたのと異なり、新興の住宅地では、近所付き合いなどなかなか交流が進まず、地域の自治会についても進んで参加する人は少ないという現状がある。川崎おやじ連でのインタビューでも、自治会の仕事を引き受けると、なかなか次に受けてくれる人が現れずに困ってしまったという話が複数聞かれた。地域にどういう人がいるのかを知っている人がほとんどいないためだということだ。そこで、おやじ連のネットワークを使って引き受けてもらったりしている。川崎おやじ連が自治会という地縁組織ともつながってきているということだ。一方、流山ユー・アイネットの場合は、もともと自治会をベースにしていることもあり、社会活動への入り口的な役割として自治会を肯定的にとらえている。

川崎おやじ連も流山ユー・アイネットも、地域の祭りなどのイベントには積極的に参加している。これらのような伝統的な地縁組織とは異なる組織が地域社会と橋渡しをするような形にかかわることによって、地域社会の活性化にもつながると考えられる。これには、場や機会の提供の面で、行政が重要な役割を果たすだろう。流山ユー・アイネットも流山市と良好な関係を持ち、川崎おやじ連も発足のきっかけは行政によって提供されたものであったし、様々なイベントにおいても頼りにされているということだ。

最近、犯罪や生活環境の悪化などを問題視する声が高まり、防犯やゴミ問題など地域での様々な問題の解決を主要なテーマとしたテレビ番組も作られるなど、地域・社会における社会生活を住民が主体となって見直そうという気運も高まっていると言える。しかし、このような動きはまだまだ限定的であり、広がりを持つにはかなりの時間を有すると思われる。近隣や地域社会と接点のなかった人が何かやろうと思っても、どうしていいかわからない。硬直化している自治会など地縁組織には関心をもてない。そのようなときに、地縁組織とは少し距離のある、メンバー同

士が緩やかな関係をもった組織の存在が求められることになる。そしてそれは、地域社会で孤立しているのではなく、地縁組織とも関わりをもち、行政のサポートも受けながら、地域全体として活性化していくという形が、ひとつの理想として浮かび上がってくる。現実はそんなに単純なものでは決していないが、無理せず楽しくやっていければ、その根は着実に広がっていくだろう。

<注>

- 1) 「1. 地域や社会に貢献したい」(57.2%)、「2. 自分の知識や経験を活かしたい」(27.9%)、「3. 社会への見聞を広げたい」(14.4%)、「4. 友人や仲間を増やしたい」(30.7%)、「5. 生活にはりあいを持たせたい」(15.8%)、「6. 身近な人に誘われた」(21.9%)、「7. 会社の勧めや命令」(3.7%)、「8. 社会人として当然と思った」(22.8%)、「9. 何となく」(0.5%)、「10. その他」(5.1%)。
- 2) (1) 自分の知識・技術、能力、経験を活かした(17.7%)、(2) 自分が人間として成長できた(14.9%)、(3) 多くの人と知り合いになれた(32.6%)、(4) 困っている人の役に立てた(7.4%)、(5) 社会のために役に立てた(13.0%)、(6) 社会的な評価を得られた(7.0%)、(7) 活動をしていて楽しい(22.3%)。
- 3) 調査は郵送版とWEB版で行われており、それぞれで「1. 達成感・充実感を味わえた」(郵送版:41.0%、WEB版:30.9%)、「2. 知識やノウハウが豊かになった」(45.4%、39.9%)、「3. 地域・社会に対する貢献ができた」(53.7%、61.2%)、「4. 価値観を共有できる仲間ができた」(49.5%、35.4%)、「5. 地域の様々な人とのつながりができた」(67.6%、67.4%)、「6. 地域への愛着が深まった」(25.1%、18.0%)、「7. 地域・社会の仕組みや問題がわかった」(32.1%、33.7%)、「8. 活動の成果を実感できた」(28.9%、21.9%)、「9. その他」(3.5%、1.7%)。
- 4) NALC に対する質問紙調査と、流山ユー・アイネットと川崎おやじ連のグループインタビューについての具体的な方法については、本報告書の所収の池田論文を参照。また、調査対象の詳細については、本報告書第1部と第3部を参照。
- 5) 「ソーシャル・キャピタル」についての研究の歴史の変遷や議論の詳細については、内閣府国民生活局(2003)を参照。

<参考文献>

- 経済企画庁 編 2001 『平成12年版 国民生活白書 ―ボランティアが深める好縁―』 大蔵省印刷局。
- 内閣府国民生活局 2003 『ソーシャル・キャピタル―豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』 国立印刷局。
- 日本労働研究機構 2003 『転職のプロセスと結果』(資料シリーズ No.137)。
- シニアプラン開発機構 2003 『少子高齢社会におけるサラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究』。
- 山内直人 編 2002 『日本のNPO労働市場』 日本NPO学会 NPO労働市場研究会。

子育て期女性の社会参加

—地域三世代子育て活動を通じての育ち合い—

河野 望

1 研究の背景

(1) 子育て期女性の社会参加状況

シニアプラン開発機構が行った「第3回サラリーマンの生きがいに関する調査」(2001年)および「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」(2003年)の結果より、サラリーマンの配偶者¹の社会活動参加状況をみると²、主婦の参加の割合は比較的高く、専業主婦と派遣・嘱託・パートなど非正規の従業員の主婦³の割合に差がみられないことが明らかにされている。年齢別にみると、専業主婦、パートなどの主婦ともに高年齢で参加の割合が高くなっている。24-44歳の専業主婦が社会活動に参加している割合は、最も低くなっている。社会活動参加分野をみると、専業主婦もパートなどの主婦も24-44歳では、「児童・青少年の世話役」が上位に入っている。他の年齢層では、上位には入っていない。次に、所属している団体をみると、専業主婦、パートなどの主婦ともに、他の年齢層では「趣味やスポーツ」が一位にきているのに対して、24-44歳の年齢層では、「PTAなど」が一位にきている。また、女性配偶者の生きがいについてみると⁴、専業主婦、パートなどの主婦ともに、家庭に生きがいを見出しながらも地域での活動に参加することで自己実現を図っている女性配偶者の姿が浮かび上がってきた。これらのことより、未成年の子どもを持つ、つまり子育て中の専業主婦およびパートなどの女性にとって、子どもを通じた親同士の活動に参加する割合が高く、またこれらの活動が自己実現の場にもなっていることが示唆される。

子どもが乳幼児期に、親の横のつながりを求めて、子育てサークルなどを自主的に運営する子育て期の女性たちが増え、1980年代後半から日本全国に自然発生的に広がってきた。子どもや親同士の仲間の交流だけではなく、子育てしやすいまちづくりを目指して活動を行う子育てサークルもある。さらに、ボランティアからNPO法人(特定非営利活動法人)の法人格を取得し、市民レベルでの子育て支援をさらに一歩進めようとする動きが活発化している(原田, 2002)。

(2) 子育て支援の現状

子育て中の母親の多くは、子育ての負担に苦しみ、社会から取り残される不安に苛立ち、焦りを覚えており、就労している母親よりも専業主婦の母親に多くみられることが様々な調査から明らかにされている(例えば、大日向, 1999; 垣内・櫻谷, 2002)。このような、母親一人で担う子育てからの脱却を目指し、多くの人の子育てに携わり、社会全体で子育てを支援しようとする風潮が芽生えてきた。それまでは家庭内の、とりわけ母親の問題として処理されてきた子育てが、社会問題の一つとして位置づけられるようになった(大日向, 1999)。

保育所・児童館・子育て支援センターなど行政の建物の中で子育て支援が行われたり、0,1,2,3児の子どもとその親のための市立の子育て支援施設(柏木・森下, 1997)ができたりと子育て支

1 ここでは女性に限る。

2 『少子高齢社会におけるサラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究』の第3部・第3章「地域・社会との関係」(藤本)を参照。

3 以下、パートなどの主婦とする。

4 『第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査報告書』の第II部・第3章「女性の生きがいと生活一友人と楽しむ未婚女性、頑張り過ぎの既婚女性」(佐藤)を参照。

援の取り組みが行われている。行政の他にも、若老男女、企業などが子育て支援に関わってきている。

ところで、当事者である子育て中の母親も、子育て支援活動に支援される側として受身的に参加するだけでなく、同じ状況にいる母親同士、子育てサークルなどのネットワークを自主的に形成し、子育てに関する知識や情報を交換したり、子育て仲間をつくっている。仲間を得ることで、子どもに対する見方や子育て観が深まり、子どもへの接し方にもゆとりがみられるようになり（垣内・櫻谷，2002）、同年齢の子どもをかかえたサークルは、母親たちの心の支えとなっている。しかし、子育て当事者だけでは、視野の広がりや危険性を伴っている（大日向，1999）。子育てを終了した、退職したシニアの男女がこのような子育て中の母親たちの子育てサークルに参加し、地域で若い母親たちの子育て支援に尽力している例もみられるようになった。

さらに、ボランティアから NPO として子育て支援活動を行なう動きも広がっている。『NALC 丹波』のように、シニア中心に子育て支援を行っている団体⁵や、『びーのびーの』のように子育て中の親を中心に立ち上げた団体もある。これらの団体は、地域三世代子育てを目指して、活動を行っている。

このように、柏木（2001）も指摘している通り、従来の「子育て」の概念が変化してきており、子育て支援の在り方を考え直す時期にきている。

(3) 子育て支援 NPO「びーのびーの」の取り組み

ここでは、子育て期の女性たちが立ち上げた子育て支援 NPO およこの広場『びーのびーの』の取り組みについて紹介する⁶。

『びーのびーの』は、2000 年に、乳幼児とその親のための子育て支援を行う NPO 法人として設立された。拠点である横浜市港北区は、子どもの数が増えているにもかかわらず、児童館を始めとする乳幼児と親のための育児施設がなかったため、その地域に住む子育て中の女性たちを中心に、地域での育ち合いの子育てを目指して、立ち上げた。活動は、商店街内の空き店舗を利用した常設のひろば型子育て支援施設およびこの広場『びーのびーの』の運営を中心に、幼稚園・保育園ガイドなどの情報誌の発行、育児関連のイベント（講演会、講習会など）、地域・行政への情報発信を行っている。

設立当初 20 名だったスタッフは、現在約 30 名になった。乳幼児や小学生の子どもを持つ、子育て当事者である女性たちで構成されている。在宅での子育てに悩み、仲間を求め、志を同じくした子育て期女性たちである。広場担当、絵本担当、広報担当に分かれて活動を行なっている。広場担当は、乳幼児の子どもがいても一緒に当番制で広場に入って、その広場に集まる子どもたちのお世話をする。代表、副代表と事務局の 2 名、広場責任者 2 名は、固定給もしくは自給で支払われているが、後のスタッフは、経費と交通費のみのボランティアスタッフである。スタッフそれぞれが、できることを、できる範囲内で関わっている。

スタッフの他に、この『びーのびーの』には、子どもの有無、年齢に関係なく老若男女のサポーターが存在している。まず、NPO 法人として立ち上げる際には、現在監事であり、『ニッポン・アクティブライフ・クラブ (NALC)』の地区代表をしている人のサポートを受けた。そして、現在、子育てを終えた、定年退職世代のシニアサポーター (NALC のメンバーも活動している)、様々な

⁵ 『ナルク丹波』の活動およびグループインタビュー結果については、本報告書齊藤論文（第 2 部・第 1 章）に詳しい。

⁶ 詳しくは、奥山・大豆生田（2003）を参照されたい。

世代（中学生・高校生・大学生）の学生サポーター、近所の商店街の人たちが活動に関わっており、『びーのびーの』は、地域の多くの人たちが自然な形で関わり合う場、つまり地域三世代子育ての場となっている。

また、『びーのびーの』の会員やスタッフの夫を対象にして行った講座をきっかけに、男性も地域で共に子育てをと、講座の仲間が集まり劇団『パパびーの』が2002年12月に誕生した。

2 研究の目的・枠組み

(1) 研究の目的

本研究では、新しい子育て支援の在り方として、『びーのびーの』の活動に着目し、スタッフとして活動をしている子育て中の女性⁷を対象にしたグループインタビューから、参加の経緯、活動を可能とする要因、NPOとしての社会活動の可能性等を明らかにしながら、子育て期女性にとっての社会参加の持つ意味について、多種多様な人を巻き込んだ地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いという視点から検討を行うことを目的とする。

(2) 研究の枠組み

子育て支援活動を行っている子育て期の女性を対象に、グループインタビューを行った。半構造化されたインタビュー内容（④の a. b. c.）に、対象者が自由に答える形を取った。このグループインタビューから得られたことを、4つのカテゴリー（⑤の a. b. c. d.）に分け分析を行った。

① 対象者

子育て支援 NPO およこの広場『びーのびーの』の代表者とスタッフの7名であった。

対象者は全員女性であり、年齢は、平均39.1歳（35-45歳）であった。家族形態は、7名とも夫婦と未婚の子どもで暮らしている核家族であった。子どもの数は、2人が5名、3人が2名であり、子どもの年齢は、平均6.9歳（0歳2か月-15歳）であった。また、この地域の居住期間は、5年未満が2名、5年以上10年未満が3名、10年以上20年未満が2名だった。

② 日時

2003年11月に実施した。

③ 方法

質問紙調査（フェイスシート）とグループインタビューを行った。グループインタビューの内容の分析は、内容記述法と記述分析法を組み合わせ、得られたメンバーのなまの表現と、その意味する内容を把握できるようにした（安梅，2001を参考にした）。

④ インタビュー内容

- a. 設立・活動の動機、現在の役割について
- b. 活動に関してからの自分自身の変化、家族との関わりの変化、子育てに対する価値観の変化、およびこれまでのキャリア、仕事、他の社会参加活動との兼ね合いについて
- c. シニアサポーター・学生サポーター・パパびーのの存在について

⑤ 分析のカテゴリー

- a. 子育て期女性の社会参加
- b. 家族の理解と協力
- c. 子育て当事者を支える多世代サポーター

⁷ 主に家庭で子育て中心の生活を送っている、もしくは送っていた女性。

d. 地域三世代子育てを目指して—NPO としての社会活動の可能性—

3 結果・考察～グループインタビューからみえてきたこと～

(1) 子育て期女性の社会参加

① 活動の経緯

a. 代表・副代表の設立の経緯

Aさん（代表）とCさん（副代表）は、『びーのびーの』を設立する前に、地域に何もつながりがないことが、子育てのプレッシャーになっていくという経験から、区の広報誌（お母さん情報誌）の編集員に、子育て中の母親として入り、そこで出会い4年程一緒に活動をしていた。そして、地域で育ち合いの子育てをしたいと、『びーのびーの』を設立した。

「仕事を辞め子どもを産んで育てる段階になって、この地域でどのように育てていけばいいのだろうと、地域のことをあまりにも知らないことに気付いたのです。つまり子どもを産むまで10年間この地域に住みながらも、この地域社会からは断絶をしている状態に気付いたのです。初めての子育てで、いろいろ分からないことが多い中で、子育てをするお母さんのための地域情報が少なすぎるころから、行政に働きかけながら、Cさんと私で行政の発行する子育て支援通信を作っていました。だから保健所と一緒に行政の発行するものですが、お母さんたちの視点でできるというようなことで、4年やっていました。その間に、生涯学習支援をやっている母親学級運営というのをやったのです。これがこの団体を作るきっかけです。やっと子どもを三人産んで育ててみて理解できたのですが、子どもというのはそれぞれ個性があって、自分の育て方だけでは気付かないことがあるし、ちょっと距離感を持ち振り返ってみると「しょうがないな」と思えることもあるし、初めての子育てでその所を理解することは到底無理でした。今のお母さん達の中で、初めてのお子さんを持たれた方の焦る気持ちもよく分かるし、私もそういう方を支えることによって、ご自身がどう変化するかという点も、とてもこの団体の影響が大きいのではないかと感じています。」

(Aさん・40代・代表)

b. スタッフの活動の経緯

Aさん・Cさんとともに、『びーのびーの』の中核をなすスタッフ5名の活動の経緯（時期、きっかけ、活動前の状況等）については、表1に示す。活動のきっかけは、スタッフである知り合い（Dさん・40代、Eさん・30代、Gさん・40代）や代表・副代表（Fさん・30代）に誘われた人が4名、『びーのびーの』の会員からスタッフになった人が1名（Bさん・30代）であった。

表1 スタッフ5名の活動の経緯

	参加時期	参加のきっかけ	状況	役割
B	立ち上げの約3年後(10か月前)	会員からスタッフへ	海外転勤から戻ってきて、海外の地域で関わっていた子育てグループのような団体がないか探していた時に、区役所でこの団体を知り、初めは会員として関わっていた。スタッフになったのと同時に下の子を妊娠し、体調のことも考え、現在はほとんど活動を行っていない。もうじき復帰しようと考えている。	広場担当
D	立ち上げの1か月前	スタッフである友だちの紹介	新聞記事で代表のことは知っていて、そこに友達から代表の話を聞き、「私も手伝おうかなと思っていたから」と、友達がつないでくれ、「子どもが二人とも小学生で、何かお役に立てることがあれば」と関わることができた。当時はパートに出ているのでその空き時間でやっていたが、現在はパートはやっていない。	広場責任者
E	立ち上げ時	スタッフである子育てサークルの仲間の誘い	子育てサークルなどの活動を割と積極的に行っている方だったが、お母さんサークルになじめないでいたところに、「今度地域で代表と副代表がNPOで立ち上げるのだけれど参加しないか」と声をかけてもらって、関わるようになった。	絵本担当
F	立ち上げ後まもなく	副代表に誘われて	下の子を妊娠している時に代表と副代表とともに子育て情報誌の編集員をはじめ、副代表が『びーのびーの』のチラシを見せてくれ、無料参加の日に参加したが、遠いのと高いので参加は考えていなかったが、今度ホームページを立ち上げるということで協力スタッフという位置づけで部分的に関わっている。子どもたちが小学校へ入ったら働こうと思っている。	協力スタッフ
G	立ち上げの2年後(1年半前)	スタッフである元の職場の同期の紹介	子どもを持って初めて地域に目がいき、子育てサークルの立ち上げ、幼稚園の子ども会、PTA活動などを経て、下の子が小学1年生になる頃に、もうちょっと何か違う面でお役に立てることが何かないかなということに関わるようになった。	事務局スタッフ

②自己実現の場としての活動

a. これまでの活動を生かして

表1に示すとおり、Aさん(代表)・Cさん(副代表)を含め、スタッフのほとんどの人が、『びーのびーの』の活動を行う前に、子育てをしながら地域につながりがなく中での子育ての大変さを痛感し、子育て仲間や地域での子育てのつながりを求め、子育てサークル、子育て情報誌の編集、PTA活動などを積極的に行っていた。そして、さらなる社会的な活動を求めて、また自分にできることを生かしたいと思い、『びーのびーの』の活動に参加するようになった人が多い。そして、ここでの活動が、これまでの活動や能力などを生かすことができる自己実現の場となっている。

『びーのびーの』には、下の子が1年生に上がるころから、1年半ほどスタッフになってたちました。事務局のスタッフを探しているという話を(勤めていた)職場の同期(『びーのびーの』のスタッフ)から聞き、紹介されたのがきっかけです。主人と私は地方出身で、1人目の子どもを持って初めて地域に目が向いたという典型的な例です。本当に友達もいないし、子育てに行き詰まっていた。それで何とか育児教室を通じて友達を作ることができまして、育児サークルの立ち上げもその仲間と一緒にやったのです。地域に知り合いが一人でも多くいたほうが良いということをすごく感じ、幼稚園の子ども会、PTA活動などにも参加しました。そうやってボランティアでもいいから何かやりがいのある、自分の足場を固めることに一生懸命でしたが、もうちょっと何か違う面でお役に立てるようなことが、何かないかなということ、『びーのびーの』に関わるようになったのです。『びーのびーの』が働く場としてよかったのは、子育てをしているお母さんたちなので、まだ小学校1年生に入ったばかりですので、時間的に融通が利いたり、そういう配慮をしていただけたことは、とてもありがたかったです。だんだんと働いている時間が広がっているのですけれども、本当に参加してよかったなと思っています。」(Gさん・40代)

b. 新しい働き方、関わり方を求めて

スタッフの中には、この活動に出会うまで、職場復帰をしたいと考えていながらも昔のような働き方ができるかについては疑問を持っていたり、子育てサークルなどの活動を積極的に行いながらもなじめていなかったり、子育てしながらも社会との接点を持って働ける、活動できる場を探していた人もいます。『びーのびーの』では、子育てをしながら、自分のもつ能力、キャリア、特技、趣味などをいかして社会的な活動を行なうことができ、スタッフにとって自分自身の生きがいとして感じる事ができる自己実現の場になっている。また、NPO活動として、「地域での子育て」を目指し社会的にもものも言えること、活動がさらに発展しうる可能性をもっていることに魅力を感じているように思われる。

「私自身は、地元というか横浜生まれの横浜育ちです。夫の実家も近いので、いざというときは恵まれていますし、出産の時も両方の実家を行ったり来たりしていました。でも、隣の区に引っ越してくるというのは未知の世界でした。第2子が生まれたと同時に引っ越してきたのですが、第1子のときに隣の区でサークル活動をやっていた、そのネットワークから外れてしまうのが不安でした。隣の区でさえも、第1子のときの関係性から飛び出すというのは、すごく不安なことでもありました。自分自身が三人きょうだいだったものですから、いずれ自分も三人子どもが欲しいとずっと思っていました。でも、三人子どもは欲しいのですけれど、いずれは社会へ復帰しようと思っていたので、どうしようかなと試行錯誤をしていました。ただ、サークル活動をしている時の親たちのつながりの中でも、いろいろとすごく支えにはなっ

いたのですが、その場で終わってしまうというか、皆さんの周りの親たちの状況などを見てみると、自分が思っているようにいずれは社会復帰したいというかたはだれもいなかったの、すごくギャップは感じていたのです。ただ、それでは、昔のような働き方ができるのかと思うと、・・・(中略)・・・子どもを3人抱えて、同じような働き方ができるかといったら、とてもできないだろうと思いました。社会復帰はしたいけれども、前のような働き方は絶対できないだろうと思っていた中で、地域で興すというようなことができてよかったなと思っています。」 (Cさん・30代・副代表)

「私自身は、お母さんサークルにあまりなじめなかったのです。足は運んでいたり、会報誌に記事を書いたり、割と積極的に活動をしているほうではありましたが、やはり何かお母さんだけの集まりの中で、サロンのものが進んでいくということが、とてもフラストレーションでした。例えば必須というのが、お茶会だったり、一緒にご飯を食べたりというもので、もっと突っ込んだ話をしたいのだけれど、とりあえずそこは置いておいてというようなところが、私自身は、なじめなかったのです。」「NPOとサークルというのは全然違うものなのだなということを改めて最近思います。私自身はボランティアとしてのかかわりなのですが、すごく発展性もあり、社会的にものが言えますし、いわゆる法人であるということも魅力を感じて今に至っているという状況です。」 (Eさん・30代)

③子育て当事者中心の活動のメリット

a. 同じ立場である親同士の理解と配慮

スタッフは、乳児から中学生までの子どもを持つ、子育て当事者の母親たちで構成されている。会員とスタッフ、そしてスタッフ同士も、同じ立場である子育て中の親なので、子育ての悩みを相談し合ったり、自分の体験からアドバイスをしたりと、子育てを通して共に育ち合っている。また、スタッフが無理しない程度にシフトを組みながら家庭・子育てと両立しながら活動できるような理解と配慮の中で、お互いができることをできる範囲でしていることは、子育て当事者同士の活動であることのメリットだと考えることができる。

「それと(スタッフになったのと)同時に妊娠したので、あまり活動はしていないのですけれども、一応広場担当です。広場担当なのですが、ちょうど自分の子供の自我が発達するところで、自分の子供を見ることで精一杯で、ほかの子を見ている余裕が全然なく、プラスつわりがあって、2月、3月、4月とキークー一言っていました。何かと言うと、泣いていたのですが、その時に、『びーの』のお姉さまがたが、『こうだったわよ』と、いろいろアドバイスをくださって、それが私にとってはとてもよかったと思います。」

(Bさん・30代)

b. 子どもと共に育つ感覚

子育て中の親の活動であるので、自分たちの子どもも連れて活動に参加するスタッフが多い。活動しながら子どもたちの行動を見ることができると親たちも安心して活動ができるし、子どもも親の活動を自然に理解していくことができる。子どもたちと「一緒に育っているような感覚」が生まれるようである。

「私自身も、自分の家族を犠牲にしてまで活動をやろうということはあまりありません。子どもたちもそれぞれ楽しんで関わってもらいたいということがありました。『びーのびーの』の広告やチラシを町のどこかで見たときに、胸を張らなくてもいいけれど、自分の母親がかかわっているものが何であって、どういうものかということ、多分今は把握していると思います。「『びーのびーの』のチラシが張ってあ

った」というように学校の友達と話題にできたり、今度秋祭りで小学生企画の中で、子供だけのフリーマーケットをやりましたが、それに関しても、小学校へ行って営業活動をしました。そんなふうと一緒に子どももやってくれるということは、うれしいかなと思います。」（Aさん）

「パパの仕事はよく分からないと思うのですけれども、私が何をしているのかということはきちんと彼らも分かっている、一緒に育っていつてくれているなというような感覚はあります。」（Cさん）

④活動に力を注いでいく中での葛藤

ここでの活動は、「どんどん自分の能力を生かしてくれ」、「非常に魅力的」なものであるからこそ、「のめりこむ」ようになるが、ボランティアスタッフとしてどこまで活動に関るか、職員という形がいいのかも含めて、自分自身の生活とのバランスを考えながら葛藤しているスタッフもいた。

「私はボランティアスタッフですが、このごろは、代表や副代表と同席することが多くて、『びーの』のことについていろいろと言われたり、「びーの」のことを考える場に行くときに、私自身が『びーの』の中のこととは自分が関わっている一部しか分からないということに、ジレンマも感じます。仕事で行っている人は、多分24時間仕事のことを考えて、右から攻められても左から攻められても上から攻められても答えられるようにしているのが仕事ではないかと私は思うのですが、私はボランティアスタッフで、自分の中の空いた時間を『びーの』に費やしているという部分で、そのところのギャップを、右からも上からも分かりません、この角度だけしか分かりませんというところを、補っていくべきなのかどうなのか、ボランティアスタッフとしてどのようにやっていくのか私自身がその辺の関わり方を考えていかなければいけないなと思っています。職員という形もあると思うのです。職員になれば、そのように全活動的に一日中仕事としてとらえることもできると思うのですが、私自身のライフサイクルと、果たして今合っているのかなども考えていきたいと思っています。『びーの』に関わると、どの人もそうだと思うのですが、非常に魅力的で、どんどん自分の能力を生かしてくれるので、のめり込むのです。けれども、振り返ってみると、自分の一日の使い方が粗雑になっていたり、何をやっていたのだろうかともあるのです。そのバランスを取るためにはどういう働き方がいいのかということも考えていきたいと思っています。」（Eさん）

(2) 家族の理解と協力

① 夫の理解・協力

妻（スタッフ）が『びーのびーの』でどのようなことをしているかを把握していたり、活動することに理解を示している夫（男性）が多いようである。子どもにしわ寄せがいくのはよくない、つまり家庭生活との両立が条件となっている家庭もあるが、女性が活動に参加するようになって、時間があるときには子どもの勉強を見たり、子どもを連れて外出したり、子どもと積極的に関わるようになり、さらには、活動にも興味を示すようになった男性もいる。

「『子どもにしわ寄せがいくのは一番いけない。それだけは守ってくれ』とされているのですが、そうではない部分ではいろいろとサポートしてくれて、逆に自分の時間があるときには、子どもに対してすごく時間を割いてくれるようになりました。勉強を見たり、どこかに連れ出してくれたり、そういう面でのサポートをしてくれるようになりました。そうですね。参加するようになってからですね。子どもが小さいうちは、関わるというよりは、ただ面倒を見るという感じだったのですが、積極的にかかわって、真剣に『こうしてあげよう』というふうに主人が変わってきたのではないかなと思います。『パパびーの』の活動

にも関心を示しているのですが、時間が取れないということで…。ただ自分の子どもが、『びーの』の世代でないものですから、そこがちょっとネックになっています。」（Gさん）

「何かそうやって打ち込んでいるということは、「いいな」と思ってくれていると思います。それが一つの仕事としてきちんと成立する、本当の意味での職場に復帰するというだけではなくても、すごく融通が利いたり、子どもも交えての活動になっているという、プラス面がきつと多いと思ってくれています。仕事として成り立たなくても、その辺は、『もっとちゃんとしたところで働けよ』というようなことは、全然言いません。」（Cさん）

② 祖父母の理解・協力

7名のスタッフとも、核家族で祖父母⁸とは別に暮らしているが、『びーのびーの』の活動を通して、家を離れることになる時には、夫の協力だけではどうにもできず、祖父母に助けを求めることがあるようである。自分の活動を説明しながら、徐々に理解をしてもらっているスタッフもいる。

「私の実家は遠く、この間ちょっと熊本に出かけなくてはいけなくなりまして、一週間くらい助けに来てと言ったのですが、年に1回くらいは来てくれるという環境です。北国なので、夏はこちらが暑いものですから、上の子ども二人を夏1か月くらいおじいちゃん、おばあちゃんにお願いしてしまって、向こうで生活をしているので、子どもはとてもおじいちゃん、おばあちゃんが大好きです。そのような交流をしています。夫の実家はそんなに遠くないです。隣の隣の区なのですが、車で40～50分くらいのところですよ。今週末はどうとう向こうの家に子ども三人をお願いすることにしました。義母にも、こういう活動をしているということを話すと、向こうは完璧な専業主婦なので、『随分忙しいのね』という感じなのですが、徐々にお願いしながら、活動しているということを伝えていくという状況です。」（Aさん）

(3) 子育て当事者を支える多世代サポーター

① シニアサポーター

a. NPOとしての活動のきっかけをくれたシニア男性

『びーのびーの』を立ち上げる際、NPO法人として社会的に責任を持った形で活動をすることをアドバイスしてくれた同じ地域で活動しているNPO団体の地区代表のシニアの存在は子育て当事者中心のスタッフにとって大変大きかったようだ。「いろいろな年代の方が関わることで、多様な見方もあったり、いろいろな活動の幅も広がるということを感じさせられた第一歩」であった。

b. 自己制御しながら関わってくれる子育てを終えたシニア女性

子育てを終えたシニアの女性は、自分自身の子育て体験から「つい『私の子育ては』とか、『こんなことをしちゃだめよ』とかいうことを言いがち」なのに、「自己制御」しながら関わってくれている。子育て当事者が主体的に活動できるように配慮しながら、子育て当事者とは違う見方で、温かく見守ってくれている。

⁸ スタッフにとっては、実父母もしくは義父母である。子どもにとっては祖父母。ここでは、祖父母と明記する。

「シニアスタッフの方は、やはり、こちらが勉強になることがよくあって、子どもに対する目線が当事者とは違って一步離れているのだけれど、すごく暖かい目で見てください。当事者は子どもだけを見ていますが、それをシニアの方は割とふんわり包んでくださるという感じです。」 (Bさん)

「シニアの女性のかたは非常に自分自身セーブして、ここにかかわることで、自己制御しながら関わってくださっているなと思います。つい『私の子育ては』とか、『こんなことをしちゃだめよ』とかいうことを言いがちです。しかし、やはりうちの母の世代ですと、お嫁さんにとっても遠慮するといいますか、何かしら一つここにかかわってくださることで、若い世代におもしろいを与えてはいけないなということ、考えつつ関わってくださっているなと、シニアの女性のかたと会うときは感じます。シニアのかたには、子育て経験者ではない方も関わってくださっていて、本当にありがたいことだと思います。」 (Eさん)

「今関わっておられるサポーターさんが、「どうしてそんなに外に出て活動できるの?」と言われたのです。ご自分のときは、洗濯も手で洗っていたし、子どもも抱えて、とにかく外に出られなかった。それから、夫がまず「出歩くな」ということだったが、やっと今になって、こういうボランティア活動ができるようになったとおっしゃっていました。そういうことを聞きますと、それほど遠くない前に、女性の生き方がだいぶ違っていただのだなと思います。自分の親を見ていても、そう思います。私たちは、恵まれている分というのも、確かにありますが、それでは、恵まれて家電がそろったから幸せかといいますと、そうでもないと思います。そういう今の60歳近くくらいの人たちと、自分の子育ての話と一緒にしてみると面白いなと思いました。でも、聞いていますと、退職した旦那さんに対して、すごく不満があったり、いろいろとそういうことをおっしゃるのです。「でも今は、とっても自由」とか。大体20年くらいしか変わらないのだけれども、子育ての状況もとらえ方も夫婦関係もだいぶ違います。そういう話をもうちょっとじっくりしたら面白いだろうなと、この間、あるサポーターの人と話をしていた思い出です。私たちの活動にも、うらやましいと思う部分と、支えてあげたいという部分と、きっといろいろとあるのだろうなと思います。」 (Fさん・30代)

c. 無意識に序列を入れてしまうシニア男性と対照的なシニア女性

無意識の内に、地域組織・ボランティア活動に会社組織の序列を持ち込んでしまうシニア男性とは対照的に、シニア女性は、年齢などに関係なく、ボランティアの仲間ということで対等に本音と本音をぶつけ合い、活動を行なっているようである。

「この間びっくりしたことは、男性の方は、会社組織みたいなものを、ボランティア組織に入ってもちょっと引きずっているかなということがあったりします。ちょっとした企画物があったときに、どここの何とかさんは、何とかの支店長までしたかたですからというように、ちょっとした発言の優先順位ができたりするのです。その点、女性の方は、年齢などもあまり関係がなく、一緒にボランティアをしている仲間という感じで、女性ボランティアさん同士の会話を聞いていても、「けんかをしているんじゃないの」というくらいの本音と本音のぶつけ合いがあるのですけれども、お二人ともあとはクロツとしていて。けんかではなく、意見交換なのです。あれは、面白いなと思いました。」 (Eさん)

d.子育て活動で「罪滅ぼし」をするシニア男性

『びーのびーの』によって元気ももらっているというシニア男性は、自分の子どもの時には仕事に忙しくてほとんど子育てに関わらず、妻に「任せっきりで、何もしてこなかった」分、ここでの子育て支援活動を通して、「罪滅ぼし」をしているという。シニアにとっても育つ場となっていることが示唆される。

「サポーターさんで、一人シニアの男性のかたで、最初に話をしたときに、すごく印象に残っているのですが、そのかたは、最初は老人介護の施設にボランティアで行っていらしたのです。そうしたら、とても気持ちが暗くなってしまったそうです。自分とそれほど年が違わない人たちのそういう姿を見て、つらくてたまらなくなってしまった。それで、『『びーの』はいいよ。元気をもらえるからね』とおっしゃられたのです。確かに、子どもの笑顔を見ていたりすると、そうなのかなと思いました。なかなかそういう世代の人とお話をする機会があまりないので、重く身にしみた一言でした。親以外のそういう世代の人と、子育てについて話し合えたりというのは、とてもありがたい環境で、『私はこういうふうに育てられたけれども、こういう考えもあるのだな』など、いろいろと教えていただいています。ただ、その方が、前に、『おれはもう母ちゃんに任せっきりで、何もしてこなかったからなあ。ここに来るのは、罪滅ぼしなんだよ』と、おっしゃっていました。ほかに、今はお弁当も作ってらっしゃるんですね。変わられましたよね。シニアになってから、成長したのでしょうか。」 (Gさん)

e.クッション的役割を果たすシニアとスタッフの世代間関係

「1対1の関係において、いつでもだめだしをしてくれる存在」であるシニアとスタッフの世代間関係は、時には実の親子関係、嫁姑関係のクッション的役割を果たしている。

「上の当事者として言うと、だめ出しをしてくれる人がいるということが、いちばん大きいです。シニアの方たちが、悩んでいたり、突破できないところを助けてくれたりということもあるのですが、1対1の関係において、いつでもだめだしをしてくれる存在としていてくれるということは貴重だと思っています。またそれが自分の親や血縁関係だけではなくて、そういう人たちがいてくれるということで、シニアのかたたちの存在は大きいです。新鮮だし、より言葉に重みがあったりもします。」 (Cさん)

「自分の息子たちも結婚して、お嫁さんがいたりすると、いろいろと言いたいこともあるのだろうけれども、『こういうところが信じられないのよね』とかいうことを私たちにおっしゃられて、『でも、気持ち的には分かります』と言うと、『そうかしらね』という感じで、自分たちも親に直接言えないようなことを、お聞きしたりして、『そういう思いもあるのか』ということがあったりします。なかなか親族的に直接言えないようなことをこういうところと言って、お互いの気持ちをなだめたりしています。ワンクッションを置くということでしょうか。」 (Cさん)

②学生サポーター

a.ダイナミックな遊びをしてくれる学生

学生サポーターは、スタッフができないダイナミックな遊びをしてくれるので、広場で遊ぶ子どもたちも楽しんでいる。

「私が日常目にする学生ボランティアのかたなのですが、やはり男性の学生ボランティアがここにおられると、うちの子は男の子なので、ダイナミックに遊んでいます。それは、おなかも大きかったときに、自分ではできなかったことなのでとてもありがたかったです。」 (Bさん)

「去年は、学生ボランティアさんもほとんどが女の子で、男子学生さんがたくさん入ってきてくれたのは今年からなのです。やはり去年と比べると、広場の雰囲気ももっとこう元気というか、パワーにあふれるような感じがしています。女の子は、たいてい男の人が苦手で、男の人を見ると泣いてしまうことが多いのですが、「びーの」で遊んでいる子は、そういうことがないように思います。逆に、男の子のほうがいいという感じで、男の子にくっついて遊んでいる子がたくさんいます。」 (Gさん)

b.積極的に活動に関わるようになった学生

「今までは、頼まれたからというか、ボランティアとしてかかわってきた」学生たちが、「今度は自分たちで企画して、よりボランティア活動を活性化するために、自分たちは何をしたらいいのか」と積極的に活動に関わるようになってきている。学生にとっても『びーのびーの』が「自分の居場所」となってきたことが推察される。

「『びーの』に来る時間をバイトに費やすこともできるのに、『びーの』に来てくれるということです。自分たちで自主的な活動を提案もしてくれるようになってきました。あと運営にまで入ってきてくれています。積極的に『びーの』に関わってきてくれています。今までは、頼まれたからというか、ボランティアとしてかかわってきたけれども、今度は自分たちで企画して、よりボランティア活動を活性化するために、自分たちは何をしたらいいのかというところにきています。」 (Eさん)

c.次世代の親育てとしての学生

将来子育てをするかもしれない学生サポーターに対して、次世代の親を育てるような気持ちで、「だめだし」をしているスタッフもいる。

また、学生自身も、子どもたちや子育て中のスタッフ、会員との関わりから、将来子育てをする時に必要な術を学んでいるのである。

「世代間の先送りというか循環という感じで、私がだめだしをしています。…自分の子どもを育てるのは逆に、そういう世代、数年後かもしれないですけども、もしかしたら育てていくかもしれない子たちを、自分の子どもだけではなくて、育てていくというか、そういう感じがあります。かわいいかなと思います。」 (Cさん)

「広場の中を見ていて、学生さんがボランティアで入っていたり、サポーターさんがボランティアで入っていたりしているわけですが、うちのサポーターさんも学生さんも、ここで子育て支援をしようと思って来ている人はいないような気がします。自分の居場所としてここに来ているのだなということと、学生さんは、お母さんがたを手伝っているという意識もあるのでしょうかけれども、実は、子どもに自分が教えられることがきっとあるだろうと思っています。特に男の子は、オムツを換えさせてもらったり、調理をやらせてもらったりというのは、きっと数年後に役に立つはずですよ。それを考えたら、赤ちゃんもボランティアしているのかなと私は思います。」 (Dさん)

③男性スタッフ

a.活動を支える男性

女性（妻）の活動の理解を示し、協力的な男性（夫）が多いことは、「夫の理解・協力」のところで述べたが、家庭でのサポートだけではなく、『びーのびーの』の活動を支えてくれる男性もいる。自分たちの仕事をいかして、活動を支えている。

「『びーの』は、割と旦那さんの後押しが多いのです。チラシ一つ作るにしても自分で作れないから、『じゃあ、僕が作ってあげるよ』とか、自分の仕事を『びーの』に持ち込んでくださったことも、これはお金になるからやってみようということ、ありました。これは男の人にとってはかけです。そういうことをやってくたさるかたもいらっしやいましたし、表面的にはお母さんの活動に見えるのですが、後ろで旦那さんがすごく支えてくださっているなということを感じていました。同じように働いてきた人同士で結婚された方が比較的多いのです。お互いに仕事のことが分かっているので、『この人はこういう仕事をする人だ』ということで、同志みたいな感じで妻のことを信頼していて、仕事を持ってきてくださったかたは、まさしくそうだと思います。また、本当にいろいろなことで、アンケートがあれば、その集計をやってくたさったりとか、なかなか広場に直接参加できなくても、そういう形で、内助の功は逆に旦那さんという感じです。」（Eさん）

b.活動を始動した男性

実際に、『パパびーの』として、活動するスタッフや会員の男性も現れた。きっかけは、女性に言われて渋々参加した『お父さんの連続講座』だったが、自分たちも地域で子育てをと、この講座のメンバーが集まって劇団を立ち上げてからは、仕事の時間をやりくりしながら、仲間との活動に自主的に参加するようになっていく。

「うちは、『パパびーの』に関係しているので、『パパびーの』の話をする、みんな忙しい旦那さんばかりなのです。…そのように忙しい人たちが時間をやりくりしながら集まっているのですが、かれこれ1年近く活動をして、お互いに状況が分かってきました。もちろんフィリピン人の旦那さんなんかもいたりして、英語で話さなければいけなかったりします。…そうして、コミュニケーションが取れてきたり。パパたちが初めて集まったときには、ビールで釣ったというところがあったりするのですが、とてもチームワークが取れてきて、お互いをカバーしています。…うちも含め、家庭の中でダイレクトに子育てに関して手伝わっているかということ、やはりそうでもなかったり、時間の制約はあるのです。でも、こうやって『パパびーの』の活動を通して、この間も秋祭りで演目をやったのですが、一つ家庭から出たところで、地域の子供たちを楽しませるという部分での子育て支援という形もまたあったりします。なかなか家でできないことも、そこで、うちの子だけではなく、地域の子どもに向けての新しい子育て支援の形になるのかなと思います。」（Eさん）

c.関心を向け始める男性

スタッフの男性だけではなく、会員の夫である男性たちの関心も高まっているようである。

「男性の方は、スタッフの男性も、『パパびーの』ということしか、今はないのですが、あとは、精神的に支えてくれています。でも、会員さんのお父さんも関心があるのだということがよく分かります。見学をするときに、お父さんのほうから電話がかかってくる、妻と子どもが常日ごろ過ごす場所がどういふ場所なのかということ、夫としてもちゃんと知っておこうというような、今本当にそういう形で夫

婦参加をしているなどと思います。迎えに来られるお父さんもいますし、すごく気になっているのだなと分かります。親子が出て行くと先にお父さんが待っていたり、恥ずかしいのだけれど、一度見てみたいというような感覚がお父さんたちにもあるのだなと思います。マタニティ企画は夫婦で参加という感じになっているのです。男性のそういう意味での参加というか、直接的ではなくても、関心度という面ではすごく高いのだなということはお分かります。」（Cさん）

（4）地域三世代子育てを目指して—NPOとしての社会活動の可能性—

①地域三世代子育てを目指した社会活動のために

「地域で育ち合う子育て」の環境を作るために、子育て期の女性が、企業等の仕事ではなく、また専業主婦とも異なる、「地域の中で子どもたちの息遣いを感じながら」の社会的な活動が職業としても少し確立できるようになると、もっと地域が変わってくると代表であるAさんは考えている。

「地域のどこでも育てられる環境をどう作っていくのかということが、私たちの第一の使命だと思っています。そういう意味で言うと、子どもたちが地域で育っていく環境を、親が働いているとか働いていないとかいうこととは関係なく、どのように作っていくかということです。だから、『びーのびーの』の活動を中心にですが、地域の子育てのいろいろなことを底上げしていかなければいけません。」「フルタイムで女性も男性並に働くということとは別に、地域の中で子どもたちの息遣いを感じながら、社会的な活動ができるというような場を作りたいということで、今はまだ始まったばかりだと思うのです。だから、今の日本の男性の働き方と同じように、女性も働いてもいいのですが、専業主婦とはまた別に、そうではない道もあるのではないかと思います。そういう形が作ればいいなと思います。そこに、女性としてライフステージの中で、そういった地域活動もできるし、子どもが育っていく間に一緒にできる活動というのがもう少し職業としてできてくると、もっと地域が変わってくるのではないかなと思います。だから、行政の力も借りながら、お母さんたちも生き生きできるように、それが結果として、子どもたちのいい発達につながり、エリアを作っていくようになっていくといいなというのが希望です。まだまだそれに対しては、いろいろなネックがあります。そういうシステムができるまで、どれだけスタッフがついてこられるかということなんです。今はかなり経済状態も悪いですし、お父さんの稼ぎがあるからできているという部分もまだまだあります。もうちょっときちんとした経済活動の一つに、この活動も位置づけられるように、社会にも行政にも働きかけていきたいと思っています。」（Aさん）

②地域三世代子育てが持つ意味の検証

『びーのびーの』が目指して活動を行なっている、地域三世代子育てが地域社会にどのようなインパクトを与えたかなどを、NPOとしての活動の可能性とも併せて検証する必要があると、副代表であるCさんは考えている。

「私たちが今行っているような三世代交流が、いかに地域のためになっているかということ、きちんと科学的に実証していけるような、体力やノウハウを身につけていきたいなと思います。これは、定性的に「いいんだ、いいんだ」と言っているだけではなく、どれだけ本当に社会にインパクトがあったのかということ、きちんとしていけるようになります。でもそれは、私たち素人では無理なので、いろいろな立場のかたを交えてやっていかなければいけないことだし、NPOの公益性ということも併せて、自分たちの成果というものを、きちんと実証していくようなシステムを作っていきたいと思っています。」（Cさん）

4 まとめ

(1)子育て期女性の社会参加

①社会参加を促している要因

a. 自主的な活動

親が受身的に参加する子育て支援ではなく、子育て当事者が地域とのつながりがなく子育てが大変だったという自らの経験から、子育てしやすい環境を作りたいという強い思いをもって、自主的に行う活動であることが、子育て期女性の社会参加を促している要因と考えられる。

b. 自己実現の場となる活動

子育てをしながら、働き方や活動の関り方を模索していた子育て期の女性にとって、子育てしながら、これまでの活動の経験やキャリア、能力、特技、趣味などをいかして社会的な活動を行なえることは、自己実現の場となっており、さらに活動に力を注いでいくようになっていると考えられる。

②社会参加を可能としている要因

a. 家族の理解と協力

子育て期の女性たちが社会活動を行なう際には、家庭の外に出て活動を行なうことや企業などの仕事とは違う社会活動を行なうことに対する夫を軸とした家族の理解とサポートは、不可欠なものである。

本研究のグループインタビューから、『びーのびーの』の活動について夫婦間でよく話している夫婦が多いという印象を受けた。女性たちが行っている活動について把握している男性が多く、そのことが活動への理解とサポートに繋がり、女性の活動を可能にしていると考えられる。そして、女性の活動が男性にも多かれ少なかれ、影響を与えているようである。実際に活動を行ない始めた男性や、活動を行なわなくても、「仕事という関係ではなくて、地域活動の情報が入ってくることは男性にも心強い」ものとなっている男性もいる。

b. 子どもと共に育つ感覚

「自分の家族を犠牲にしてまで活動をやろう」というのではなく、子どもたちも活動を楽しみながら、親も子どもの息遣いを感じながら活動を行ない、子どもも親も活動を通じて「共に育つという感覚」が、子育て期の女性の社会参加を可能にしていると考えられる。

c. 同じ立場である親同士の理解と配慮

子育て当事者であるスタッフ同士悩みを分かち合えたり、精神的にサポートされるだけではなく、活動の時間など融通が利くなどの理解があることも、子育て期女性の社会参加を可能にしている。

また、会員とスタッフの間にも同じ立場である親という関係が存在する。スタッフも子育て当事者であることから、会員に「支援されたい」気持ちから、「共に育ち合いたい」という気持ちへの変化が現われたのであろうと考えられるが、会員として関わっている人が、自分にもできることがあるのではとスタッフへとなる場合もある。

③残されている課題

a. 社会活動と自分自身の生活とのバランス

活動に力を注いでいく内に、どこまで活動に関ったらいいのか、自分自身の生活・家庭生活とのバランスに葛藤する女性もいた。このようにスタッフが、活動と生活の両立に悩んだりしないようボランティアの意味を一人ひとりがよく話し合う場が開かれているようである。子育て期の女性がお互いに社会活動と生活のバランスを取りながら、無理のない範囲での活動が求められている。

b. 頼れるところが親になっているというシステム

遠くに活動に出る時、子どもの世話を頼む人は、実の親か義理の親になっていることが指摘された。実の親との距離が離れている場合、義理の親に、活動の説明を行いながら徐々に理解してもらっているスタッフや、親に頼ることができずベビーシッターをお願いしたスタッフもいた。女性がさらに活動を行なっていく際、必ず直面する問題だと考えられる。

(2)多種多様な人のつながりによる地域三世代子育て—NPOの可能性—

『びーのびーの』の仕組みは、従来の地域と組織の成り立ちが異なっている。仕事の仕組みを持ち込んだ、男社会（タテ社会）ではなく、しかも町内会型のように義務感によって主に支えられている活動でもない。行政などが企画する子育て支援活動に受身的に参加するものでもない。地域とのつながりがあまりない中での子育ての大変さを痛感した自らの経験より、地域に目を向け、「地域での育ち合いの子育て」を目指した子育て期の女性が、地域の多種多様な人たちを巻き込みながら、主体的に行う形で誕生した地域三世代子育てである。地域社会と結びつこうとする取り組みであることから、地域に開かれた活動となっており、多世代が入りやすい環境であったと言える。多種多様な人のつながりが地域に生まれることによって、時代に見合った地域社会の再構築ができるのではないかと考えられる。

同じ地域に暮らす人が可能な範囲の資源を持ち寄って、楽しく取り組み、共同で一定のことを成し遂げたという達成感（名和田，1998）を持つことができるような「地域での育ち合いの子育て」を目指して、親が主体的になって市民主導の活動を行なう『びーのびーの』のNPO活動は、新しい形の地域社会の構築の出発点になりうるものとして期待したい。

本稿では、子育て期の女性主体の活動が今後の子育て支援活動の大きな力になるのでは、という問題意識から子育て中の親が立ち上げた『びーのびーの』の活動を手がかりに、スタッフへのグループインタビューから参加の動機、参加を可能としている要因などを明らかにした。今後さらに、子育て支援活動を行なっている団体への質問紙調査、子育て中の親たちへの子育て支援のニーズ等に関する質問紙調査等を行うことで、子育て期の女性が社会参加活動として子育て支援活動に関ることの意味などを見出していく必要があると思われる。

また、本稿では、子育て中の女性スタッフへのグループインタビューから、地域三世代子育ての可能性についてもまとめてきた。今後さらに、『びーのびーの』の活動に関っている多種多様な人々（シニアの男女、子育て期の男性、中・高・大学生の男女など）を対象にした調査を行い、どのような経緯でこの子育て支援の活動に参加し、どのように育ち合っていると自覚しているかを明らかにすることで、地域の人々をどうして巻き込んで活動を行なうことが可能であったかを追求することができるのではないかと考えている。

【参考文献】

- 安梅勅江 2001 ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開 医歯薬出版株式会社
- 原田正文 2002 子育て支援とNPO 朱鷺書房
- 柏木恵子 2001 子育て支援を考える—変わる家族の時代に— 岩波書店
- 柏木恵子・森下久美子 1997 子育て広場武蔵野市立 0123 吉祥寺 ミネルヴァ書房
- 小出まみ 1999 地域から生まれる支え合いの子育て ひとなる書房
- 名和田是彦 1998 コミュニティの法理論 創文社
- 野沢慎司 1988 主婦の社会参加を巡る夫婦関係・友人関係—都市集合住宅団地における4人の事例— 東京都立大学社会学研究会 社会学論考 第9号, 23-48.
- 奥山千鶴子・大豆生田啓友 2003 およこの広場 ビーのビーの ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 1999 子育てと出会うとき 日本放送出版協会
- 大豆生田啓友 2002 市民活動としての子育てひろばの取り組み—NPO法人ビーのビーのの活動を通して— 関東学院女子短期大学生活文化研究所紀要第9号
- 垣内国光・櫻谷真理子 2002 子育て支援の現在—豊かな子育てコミュニティの形成をめざして— ミネルヴァ書房
- 高木和子 2004 子育て支援をめぐる「支えあいの輪」の機能—子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ— 立命館人間科学研究 第7号, 3-12.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 2003 都市環境と子育て 勁草書房

第3部 アンケート調査結果

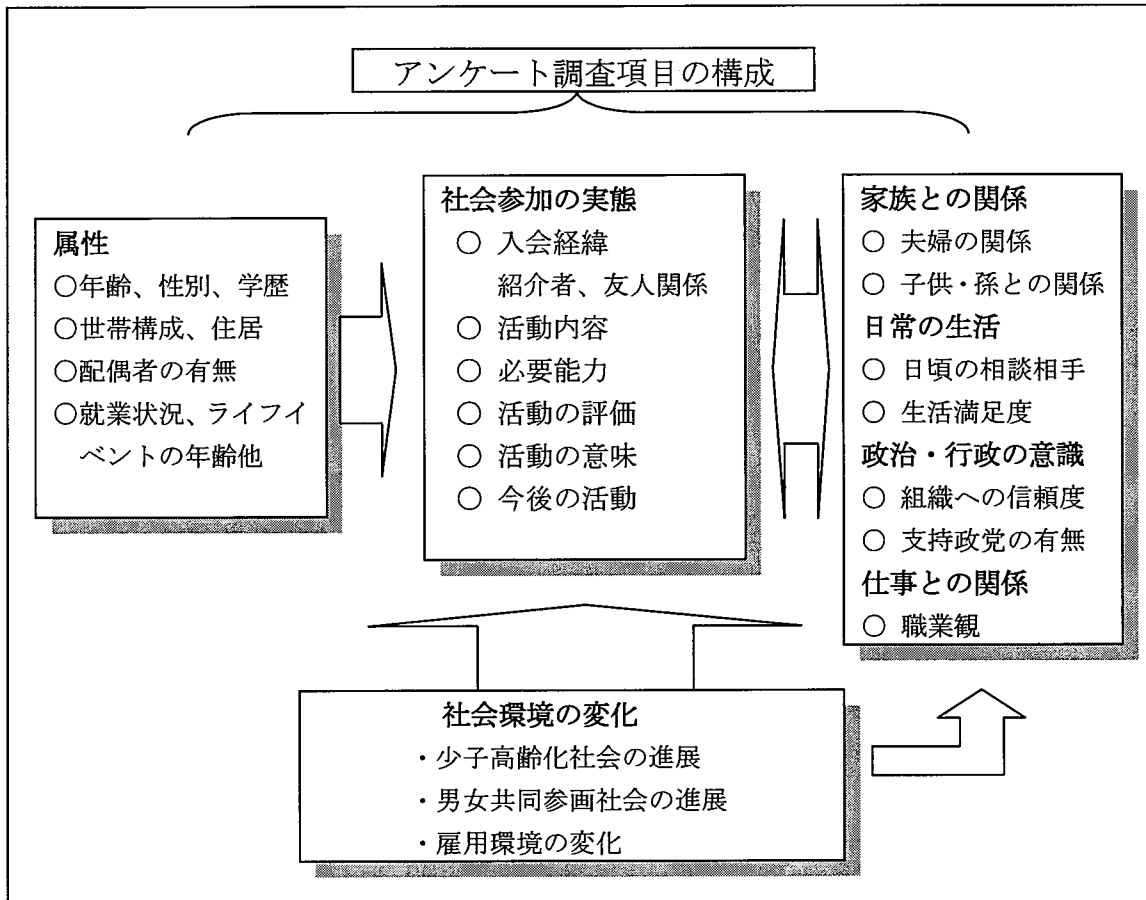
1. 調査実施概要
2. 調査結果の詳細

第3部 アンケート調査結果

1 調査実施概要

(1)アンケート調査項目の構成

本調査項目の構成は、以下の通りである。



アンケート調査項目の構成としては、社会環境の変化を念頭に個人の「属性」を踏まえ「社会参加の実態」と「家族との関係」「日常生活」「政治・行政の意識」「仕事との関係」との相関関係を見ていく構造としている。

① 社会参加の実態

入会経緯を中心に、参加した動機と活動の実態を把握し、NPO活動に対する価値観や人間関係、必要とする能力などについての評価を通じて活動の意味を捉える。

② 家族との関係

夫婦関係や子供・孫との関係の実態を把握することによって、家族の関係がどのように社会参加活動に影響を与えていくのかを見る。

③ 日常生活

日常生活で困ったときの信頼関係や日頃の満足度を通じて、社会参加の位置づけを捉える。

④ 政治・行政の意識

組織、制度、メディアに対する信頼度や支持政党の有無を通じて公共への意識と社会参加活動への影響を見る。

⑤ 仕事との関係

職業についての意識を見ていくことで、働くということの意識を捉え、社会参加活動とのかかわりを考える。

⑥ 属性

年齢、性別、職業などが社会参加活動に与える影響を捉える。

(2)調査設計

① 調査対象者

名称 : 特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ (NALC)

所在地 : 大阪市中央区常盤町 2-1-8 親和ビル 4 階

設立 : 1994 年 4 月

活動会員 : 11,518 名 (平成 15 年 11 月末)

主な事業内容 : 高齢者の介護・介助・家事援助

子育て支援

時間預託制度を活用した会員相互扶助のボランティア

学習健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事

特徴 : 全国 89 ヶ所に拠点。主に高齢者を中心とした会員同士の相互扶助ボランティア活動を時間預託制度としてすすめている。

会員 : (a) 地域別分布

(%)

	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州
男性	3.7	11.3	3.7	21.5	2.0	1.2
女性	4.9	14.3	4.7	28.4	2.6	1.7
全体	8.6	25.6	8.4	49.9	4.6	2.9

(b) 男女比、年齢構成

(%)

	全体	49 歳以下	50 歳代	60 歳代	70 歳以上	不明
男性	43.3	2.5	8.3	20.8	11.2	0.5
女性	56.7	4.1	15.8	24.7	11.5	0.5
全体	100.0	6.6	24.1	45.5	22.7	1.0

(注) NALC は、主に高齢者を中心とする団体であり、その構成上年齢区分に偏りが見られるが、本調査の目的は、NPO 団体に参加している人の生活や意識、ライフスタイルを把握することを目的として、データを利用する。

② 標本数

NALC のスタッフ・活動会員 11,518 人に対し、2,400 人を抽出した。

③ 回収結果 有効回収数 1,351 件、有効回収率 56.3%

(3)本報告書を読むにあたって

①本報告書における数値の取り扱い及び図表については以下のように扱っている。

- ・アンケートへの回答は、単数回答（1つだけ選択する回答）と複数回答（2つ以上を選択する回答）及び数値の記入がある。

- ・調査結果の数値は、原則としてパーセンテージ（%）で表記した。%値の母数は、原則としてその質問項目の該当標本数（回答すべき人の数）であり、図では「n」、表では「標本数」として表示してある。

- ・%値は小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記してある。したがって、単数回答の合計が必ずしも100%でない場合（99.9%または100.1%など）がある。同様に、複数の選択肢をあわせた場合や小計等では、内訳の%値を単純加算した数値と0.1%異なる場合がある。

- ・分析対象項目が初めて出現する図表では、回答選択肢の全て及び「無回答」を表示してある。その後示す同じ項目の図表では、煩雑さを避けるために、選択肢の言葉や文章を省略型にしたり、「その他」「無回答」等の表示を省略する場合がある。

②標本誤差について

調査結果の数値（比率）を読む際に、比率の差が統計的に有意であるかどうかを考慮する目安として、以下の早見表を参照されたい。

a. 1つの回答比率（%）の誤差範囲

1つの回答比率における誤差の範囲は、以下の早見表に示すとおりである。

1つの回答比率における誤差範囲

比率 \ n	50	100	200	300	400	500
10% or 90%	± 8.5%	± 6.0%	± 4.2%	± 3.5%	± 3.0%	± 2.7%
20% or 80%	±11.3%	± 8.0%	± 5.7%	± 4.6%	± 4.0%	± 3.6%
30% or 70%	±13.0%	± 9.2%	± 6.5%	± 5.3%	± 4.6%	± 4.1%
40% or 60%	±13.9%	± 9.8%	± 6.9%	± 5.7%	± 4.9%	± 4.4%
50%	±14.1%	±10.0%	± 7.1%	± 5.8%	± 5.0%	± 4.5%

比率 \ n	700	1000	1250	1500	1750	2000
10% or 90%	± 2.3%	± 1.9%	± 1.7%	± 1.5%	± 1.4%	± 1.3%
20% or 80%	± 3.0%	± 2.5%	± 2.3%	± 2.1%	± 1.9%	± 1.8%
30% or 70%	± 3.5%	± 2.9%	± 2.6%	± 2.4%	± 2.2%	± 2.0%
40% or 60%	± 3.7%	± 3.1%	± 2.8%	± 2.5%	± 2.3%	± 2.2%
50%	± 3.8%	± 3.2%	± 2.8%	± 2.6%	± 2.4%	± 2.2%

b. 2つの回答比率 (%) の差

(I) 1の標本の場合

1つの標本において、2つの回答比率の間に差があるかどうかをみる場合、例えば、ある質問の全体の結果で、ある質問に対する回答「A」の比率 p 、回答「B」の比率 q とで差があるといえるかどうかをみる場合に用いる。

<使い方> (注意) %で表示されているものを、 $100\% = 1$ として比率になおして用いる。

- 1) 比率 p 、 q から、 $p + q$ 、及び $|p - q|$ を計算する。
- 2) 標本数 n と $p + q$ により、表から誤差範囲を読み取る。
- 3) $|p - q|$ がその誤差範囲内であれば有意差(統計的に意味のある差)があるとはいえず、誤差範囲を超えていれば、有意差があるといえる。

2つの比率の差の検定表(1つの標本の場合、片側検定、 $\alpha = 0.05$)

$\frac{n}{p+q}$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000
0.10	0.074	0.052	0.037	0.030	0.026	0.023	0.020	0.016	0.015	0.013	0.012	0.012
0.20	0.104	0.074	0.052	0.042	0.037	0.033	0.028	0.023	0.021	0.019	0.018	0.016
0.30	0.127	0.090	0.064	0.052	0.045	0.040	0.034	0.028	0.025	0.023	0.022	0.020
0.40	0.147	0.104	0.074	0.060	0.052	0.047	0.039	0.033	0.029	0.027	0.025	0.023
0.50	0.164	0.116	0.082	0.067	0.058	0.052	0.044	0.037	0.033	0.030	0.028	0.026
0.60	0.180	0.127	0.090	0.074	0.064	0.057	0.048	0.040	0.036	0.033	0.030	0.028
0.70	0.195	0.138	0.097	0.079	0.069	0.062	0.052	0.044	0.039	0.036	0.033	0.031
0.80	0.208	0.147	0.104	0.085	0.074	0.066	0.056	0.047	0.042	0.038	0.035	0.033
0.90	0.221	0.156	0.110	0.090	0.078	0.070	0.059	0.049	0.044	0.040	0.037	0.035
1.00	0.233	0.164	0.116	0.095	0.082	0.074	0.062	0.052	0.047	0.042	0.039	0.037
	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.

(II) 2つの標本の場合

異なる2つの標本における回答比率に差があるかどうかをみる場合、例えば、ある質問に対する回答「A」の男性の比率 p と「B」の女性の比率 q との間に差があるといえるかどうかをみる場合に用いる。

<使い方>

- 1) 2つの標本 n_1 と n_2 から、調和平均表により調和平均(H)を求める。
- 2) 比率 p と q の加重平均Pを算出する。ただし、男女別の比較のように全体が2分割されているような場合には、全体の比率を近似的にPとして用いることができる。
- 3) 検定表により、HとPから誤差範囲を読み取る。
- 4) $|p - q|$ がその誤差範囲内であれば有意差があるとはいえず、誤差範囲を超えていれば、有意差があるといえる。

調和平均表

$n_1 \backslash n_2$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000
50	50											
100	67	100										
200	80	133	200									
300	86	150	240	300								
400	89	160	267	343	400							
500	91	167	286	375	444	500						
700	93	175	311	420	509	583	700					
1000	95	182	333	462	571	667	824	1000				
1250	96	185	345	484	606	714	897	1111	1250			
1500	97	188	353	500	632	750	955	1200	1364	1500		
1750	97	189	359	512	651	778	1000	1273	1458	1615	1750	
2000	98	190	364	522	667	800	1037	1333	1538	1714	1867	2000

2つの比率の差の検定表(2つの標本の場合、片側検定、 $\alpha=0.01$)

$P \backslash H$	50	100	200	300	400	500	700	1000	1250	1500	1750	2000
	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.
0.10or0.90	099	070	049	040	035	031	026	022	020	018	017	016
0.20or0.80	132	093	066	054	047	042	035	029	026	024	022	021
0.30or0.70	151	107	075	062	053	048	040	034	030	028	025	024
0.40or0.60	161	114	081	066	057	051	043	036	032	029	027	025
0.50	164	116	082	067	058	052	044	037	033	030	028	026
	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.

(4)分析標本の基本属性

分析標本（有効回答者）の基本属性は以下のとおりである。

○ 性別・年齢

① 性別

(人)

	標本数	49歳以下	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
男性	576	18	20	43	138	199	158
女性	775	26	66	133	255	186	109
全体	1351	44	86	176	393	385	267

② 年齢

(%)

	標本数	49歳以下	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
男性	576	3.1	3.5	7.5	24.0	34.5	27.4
女性	775	3.4	8.5	17.2	32.9	24.0	14.1
全体	1351	3.3	6.4	13.0	29.1	28.5	19.8

○ 居住地

③ 居住地域

(%)

	標本数	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州
男性	576	10.2	36.5	6.1	43.4	3.1	0.7
女性	775	9.0	35.9	6.8	43.9	3.0	1.4
全体	1351	9.5	36.1	6.5	43.7	3.0	1.1

④ 居住地の都市規模

(%)

	標本数	23区・政令指定都市	その他の市	郡部
男性	576	24.0	67.5	8.5
女性	775	24.5	68.6	6.8
全体	1351	24.3	68.2	7.5

○ 学歴・就業

⑤ 学歴

(%)

	標本数	旧制小学校・高等小学校・新制中学校	旧制中学校・高等女学校・旧制実業学校・新制高等学校	旧制高等学校・高等師範学校・新制短大	大学・大学院	専門学校・専修学校	その他	無回答
男性	576	8.2	42.7	6.1	37.7	3.8	0.0	1.6
女性	775	7.9	51.7	14.6	12.0	11.9	0.1	1.8
全体	1351	8.0	47.9	11.0	22.9	8.4	0.1	1.7

⑥ 就業の有無 (％)

	標本数	就いている	就いていない	無回答
男性	576	3.2	53.3	3.5
女性	775	30.2	65.8	4.0
全体	1351	35.8	60.5	3.8

⑦ 配偶者の就業の有無 (％)

	標本数	就いている	就いていない	無回答
男性	534	24.7	74.7	0.6
女性	600	51.3	46.5	2.2
全体	1134	38.8	59.8	1.4

○ 職業・勤務先

⑧ 現在の就業形態 (％)

	標本数	正規の社員・従業員	パートタイマー	嘱託	派遣社員	自営業・自由業 家族従業員	シルバー人材センター(高齢者事業団)	内職	その他	無回答
男性	249	32.1	14.1	19.3	0.8	27.3	5.6	0.0	0.8	0.0
女性	234	15.8	43.2	5.1	1.3	24.8	3.8	3.8	0.4	1.7
全体	483	24.2	28.2	12.4	1.0	26.1	4.8	1.9	0.6	0.8

⑨ 配偶者の就業形態 (％)

	標本数	正規の社員・従業員	パートタイマー	嘱託	派遣社員	自営業・自由業 家族従業員	シルバー人材センター(高齢者事業団)	内職	その他	無回答
男性	132	14.4	47.0	4.5	0.8	27.3	0.8	3.8	1.5	0.0
女性	308	45.5	8.8	13.3	1.3	24.7	4.5	0.3	1.0	0.6
全体	440	36.1	20.2	10.7	1.1	25.5	3.4	1.4	1.1	0.5

⑩ 職種 (％)

	標本数	専門技術職(研究職・技師等)	管理職(役員・課長以上の管理職)	事務職(一般事務・営業・経理事務等)	販売職(店員・セールス等)	技能職・技術補助・生産工程従事・作業員	サービス職(添乗員・ホテルマン等)	その他	無回答
男性	249	13.3	27.3	18.9	4.4	23.3	6.4	4.4	2.0
女性	234	11.1	5.6	23.1	8.5	35.0	8.5	5.1	3.0
全体	483	12.2	16.8	20.9	6.4	29.0	7.5	4.8	2.5

⑪ 勤務先の従業員数 (％)

	標本数	1～29人	30～99人	100～299人	300～999人	1000人以上	官公庁公務	無回答
男性	249	39.4	18.5	9.6	13.3	10.0	5.6	3.6
女性	234	44.0	16.7	9.4	7.3	6.0	7.7	9.0
全体	483	41.6	17.6	9.5	10.4	8.1	6.6	6.2

⑫ 1日の労働時間 (％)

	標本数	～3時間	4～5時間	6～7時間	8時間	9～10時間	11～15時間	16時間以上	無回答
男性	249	8.8	10.8	22.9	26.5	18.5	7.6	0.8	4.0
女性	234	24.4	19.2	18.8	20.1	6.8	1.7	0.4	8.5
全体	483	16.4	14.9	20.9	23.4	12.8	4.8	0.6	6.2

⑬ 週の勤務日数 (％)

	標本数	～2日	3～4日	5日	6日	7日	無回答
男性	249	14.1	21.3	40.6	16.9	4.8	2.4
女性	234	19.7	27.4	30.3	12.8	2.1	7.7
全体	483	16.8	24.2	35.6	14.9	3.5	5.0

○ 転職・退職

⑭ 転職の回数 (％)

	標本数	0回	1回	2回	3回	4～5回	6回以上	無回答
男性	576	0.0	40.6	25.5	14.6	9.9	2.6	6.8
女性	775	6.5	28.1	21.8	16.5	17.9	3.1	6.1
全体	1351	3.7	33.5	23.4	15.7	14.5	2.9	6.4

⑮ 定年退職の経験 (％)

	標本数	定年退職した(自営業で後継者に経営を譲った場合も含む)	定年前に退職した・定年はないが退職した	定年前で仕事に就いている・定年はない	収入を伴う仕事に就いたことがない	無回答
男性	576	64.6	16.0	14.1	0.0	5.4
女性	775	16.3	50.2	16.5	6.8	10.2
全体	1351	36.9	35.6	15.5	3.9	8.1

【退職している方・退職直前の仕事】

⑯ 就業形態 (％)

	標本数	正規の社員・従業員	パートタイマー	嘱託	派遣社員	自営業 自由業 家族 従業員	シルバー 人材センタ ー(高齢者 事業団)	内職	その他	無回答
男性	464	90.9	0.0	3.9	0.6	3.4	0.2	0.0	0.2	0.6
女性	515	64.7	21.4	2.1	0.0	4.7	0.2	0.6	0.2	6.2
全体	979	77.1	11.2	3.0	0.3	4.1	0.2	0.3	0.2	3.6

⑰ 職種

(%)

	標本数	専門技術職 (研究職・技師等)	管理職 (役員・課長以上の 管理職)	事務職 (一般事務・ 営業・経理 事務等)	販売職 (店員・セ ールス 等)	技能職・技 術補助・生 産工程従 事・作業 者	サービス職 (添乗員・ホ テルマン等)	その他	無回答
男性	464	10.8	61.4	10.1	1.7	13.4	1.3	0.4	0.9
女性	515	9.1	4.9	50.7	7.2	16.5	4.3	0.8	6.6
全体	979	9.9	31.7	31.5	4.6	15.0	2.9	0.6	3.9

⑱ 勤務先の従業員数

(%)

	標本数	1～ 29人	30～ 99人	100～ 299人	300～ 999人	1000人 以上	官公庁・ 公務	無回答
男性	464	7.3	8.4	8.4	13.1	53.0	8.8	0.9
女性	515	19.4	15.1	12.2	9.5	24.3	12.4	7.0
全体	979	13.7	12.0	10.4	11.2	37.9	10.7	4.1

⑲ 1日の労働時間

(%)

	標本数	～ 3時間	4～ 5時間	6～ 7時間	8時間	9～ 10時間	11～ 15時間	16時間 以上	無回答
男性	464	0.6	0.6	7.5	39.4	43.3	6.3	0.2	1.9
女性	515	1.6	6.6	21.6	39.6	22.5	1.2	0.2	6.8
全体	979	1.1	3.8	14.9	39.5	32.4	3.6	0.2	4.5

⑳ 週の勤務日数

(%)

	標本数	～2日	3～4日	5日	6日	7日	無回答
男性	464	0.6	0.9	69.4	24.8	1.5	2.8
女性	515	1.9	7.8	36.3	43.3	3.1	7.6
全体	979	1.3	4.5	52.0	34.5	2.3	5.3

㉑ 仕事引退年齢

(%)

	標本数	50歳 未満	50～ 54歳	55～ 59歳	60歳	60～ 64歳	65～ 69歳	70歳 以上	無回答
男性	464	1.9	4.3	17.2	46.6	16.6	9.3	2.6	1.5
女性	515	38.1	12.2	17.1	16.1	6.0	3.7	0.4	6.4
全体	979	20.9	8.5	17.2	30.5	11.0	6.3	1.4	4.1

○ 家族・世帯

㉒ 配偶者の有無

(%)

	標本数	いる	いない	無回答
男性	576	92.7	6.9	0.3
女性	775	77.4	21.9	0.6
全体	1351	83.9	15.5	0.5

⑳ 同居家族

(%)

	標本数	配偶者	子ども	子どもの配偶者	自分の父	自分の母	配偶者の父	配偶者の母	自分の祖父	自分の祖母	配偶者の祖父	配偶者の祖母	兄弟姉妹	孫	その他	なし (二人住まい)	無回答
男性	576	92.0	34.5	5.0	1.6	4.7	0.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	5.4	0.0	4.5	0.0
女性	775	75.5	35.6	5.3	0.9	3.1	1.4	5.0	0.0	0.1	0.0	0.3	1.4	5.9	0.5	13.7	1.2
全体	1351	82.5	35.2	5.2	1.2	3.8	1.0	3.5	0.0	0.1	0.0	0.1	1.0	5.7	0.3	9.8	0.7

○ ライフイベント

㉑ 最初に結婚したのは

(%)

	標本数	20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上	該当しない	無回答
男性	576	0.0	11.6	66.8	16.1	1.9	0.2	0.0	0.0	1.6	1.7
女性	775	0.6	56.3	33.7	3.0	1.5	0.3	0.3	0.0	3.0	1.4
全体	1351	0.4	37.2	47.8	8.6	1.7	0.2	0.1	0.0	2.4	1.6

㉒ 最初のお子さんが生まれたのは

(%)

	標本数	20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上	該当しない	無回答
男性	576	0.0	2.8	48.6	35.8	4.3	0.7	0.0	0.0	5.0	2.8
女性	775	0.1	27.2	50.6	8.5	1.5	0.4	0.0	0.0	8.5	3.1
全体	1351	0.1	16.8	49.7	20.1	2.7	0.5	0.0	0.0	7.0	3.0

㉓ 一番下のお子さんが生まれたのは

(%)

	標本数	20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上	該当しない	無回答
男性	576	0.0	0.0	10.9	49.1	24.7	3.1	0.0	0.0	8.0	4.2
女性	775	0.0	2.5	38.2	33.9	6.6	0.8	0.0	0.0	12.4	5.7
全体	1351	0.0	1.4	26.6	40.4	14.3	1.8	0.0	0.0	10.5	5.0

○ 年収

㉔ 世帯の主たる収入源

(%)

	標本数	自分の仕事の収入	自分以外の家族・同居者の収入	年金収入 (公的・企業・個人年金)	不動産収入	利息・配当金収入	その他	無回答
男性	576	23.8	2.6	67.2	1.9	0.0	0.3	4.2
女性	775	6.7	29.7	57.9	1.5	0.5	0.4	3.2
全体	1351	14.0	18.1	61.9	1.7	0.3	0.4	3.6

㊸ 昨年1年間の世帯年収

(%)

	標本数	二〇〇万円未満	三〇〇万円未満 二〇〇万円以上	四〇〇万円未満 三〇〇万円以上	五〇〇万円未満 四〇〇万円以上	六〇〇万円未満 五〇〇万円以上	七〇〇万円未満 六〇〇万円以上	八〇〇万円未満 七〇〇万円以上	一〇〇〇万円未満 八〇〇万円以上	一〇〇〇万円以上 一五〇〇万円未満	一五〇〇万円以上	無回答
男性	576	3.5	12.2	20.0	16.5	12.5	10.9	5.6	9.2	6.6	1.7	1.4
女性	775	8.5	16.6	16.9	13.3	10.5	7.7	5.5	7.5	7.5	1.5	4.4
全体	1351	6.4	14.7	18.2	14.7	11.3	9.1	5.6	8.2	7.1	1.6	3.1

○ 活動の実態

㊹ あなたが最初にボランティア活動に参加したのは

(%)

	標本数	20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳69歳	70歳以上	無回答
男性	576	3.0	5.0	6.1	7.3	6.9	11.6	33.0	13.0	4.9	9.2
女性	775	4.9	3.0	9.9	13.3	15.9	18.8	18.1	5.3	1.8	9.0
全体	1351	4.1	3.8	8.3	10.7	12.1	15.8	24.4	8.6	3.1	9.1

㊺ あなたがNALCに参加し始めたのは

(%)

	標本数	20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳69歳	70歳以上	無回答
男性	576	0.0	0.2	1.9	3.3	7.3	15.6	37.2	21.4	7.5	5.7
女性	775	0.0	0.1	1.2	7.5	16.4	27.1	29.5	10.2	3.9	4.1
全体	1351	0.0	0.1	1.5	5.7	12.5	22.2	32.8	15.0	5.4	4.8

㊻ NALC以外に所属しているグループ・団体

(%)

	標本数	趣味やスポーツのクラブ・サークル	学習・研究会や教養教室	職場・職域関係の団体・グループ	定年退職者の会など、旧職場の集まり	も会・青少年団体	PTA・父母会や子ども会	難病や障害児・者を持つ家族の会	災協会	町内会・自治会や防同好会	老人クラブや地域の同好会	消費団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	宗教団体・政治団体	その他	所属していない	無回答
男性	576	50.7	21.0	17.7	39.2	3.0	3.0	26.9	22.4	19.6	8.2	4.0	14.4	4.2		
女性	775	59.0	26.6	3.5	7.9	2.8	3.9	22.8	15.1	24.5	6.5	4.1	12.1	4.9		
全体	1351	55.4	24.2	9.5	21.2	2.9	3.5	24.6	18.2	22.4	7.2	4.1	13.1	4.6		

㊼ NALCへの参加時間（1日）

(%)

	標本数	0時間	1～2時間	3時間	4～5時間	6～7時間	8時間	9～10時間	11～15時間	16時間以上	無回答
男性	576	25.3	17.4	5.6	6.4	2.1	1.2	0.3	0.0	0.3	41.3
女性	775	23.0	15.5	5.9	5.9	0.9	0.3	0.1	0.1	0.0	48.3
全体	1351	24.0	16.3	5.8	6.1	1.4	0.7	0.2	0.1	0.1	45.3

③③ NALCへの参加日数（1週間） (％)

	標本数	0日	1日	2日	3～4日	5日	6日	7日	無回答
男性	576	26.9	33.9	8.7	6.4	1.9	0.5	0.2	21.5
女性	775	27.6	33.7	5.7	3.1	0.8	0.0	0.0	29.2
全体	1351	27.3	33.8	7.0	4.5	1.3	0.2	0.1	25.9

③④ NALCでの位置づけ (％)

	標本数	理事・役員	事務局スタッフ (職員・会員)	現職スタッフ (職員・会員)	無回答
男性	576	12.5	12.5	61.1	13.9
女性	775	4.0	7.7	69.5	18.7
全体	1351	7.6	9.8	66.0	16.7

③⑤ NALCでの活動形態 (％)

	標本数	専従・フルタイム	非専従・パートタイム	無回答
男性	576	3.6	76.6	19.8
女性	775	2.2	67.7	30.1
全体	1351	2.8	71.5	25.7

③⑥ 配偶者のNALCでの活動参加 (％)

	標本数	定期的に参加 している	ときどき参加 している	以前に参加した ことがある	参加して いない	無回答
男性	534	24.7	28.7	12.2	33.9	0.6
女性	600	22.8	17.0	12.0	46.8	1.3
全体	1134	23.7	22.5	12.1	40.7	1.0

③⑦ 配偶者はNALC以外で何か社会に役立つ活動参加 (％)

	標本数	定期的に参加 している	ときどき参加 している	以前に参加した ことがある	参加して いない	無回答
男性	534	30.3	27.9	11.8	29.4	0.6
女性	600	26.3	18.2	10.8	42.8	1.8
全体	1134	28.2	22.8	11.3	36.5	1.2

(5)調査の内容

当調査では、社会参加の実態をより詳しく把握するため、前述のアンケート項目の構成に従い「社会参加の実態」「家族との関係」「日常の生活」「政治・行政の意識」「仕事との関係」の各分野、および「属性」についてアンケート調査を行なった。以下、各質問項目ごとに対応した問番号を次に示した。

調査項目

分野	質問項目	番号	フェイスシート		
分野	質問項目	番号	分野	質問項目	番号
社会参加の実態	入会経緯	問1	属性	性別	F1
	直接の入会経緯	問2		年齢	F2
	紹介者	付問(1)		住まい	F3
	紹介者と会う回数	付問(2)	(NALC活動)	NALC活動時間	F4
	紹介者との共通の友人・知人	付問(3)		位置づけ	F5
	活動内容	問3		活動形態	F6
	活動への必要能力	問4	基本属性	学歴	F7
	活動への評価	問5		イベント年齢	F8
	参加の障害	問6		他の活動グループ	F9
	家族との関係 (夫婦の関係)	活動の意味	問7	就業	就業有無
今後の活動		問8	就業者の就業実態		F11
(子供・孫との関係)	日頃の関係	問9	転職回数		F12
	夫婦関係	問10	定年	定年退職の有無	F13
	孫の有無	問11		退職前の就業実態	F14
	孫の数	付問(1)	家庭	収入源	F15
	過す時間	付問(2)		世帯収入	F16
	初孫の年齢、性別	付問(3)		同居の世帯構成	F17
	孫との関係	付問(4)		配偶者の有無	F18
	孫の同居人	付問(5)		配偶者の活動、就業の有無	F19
	孫の住まい	付問(6)			
	孫の世話の回数	付問(7)			
	孫と会う回数	付問(8)			
	孫の母親の就業	付問(9)			
	孫、孫の親、自分との関係	付問(10)			
	経済的な援助	付問(11)			
	孫への行動	付問(12)			
孫との活動	付問(13)				
孫の育て方	付問(14)				
日常の生活	日常生活での相談者	問12			
	生活満足度	問13			
政治・行政の意識	組織・制度への信頼	問14(1)			
	支持政党の有無	問14(2)			
	支持政党の無い理由	問14(3)			
仕事との関係	職業観	問15			

*アンケート調査票については、P.195 調査データをご参照。

2 調査結果の詳細

(1) 社会参加の実態

① 直接の入会経緯[問2]

現在のNPOで活動し始めた直接のきっかけについてたずねた〈図表(1)－1(i)〉。

全体においては、「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」が19.0%と多く、その後に「職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介」(18.1%)、「地域雑誌や新聞広告などを通じての公募」(17.3%)、「家族や親戚・縁戚関係からの紹介」(16.2%)と続いている。男性が「職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介」を男性の中で26.7%と最も多くきっかけとして挙げているのに対して、女性は「地域雑誌や新聞広告などを通じての公募」(21.2%)、「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」(20.8%)の比率が最も高い。NPOへの参加のきっかけが、男性と会社、女性と地域社会との各々の関わり方の差が表れているように思われる。

また、都市規模別として「23区・政令指定都市」、「その他の市」、「郡部」と区分したが、「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」と「地域雑誌や新聞広告などを通じての公募」について特徴が表れた〈図表(1)－1(ii)〉。

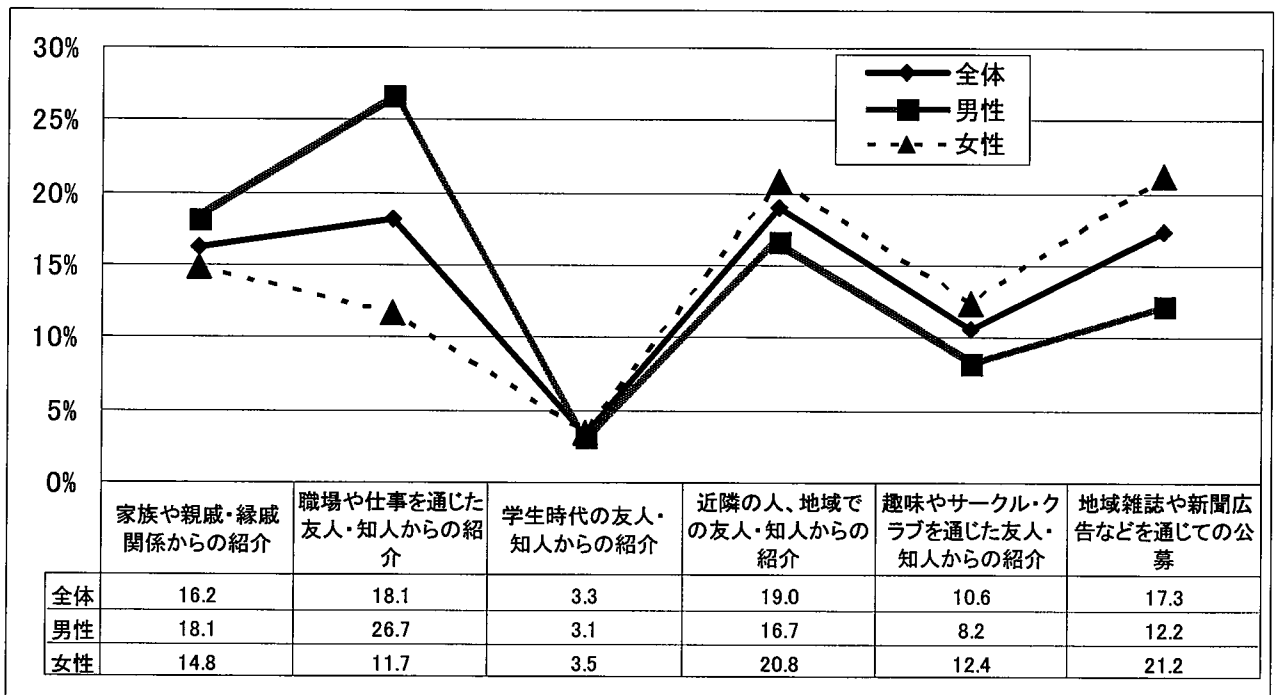
郡部においては、「近隣の人、地域での友人・知人からの紹介」が23.5%(その他の市20.5%、23区・政令指定都市13.4%)と高い数字が出ているのに対して、23区・政令指定都市という情報網が発達した地域においては、「地域雑誌や新聞広告などを通じての公募」が23.8%(その他の市15.5%、郡部12.7%)と最も多くなっている。男女ともが同じ傾向であり、地域との繋がりが強い傾向にある郡部と情報媒体・情報窓口がより多くある都市部との違いがあるように思われる。

図表(1)－1 活動のきっかけ

(i) 男女別

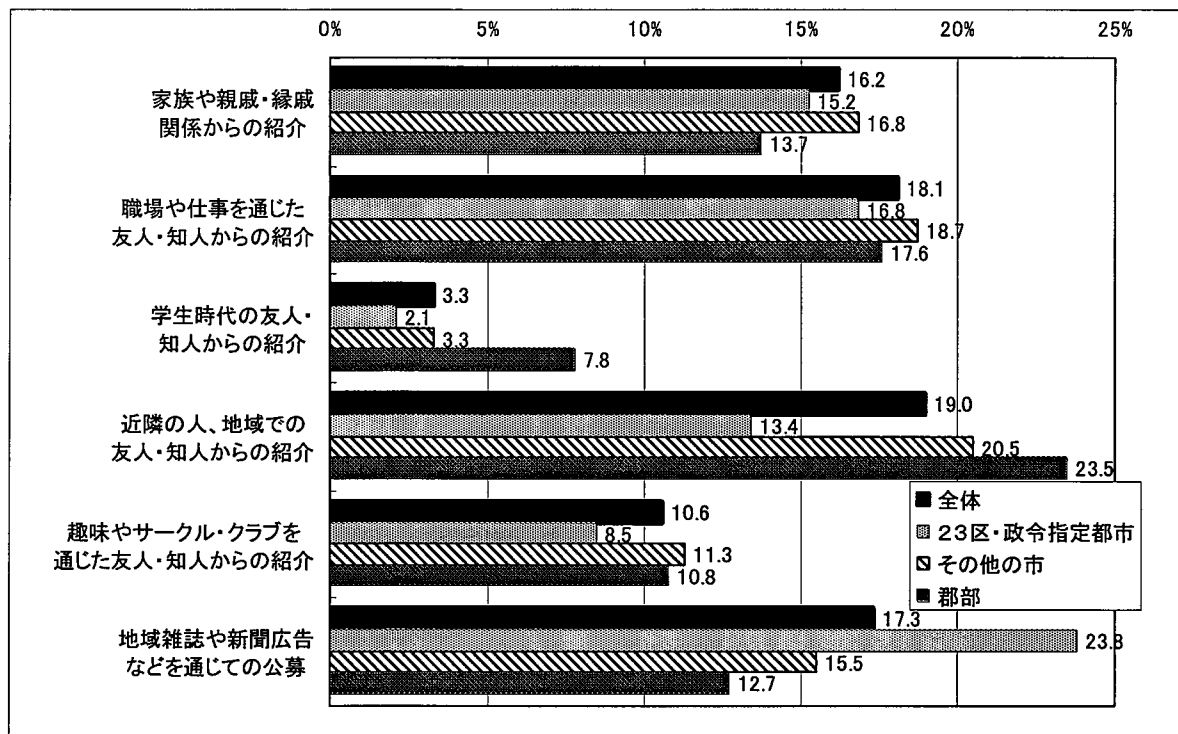
n=1,351 (%)

n=男性 576、女性 775 (%)



(ii) 都市規模別

n=23区・政令指定都市 328、その他の市 921、郡部 102 (%)



②活動内容[問3(ア)～(ウ)]

活動の内容については、各アンケート対象者が所属しているNALCの支部が行っている活動内容とその支部の中において参加している活動について複数回答でたずね、さらに参加する活動の中で最も重要なものと位置づけている活動を単数回答でたずねた(図表(1) - 2)。

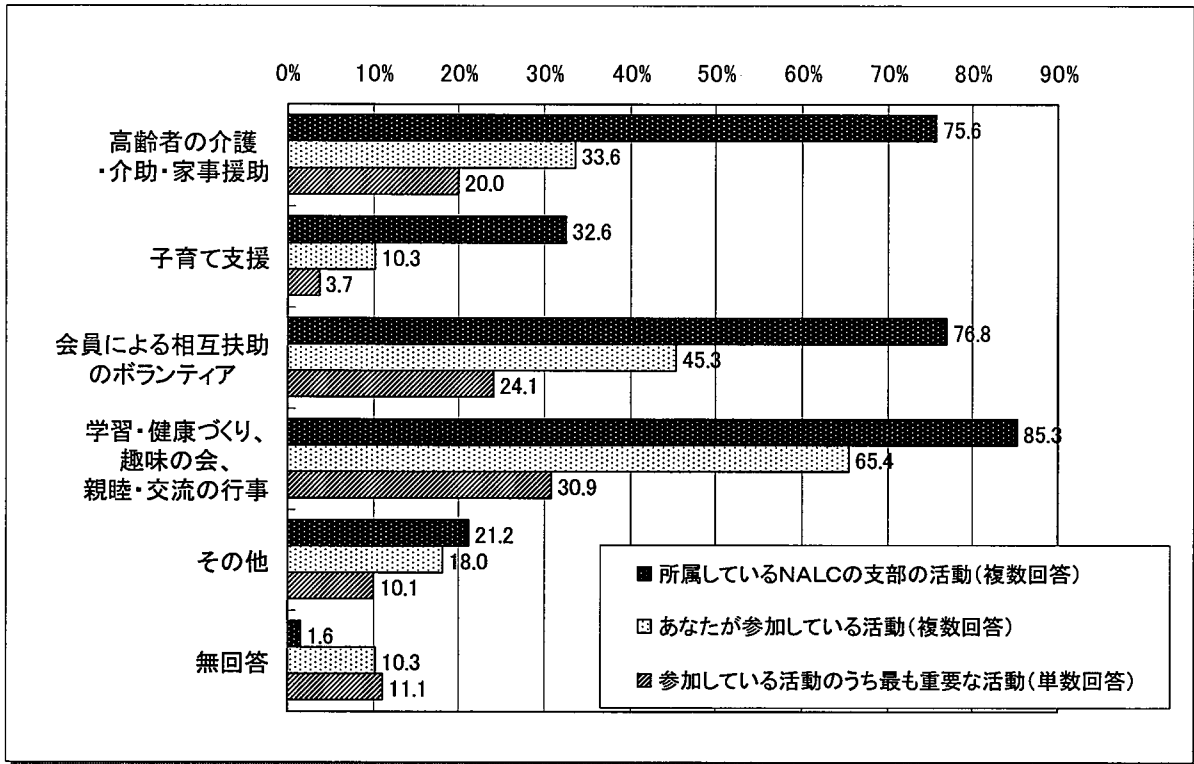
NALCの活動の柱は、時間預託制度(会員相互の助け合い活動の中で活動した時間を預託し、自分に対しての活動が必要な時に預託した時間を使い、その活動を受けられる制度)を運営するためのボランティア活動である。各支部の活動としては、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」が85.3%、「会員による相互扶助のボランティア」が76.8%、「高齢者の介護・介助・家事援助」が75.6%と、この3つの活動が概ね各支部の中心の活動となっている。

ここで、参加している個人の活動をみると、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」に参加する対象者は、65.4%が行っているのに対して、「会員による相互扶助のボランティア」は45.3%、「高齢者の介護・介助・家事援助」については33.6%となっている。

その参加する活動の中で最も重要な活動については、「学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事」の活動だと考える人が30.9%、「会員相互による相互扶助のボランティア」では24.1%、「高齢者の介護・介助・家事援助」では20.0%と続いている。

図表(1)－2 活動の内容

n=1,351 (％)



参加している個人にとっての最も重要な活動については、男女間及び都市規模間においても違いが表れている(図表(1)－3)。

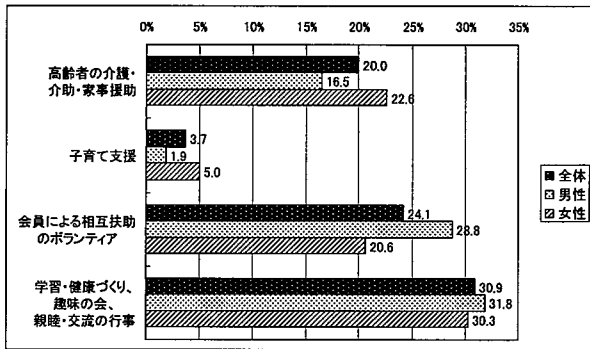
「高齢者の介護・介助・家事援助」においては、男性が16.5%なのに対して、女性が22.6%となっている。また「会員による相互扶助のボランティア」については、男性が28.8%なのに対して、女性が20.6%とその意識に違いが表れている。

都市規模間で比較すると、「高齢者の介護・介助・家事援助」において、「23区・政令指定都市」では28.7%であったのに対して、「その他の市」17.2%と「郡部」17.6%となっており、都市における高齢者問題の大きさを表しているのではないと思われる。

図表(1)－3 活動の内容(男女別、都市規模別)

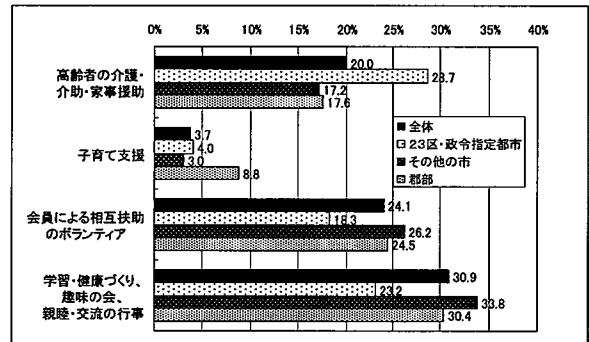
(i) 男女別

n=男性576、女性775 (％)



(ii) 都市規模別

n=23区・政令指定都市328、その他の市921、郡部102 (％)



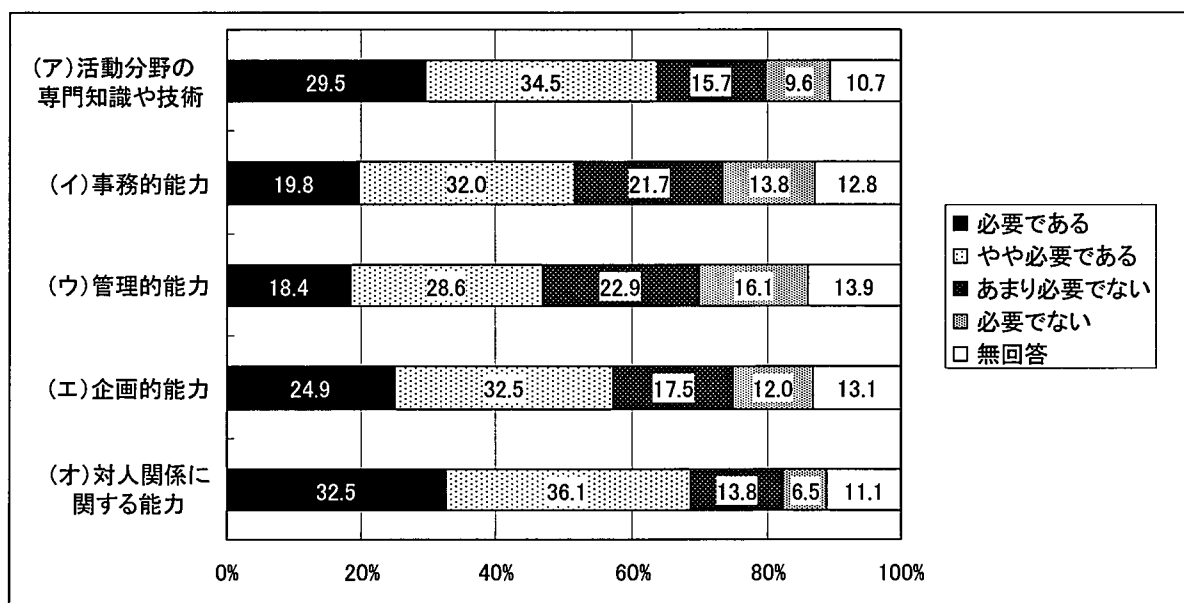
③活動への必要能力[問4(ア)～(エ)]

上記での活動状況を踏まえて、現在の活動について5項目あげ、能力の必要性についてたずねた〈図表(1)－4〉。

活動において「必要である」とした能力では「(オ) 対人関係に関する能力」が 32.5%と比較的多い結果となり、「(ア) 活動分野の専門知識や技術」が 29.5%、「(エ) 企画的能力」24.9%と続いている。「やや必要である」を含めた肯定的な意見においても、「(オ) 対人関係に関する能力」が 68.6%と最も高い数字となった。上記での「活動内容」における活動が、対人コミュニケーション能力の重要性が高いことが表れているものと思われる。逆に「必要でない」および「あまり必要でない」との否定的意見では、「(ウ) 管理的能力」が 39.0%となっている。活動における必要能力は、各自の役割や立場で異なるものの、全体としては、専門的な知識よりもむしろ折衝力や礼儀などといった基本的なことが最も必要とされているようである。

図表(1)－4 活動の内容

n=1,351 (%)



④活動への評価[問5]

この設問においては、各対象者が参加しているNALCでの活動について8項目をあげ、どのような認識を持っているかをたずねた〈図表(1)－5〉。

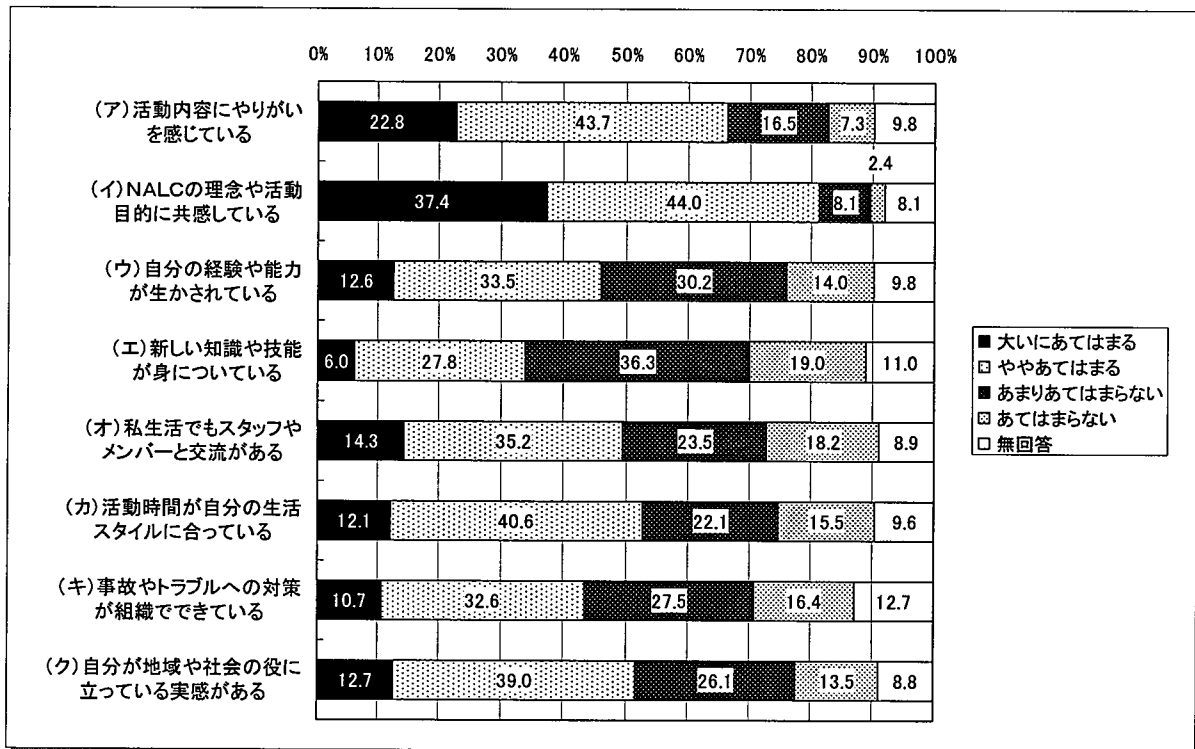
「大いにあてはまる」においては、「(イ)NALCの理念や活動目的に共感している」が 37.4%と最も高く、続いて「(ア)活動内容にやりがいを感じている」(22.8%)も比較的多くの人が該当する結果となっている。「大いにあてはまる」と「ややあてはまる」の肯定的意見と「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の否定的意見との比較では、上記同様に「(イ)NALCの理念や活動目的に共感している」(肯定 81.4%、否定 10.5%)と「(ア)活動内容にやりがいを感じている」(肯定 66.5%、否定 23.8%)の2つが、肯定否定の差において顕著に表れ、参加者の評価が高くなっている。

逆に評価の低い項目については、「あてはまらない」においては「(エ)新しい知識や技能が身についている」が 19.0%、「(オ)私生活でもスタッフやメンバーと交流がある」が 18.2%とな

っており、「あまりあてはまらない」との合計では、「(エ) 新しい知識や技能が身についている」において、55.3%と過半数以上の人が否定的な回答をしている。これは、NALCという場を通じて、新たな経験を積むというよりはむしろ、シニア層にとってやりがいや自己実現の場として社会参加を考えている傾向が表れているのではないだろうか。

図表(1)－5 活動への評価

n=1,351 (%)



活動に対する評価についてのデータを年代別に集計してみた(図表(1)－6)。年代別に特徴がでている項目の一つには、「(オ) 私生活でもスタッフやメンバーと交流がある」である。「大いにあてはまる」では、70歳以上では19.9%となっており、年齢が上昇するにつれて、60～64歳が13.2%、65～69歳が15.6%と徐々に増加している。これは、「ややあてはまる」を含めた肯定的意見からも同様のことが見受けられ、参加の年齢が高まるにつれ、メンバーとの交流も深まっていくことが言える。

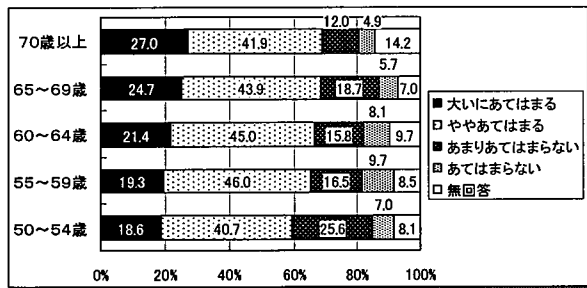
そして「(ア) 活動にやりがいを感じている」については、明らかな年代別変化ではないが、「大いにあてはまる」については、60～64歳では21.4%、65～69歳24.7%、70歳以上が27.0%と年齢上昇とともに増加している。これは「ややあてはまる」を加えた肯定的意見においても66.4%(60～64歳)、68.6%(65～69歳)、68.9%(70歳以上)となっておりほぼ同様の年代別の変化がある。ここにおいては年齢が上昇するにつれて、活動に対する評価が高まっていることが伺われる。

さらに「(ウ) 自分の経験や能力が活かされている」についても、肯定的な意見において、44.8%(60～64歳)、47.8%(65～69歳)、50.2%(70歳以上)と年齢とともに評価が上がっており、活動の幅の広がりや(ア)での「やりがい」に繋がっているように思われる。

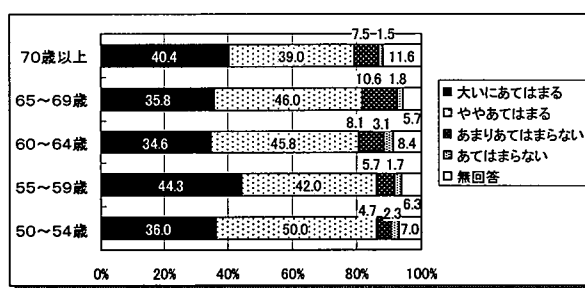
図表(1)－6 活動への評価 (年代別)

n=70歳以上 267、65～69歳 385、60～64歳 393、55～59歳 176、50～54歳 86 (%)

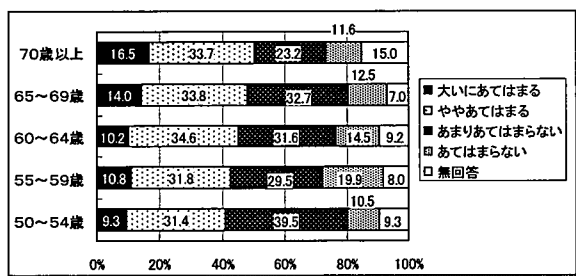
【ア】 活動内容にやりがいを感じている



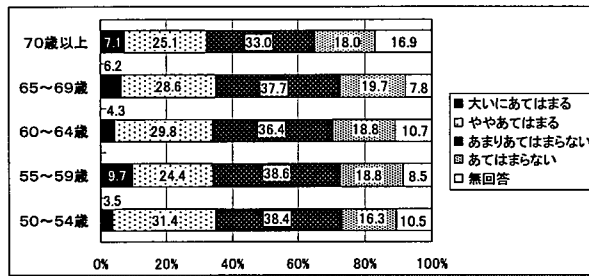
【イ】 NALCの理念や活動目的に共感している



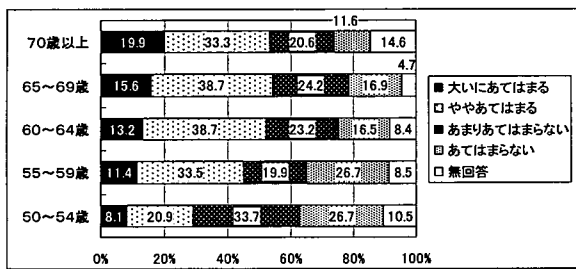
【ウ】 自分の経験や能力が生かされている



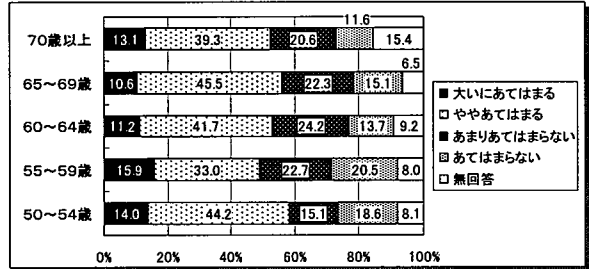
【エ】 新しい知識や技能が身についている



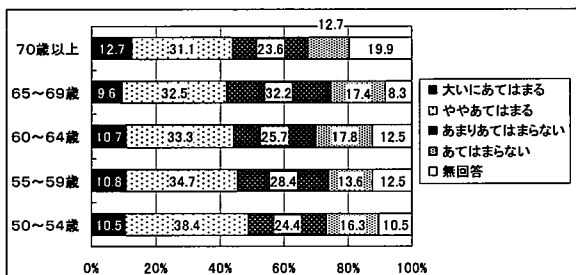
【オ】 私生活でもスタッフやメンバーと交流がある



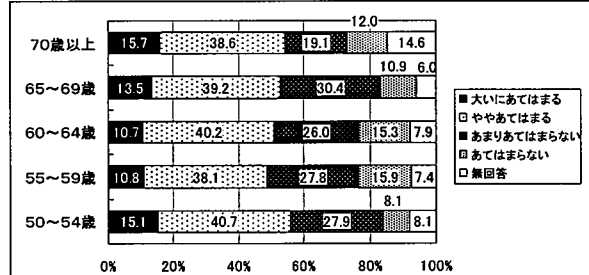
【カ】 活動時間が自分の生活スタイルに合っている



【キ】 事故やトラブルへの対策が組織できている



【ク】 自分が地域や社会の役に立っている実感がある



⑤参加の障害[問6]

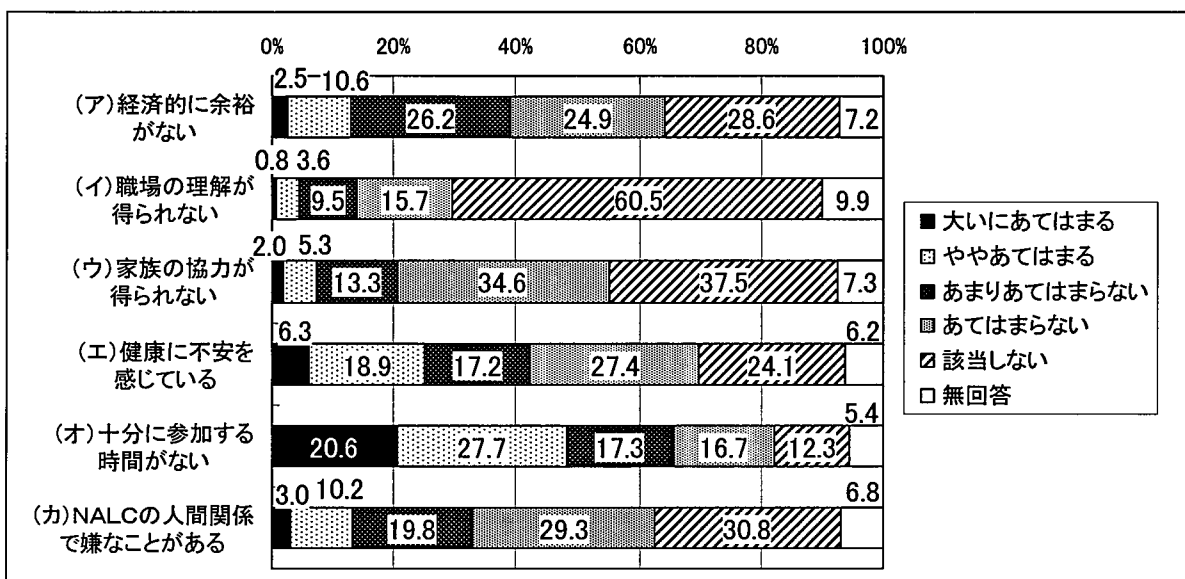
ここでは、活動に参加するにあたり障害となっているものについてたずねた〈図表(1)－7〉。

この調査では継続した活動を行っている人を対象にしているため、概ね肯定的な意見が少ないものと予想されてはいた。結果では、「大いにあてはまる」との回答が最も多かったのが、「(オ)十分に参加する時間がない」で20.6%あった。そして「ややあてはまる」を含めての肯定的意見については、同項目の48.3%、次いで「(エ)健康に不安を感じている」で25.2%となっており、「(ア)経済的に余裕がない」、「(イ)職場の理解が得られない」、「(ウ)家族の協力が得られない」については、ほぼ10%以下であった。

これによれば、社会参加活動を行う上では、ある程度経済的に余裕のある状況で家庭や職場の理解をもとに行われており(但し、約6割は未就業)、年齢に応じて自分の時間や健康との兼ね合いを調整しながら活動をしていることが伺える。

図表(1)－7 活動参加の障害

n=1,351 (%)



参加するにあたり障害としてあげている「(エ)健康に不安を感じている」と「(オ)十分に参加する時間がない」について、年代別の肯定的意見をグラフにしてみる〈図表(1)－8〉。

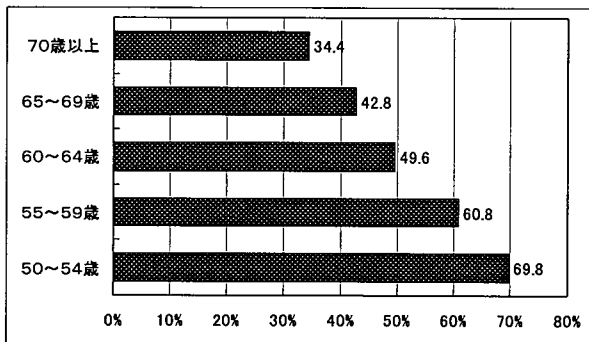
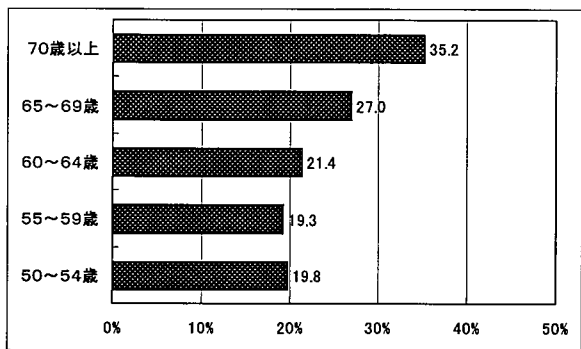
健康については、年齢とともにその不安が増大している。逆に、時間については、年齢が上がるにつれ障害と感じる人が減っており、時間に対する社会参加の優先度が年齢とともに上がってくる可以说。ただ、50歳代の6割を超える大部分の人が、時間的に満足する活動を行えていないことには、家庭的なことや仕事等で費やす時間の優先度が高いことが推測される。

図表(1)－8 活動参加の障害 (年代別:「大いにあてはまる」と「ややあてはまる」の合計)

n=70歳以上 267、65～69歳 385、60～64歳 393、55～59歳 176、50～54歳 86 (%)

【エ】健康に不安を感じている

【オ】十分に参加する時間がない



⑥活動の意味[問7]

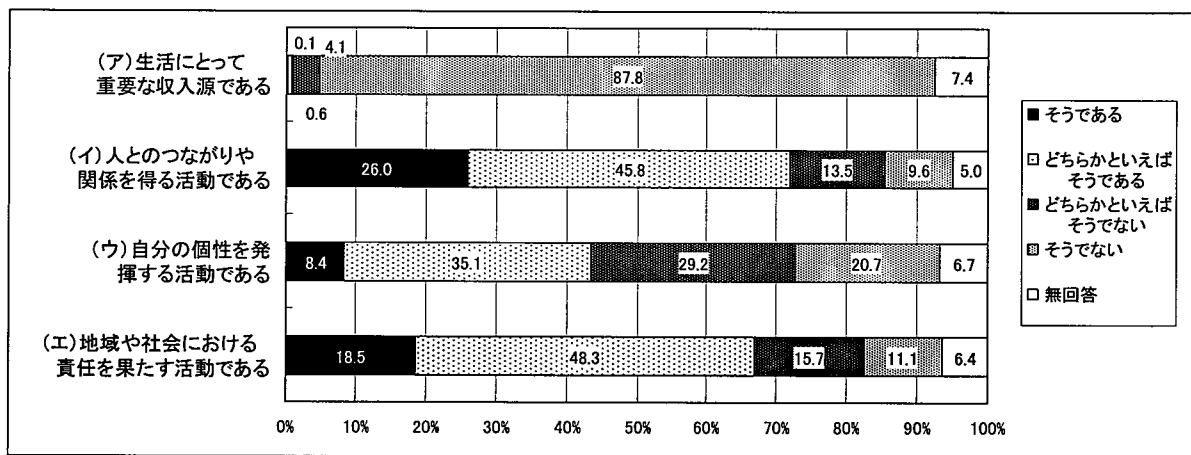
NALCでの活動の目的及び位置づけについてたずねた〈図表(1)－9〉。

「(ア)生活にとって重要な収入源である」については、ボランティア団体としての性格上、収入を目的として活動は行っていない結果である。

この設問の中では、「(イ)人とのつながりや関係を得る活動である」と捉えている人が、「そうである」で26.0%、「どちらかといえばそうである」を含めると、71.8%の回答が得られた。同様に肯定的意見が多かったのが「(エ)地域や社会における責任を果たす活動」であり、「そうである」が18.5%、「どちらかといえばそうである」を加えて66.8%となっている。NALCでの参加活動が、人とのつながりや自分の自己実現を発揮するネットワークの場として位置づけられているようである。

図表(1)－9 活動参加の意味

n=1,351 (%)



⑦今後の活動[問8]

これからの活動についての方向性についてたずねた〈図表(1)－10〉。

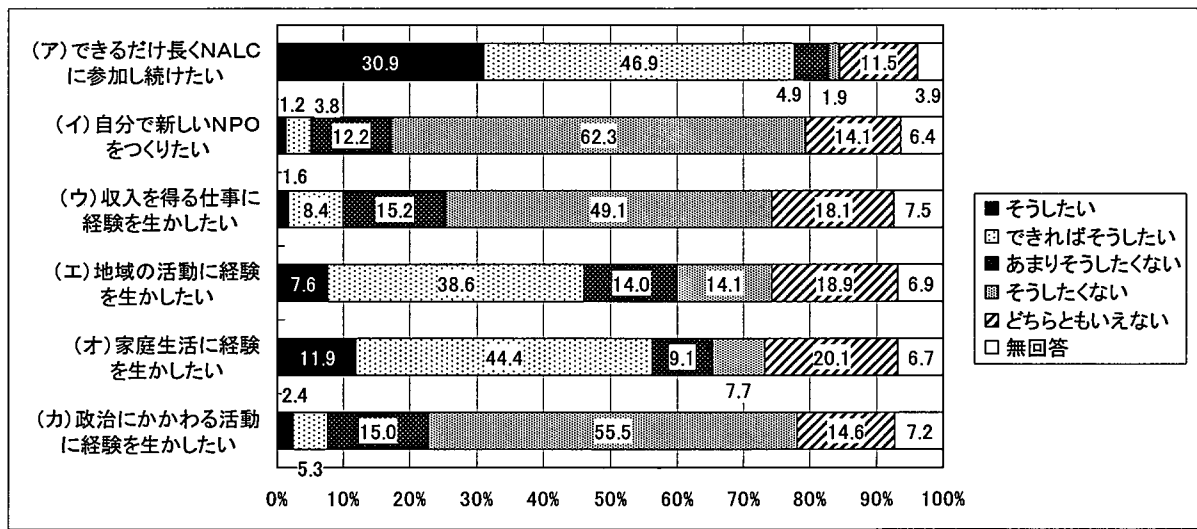
「そうしたい」と「できればそうしたい」を含めた肯定的な意見については、「(ア)できるだけ長くNALCに参加し続けたい」が77.8%、「(オ)育児や介護など、家庭生活にNALCの

経験を生かしたい」が 56.3%、「(エ) 町内会や自治会など、地域の活動にNALCの経験を生かしたい」が 46.2%となっている。

また反対に「あまりそうしたくない」と「そうしたくない」の否定的な意見については、「(イ) 自分で新しいNPOをつくりたい」の 74.5%、「(カ) 議会や政党など、政治にかかわる活動にNALCの経験を生かしたい」の 70.5%、及び「(ウ) 企業での仕事や自営業など、収入を得る仕事にNALCの経験を生かしたい」の 64.3%とほぼ同程度の回答があった。現在の活動についての評価は高く、今後もNALCに参加し続けたいという意見が大勢であるが、その活動内容については、家族や地域など、自分の身近な問題を中心に関わりを持っていくとしているようである。

図表(1)－10 今後の活動

n=1,351 (%)



(2) 家族との関係

① 日頃の夫婦関係[問9]

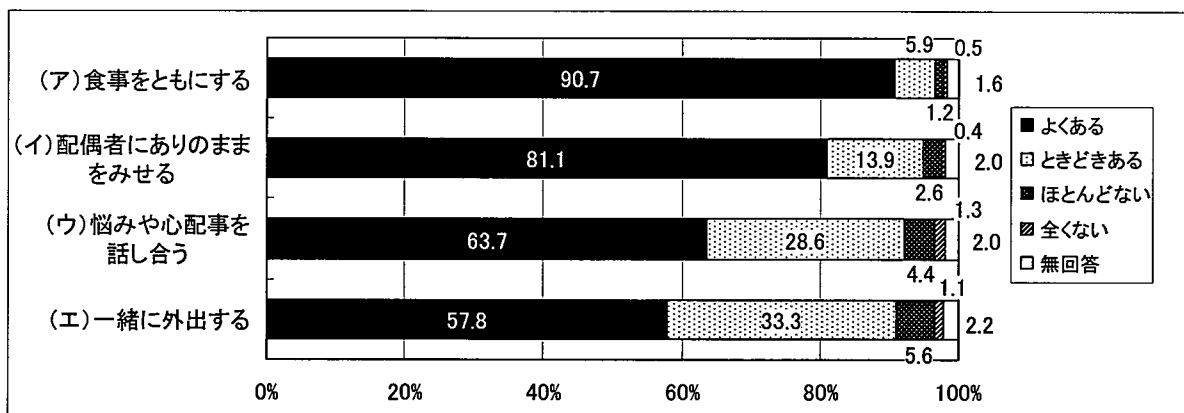
ここでは、夫婦関係についてたずねた〈図表(2)－1〉。

調査集計からは、「よくある」については、「(ア) 食事をともにする」の 90.7%、「(イ) 配偶者にありのままを見せる」の 81.1%、「(ウ) 悩みや心配事を話し合う」63.7%、「(エ) いっしょに外出する」57.8%となっている。ここからは、NALC参加者の夫婦の親密度がかなり高いことが伺われる。

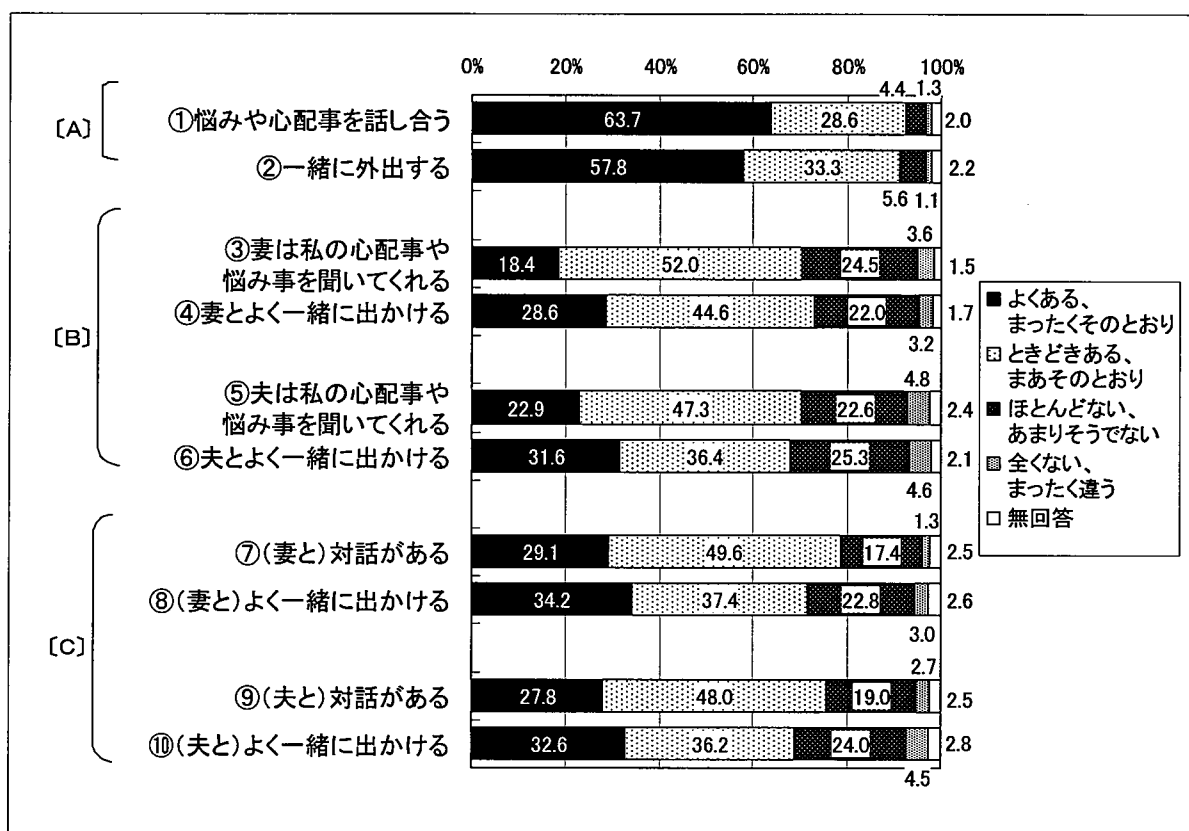
参考に、当財団で行われた『「サラリーマンの生きがい」に関する調査(注1)』と、「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査(注2)」の二つの調査で、一般のサラリーマンを対象として、ほぼ同様の設問がなされている〈図表(2)－2〉。夫婦関係については、一般的に社会参加をしている夫婦は親密度が高くなる傾向にあり、「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」では「家族外領域の社会的活動が、それぞれの夫婦の親密性認知得点を高める方向に作用する可能性が示唆」されたが、同様の傾向を示しているものと思われる。

図表(2)-1 夫婦の関係

n=1,134 (%)



図表(2)-2 夫婦との関係(過去の調査との比較)



[A] ①②今回調査 [問9 (ウ) (エ)]

[B] ③~⑥2003年調査「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」

③④は本人調査 (n=787)、⑤⑥は配偶者調査 (n=747)

[C] ⑦~⑩2002年調査第3回「『サラリーマンの生きがい』に関する調査」

⑦⑧は本人調査 (n=2,597)、⑨⑩は配偶者調査 (n=2,525)。

・各調査での選択肢の表現が一致していないが、便宜上、「よくある」と「まったくそのとおり」、「ときどきある」と「まあそのとおり」、「ほとんどない」と「あまりそうでない」、「全くない」と「まったく違う」を同義と解釈して表を作成する。

(注1) 財団法人 シニアプラン開発機構 調査報告書「第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査 サラリーマンシニアを中心として(平成14年9月)」における調査。35～74歳の就業者を中心とした男女及びその配偶者、計4,505名を対象に実施。

(注2) 財団法人 シニアプラン開発機構 調査報告書「少子高齢社会におけるサラリーマンの生活・就業スタイルの多様化に関する研究(平成15年3月)」における調査。35～69歳の就業者を中心とした男性及びその配偶者、計2,000名を対象に実施。

②夫婦関係のあり方[問10]

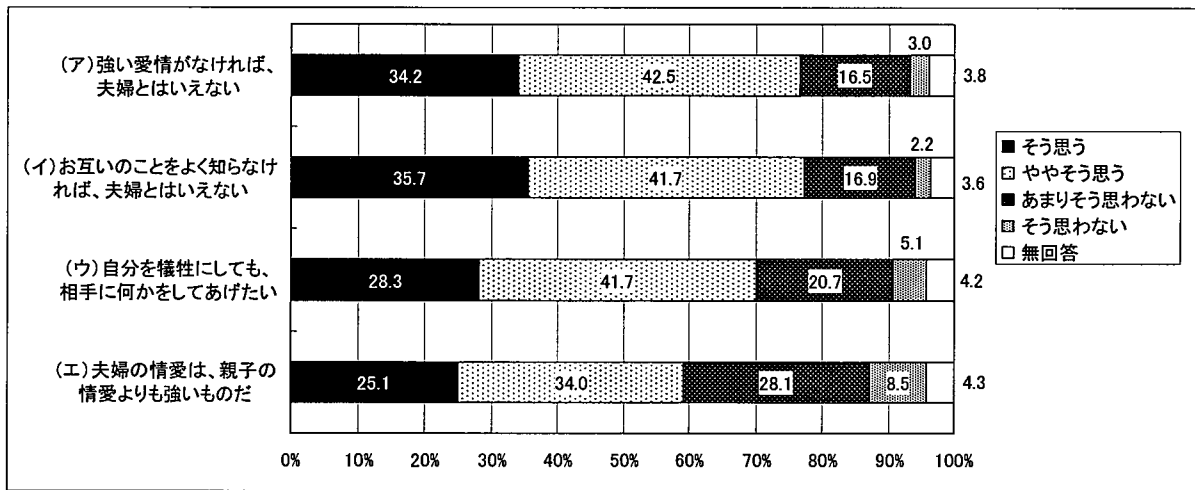
ここでは、夫婦関係をどのようなものと考えているか、たずねた(図表(2)－3)。

4つの設問に対する意識をたずねたものであるが、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた肯定的な考えを、「(ア)強い愛情がなければ、夫婦とはいえない」、「(イ)お互いのことをよく知らなければ、夫婦とはいえない」、そして「(ウ)自分を犠牲にしても、相手に何かをしてあげたい」については、約7割が持っていた。「(エ)夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ」については、若干少なく6割弱との結果であった。

ここでは、男女の意識の差に開きが見られる(図表(2)－4)。各設問とも「そう思う」と「ややそう思う」の肯定的意見では、男女のほうは女性よりも、10ポイント以上の高く、特に「(ウ)自分を犠牲にしても、相手に何かをしてあげたい」「(エ)夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ」は20ポイント前後夫婦の意識の差に開きがある。(ウ)と(エ)の比較においては、夫婦間と親子間の情愛の強さのある一面を表しているのだが、男性と比べて女性は子供に対する情愛の意識が高いことを示しているものと思われる。

図表(2)－3 夫婦の関係

n=1,351 (%)

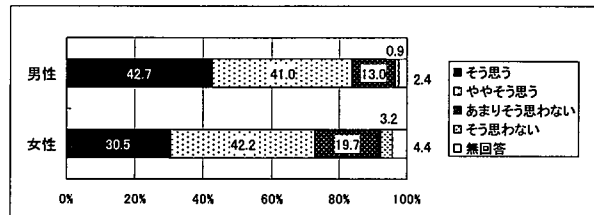
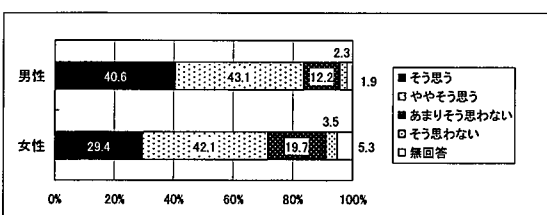


図表(2)－4 夫婦の関係(男女別)

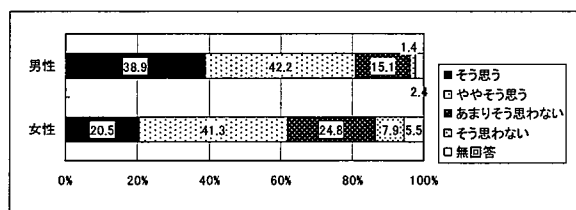
n=男性576、女性775 (%)

【ア】強い愛情がなければ夫婦とはいえない

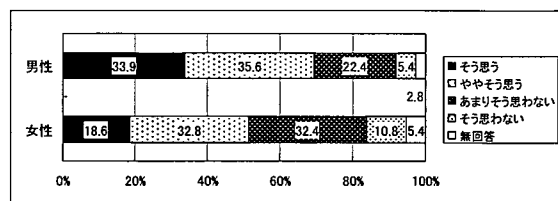
【イ】お互いのことをよく知らなければ夫婦とはいえない



【ウ】自分を犠牲にしても、相手に何かをしてあげたい



【エ】夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ



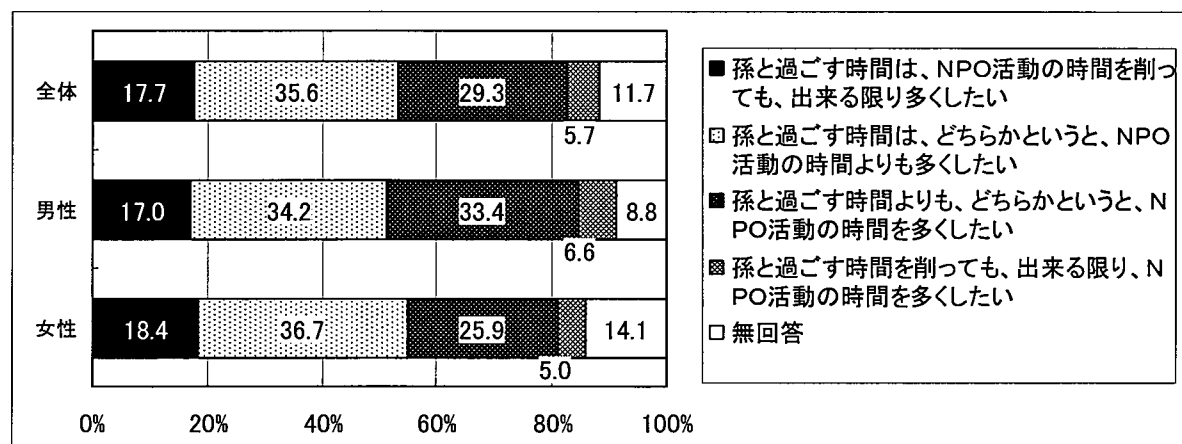
③孫との関係[問11付問(2)]

ここでは、孫がいる参加者に、孫と過ごす時間についてたずねた（図表（2）－5）。

自分の時間の中に占める家族との関係、特に孫との関係において、孫と過ごす時間と現在の活動を行う時間の優先度合では、全体として「孫と過ごす時間を、どちらからと言うと、NPO活動の時間よりも多くしたい」が35.6%と高く、次に「どちらかと言うと、NPO活動を多くしたい」の29.3%となっている。ここでの男女差は大きくはないが、NPO活動に費やす時間については「どちらかと言うと多くしたい」と「出来る限り多くしたい」という、孫よりもNPOの活動を重視する考えは、男性が40.0%であるのに対して、女性が30.9%となっており、男性と女性では、NPOと孫についての時間の優先度合に違いが表れている。

図表（2）－5 孫との関係

n=806 (%)



④孫の育て方[問11付問(14)]

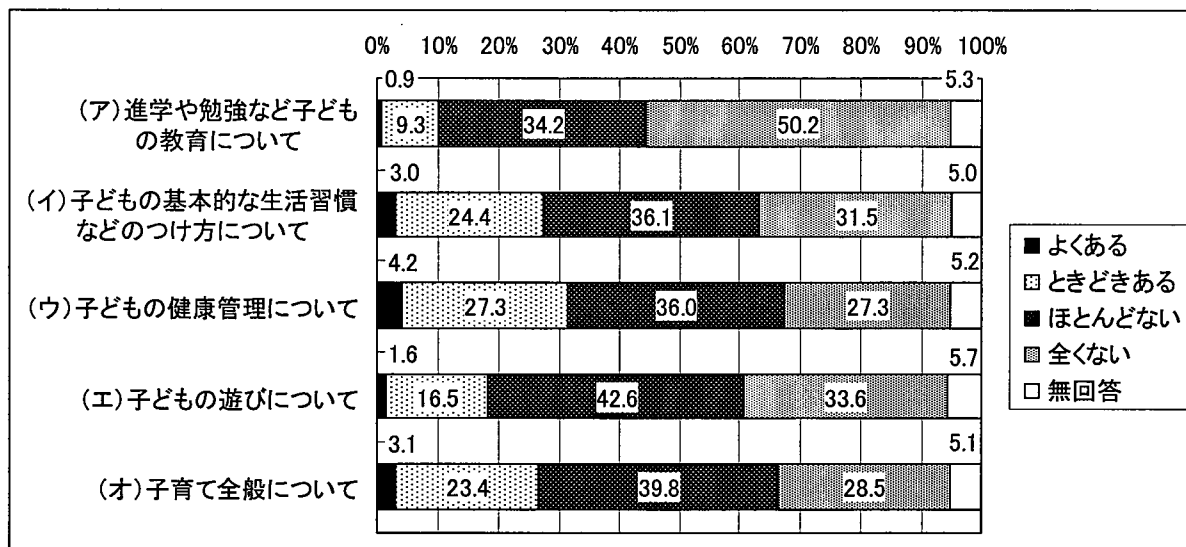
ここでも孫のいる該当者に対して、比較的に接する機会が多いであろう最年少の孫の育て方に関して、孫の親（自分の子供）夫婦との意見の対立の有無を5項目たずねた（図表（2）－6）。

ここからは「ほとんどない」と「全くない」の否定的意見について約7、8割を占めており、孫の育て方については、意見の対立をするという強い関与までは行わない傾向にあることがわかる。

ただ、この中でも「(イ)子供の基本的な生活習慣などのつけ方」、「(ウ)子供の健康管理」、「(エ)子育て全般」の3項目については、「よくある」と「ときどきある」を合わせた肯定的意見で比較的多く、3割前後が意見の対立があることが分かる。孫の育て方については、自分自身の経験則や、社会生活を営む上での基本的なことなどについて、比較的意見の対立があるものの、全般的にはある程度の距離感をもって対応しているようである。

図表(2)－6 孫との関係

n=806 (%)



(3) 日常生活

① 信頼をしている人との関係 [問12]

NALCに参加する人の社会生活における状況をたずねた (図表 (3) - 1)。

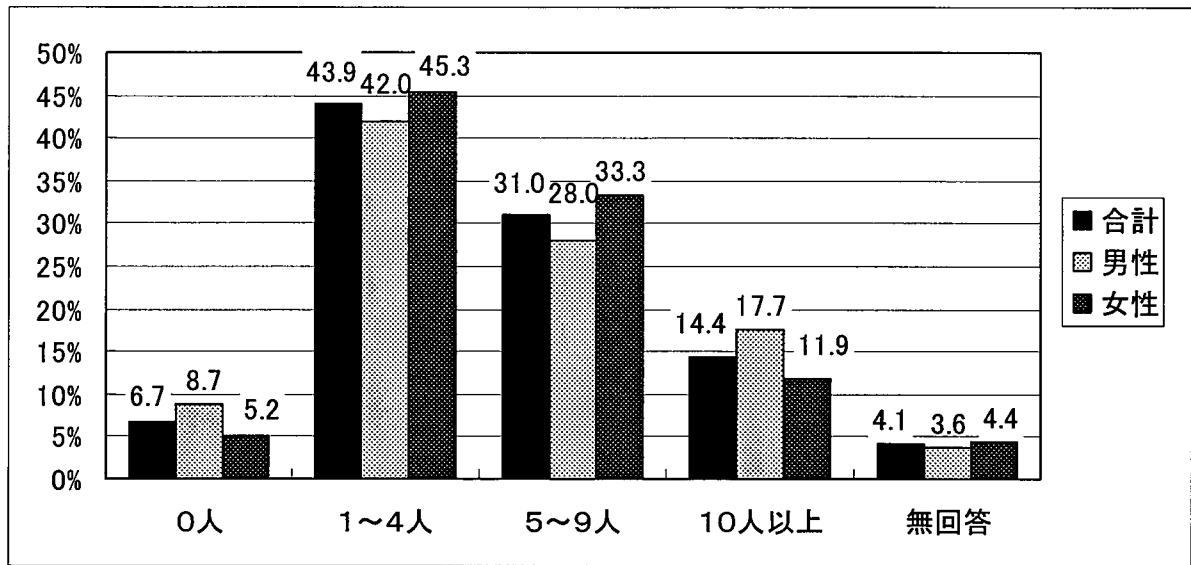
ここにおいては、日常生活で困難な状況に陥ったときの相談者の人数について聞いた。全体では、1～4人が43.9%、5～9人が31.0%となっている。男女間での違いについては、「家庭以外に信頼して相談できる人」がいないのは、男性(8.7%)のほうが女性(5.2%)に比べて高く、女性のほうが「家庭以外に信頼して相談できる人」を持っているようである。

また、この相談できる人がNALC内に何人いるか、さらにたずねた (図表 (3) - 2)。

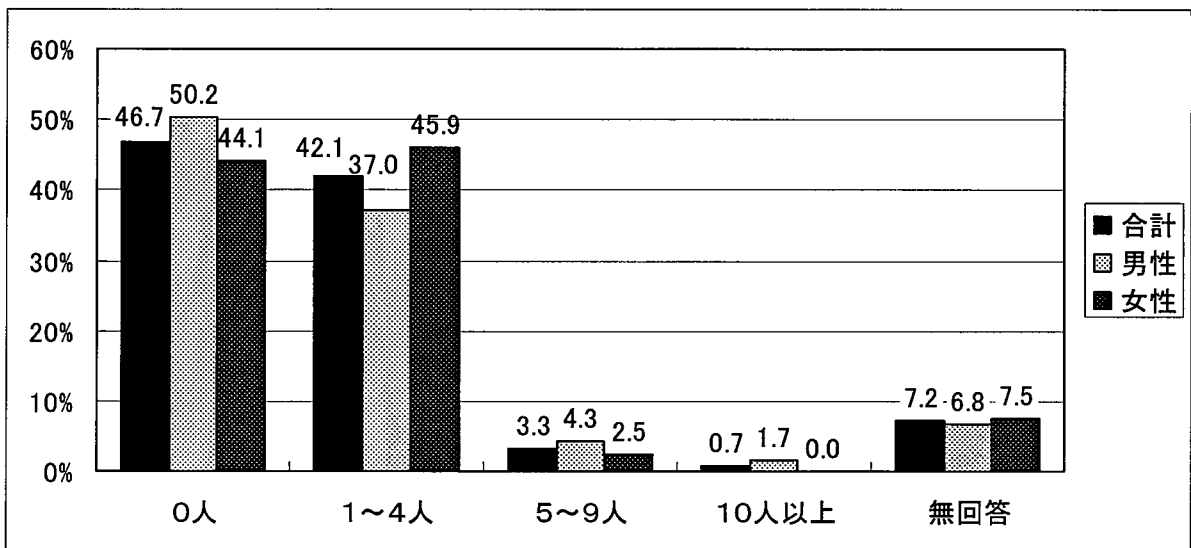
ここでは、ともに活動をしている中で、困ったことを相談出来る関係をNALC内で築いているかを探ったものである。結果は、46.1%がNALCの中に信頼できる人を持っていた。

ここで、相談者がNALC内にいる人の年齢分布を図 (図表 (3) - 3) にすると、55～59歳の間を除き年齢が上昇することにより、その数が増えていくことがわかる。年齢の上昇とともに、NALCという活動の場で私生活での信頼関係を築いていくことが伺われる。

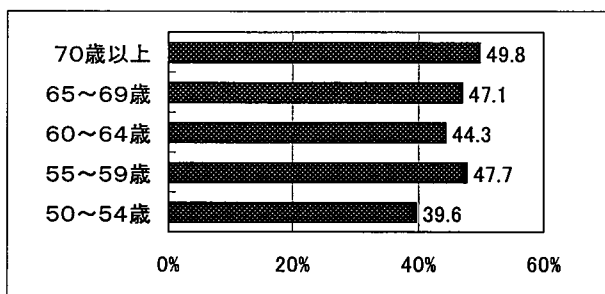
図表(3)－1 日常生活で困ったことが起きたとき、家族以外に信頼して相談できる人 n=1,351 (%)



図表(3)－2 日常生活で困ったことが起きたとき、家族以外に信頼して相談できる人のうち、NALCで活動している人は何人か n=1,351 (%)



図表(3)－3 家族以外に信頼して相談できる人のうち、NALCで活動している人の年齢分布 n=70歳以上 267、65～69歳 385、60～64歳 393、55～59歳 176、50～54歳 86 (%)



②生活に関する満足度[問13]

ここでは、「現在の生活にどの程度満足」をしているかをたずねた（図表（3）－4）。

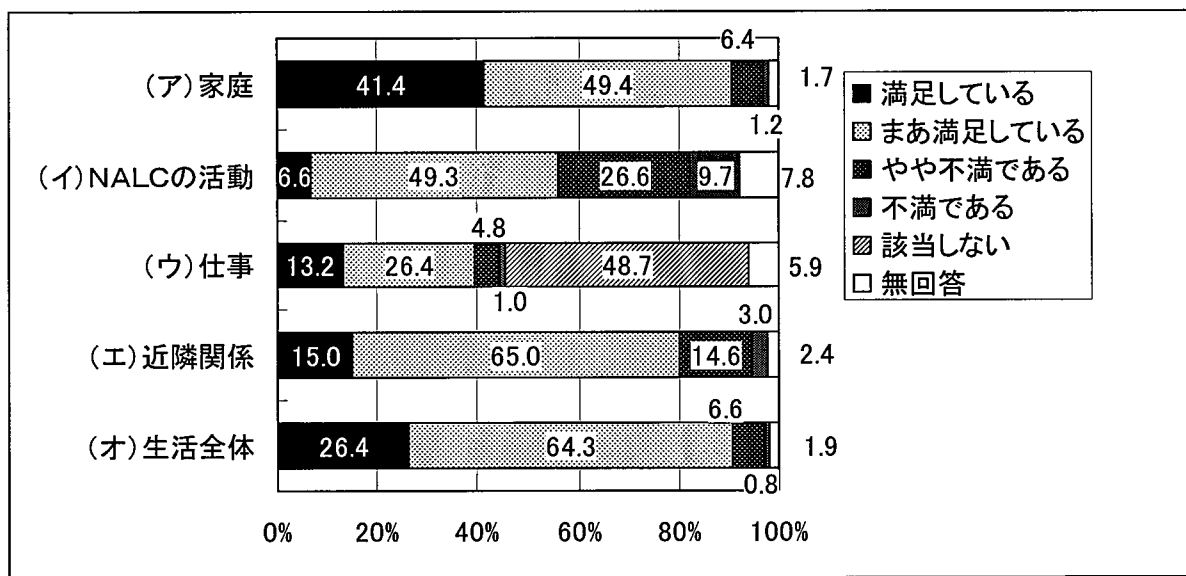
「満足している」の中では、「(ア) 家庭」の41.4%、次に「(オ) 生活全体」26.4%、「(エ) 近隣関係」15.0%と続いている。「まあ満足している」の肯定的な意見においては、「(ア) 家庭」が90.8%、「(オ) 生活全体」は90.7%となっており、大部分が満足している状況が伺える。反対に否定的意見、「不満である」については、「(イ) NALCの活動」9.7%、「(エ) 近隣関係」3.0%である。「やや不満である」を含めた否定意見は、「(イ) NALCの活動」が36.3%、「(エ) 近隣関係」の17.6%となっている。

家庭に対する満足度は、P. 124の「活動参加の障害」の結果からでも、社会参加活動している家庭が比較的協力的である結果がでてきていることから、高い数字として現れているように思われる。「(イ) NALCの活動」に対する否定的回答については、各々の参加者が活動に対して、様々な意見を持っている一面が表れているようである。

「(ウ) 仕事」について、48.7%が仕事に就いていないため「該当なし」は回答者数658名。同回答者を除くと、n=693となり、該当者での回答比率は以下の通りとなる。「満足している」25.7%、「まあ満足している」51.4%、「やや不満である」9.4%、「不満である」2.0%、「無回答」11.5%である。

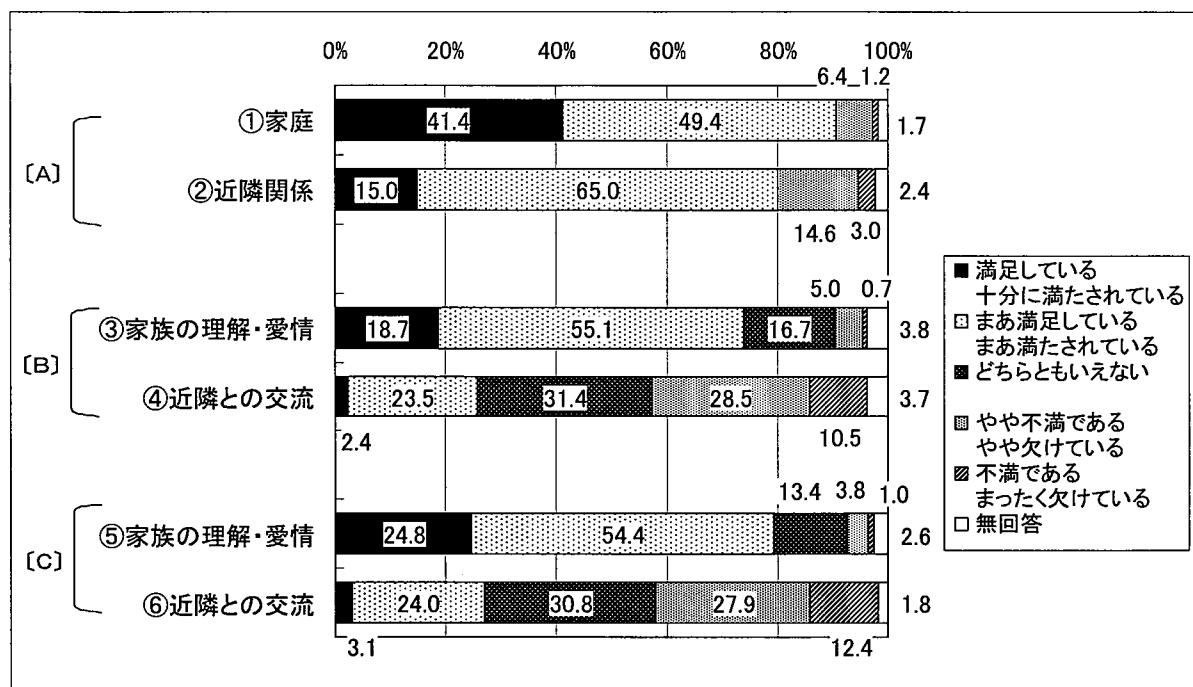
図表(3)－4 現在の生活に対する満足

n=1,351 (%)



参考に、当財団で行った『「サラリーマンの生きがい」に関する調査』（P. 128（注1）参照）と、「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」（P. 128（注2）参照）の過去の調査との比較してみると、「満足している・十分に満たされている」と「まあ満足している・まあ満たされている」との肯定的意見については、「家庭」「家族の理解・愛情」では、多少NALC活動者の方が90.8%と他の調査対象である一般のサラリーマンの調査よりも上回っている（〈図表（3）－5〉③73.8%、⑤79.2%）。「近隣関係」「近隣との交流」については、NALC参加者は満足度の肯定意見が80.0%を占めるのに対して、一般サラリーマン調査ではかなり満足度の低い数字（〈図表（3）－5〉④25.9%、⑥27.1%）がでてくる。

図表(3)－5 現在の生活に対する満足(過去の調査との比較)



[A] ①②今回調査 [問13 (ア) (エ)]

[B] ③④2003年調査「サラリーマンの生活と就業スタイルに関する調査」本人調査 (n=875)

[C] ⑤⑥2002年調査「第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」本人調査 (n=3,189)

・各調査での選択肢の表現が一致していないが、便宜上、「満足している」と「十分に満たされている」、「まあ満足している」と「まあ満たされている」、「やや不満である」と「やや欠けている」、「不満である」と「まったく欠けている」を同義と解釈して表を作成する。今回調査には「どちらともいえない」の選択肢はない。

・(注1)、(注2) 調査詳細については、P.127 図表(2)－2脚注を参照。

(4)政治・行政の意識

①組織・制度への信頼度[問14(1)]

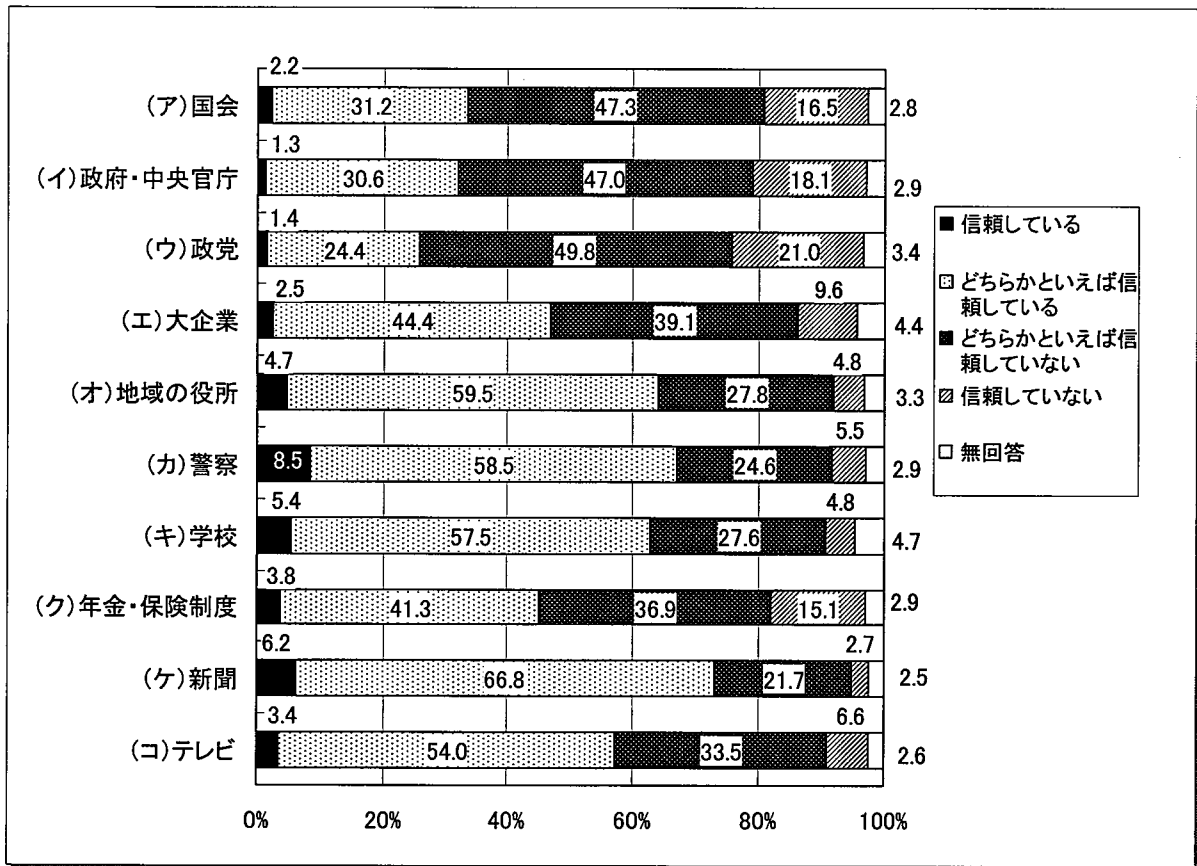
組織・制度・メディアについて、どの程度の信頼を寄せているかを、ここでたずねている(図表(4)－1)。

全体的に強い肯定として「信頼している」の回答は、「(カ)警察」が最も高かったが、8.5%にとどまっている。「どちらかと言えば信頼している」を含めた肯定的意見については、「(ケ)新聞」の73.0%を筆頭に、「(カ)警察」の67.0%、「(オ)地域の役所」64.2%、「(キ)学校」62.9%と続いている。また、強い否定意見として「信頼していない」については、「(ウ)政党」21.0%が最も多く、次いで「(イ)政府・中央官庁」が18.1%、「(ア)国会」16.5%となっている。「どちらかといえば信頼していない」を加えた否定的意見については、同様に「(ウ)政党」が70.8%、「(イ)政府・中央官庁」65.1%、「(ア)国会」63.8%となっている。

この設問は調査時点における社会情勢により、多分に状況が変化するものと思われるが、昨今の政治情勢や、景気情勢などが影響して、「(ウ)政党」「(イ)政府・中央官庁」「(ア)国会」などの信頼度が低かったのではないと思われる。逆に比較的身近で地域との関わりが深い対象については、信頼度が高い数字として表れているようである。

図表(4)ー1 組織・制度・メディアへの信頼度

n=1,351 (%)



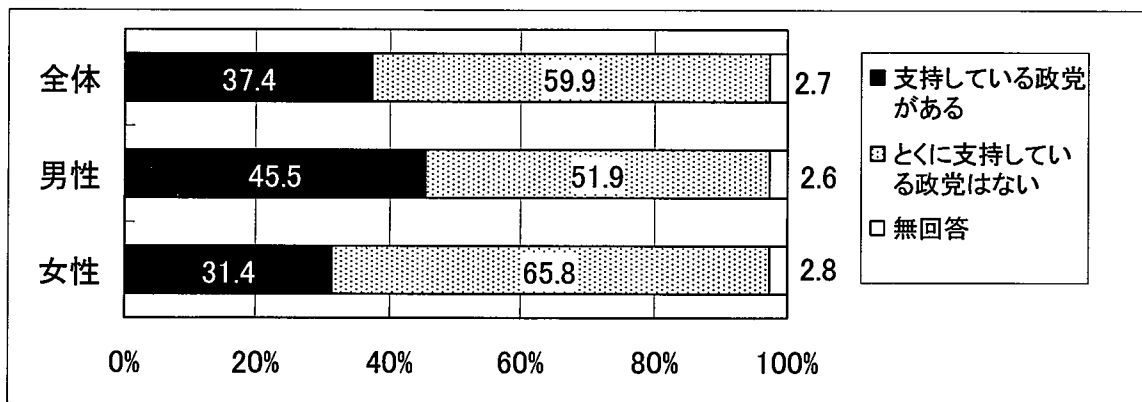
②支持政党の有無[問14(2)]

支持政党の有無についても聞いた〈図表(4)ー2〉。

全体においては、「支持している政党がある」が37.4%、「とくに支持している政党はない」は59.9%となっている。男性と女性との比較については「支持政党あり」で、男性45.5%、女性31.4%と男性が10ポイント以上も高い数字となっている。

図表(4)ー2 支持政党の有無

n=1,351 (%)



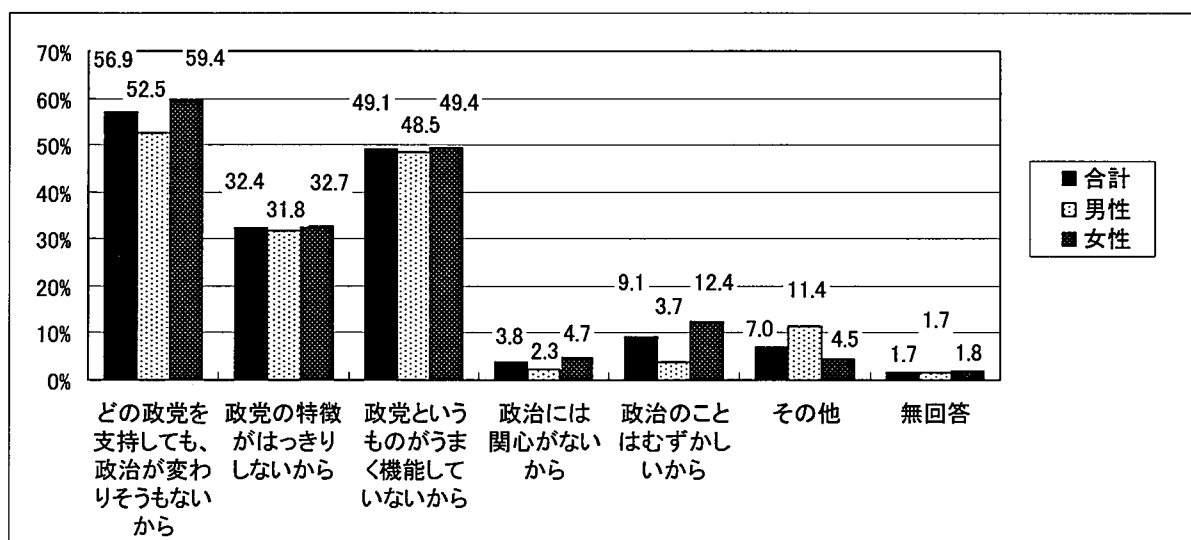
③支持政党のない理由[問14(3)]

先程の設問の中で、「とくに支持している政党はなし」と回答した人に対して、その理由について、2項目まで選択する複数回答形式でたずねた（図表（4）－3）。

ここでの結果は、「どの政党を支持しても、政治が変わりそうもないから」との回答が56.9%と最も多く、次いで「政党というものがうまく機能していないから」が49.1%、「政党の特徴がはっきりしないから」が32.4%と続いている。その他では「政治家に信頼できる人がいない」「政治に信頼性がない」「政党ではなく政治家個人を判断する」などの回答があった。男女間での違いについては、若干差がある項目もあるが、概ね同様の意見を持っていることがわかる。政治、政党に対する閉塞感、不信感などの一端がここでの数字に表れているようである。

図表(4)－3 支持政党のない理由

n=809 (%)



(5)仕事との関係

①職業観[問15]

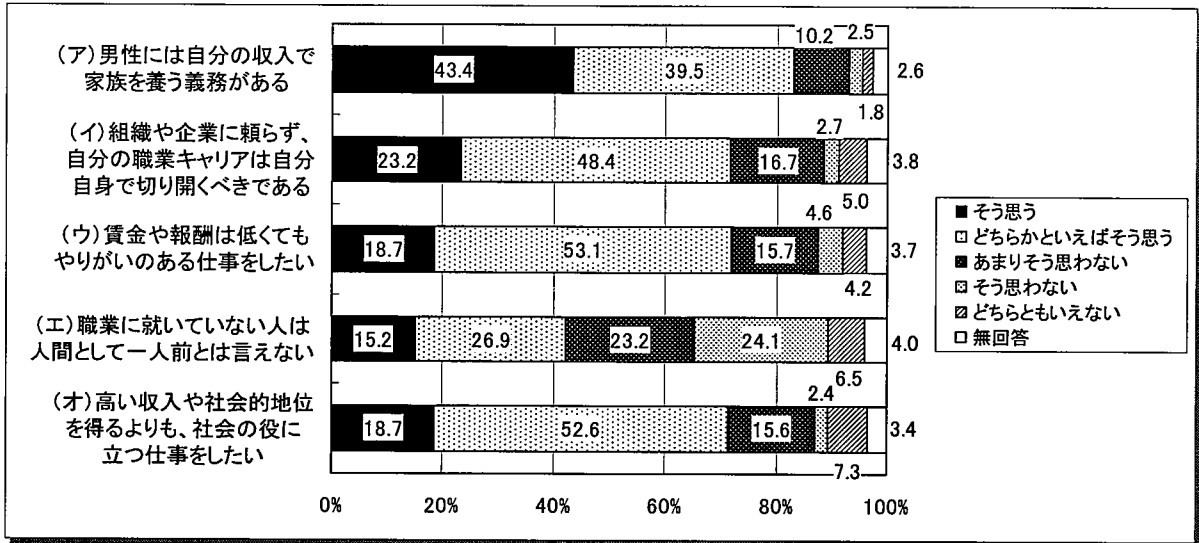
職業（収入を得るための仕事）について、どのような考えを持っているかをたずねている（図表（5）－1）。

「(ア) 男性には自分の収入で家族を養う義務がある」においては、最も「そう思う」と回答が43.4%と多かった。ただ、ここでの男女別での回答分布を見ると（図表（5）－2）、男性での「そう思う」との回答が64.1%と高く、全体での数字を押し上げている。家族における男性自身の役割や責任が影響しているのではないかと考えられる。

全体的に各設問とも、女性に比べ男性の方の肯定度合がより高く、男性と女性の職業に関する意識の差の開きが表れている。特に「(エ) 職業に就いていない人は人間として一人前とは言えない」では、女性の半数以上が否定をしており、これは、女性としての役割（専業主婦に対する評価など）に対する意識が影響しているようである。

図表(5)-1 職業観について

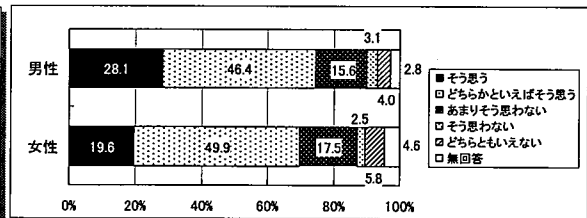
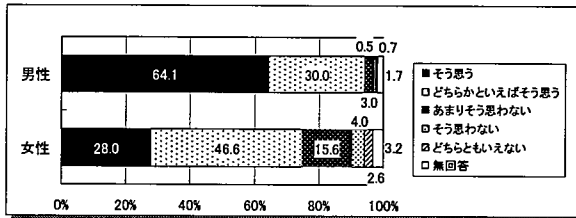
n=1,351 (％)



図表(5)-2 職業観について(男女別)

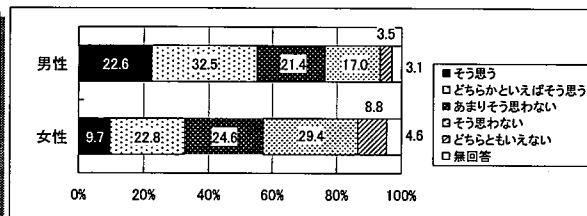
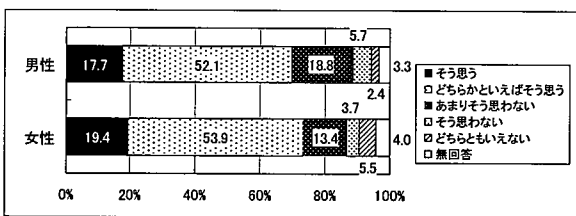
n=男性 576、女性 775 (％)

【ア】 男性には自分の収入で家族を養う義務がある 【イ】 組織や企業に頼らず、自分の職業キャリアは自分自身で切り開くべきである

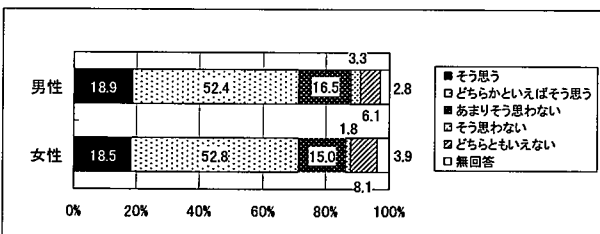


【ウ】 賃金や報酬は低くてもやりがいのある仕事がしたい

【エ】 職業に就いていない人は人間として一人前とは言えない



【オ】 高い収入や社会的地位を得るよりも、社会の役に立つ仕事をしたい



グループインタビュー記録

1. リーダーインタビュー
子育てたんぽぽ
NPO法人 手をつなご
NPO法人 生きがいの会
NPO法人 じょいんと
2. NPO法人 びーのびーの
3. NPO法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ 本部
4. NALC 丹波
5. NPO法人 流山ユー・アイネット
6. 川崎おやじ連

(注) モニターの表示

【例】 A : 女性・30代

A . . . モニター (A・B・C・D . . .)

女性 . . . 性別

30代 . . . 年代

NPO、ボランティアグループのリーダーを中心としたグループインタビュー（4団体5名）

日時：平成15年10月31日（金）

場所：東京都品川区

1. 子育てたんぽぽ（子育て）

- ・乳幼児を持つ親のための子育て支援ボランティア団体（任意団体）。事務局長の渡辺氏が全体の運営を行っているが、同氏が現役で働いているため、NPO化せず、現状の任意団体で活動中。
- ・都市における地域でのつながりが希薄になり、育児やしつけ等に不安や悩みを抱えたままの親が増えていく現状を踏まえ、同年齢の子を持つ親同士の会話、悩みの相談、ストレス解消の場としての広場を提供している。
- ・活動は月に1回江東区内の文化センターで開催。ボランティアメンバーは、助産師、保育士、保護司等で、相談やアドバイスを受けることや、怪我や救急・救命に関する処置、対応等の研修、指導なども行っている。
- ・同氏から行政への働きかけで、区、社会福祉協議会主体で同様の広場づくりが進行中。

2. NPO法人 手をつなご（子育て）

- ・中高年者による子育て支援ボランティア団体（任意団体）での4年半の活動を経て、平成14年、「手をつなご」をNPO法人として設立。
- ・東京都練馬区が拠点。地域での世代を越えた子育て支援を行うことを目的とする。
- ・活動は、「親子のつどいの広場」を週3回開催し、中高年の方が中心となり、子供たちの安全で健全な子育てができるような、地域に根ざした社会づくりを目指す。

3. NPO法人 生きがいの会（介護）

- ・同会は、平成12年に東京都杉並区からデイサービスセンター「松溪ふれあいの家」の運営について受託しているNPO法人。
- ・同区は、少子化に伴い空き教室となった教室を活用する、「住民参加型」のデイサービスセンター構想を立ち上げ、その施設の運営をNPO法人に委託している。その一つが、要介護・要支援者に対するデイサービス拠点としての高齢者在宅サービスセンター「松溪ふれあいの家」である。
- ・生きがいの会は、男性料理教室で知り合った仲間が、地域社会への何らかの貢献を考えていたところ、上記構想に賛同し、平成12年にNPO化した団体。介護の分野では、男性退職サラリーマン中心によりNPOを発足した点で、特徴がある。

4. NPO法人 じょいんと（障害児支援）

- ・平成15年4月に設立した、障害児者とその家族の地域でのくらしをサポートすることを目的とするNPO法人。
- ・千葉県習志野市が拠点。のびのび広場（障害児の学童保育）、訪問介護・居宅介護、支援パートナーの育成及び学習の場の提供などを行う。
- ・同法人は、代表である石津谷氏が、障害のあるお孫さんに対して、自立した生活が送れるような支援を探したが、行政サービスでは対応しておらず、かつ障害児をもつ親も自立するために支援する場が少ないという環境も踏まえて活動開始。平成15年4月に障害者福祉制度が変更したことを機に、NPO化。

● 自己紹介（NPO・ボランティア等を自ら設立した動機・きっかけ・経緯）

（A：男性・子育てたんぽぽ） 私の名刺には「手をつなごうアジアの子供達」と書いてあります。これが私の願いというか、大きな夢です。私の団体はNPO登録をしておらず、個人的な活動、いわゆるボランティア活動ですね。

名刺にはさらに「森を再生させる会」と書いてあります。これはカンボジアで植林活動を依頼されて始めたのが由来で、森を再生させる会としました。本来、私の目指すものは、発展途上国に限らず世界の子供たちに、よりよい育ちの

環境をとということが私の願いです。カンボジアについては、過去の政権下にありました悲惨なニュースを見ていて、何ともたまらない震えを感じて、何とかしてあげたいというのが始まりです。

そこでカンボジアへ行き、支援活動をしたと歩いていたら、ある開発僧に、地域を開発するお坊さんに植林活動を応援してくれという依頼を切々と訴えられました。植林活動を支援するといっても、直接植林もしますが、金銭的支援です。それがその人たちの現金収入となり、生活が成り立ち、子供たちが学校へ行けるという三段論法から、そういう会を6年前に作りました。その他にも、衣類などを集めて送ったり、全国の人に呼びかけたりしました。

そして向こうへ行ってみると、子供たちの目がきらきら輝いていることに非常に感動しました。そこへ行った人は皆さん、子供たちの目が輝いていると同じことをおっしゃいます。振り返ったときに、自分たちの近隣はどうかというと、あまりにも未成年の事件が続いて、今度は虐待というニュースが続いています。これも驚き、子供たちの問題は深刻だと感じました。

(B:女性・手をつなご) NPO法人「手をつなご」と申しまして、子育て支援という形での活動をしています。97年に、本当に子育て支援やNPOとかを考えていない地域の中老年の女性たちで、阪神淡路大震災や神戸の児童殺傷事件があり、ボランティアで何かできるかと考え、子育てができるということで始めました。

私は保育士として25年間、保育園で働き、園長も経験しましたが、何か違うことで楽しみたいと思って定年より10年早く辞めました。主人の都合でシンガポールへ行って、そこでボランティア活動で子供の広場みたいな所で活動していました。それから帰国し、既にリタイヤしていたので、私が保育に参加することはないと考え、普通のボランティア活動をしようと思いました。でも長年子供の世界にいましたので、やはり多少関心がありまして、保育・福祉の研修でカナダでの研修に参加する機会を機に、その活動をしようと思ったのです。

地域の中にボランティアコーナーというものが新しくできたのですが、活用されていなかったもので、中老年の主婦たちでボランティアグループを作ろう、子育てならできるだけだろうとなりました。ただ、私たちは保育をすることが目的ではなく、お母さんたちに楽しい子育てをしてもらいたいと思っていて、リーフレットには初めからこのように書きました。「自由に来てもらって、自由に遊んでもらって、子供とお母さんがお友達を作る、お友達作りのお手伝いをします」ということで始めたのです。もちろんこれはボランティアコーナーの一室をお借りして、私たちも無理なく出来る範囲で、当時は月に2回、10時から14時ということで活動しました。

その後、WACの子育て支援のモデルケースにとのお話を引き受けた後に、事例発表にする機会があり、そのときに厚生労働省の少子化対策の室長にお会いしたのですが、その方が、これが少子化対策の一つになるとお考えになったようで、「手をつなご」を基本にして広場作りを進めていこうと厚生労働省が方針を出たのです。私たちは無理なく楽しい活動だったのですが、見学される方がますます来られるようになり、国の事業として広場活動がなされることになり、私たちのこのままではと思ひましてNPO法人になり、月火金10時から16時での活動をしています。

(C:男性・生きがいの会) 杉並区立高齢者在宅サービスセンター「松溪ふれあいの家」で、私ども「NPO法人 生きがいの会」が運営しています。生きがいの会とふれあいの家の関係は、介護保険制度がスタートする2000年4月に、杉並区で少子化に伴う小中学校の空き教室の活用を考えて、そこを高齢者の在宅サービスにすることになりました。

私が1996年に退職をしたあと、何か地域でと思ったのですが、それまでは家と企業との往復だけでしたから、地域について全く知りませんでした。きっかけはWACの地域コミュニティリーダー、シニアライフアドバイザーという資格があって、そこを家内と同時に受けていました。定年より少し早めに辞めたものですから、私自身地域にとけ込むための準備期間があまりないまま、スタートを切った感じです。

区では、NPOを条件に定年退職の方への機会付与が発想でしたが、その空き教室をデイサービス事業は、定年退職者だけでなく一般公募でしたので、女性のグループの方や民間の方も手を挙げました。その中で、私たちは定年退職者数人が趣味で集るようなグループでして、その公募に手を挙げたら区から運営委託されたのです。現在は区内には同様の施設が5か所あり、その1か所を男性が中心になり作り上げた「生きがいの会」が運営しているのです。

私どもは、介護の問題については全くの素人でした。地域についても分からない状況でしたが、マネジメントについては経験がありましたので、新しい形でNPOを作ることからスタートしました。運営についてはあまり困りませんでしたが、地域に対しての人集めの問題とかネットワーク作りについては、3年経ち、ようやく模索の段階が終わった状況です。経営的には、当初区からの条件は3年で自立ということでしたが、業績的にも目処がついてきています。定員についても20名から今年の3月に25名に増員して頂きました。

どこの施設も利用者の中心は女性ですが、私どものところは75%が男性です。活動としては、マージャン・パソコン・囲碁・将棋とか、その他、女性の方も含めてという感じのデイサービスをやっています。

(D:女性・じょいんと) 習志野市地域で障害児者を支援する会をやっています。この支援を始めるに当たって、今は6歳になる私の孫が、知的障害を持って生まれてきました。その孫と関わるうちに、こういう障害を持って生まれた子供たちのために、誰かが何かをやらねばと思うようになりました。福祉の手だけでは、各々が人間性を持って世間に

出て、自立した生活が送れるには程遠いからです。そうすると個人で何かを立ち上げてという気持ちになったのです。

いろいろと試行錯誤しましたが、たまたまEさんや若者が4～5人が私の理念を理解してくれて、集まりができて、平成14年6月に発足しました。当初は、本当に私の孫の仲間が集まり、自宅を開放しての支援だったのですが、それが地域に広がり、今では本当に收容しきれない規模になっています。

私が当初考えたことは、この子供たちが成長していく段階で地域の中で、施設に入所することは簡単ですが、そうではなくて人間らしく、当たり前前の生活をこの習志野市近辺で出来るものを築きたいということです。そのため、子供たちの個性を、障害ではなく一つの個性として捉える姿勢を理解してくれるスタッフを集めたわけです。その若者たちは、そこをよく理解してくれ、お預かりしている障害児の子供たちはのびのびと楽しく、自宅の3階をプレイルームとして開放してありますので、数時間過ごして帰ります。親が外に連れて行けない場合は、私たちが外にお連れして楽しく過ごさせてあげる。仕事の中身は本当に細かくなりますが、支援される側もする側も学びながら発展しています。

3名で活動が始まりましたが、平成15年4月にNPO化しました。これは、福祉制度が平成15年4月に措置制度から支援費制度に変更したことにより、NPO法人として活動した方がより内容が充実するのではという若者たちの意見を組み入れ、発展したわけです。

(E:女性・じょいと) 私は大学院で障害者の支援を学んでいます、支援活動を何とか地域に広めていけないかと考えていました。それまでは、障害者の施設ではやっていなかったことですから、私一人で一緒にお出掛けしたという活動を、研究と並行してやっていました。Dさんが声を掛けてくださったのがきっかけです。

● フリートーカー (活動の特徴・生き方・働き方・障壁と課題等)

(A) 先ほどの続きになりますが、日本に虐待を受けた子供たちが多くなることは大変だと思い、青梅にある東京恵明学園に行ってみると、ほとんどが虐待を受けていた子供でした。それを児童相談所から引き受けてきたそうです。全国にはそういう施設が553か所、東京都は54か所あります。でも今は入りきれない状況で、それを聞いたときはショックでした。自分でそういう施設を始めねば、子供たちの将来はどうなるのだろうと考えました。

例えば、虐待されて收容されてきた子供たちは、2～3歳ごろはいいのですが、大きくなって收容された子供は一生心に傷が残ります。性的虐待もあれば、ネグレクトもあれば、肉体的虐待、精神的虐待などありますが、とにかく大きくなって発見されて連れて来られた子供は、生涯そういう心の傷が残ります。そして、何かのときにそれが出てくるということです。乳幼児のときに発見された子供は、潜在的には若干残りますが、心の傷は大体忘れていくそうです。それで、何とかせねばと考えていたとき、この子供たちを出さない社会が一番いいのだ、いくら收容しても間に合わないから、子育てを支援する活動が必要であることに気づき「手をつなごう」が始まったのです。

しかし、私は職業を持っています。自分の仕事の一つの大きなネックでした。しかし、もしなければ前へ進まないで、保護士、民生委員、私の友人たちに、始めることを前提に呼びかけました。準備段階では、新澤さん(現日本子どもNPOセンター代表理事)にもお出で頂き、始めたのが「子育てたんぼぼ」です。

私が実質的にも全部運営していますが、私は事務局長という立場をとっています。私が代表やるとなると、全部、私の運営になってしまいますし、別の見方をしてくださる方がいれば、私の行き過ぎをアドバイスしてもらえるかもしれません。また、その方の人間のつながりで、また人が集まるだろうということが自分の発想です。

ただし、職業を持ちながらNPOはとても出来ません。新澤さんからも何度も応援するからという声は頂いているのですが、自分の職業を置いてまでは出来ません。仕事をリタイアできれば、その時点でまた考えます。

(司会:前田) 今はどういうふうに関立しているのですか。

(A) 活動は、月に1回、江東区の文化センターで2時間やっています。会費は1回につき300円で、お子さんを連れて、乳幼児を持つ方々が集まります。スタッフは助産士、保育士、一般の主婦の方で、ほとんどが女性です。男性が運営しているのは珍しいそうですが、参加者となると、男性の方は中々出てこれないのが現状です。集まる人数はそのときによって違います。寒い2月に約4人の時もありましたが、最高51組来られたこともありました。部屋は有料で、行政からは一切もらっていませんので、会費で不足すれば自分たちで払いますが、概ね会費で賄っています。

今は、お母さん方はマンションの一室で、子育てだけの人が多いと思います。かつては近隣が下町社会で、また核家族ではなかったもので、上下の間で子育てを助けてもらえたり、アドバイスがあったり、面倒を見てもらえました。

ところが今、私の近隣では、人口の半分近くがマンション人口になりつつあります。だから、地方出身者にとり、とりわけ社会、地域が遠いのです。隣も知らない人ばかりという環境を見て、こういう広場を作りました。そうすると、近隣との交流や、たわいない会話の中で子育ての不安解消や異常の発見、病院の情報など、助けてもらえます。しかし、それだけでは続かないので、腰痛体操・救急救命指導・本の読み聞かせ・折り紙教室・歯磨き教室とかも行っています。

江東区ではこの実績を基に行政にこの重要性和参加者の満足度を訴えて、同じ広場を人口増加地域の一つ設けること

につながりました。実際、そちらの運営は、社会福祉協議会と行政の子育て関連の部署の人たちが関わることになりました。行政と何度も会を開いて、やっとスタートしました。スタッフは皆さんそれぞれ忙しいので、ほぼ私が一人で手伝いに行く程度ですが、大変喜ばれているので、第2、第3、第4の広場をという運動につながりつつあります。

(司会：前田) Cさんは、どちらかというと高齢者専門の会ですね。

(C) そうです。杉並区の中に、高齢者の認定を受けている方に対する施設が約30か所あり、うち5か所は空き教室でして、運用は委託事業で私どもが受け、3年間で自立できる体制を作ると。平成16年3月までがその期間です。

この活動の始めは、区が定年退職の人たちの健康という講座をやって、たまたまそのグループが集まり、趣味のグループだけでは面白くないから、ちょうど介護保険のスタートの頃でもあり、区では高齢者に対してどういう動きをしているのか、ということを考える仲間を呼びかけるという形から始まりました。当然、今後高齢社会になるということを考えてグループを立ち上げのですが、同じ目的を持った仲間を絞り込んで作り上げたことで時間がかかりましたね。

今、私自身の課題としては、区の方向性が私どもの考える前向きな理解になってきましたから、立ち上げ資金も必要なく、比較的順調な形で進んでいます。これからいざ独立したときに、介護保険の高齢者の方々25名のお世話だけで事業をやっていくにはやはり限界があるなど。もう少し何か別の形のものを、これから自立の方向に向かっては新しい物を取り上げる必要があるな、これが一つの現在の課題だろうと理解しています。

(司会：前田) Bさんのところは厚生労働省から一躍注目されているというお話でしたが。

(B) こういう事態になるとは予測していなかったし、それこそ意気込みもなかったわけです。

ヨーロッパやアメリカ辺りでドロップイン（[参考]drop in・・・「ふっと立ち寄る」）と言われている、施設に親子がふっと立ち寄って、遊んで帰るといったシステムを頭の中に描いていました。ただ、カナダに行きましたとき、いわゆる国境の近辺、山村地域にはないわけです。ドロップインというものは、商店街のモールの中とか、比較的町中にあるのです。そうではないところでは、家庭リソースセンター（家庭情報センター）が車に、おもちゃやカーペットを載せて、教会の空いている部屋、図書館の空いている場所、地域の公民館などに場を設けて、その地域の人が月に2回ぐらいそれを楽しみにして、親子で遊びに来るということを見てきたのです。それで、私どもはまず、地域にボランティアコーナーで、毎回おもちゃとかを車で持って行くことから始めました。それこそカナダの家庭リソースセンターがやってシステムを取りました。

しかし、当時はボランティアグループで、場所代が要りませんでした。おもちゃなども、グループの中で、何かがないという、みんな勝手に何処かから集めてきてしまうのです。だから、資金的には困りませんでした。ところが、NPO法人にすると場所が必要で、そのボランティアグループは法人には貸してくれませんので、自分たちで家を借りる必要がでてきたのです。そこで、資金的な問題が生まれてね。国で広場事業が打ち出されていたので資金的援助が使えらると思っていたら、都は広場事業に手を出さず、都がやらなければ区もやりません。しかたなく私財を使っても考えましたが、ある財団法人から、区を広場事業に巻き込んで行くことを条件に助成金を頂くことができました、3年間なのですが、それで、やっと息をついています。結構そういうところでは厳しかったですね。

私も民生委員をやっているのですが、地域の民生児童委員と市民児童委員と、子供に関係する人達がたくさんいますので、その方を理事の中に皆引き込んだのですが、そうすると、法人立ち上げの時だったのですが、地域の中の子供の問題については私たちがやるのだという意識になりました。資金面での援助については、賛助会員になって頂く方を会員からの紹介と方法をとりました。今は行政も巻き込んでいます。行政が少し私達の方向性に近くなってきたので、次には共同という形ができれば良いなと思っています。

(司会：前田) 出発点は、お金の問題と人の問題がありますね。

(D) 私の場合は自宅を利用しました。自宅を開放しまして2年経ちますが、入っている方も日々の訓練で、やっと住み着くことが出来まして、その方も地域の更生施設に毎日40分かけて歩いて行って、帰ってこられるようになりました。それと、まだ制度の中に認定はされていない、ADHD（注意欠陥多動性障害）やアスペルガー症候群（自閉的精神病）が今、問題になっています。その症状の方は制度で認定されませんが、何とかしなければと思ひ、その病気について学習会を開き、実際、現在は3名のアスペルガーの方を受けています。若い人たちが取り組んで、発進しています。

私たちの特徴は、私は若い人たちだけでないことです。多世代の人たちが支援の手を差し伸べていかなければ地域に根ざさないということを目的としていますので、現在、うちには20代が6名、30代が2名、50代が3名、そして60代が7名関わっています。そして男性のほうが多いのです。障害児というのは、やはりADHD、その他の知的障害、自閉症の子供たちは多動性が多いので、女性ではちょっと扱いにくく、若い男性でなければ対応できませんし、対応の仕方によっては、年寄りでなければいけない子供もいます。今、男性の60歳以上の方には運転ボランティアとし

て、養護学校にお迎え、自宅へお届けとかの送迎を担当してもらっています。女性には、皆さんにヘルパー2級を取ってもらっています。支援費制度になり、2級以上所持しないと子供の支援ができませんからね。

総勢19名のスタッフですが、それでも土曜日、日曜日、夏休み、三連休となると賄えませんが、大学生や短大生、障害に興味を持つボランティアの方たちを集めて対応しています。そのボランティアさんはあくまで介助までしかできませんので、大変な子供さんにはスタッフが介助に入って頂きます。

資金面ですが、建物は自前なので家賃はないのですが、その他にかかります。私たちは、本人が意思疎通できないので、親と支援者との連絡を密にやらねばなりません。受ける日の前日にも、翌日のことを必ず親御さんと打合せを行なっています。だから、すごく通信費のウエートが高くなっています。このことで悩んでいるところです。

そのように資金面でも大変です。私たちも何処か出ないかと思い、補助金、助成金はインターネットから何から全て調べて申請しています。でもうまくはいきませんで、私たちのように小さな規模の団体にはまわってきません。県の補助金を少し頂いているから、それに頼るしかありません。市は、財政事情が厳しいようで補助金は出ておりません。

例えば、制度内の方は支援費で頂きますから、スタッフの給料、経費その他は出ますが、制度外のお子さんなどは、支援費制度上のいろいろな縛りがあって、該当する方はとても少ないのです。その枠外の支援をすると実費負担になってきます。1時間700円頂いていますが、ヘルパーの方に800円支払っていますので、預かれれば赤字です。しかし、そのことより、皆さん頼るところがなくて来てくださる、それにお答えしなければと思い、それこそ私の私財を出してでも何とかやらねばと思い頑張っています。私が困っていても、うちのスタッフたちは皆すごく理解してくれ、協力的ですので、そういう点では、すごく恵まれていて、救われていると思います。

先ほど虐待の問題がありましたが、障害児を持つご家庭では、母親は障害に対する受け入れが来ていますが、父親に受け入れが来ていないケースがあります。そのため家庭不和が起り、離婚の問題も出てきますので、そういう方も相談に見えることがあります。行政が携わるまでには、私が行政との橋渡しとして相談相手になり、離婚の問題とか生活保護の問題をやっています。障害児を持ったご家庭は母親が働けないので、本当に生活レベルが厳しいと思います。

私どものところは障害の程度は皆さんいろいろ違います。自閉症もあれば、ダウン症(染色体の異常)もありますし、精神障害を持った方もいれば、肢体不自由なお子さんも見えます。全然硬直したままで動かない、寝転がっているだけという方もいます。そういう方たちを交えながら、その子供たちをどうしていけばいいかというミーティングをしたり、お母さん方を集めて、日常考えていること、私たちに対する要望をお聞きしたり、また、制度は変わっていきますから、その勉強もやっています。2か月に1回はお勉強会、学習会で何でも言えるボイスネットにしようと考えています。とにかくそのご家庭と自分の家庭が本当に密接に、いろいろな話し合いが出来ないことには、その子供にとって、より密度の濃い支援ができませんので、そういう関わり合いを保っていこうと思います。結局、私の孫は私が見るのではなくて、じよいんと誰かが交替で関わっています。また、私だけが関わるよりは、いろいろな世代の人と関わったほうが、成長は早いように思います。それが実践で得た、そういう子供たちを育てるための一番いい方法ではないでしょうか。

それから、制度の中で特殊学校や養護学校に通っている、中学生、高校生には何の手だてもありません。小学生は健常児に交じってもよいという制度はありますが、現実には交じれません。交じっても独りになるので、結局うちに来ています。しかし、中学、高校はそういう制度が全然ないので、学校から帰ってきたら家にこもりっきりでお母さんが見ています。そういう方たちのために、ぜひ来年度は中高生を対象にした、学童保育とまではいかないまでも、何か子供たちが出来ることを見出せる場を作りたいと思っています。今、その辺りの下調べとして、費用のことや、どうすれば県からの補助を頂けるのではないかと、それを一生懸命調査して、思索中です。

(B) そういう相談を受けることがあります。私は児童館から中学生の学童保育で、夏休みなどに預かってもらいたいと言われました。私は「なぜ養護学校の中に学童クラブを作らないのか」と言ったのです。養護学校の中に、区が学童クラブを作れば、地域の子供たちもそこに来ます。学童クラブの場がないとおっしゃるので、養護学校の中に作って、区の職員が来て、地域の子供たちも集めて一緒にやったらどうでしょうかという話をしたら、納得されていましたね。

(D) それを私も提案しました。でも、東京都はどうか知りませんが、地方に行くと養護学校は人里離れた場所にあることが多いのです。

(B) 東京都の場合は、地域の中にあるので出来るのです。ところが、都の施設に区の学童クラブが入るところに問題があるとお聞きしました。私のところでも、養護学校に行っている中等部の自閉症のおさんがいましたが、自立させたいという親御さんの願いでお手伝いしたことがあります。電車に乗せて帰すお手伝いでして、養護学校の先生は無理だとおっしゃいましたが、関わっていくうちに自立できました。朝は母親が送りますが、帰りは自分で電車に乗って帰ることが出来るようになったのです。その帰途に、私たちの活動する広場があるのですが、いつしか自分の意思で訪ねてくるようになりました。そして、おやつを食べて帰るのですが、もしかするとその子はおやつが目的かもしれませんが、ただいまとか、いただきますとかの挨拶とか、親には依頼されていませんが、指導しています。

(D) 親が指導するのは難しいと思います。自閉症の特徴なのですが、時間がかかるので、親が先にやってしまうのです。一つするのに3秒待ちなさいと。例えば、立ちなさい、1、2、3、それで立てればいいほうです。いつも心の中で数を読みながら、この子は5秒だとか、ペースに合わせた進行でなければやはりパニックになって暴れます。

(B) そうですね。大変でしたよ。通学介助をしているとき、駅のホームで電車に乗せようと思うのですが、介助の終りの段階でしたが、なかなか乗らず、私どもは隠れて待っているわけです。30分経っても電車に乗らなかつたら出て行こうとかありました。そういうことによって、彼女たちから、何をそんなに慌てなさんな、我慢も必要なのだと、私などは毎日毎日忙しく暮らしていましたから、この子が教えてくれたのだと、そのときはそういうふうに思いました。

(E) こういう支援を通して私が学んだことは、自分の生き方や自分の生活を見直せることが福祉の関わりだと、強く感じています。私も出来ることはないかと振り返るときに、そういう高齢者の方たちを含めいろいろな世代の方が関わってくれる、いろいろな立場に置かれた人が作り出すコミュニティの中で生きていけることが、本当は一番幸せではないかと思えます。本当に必要なことは、人のつながりの中で出来た場所に自分の居場所があるということ、そういう繋がりからすごく感じ取れたと思っています。

(A) 私はこの間、企画書を送らせて頂いた中で、地域づくりというものを提案しました。

高齢者とか、障害者とか、私たちの団体で関わるのは乳幼児、またその親ですが、東京の中でも、町中に廃校になったところが結構あります。一つのモデルケースとして、その廃校を企業に売却したり、私立の学校に売却したり、そこを取り払って文化センターのようなホールにしているのです。私は、これもぜひ開放して、元気な高齢者、障害者の人たちも来られる、それから小中学生、学童もそこに入れ、子供たちを育て、乳幼児を持つ親と子供たちも憩える広場と提言したのです。そこに町の人たちが、ボランティアとして遊びに行ったり、お手伝いをしたり。あの広さと部屋数、駐車場も取れるし、運動場もあります。それを地域の本当に交流の場として開放したらという提案を書いて、区議会議長や都議会議員にも渡しましたが、うまくいっていません。もちろん空き教室もとてもよいと思います。

(D) 空き教室の点は、習志野市に交渉をしましたが、建物自体は所有者が市であったり県であったりで、それを管理するのが教育委員会であったりと、縦割りで話が繋がらないのです。それさえ、まとまれば出来るのです。

(B) でも、これからはその辺を変えていかなければだめだと思います。私たちがボランティアグループのときに学校に行き、空き教室を貸してほしいとお願いしたら、事故が起きたときの責任の所在について言われて、学校サイドは責任とれないとのことで駄目でした。今は厚生労働省にて小学校などと交流事業をやっていますが、でもその時、任意団体は信用がないと思い、NPO法人とか法人格を取らねばと考えるようになりました。

それと、やはり地域の中で私たちが横の連携のような、自分の親や嫁、姑の関係を抜きにした、ワンクッションを置いてある他人の関係だから、助言や忠告などでも、お母さんたちもそれほど傷つかないで済むのです。今の若い人たちは、昔の私たちの時代と違って、そのような面での支援が必要なのです。「昔の子育てがいろいろのだよ」と言ってもだめなのです。一緒に楽しみ、私たちは子供や若い人たちからエネルギーを頂いて、お母さんたちのクッションになることが、地域の中で関わって行くことだと思います。

(A) あと今、私がもう一つ提案していることは、子供たちの非行、万引きが非常に多い現状に対してです。引ったくりは、中学生になると多く、万引きは中学生、小学生が多いです。もちろん高校生もあります。検挙数も相談数も増加傾向にきているので、このあたりを視野に入れた子育て支援活動が考えられないだろうかという提案です。

私がこの間、0歳や1歳の親にそれを言っても、まだ子どもも聞いてもわからず、育児だけしか考えていない人が多く聞いてくれないのです。確かにそうですが、子供たちが聞くような年齢になってから言ったときに母親が聞くかという、パートとかで働き出して聞きに来ないわけです。だから、今のうちに伝えておかなければ、その子供たちが小学生、中学生になった頃、大変だと思うのです。でも話し合おうよと言っても、ほとんど出てこないのが現実です。

(B) 私は教えるというか、そういうことではないような気がします。やはり一緒に広場の中において、育児に対する状況や考え方を相談したり、いろいろ会話を確認したりしながら、お母さんたちが安心して、自信を持って子育てが出来るようになっていければよいかなと思います。

現実問題として、中学生や小学生の高学年でも、親がパートに出て、夕方になっても行き場のない子供たちがたむろしていることがあります。でも、その子たちも悪いことをしているわけではないのです。その場で、ただ喋っているだけかもしれないのに、そのままほうっておくから、たばこやお酒に関わるようになってしまうのです。現実的にはまだですが、私どもの広場でも、夕方に来てくれる人があれば、そういう場にしてみたいのではと考えたりもします。

先ほどもありましたが、空いているときにはデイサービスのお年寄りも来て、夕方になれば、中高生たちのたむろす

る場であってもいいし、皆が一緒に集える時間があってもいいと思っています。

● NPO事業へのかかわりと自分

(C) 私は、一つの会社にずっとおりました、はっきり申し上げると会社人間だったのです。だから定年を境にして、仕事人間から生活人間に変わらなければ、人生80年と考えても、あと20年を何もしないわけにはいかないということが、活動をはじめるときかけの一つにはありました。そこで考えて、福祉の問題はいつかお世話になるだろうから、何かお世話をしたい、役立ちたいという思いがありました。

私は毎年二人の視点で、女房と二人で海外に行っています。国内は仕事の関係で、全部行っていましたが、国外へはほとんど行っていません。たまたま子どもがアメリカにいるものから、アメリカを拠点にいろいろ回ってみると、どうも日本で歩いてきた道とはだいぶ違うし、福祉の問題もそうですし。我々の老後の問題は、日本はこれでは大変だろうと。それは国が悪いとか年金の問題ではなくて、自分の問題として取り上げる必要があるのではないかと。ただ、それは限られた範囲でもいいので、会社でも、NPOでも、やれるところで問題化するのです。

(司会：前田) 長い間会社で働くことと、NPOで活動をされている違いはどのようなところですか。

(C) 一つには、私は40年勤めましたが、やはり会社は滅私奉公ですかね。家族のことは、子育てを含めて、女房に任せるといった感じでしたから、地域の問題はほとんど眼中になかったと思います。これからの企業にお勤めの方々、定年になってから考えるのではなくて、もう少し早く考えたほうがいいと感じています。私どもは定年を中心にした生活設計を考えましたが、介護の問題においては看護師さん、車の運転、ヘルパーなどがあり、私でも出来ることはありますが、料理の問題とかヘルパーのスキルとなると、ベテランの方にはかないません。

(司会：前田) サラリーマンがNPOということは可能なのでしょうか。

(C) 私は可能だと思います。ただ、一つだけ言えることは、ボランティアという対応でなければ、一般の団体では人件費対応が出来ません。我々は年金の中ですから、立ち上げなどを無償でやってもいい、小遣いの範囲の中でということも出来ますが、そうではない方、生活にかかる方は要りますね。だから、どうしても必要な人件費があるのです。私どもは年金で抑えることはできますが、看護師やヘルパーなどの資格を持った方とか、常勤の方には、賞与は別にしても、相場として平均ベースぐらいは必要です。ただNPOへ入ってみて、比較的受け入れられる資金がなくても、いろいろな形のマネジメントがなくても、寄せ集まって何か出来る、会社と違ったものが出来そうというのが実感です。

(B) 私たちのNPO法人の組織としては、私が働いていた時にもらっていた給料以下のものが全体の運営費ですから、給料という面では非常に厳しいです。責任を持って、その広場を運営して頂くために責任者を置いています、その方たちには満足いく、給料が出せないのが現状です。それで何とか賄っています。

でも、それで全体の組織を動かす事務費等が賄えるかというと、それは全くありません。全部家へ持って帰って、結局、私が夜中までやっています。今まで公務員として働いているときは、仕事場で8時間勤務していればよかったです、それ以上に忙しいです。私どもは経理の専門家がおらず、全部ボランティアでやっているので、今はNPO支援団体をお願いをして、経理を教えるという形を取っています。

(D) 私がなぜNPO法人にしたのかは、将来的に、やはり法人格でなければ、社会的な信用がないと考えたからです。人のお子さん、大事な人の命を何時間か預からなければならず、皆さんがお世話されているのは元気なお子さんでしょうが、いつてんかんを起こすか分からないとか、いつ息が切れるか分からない重身の子供たちが集う場所なので、やはり社会的な信用が必要なのです。役所からも、ボランティアの若い人たちも、NPO法人を取ったほうが、将来的に事業が伸びたときにいいのでは、と勧められました。また、介護保険もそうですが、支援費も法人格でなければ認可されません。それを頂かないと、運営自体を続けることができず、法人格が欲しかったという面もあります。

お給料のお話が出ましたが、私どもの理事10名は無給です。事務局長として常勤の専門職がおりますが、生活する必要がある方なのでお支払いしています。あとの方は時給制ですが、赤字になるぐらいで、本当に大変なやりくりです。

私の感覚として、役所との交渉するとき、やはり任意団体よりは、NPO法人じょいんと名刺に書いてある方が役所の対応も違っているのではないかなという気がしました。習志野市には、やっと8か所のNPO法人が出来ましたが、福祉団体は私どもを含め2か所しかありません。残りはまちづくりの關係の団体です。任意団体ではなく、法人となったからには、やはりそれに恥じないだけの責任を持った仕事をやっていかなければいけないと思います。

とにかく私たちは、今、人材育成に重点的に力を入れています。法人の名に恥じない人材を育てねばと考え、少し経費があれば、全部人材育成に回します。若い人たちには、あらゆる研修会には出てもらい、中年のお母さん方には、へ

ルパー2級を取って、いつでもあなたのお子さんだけでなく、よそのお子さんも見られる立場になりなさいという支援の仕方をしています。今は親の社会参加がなく、みんな閉鎖的で、自分の子供を自分で囲っている家庭が多いので、「社会参加、社会参加」と盛んに呼びかけて、熱心な人にはヘルパー2級、ガイドヘルパー、手話通訳の研修、講習にと、勧めています。そうやって、お母さん方がとにかく社会に出て「うちの子供はこうなのだけれど」と言える勇気を育てて行きたいと思い、頑張っています。

(A) 自分が取りかかった動機を一言でいうと、50何歳までやってこられて、これから60歳を迎えるにあたって、お返しの人生が出来るようになるという気持ちで、40歳が終わり、50歳に入ってからずっとありました。

良かったことはたくさんありました。大変なこともあります。良かったことは、まず人間関係が広がったことです。それから、本を読んだり、いろいろなところで会話をしたり、講演を聞いたりして、知識が吸収されて行くこと。まだ、仕事は現役ですが、とにかく早く仕事をリタイヤしたいですが、なかなかそれができないのです。多分リタイヤをしたら生き方がもっともっと広がるだろうという楽しみはありますよね。

それから、活動していて感謝の言葉が出てきます。「ありがとうございます」と言われると、誰でも非常に嬉しいですよ。そうすると、自分も感謝の気持ちが湧いてくるのです。だから、おのずと感謝の気持ちがお互いに持てる、これは生き方としてすごい力だと思います。「ありがとう」という言葉の力はものすごく大きいです。

そして、もちろん視野が広がってきています。ただ、私たちは皆さんと違ってNPO法人を取っていません。先ほどから申し上げていますように、取るとうかにか大変かをよく知っているのので、これからは取らないかもしれません。ボランティアだから社会的信用がないのかと考えたときに、私はそんなことはない。社会福祉協議会に働きかけたり、教育委員会や子育て会に行ったりして、行政の力で新しいところの運営を始めることが出来ました。

今も次のステップとして、先ほど少し申しました、非行を生まないような子育てを考えようと思い、今度は保護司や警察の少年課を入れて、このようなディスカッションをしながら積み上げていこうとしています。

そして今、第4の広場としての会場が大体決まりました。この会場作りについて、小学校と江東区の中は大体話ができました。あとは警察と保護司会に話をし、そういう懇談会を何回か持ち、スタートしようとしています。それが出来たら、場所を多く、5~6人のグループで作れるように。あまり大勢では、こちらの意図が伝わりませんので。でも、そこには経費問題が当然出てくるので、やればやるほど頭の痛いのですが、今のところは何とかなると思っています。

(D) 障害者を、障害児や取り巻くご家族を含めての環境で、福祉というものは今まで措置で与えられ、保護されてきました。そういう観念がまだ皆さんに根強くあるので、新しい制度に切り替わっても馴染めないし、自分たちでどういうサービスを得て、自立に向けて何をやるのかという発想が生まれません。本人は意思がないから、取り巻く家族や親が決めるのですが、まだ現制度に適応するという事を考えているのが現実です。考えていかねばいけない問題について、勉強会、意見の交換会で、専門の先生をお呼びして、いろいろと学習会をやったりしています。

しかし、現実の問題に返ったときに、最終的に親亡き後は入所という考え方の人がほとんどです。地域の中でこの子をどう生活させてやらなければならないかと考える親は、ほとんどいません。福祉の現状は、まだそういう状態です。

だから、制度だけが新しく変わっていても、どういう方法で浸透させるかが、大きな課題だと思います。それに向け、親の意識の変革を求めていますし、私たち自身もそれを考える必要があるの、いろいろな勉強会を催しています。

まだ現実には、新しい福祉に向かっている改革に対し、根強く現状にこだわる考えが一方であると思います。地方に行くと、現状の福祉に、行き詰まったところがあるのを見てきています。それをどう変えていくかということが私たちに課せられた仕事だと思、微力ながらも、一生懸命お母さん方の意識改革と思、やってやっています。

(E) Dさんの所でスタッフとしての期間が長かったので、その立場から申します。実際に支援を受けるお母さん方は、毎日の生活が打ちひしがれて、明日生きていく方法をどうしたらよいか分からないのです。とにかく隣の人に話を聞いて欲しいのでは、ということが原点の一つなのです。

実際、お母さん方はあまりに受身すぎて、今以上のことを言われると打ちひしがれる方が多いのが現状です。そこをどう明日も順調に来てもらうかと考えるときに、社会が今、抱えている問題、障害児の問題であれば、それは誰が解決するのかを一緒に考えるようにしています。市とか誰かがやってくれないからと、皆言うものです。でも、「私たちが働けないのは子供が障害児だから。それは違うよね、お母さん」というところから考え直しを始めて行きます。一緒に乗り越えていこうよ、みんな問題を抱えているのだし。問題は誰が作り出すのかということ、自分自身であるのだから。生きていけば自分も問題になることもあるし、というところを一緒に共有していけることが、本当に意味があるし、そう考えられるようになったのが、NPOをやった良かったと思っています。

(B) 私たちがNPO法人になって、私たちは中高年の主婦が主体でやっているのですが、家庭の夫たちが皆定年退職で家に居る時間が増えたのです。そうすると、逆に奥さんたちが出にくくなってしま、外に出歩くことが多いと、今度は向こうが私たちに嫉妬感を抱くのです。その辺が活動する中で、今の主婦のつらい一面でもあるのです。

(C) 定年退職後にボランティアという形で来て頂く中では、会社で何をやりましたかではなく、何ができますかということが重要ですね。例えばNPOの場合、運転の問題であれば、運転が安全確実に出来れば何でも構わないのです。だから、ボランティアという形での働き場の提供なのです。

私のところはプログラムの問題があります。デイサービスは女性が8割で、男性は2割しかいません。平均的には5割、5割いるはずですが、なぜか来ません。私のところは、目標としてせめて5割を考えています。今は各地から視察に来て頂いていますが、ここはサロンのようで、普通のところとは違う雰囲気があるそうです。でも、やはりいろいろな方が集まる場にするためには何が必要かということを考えなければ、自然には集まってくれないと思います。

もう一つ、私どもには3年という団体としての自立猶予期間がありました。3年間も与えて頂きましたが、確かに3年は必要だなと感じています。その間に解決すべき問題は、資金面、人材面、活動の場所の問題です。今、自治体での整理統合が進んでいますが、行政でも余剰の人員が増えていると思いますので、そういう方々が民間の人たちと一緒に行動を起せば、新しいビジネスチャンスが生まれるのではないかと思います。NPOとか、私どもの介護の中にも民間を、共存関係として既に入れてあります。私どもも当初は、民間を通じて、企業のサイドからは提携する、そんなことはしなかったのです。3年間の中で何かユニークな存在を作ろうとスタートしたことは良かったと思っています。

(B) NPO法人も、やはり仕事ができる場としていく必要があると思います。ところが、私の思いの中では、定年退職後の男性がもう少し世の中に関わっていけるような方向を考えて頂きたいのです。ぜひお願いしたいと思います。

(司会：前田) NPOは、一人でやっていた育児なり介護を少し公の場に出したという意味では、私は相当大きなインパクトがあると思っています。一人でやるよりも皆でやるということです。つまりアンペイド、ペイされないものを社会に認めてもらうということです。これは企業のビジネスと同じレベルまで行かせようとする一つの動きだと私は思っています。NPOの現場の方にぜひ頑張ってもらいたいと思います。どうも有り難うございました。

NPO法人 びーのびーの グループインタビュー

日時：平成15年11月17日（月）

場所：横浜市港北区

NPO法人 びーのびーの

- ・平成12年に、乳幼児とその親のための子育て支援を行うNPO法人として設立。
- ・拠点は、横浜市港北区。地域に乳幼児と親のための育児施設がなく、その地域に住む母親たちを中心に、その中で支え合い育て合うことを目的とした施設の設立を目指したことが発足経緯。
- ・活動は、ひろば型子育て支援施設「おやこの広場 びーのびーの」の運営を中心に、育児関連のイベント（講演会、講習会等）、情報誌の発行、地域・行政への情報発信を行う。
- ・ボランティアスタッフ 約30名。

●自己紹介（きっかけ・夫婦関係の変化・良かったことや今後の課題）

（司会：河野） 最初に、3点お聞きいたします。第一にこの団体に入られたきっかけを含めて自己紹介をお願いします。第二に入られたことによって、夫婦関係がどう変化したのかお聞きします。第三にこの団体に関わりよかったことや今後の課題について教えていただければと思っております。

（A：女性・40代・団体代表） 私は18歳のとき地方から出て、東京で働いていました。それから仕事を辞め子供を産んで育てる段階になって、この地域でどのように育てていけばいいのだろうと、地域のことをあまりにも知らないことに気付いたのです。つまり子供を産むまで10年間この地域に住みながらも、この地域社会からは断絶をしている状態に気付いたのです。初めての子育てで、いろいろ分からないことが多い中で、子育てをするお母さんのための地域情報が少なすぎるころから、行政に働きかけながら、Cさんと私で行政の発行する子育て支援通信を作っていました。だから保健所と一緒に行政の発行するものですが、お母さんたちの視点でできるというようなことで、4年やっていました。その間に、生涯学習支援をやっている母親学級運営というのをやったのです。これがこの団体を作るきっかけです。

やっと子供を三人産んで育ててみて理解できたのですが、子供というのはそれぞれ個性があって、自分の育て方だけでは気付かないことがあるし、ちょっと距離感を持ち振り返ってみると「しょうがないな」と思えることもあるし、初めての子育てでその所を理解することは到底無理でした。今のお母さん達の中で、初めてのお子さんを持たれた方の焦る気持ちもよく分かるし、私もそういう方を支えることによって、ご自身がどう変化するかという点も、とてもこの団体の影響が大きいのではないかと感じています。

夫は自営業なので、常に多忙で、人を雇っている関係上、家にいることが難しいです。でも、子供が生まれてから、土日は何とかしようと努力していて、料理を作ったり、家事を手伝ってくれたりしています。

（B：女性・30代） 私は昨年3月にヨーロッパから帰国したのですが、この団体に関わったきっかけは、上の子の出産後、その海外で住んでいた地域で子育てグループの企画のようなものに関わっていて、帰国後、そういうグループがないかと探したら、区役所でこの団体を知り、初めは会員として入りました。

それと（スタッフになったのと）同時に妊娠したので、あまり活動はしていませんけれども、一応広場担当です。広場担当なのですが、ちょうど自分の子供の自我が発達するころで、自分の子供を見ることで精一杯で、ほかの子を見ている余裕が全然なく、プラスつわりがあって、2月、3月、4月とキーキー言っていました。何かと言うと、泣いていたのですが、その時に、「びーの」のお姉さまがたが、「こうだったわよ」と、いろいろアドバイスをくださって、それが私にとってはとてもよかったと思います。もうじき、広場担当に復帰しようと思っています。

（C：女性・30代・団体副代表） 私達の組織についてですが、スタッフは約30人と比較的多く、立ち上げ当初から、広場担当と絵本担当と広報スタッフ担当と、三つの組織に分けて活動しています。広場担当は、お子さんがいても一緒に当番制で広場に入って、その広場に集まるお子さんのお世話をします。

（D：女性・40代） ここの会員になったのは、ある日新聞を見ていたら、代表が記事に出ていて、ある友達より、「Aさんという人が場所を探しているの、どこか知らない？」と聞いたのです。そこで、「私も手伝おうかなと思っていました」と言いましたら、友達が紹介してくれたのです。それが、広場が立ち上がる1か月前で、私自身、子供が二人とも小学生で、ある意味では、もう当事者ではない世代だったのですが、そこで何かお役に立てることがあればと思い関わりました。当時パートに出ていて、その空き時間でやっていたのですが、仕事の都合もあり、パートはやっていません。

広場責任者ということで、週2日終日、広場に今、配属されています。

(C) この団体では副代表兼事務局長をやっています。きっかけは、先ほど代表が申し上げた区の母親のための広報誌の編集委員に公募で入り、代表と一緒にその雑誌の立ち上げからやってきました。その時は、隣の区から引っ越した直後で、自分自身も公園情報や地域の情報を知りたいと思っていました。転入届を出した帰りに、保健所でそのような情報誌がないか尋ねたら、まさに今作ろうとしているから、一緒にやりましょうという感じで、関わり始めたのです。そこで、Aと出会って、4年くらい伴に活動をやってきて、自分の子供も一緒に育て上げました。

今、子供は三人いて、小学校4年生の男の子と1年生と保育園児の5歳の女の子がいます。私自身は、地元というか横浜生まれの横浜育ちです。夫の実家も近いので、いざというときは恵まれていますし、出産の時も両方の実家を行ったり来たりしていました。でも、隣の区に引っ越してくるというのは未知の世界でした。第2子が生まれたと同時に引っ越してきたのですが、第1子のときに隣の区でサークル活動をやっていて、そのネットワークから外れてしまうのが不安でした。隣の区でさえも、第1子のときの関係性から飛び出すというのは、すごく不安なことでもありました。

自分自身が三人だったものですから、いずれ自分も三人子供が欲しいとずっと思っていました。でも、三人子供は欲しいのですけれど、いずれは社会へ復帰しようと思っていたので、どうしようかなと試行錯誤をしていました。ただ、サークル活動をしている時の親たちのつながりの中でも、いろいろとすごく支えにはなっていたのですが、その場で終わってしまうというか、皆さんの周りの親たちの状況などを見ると、自分が思っているようにいずれは社会復帰したいというかたはだれもいなかったの、すごくギャップは感じていたのです。ただ、それでは、昔のような働き方ができるのかと思うと、私は、東京にずっと2時間かけて、大学にも勤めにも行っていましたので、すごく大変だったのです。5時半くらいの始発に乗って行っていましたので、子供を三人抱えて、同じような働き方ができるかと思ったら、とてもできないだろうと思いました。社会復帰はしたいけれども、前のような働き方は絶対できないだろうと思っていた中で、地域で興すというようなことができてよかったなと思っています。

夫は普通のサラリーマンで、横浜市内に勤務しています。第1子が生まれたときからかなり育児には協力的で、第1子のときは育児休暇を取りました。1人目、2人目と実家で、3人目を自宅で当初育てたのですが、担い手として祖父母がそばにいるのは楽なのですが、精神的には、自分の家で子育てしたほうが楽だったかなと、夫婦で思っています。そういう形で今に至っております。

(E:女性・30代) ここに関わるきっかけは、こちらのほうにもあるのですけれども、アドバイザーの先生の奥さんと育児サークルでずっと一緒だったのです。そこで、2年くらいサークル活動をしていました。それと並行して、横浜市の育児の会といって、会報を中心に、主にアトピーの赤ちゃんを持っている方などが、自然育児ということについて考える会の活動を行っていました。私自身は、お母さんサークルにあまりなじめなかったのです。足は運んでいたり、会報誌に記事を書いたり、割と積極的に活動をしているほうではありましたが、やはり何かお母さんだけの集まりの中で、サロンのものが進んでいくということが、とてもフラストレーションでした。例えば必須というのが、お茶会だったり、一緒にご飯を食べたりというもので、もっと突っ込んだ話をしたいのだけれど、とりあえずそこは置いておいてというようなところが、私自身は、なじめなかったのです。そこに、今度地域でAさんとCさんがNPOで立ち上げるのだけれど参加しないかと、声をかけてくださいました。最初に関わったのが、絵本部会の立ち上げでした。

ここでの子育ては、親戚や知り合いがいない状態で、サークルに支えられた部分はすごくあったのですけれども、2歳くらいになって一息ついたときに、この団体に出会いました。NPOとサークルというのは全然違うものなのだなということを改めて最近思います。私自身はボランティアとしての関わりなのですが、すごく発展性もあり、社会的にものが言えますし、いわゆる法人であるということも魅力を感じて今に至っているという状況です。

(F:女性・30代) 私のこの団体への参加のきっかけは、CさんとAさんが前にやっていた子育て通信の編集員を始めたことからです。

遠いのと高いのとで参加は考えなかったのですが、いろいろと話を聞いていて、ちょっと面白そうだなと思ってきました。そうしたら、「今度ホームページを立ち上げるので、そのメンバーにどうですか」と言われ、「じゃあ、ちょっとでも」ということで入りました。私は、協力スタッフという位置づけで、ほかのスタッフの方とは違って、その部分のみやっているだけで、広場のスタッフシフトにも入ったことがないのです。広場自体にも半年に1回くらいしか行かないくらいで、全然お役に立っていません。ホームページのほうも、今の担当になった方がすごく積極的にいろいろやってくださって、ほとんど何もすることがなくなって、名前だけのスタッフでここに来てよかったのかなと思うほど、たまにちょこちょこお手伝いするくらいです。本当はやめてもいいのかなと、ちょっと思ったこともあります。でも、すごくみんな活発なお母さんたちがいっぱい、たまにこうやって参加しても、すごく刺激を受けるといいですか、やっぱりちょっとつながっていたいかなという感じで、協力スタッフをさせていただいています。

子育ては親戚の助けというのはほとんど借りずに今までやってきました。何かあったら、生協のサポーターさんなどにお願ひしようと思って、生協に幾つか入っています。今のところ、私は丈夫でいますので、何とか大丈夫です。

(G : 女性・40代) 小学生二人の母親です。「びーのびーの」には、下の子が1年生に上がるころから、1年半ほどスタッフになってたちました。事務局のスタッフを探しているという話を(勤めていた)職場の同期(「びーのびーの」のスタッフ)から聞き、紹介されたのがきっかけです。主人と私は地方出身で、1人目の子供を持って初めて地域に目が向いたという典型的な例です。本当に友達もいないし、子育てに行き詰まっていた。それで何とか育児教室を通じて友達を作ることができまして、育児サークルの立ち上げもその仲間と一緒にやったのです。地域に知り合いが一人でも多くいたほうが良いということをしごく感じ、幼稚園の子供会、PTA活動などにも参加しました。そうやってボランティアでも良いから何かやりがいのある、自分の足場を固めることに一生懸命でしたが、もうちょっと何か違う面でお役に立てるようなことが、何かないかなということで、「びーのびーの」に関わるようになったのです。「びーのびーの」が働く場としてよかったのは、子育てをしているお母さんたちなので、まだ小学校1年生に入ったばかりですので、時間的に融通が利いたり、そういう配慮をしていただけただけことは、とてもありがたかったです。だんだんと働いている時間が広がっているのですけれども、本当に参加してよかったなと思っています。

●活動を通じての子供・夫婦・親御さんとの関係の変化

(司会 : 河野) 次に、ここでの活動を通じて、今も少しお話がありました。お子さんやパートナーの方、親御さんとしての関係などが、どのように変わったかということと、価値観、子育てに対する考え方などで大きな変化みたいなものがあつたら、お話をしていただけませんか。

そうしましたら、Gさんからお話をいただけますか。

(G) 自分の時間の使い方が積極的になりましたね。ここでの活動をこなしながらも、今までの生活のペースを崩さないように折り合いをつけなければいけません。現状は、少し厳しいです。主人より「子供にしわ寄せがいくのは一番いけない。それだけは守ってくれ」と言われているのですが、そうではない部分ではいろいろとサポートしてくれて、逆に自分の時間があるときには、子供に対してしごく時間を割いてくれるようになりました。勉強を見たり、どこかに連れ出してくれたり、そういう面でのサポートをしてくれるようになりました。そうですね。参加するようになってからですね。子供が小さいうちは、関わるというよりは、ただ面倒を見るという感じだったのですが、積極的に関わって、真剣に「こうしてあげよう」というふうに変ってきたのではないかなと思います。「パパびーの」の活動にも関心を示しているのですが、時間が取れないということで…。ただ自分の子供が、「びーの」の世代でないものから、そこがちょっとネックになっています。

(司会 : 河野) Gさんは、活動状況のような情報をご主人に流されるのですか。

(G) そうですね。「大丈夫? きみにできるの?」みたいに言われているのですけれど。教えてもらうところはアドバイスを受けながら。

(司会 : 河野) この団体に参加されるときに、ご主人とはどういってお話をされたのですか。

(G) とにかく幼稚園の集まりの会長をしていたときは、けっこう時間を取られまして、ほとんど勤めているように午前中毎日出たのです。すると、このまま家にいるのがもったいないような、自分でもこれは何かできるのではないかという気がしてきて、それで主人に話したら「いいと思うよ。周りの社会に目を向けることは大事なことだよ」と言ってくれました。

(A) ごめんなさい。多分いろいろな関わり方がありますので、一応言っておくと、今日来てくださっている方で、一応固定給で払っている方は一人おられます。パートぐらいの、扶養の範囲でギリギリという感じです。ほかに、広場責任者二人と事務局の二人が、時給をお支払いしています。あとは、今日来てくださっている方で、広場責任者で時給をお支払いしていて、ほかの方は、交通費のみのボランティアスタッフという形になっています。

(F) 私は、先ほど言いましたように、ここに割いている時間というのが本当に少ないので、それで生活がどうのこうのというのはないのですけれども、たまに何かのお手伝いをしたり、メーリングリストがあつて、そういう名簿がバツと来るのですけれども、そういうものを見ていて、しごくお母さんたちが積極的でいらつしやつて、そういうことにしごく刺激を受けているという気がします。

私は、サークルなどを子供が小さいころからいろいろとやつていて、いろいろな人を知っているのですが、ここほど強力なお母さんたちはどこにもいなくて、ここに少しでも関わつていられるのは、しごくうれしいなという感じでやつています。

他にもいろいろと趣味を持っている方、昔お仕事をされていた方からいろいろ聞いて、私も何かしなくては、こうしなくてはと感じています。子育てが少し終わったら働こうかなというお母さん方は少ないのですが、私は子供たちが小学校へ入ったら働こうかと思っていますので、同じ考えも持っている方が多くいる今は、参考になります。

(E) 私自身、下の子供が1歳半くらいのときからこの団体に関わっていて、そこで育ったような感じです。彼女の中に広場がすごく根付いているのが見えて、いろいろな場面でびっくりさせられることが多いです。このごろ他所の集いの広場の見学に連れていったりするのですが、やはり彼女との会話での基準が地元の「広場」であることが、面白いですし、浸透しているのだなと思います。例えば、ここは「広場」と比べて狭いとか、小さい子供が多いとかいう話をしたりしますので。

幼稚園もすごく楽しいのですが、その幼稚園から帰ると、自分の地域のホームグラウンドに「広場」があります。場所は商店街に面していますので、前のレストランのおばちゃんから、薬局のおばちゃんから、近所のおばちゃんたちがよく声をかけてくれるのです。昔はあった声をかけてくれる「近所のおばちゃん」が、こんなにたくさん存在することのありがたさを感じています。

私自身は、今まで、朝きちんと起きて、ご飯を食べさせて送り出すということが、親の務めと思っていたのです。しかし、この団体での仕事を、夜遅くまでやっていると、朝起きられないのです。それで、子供は一人でご飯をよそって、父親と一緒に食べて出ていきます。やはり、神経質に子育てだけに向いていた時期に比べると、自分自身この2~3年、かなり気持ちとして楽になり、楽しいです。

(C) 私の場合は、ある意味では、ボランティア活動というよりは、仕事という形ですので、夫も一応はそう思っていると思います。でも、私が最初から携わってききましたので、夫も多分一緒に築き上げてきたという感覚があると思うのです。だから、精神的な部分で支えてくれています。

当初は、主人に、いろいろとこのことを話していたのですが、今は私のほうが忙しくなってきたし、あまり話していません。でも、何かそうやって打ち込んでいるということは、「いいな」と思ってくれていると思います。それが一つの仕事としてきちんと成立する、本当の意味での職場に復帰するというのではなくても、すごく融通が利いたり、子供も交えての活動になっているという、プラス面がきっと多いと思ってくれています。仕事として成り立たなくても、その辺は、「もっとちゃんとしたところで働けよ」というようなことは、全然言いません。

子供は、保育園に預けているので、スタッフのお子さんよりは全然来ていないのですが、いつでも休めるとか、終わったなら行ける場所という補完的な場所として、子供たちはそれぞれ安心感を持っているようです。だから、学校の友達でもない、マンションの友達でもない、新たな自分たちの縦の交友ラインみたいなものが自然とできています。「パパの仕事はよく分からないと思うのですが、私が何をしているのかということとはきちんと彼らも分かっている、一緒に育っていつてくれているな」というような感覚はあります。

立ち上げた当初は、大変でした。子供同士の関係性が何もない中でしたので、「この子供は誰がお母さんでしょう」というところからやっていました。でも、子供は強いなと思いました。知らない間に、自分たちで独自の縦の社会を作っていて、のびのびと遊んでいます。学校や保育園のストレスなど、いろいろと子供は抱えているのですけれども、ここではそういうものがなく、自由に過ごせる場と思ってくれているのではないかと思います。

夫も私から聞いて、地域活動の情報が入ってきますので、すごく心強く思うようになったと思います。

(D) 私は、夫も市民活動をしていまして、今まで土日もないことが多かったのです。今後は秋なので、いろいろとお祭りやイベントがあり、忙しくなると思います。それで、今はちゃんと日程を「来月私はこういうふうに動くから、あなたはどうか」という感じで確認しています。子育ては、今までは近所にいる義母と私でしていましたが、私も出ることが多くなったので、3分の1くらいは夫がやるようになったところが変わったと思います。

謝礼をいただくようになったのはここ数年なのですが、その意味付けとしては、終日、受け入れから送り出しまでに関わることへの謝金であって、完全にボランティアに関わっていたときと、関わる気持ちは何一つ変わっていないと思います。もう一人の広場スタッフは、やはりちょっと変わったかなという話はしていましたが、私は変わらないです。

今年から、土曜か日曜に、小学生講座というものを始めました。今は子供が大きくなったので、ここでの活動で関わると言ったら、お祭りのイベントくらいしかなかったのですが、初めて今年、みそ作りや工作というものに次男が参加できるようになったのは、私としてもうれしかったです。

(B) 一番大きく変わったのは私の息子で、1歳半で帰国したのですが、それまでは現地の人たちとサークルに入っていたのですが、この子は本当に楽しんでいるのかなと思って見ていました。でもこの会員として入り、何か月か後には、彼はすごく楽しそうで、ほとんど毎日来て第二の家ようになってしまいました。ここは、友達もいるし、安心して遊べるし、怒られたりはするのですが、彼にとってはここが本当に心の拠り所になっています。私もここで彼を遊ばせることによって、心が安定してきたかなと思います。

海外生活を全てリセットして帰国したので、知人が全然いない状態から始めました。ここの会員のときも楽しかったのですが、スタッフになり深く皆と関わるようになると、より楽しいと感じますし、感銘を受ける方も多いのです。

以前、イベントのテーブル起こしの仕事をしたときに、久しぶりにお金を頂いたときは、やはりお金がもらえるのはいいことだなと思いました。ボランティアでやるよりも、やはりシャキッと背筋が伸びる感じがして、たまにはやらなくてはという感じがしました。

海外にいるとき、夫は、5時か6時には帰宅していましたが、帰国してからは、9時10時に帰ってきて、息子の寝顔を見るだけという感じになりました。前々から、掃除、洗濯など、ご飯を作る以外は何でもやる人なので、この団体に関わるにより変わったことはあまりないですが、元より子供は多くの人と関わり合いながら成長していくのが一番との持論がありましたので、ここでいろいろな人と出会い、もまれていくという子供が成長していける環境がありますので、好ましいことだと言っています。

(A) 私がここを始めたときは、長男が幼稚園の年長の時で、ここで1時間から1時間半くらい遊ばせながら、自分も働いていたという感じです。CさんとEさんのお子さんとはほぼ同年で、通信作りの時期は、ほとんどずっと一緒に遊んでいました。みんな小学校は違うのですが、学校の後に遊べる友達がいるということは、よかったのではないかなと思います。

私自身も、自分の家族を犠牲にしてまで活動をやろうということはあまりありません。子供たちもそれぞれ楽しんで関わってもらいたいということがありました。「びーのびーの」の広告やチラシを町のどこかで見たときに、胸を張らなくてもいいけれど、自分の母親が関わっているものが何であって、どういうものかということ、多分今は把握していると思います。「『びーのびーの』のチラシが張ってあった」というように学校の友達と話題にできたり、今度秋祭りで小学生企画の中で、子供だけのフリーマーケットをやりましたが、それに関しても、小学校へ行って営業活動をしました。そんなふうと一緒に子供もやってくれるということは、うれしいかなと思います。

私の夫に関しては、私がずっと専業主婦であることはないとは思っていたと思いますが、ここまでのめり込むとは思っていなかったかもしれません。私の実家は遠く、この間ちょっと熊本に出かけなくてはいけなくなりまして、一週間くらい助けに来てと言ったのですが、年に1回くらいは来てくれるという環境です。北国なので、夏はこちらが暑いものですから、上の子供二人を夏1か月くらいおじいちゃん、おばあちゃんにお願いしてしまって、向こうで生活をしているので、子供はともおじいちゃん、おばあちゃんが好きです。そのような交流をしています。夫の実家はそんなに遠くないです。隣の隣の区なのですが、車で40~50分くらいのところ。今週末はどうとう向こうの家に子供三人をお願いすることにしました。義母にも、こういう活動をしているということをお話すと、向こうは完璧な専業主婦なので、「随分忙しいのね」という感じなのですが、徐々にお願いしながら、活動しているということを伝えているという状況です。

私自身は、田舎で育ったので、本当にいろいろな人たちと子供同士でいろいろな関係ができて育っていける環境がいいなと思っていました。ただ、1人目の時は、どのように人間関係を作っていくといいのか、自分自身分かりませんでした。本当に、こうやって多くのスタッフの方たちと一緒に子育てができるということが、とても私にとってはうれしいことです。放っておいても、子供たちは、自分たちで遊ぶ空間なり、やり方なりを勝手に決めてやっていきます。昔は、私たちもそうだったのですが、子供に対して目が行き過ぎるように思います。それが放っておいても、遊んでいる環境ができてきていますし、そういう時に子供を通じて、一緒に遊ぶようにもなりました。多分そんなことは昔だったら考えもしなかったです。一緒に遊ぶ側としてプライベートな部分にどんどん入ってこられても、昔だったら嫌だなと思ったかもしれませんが、今は許容できるようになりました。

(D) AさんやCさんなどが最終的に頼るところは、まだ自分の実家とか、お母さんが専業主婦の場合であったりするのですが、私の母は対照的で仕事をしているのです。先日も出張する機会があったときに、母親にお願いしたら、仕事の都合上無理でした。結局、ベビーシッターさんを、この団体で親しくしていただいている方をお願いしたのです。まだ女性が本気で働くとなると、頼るべきところは自分の親元であったりすることを、考えたりします。

(司会：河野) 次にいろいろと活動で関わられることによって、ご主人との理解のほうは、いかがでしょうか。

(E) 自分のボランティア活動は、家庭の中に持ち込むことを主人も望んでいませんので、私は土日絶対に休んで夫をしています。いろいろなプロジェクトをやりましたが、「びーの」は、割と旦那さんの後押しが多いのです。チラシ一つ作るにしても自分で作れないから、「じゃあ、僕が作ってあげるよ」とか、自分の仕事を「びーの」に持ち込んでくださったことも、これはお金になるからやってみようということ、ありました。これは男の人にとってはかけです。そういうことをやってくたさるかたもいらっしやいましたし、表面的にはお母さんの活動に見えるのですが、後ろで旦那さんがすごく支えてくださっているなということを感じていました。同じように働いてきた人同士で結婚されたかたが比較的多いのです。お互いに仕事のことが分かっているので、「この人はこういう仕事をする人だ」ということで、

同志みたいな感じで妻のことを信頼していて、仕事を持ってきてくださったかたは、まさしくそうだと思います。また、本当にいろいろなことで、アンケートがあれば、その集計をやってきてくださったりとか、なかなか広場に直接参加できなくても、そういう形で、内助の功は逆に旦那さんという感じです。

●男性が参加されるようになってからの、団体自体の変化および課題

(司会：河野) 次に、男性の方が参加されるようになって、この団体自体の変化、スタッフの方やお子さんなどの変化、その他にもシニアの方、学生ボランティアの方の関わりのよいことと、課題等あればお話ししていただけますか。

(A) みんながそれぞれに言うてくださると思うので、立ち上げのときの話をしておきます。

NPO法人にしたのは、幹事をやってくれている方の存在が大きかったのです。彼は、いわゆる退職サラリーマンボランティア団体の地区代表をやってらっしゃって、彼とあるセミナーで一緒になったのです。いろいろと話をしていたら、偶然彼は同じ地元に住んでいて、「広場」を立ち上げようとCさんと話し合っているころだったので、その方に相談してみたのです。こういうことをやりたいと企画書に書き相談したら、「やるのだったら、NPO法人でやってみたらどう？」と言ってくれたのです。

まだ1999年の話で、NPO法が出来た直後だったので、分からないことだらけで、とにかく調べてみようということになりました。社会的に責任を持ってきちんとした形でやっていくのならば、NPO法人がいいかもしれないということになりました。元々ある任意団体がNPO法人にすることは多いと思いますが、私たちは立ち上げ時からNPO法人とのことにしました。今は、一つの任意団体やサークルのレベルではなくて、NPO法人としてやったということとはとてもよかったと思います。

そのときに思ったのは、子育ての支援団体を作るのでも、当事者だけではなかなか難しい点もあります。いろいろな年代の方が関わることで、多様な見方もできるし、活動の幅も広げられることを感じたのが第一歩でした。例えば、税務署への対応ですかね。年に一回、税金を納めますし、そのときに非営利と営利の差は何なのかとか、このお金をこのように仕訳けるべきであるということ、こちら側が用意しなければいけません。税務署と交渉する部分を担ってもらい、かなり退職サラリーマンのノウハウを生かして頂いたと思いますし、非常に助けて頂いています。まだまだ弱い組織ですが、労務や財務のことなどを法人として、作り上げていかなければいけません。私たちもそういう勉強会と一緒に進んでいまして、組織としての一部分を一つ一つ勉強しています。

そういう意味では、彼らのノウハウというのは、とても大事だと認識しています。広場でのシニア世代の方たちや学生さんの働きというのは別のテーマで、皆さんから言っていただければいいと思います。

(B) 私が日常目にする学生ボランティアのかたなのですが、やはり男性の学生ボランティアがここにおられると、うちの子は男の子なので、ダイナミックに遊んでいます。それは、おなかも大きかったときに、自分ではできなかったことなのでとてもありがたかったです。シニアスタッフの方は、やはり、こちらが勉強になることがよくあって、子供に対する目線が当事者とは違って一歩離れているのだけれど、すごく暖かい目で見てくださっています。当事者は子供だけをみていますが、それをシニアの方は割とふんわり包んでくださるという感じです。私自身子供を出産したとき母親が2か月くらいいてくれたときにも感じたのですが、違う世代が家に居たり近隣に住んで居たりするというのは、また私自身とは違う見方があり、いいなと実感しました。

(D) この団体は、姉妹団体の父親グループ以外にも、お父さんが会員さんとして来てくださっている方もいらっしゃいましたし、あとは、おじさんが連れて来てくれることもありました。そういう面では、狭いけれどあまり嫌ではないのかなという感じがします。男子学生さんもいますし。

それから、広場の中を見ていて、学生さんがボランティアで入っていたり、サポーターさんがボランティアで入っていたりしているわけですが、うちのサポーターさんも学生さんも、ここで子育て支援をしようと思って来ている人はいないような気がします。自分の居場所としてここに来ているのだなということと、学生さんは、お母さんがたを手伝っているという意識もあるのでしょうかけれども、実は、子供に自分が教えられることがきっとあるだろうと思っています。特に男の子は、オムツを換えさせてもらったり、調理をやらせてもらったりというのは、きっと数年後に役に立つはずです。それを考えたら、赤ちゃんもボランティアしているのかなと私は思います。

サポーターさんも、若いお母さんたちと話ができてよかったとか、今日は誰々さんの赤ちゃんが可愛らしかったとか言いながら、元気に帰っていきますし、お互いがそれぞれの楽しみの場所として、集まっているところが、この一番いいところではと思っています。

(C) 組織、法人、という形よりも一人一人との関わりの方が面白いです。やはり、上の当事者として言う、だめ出しをしてくれる人がいるということが、いちばん大きいです。シニアの方たちが、悩んでいたりと、突破できないとこ

ろを助けてくれたりということもあるのですが、1対1の関係において、いつでもだめだしをしてくれる存在としていてくれるということは貴重だと思っています。またそれが自分の親や血縁関係だけではなくて、そういう人たちがいてくれるということで、シニアのかたたちの存在は大きいです。新鮮だし、より言葉に重みがあったりもします。逆に、そういう方たちから身体を心配して頂いていただくこともあって、安心感と言いますか、ありがたいと思っています。

あと、男子学生さんとはつい私自身の学生時代の感覚で話していて面白いのですが、世代間の先送りというか循環という感じで、私のだめだしをしています。でも自分の子供を育てるのは逆に、そういう世代、数年後かもしれないですけども、もしかしたら育てていくかもしれない子たちを、自分の子供だけではなくて、育てていくというか、そういう感じがあります。かわいいかなと思います。

男性の方は、スタッフの男性も、「パパびーの」ということしか、今はないのですけれど、あとは、精神的に支えています。でも、会員さんのお父さんも関心があるのだなということがよく分かります。見学をするときに、お父さんのほうから電話がかかってくる、妻と子供が常日ごろ過ごす場所がどういう場所なのかということ、夫としてもちゃんと知っておこうというような、今本当にそういう形で夫婦参加をしているなと思います。迎えに来られるお父さんもいますし、すごく気になっているのだなと分かります。親子が出て行く就先にお父さんが待っていたり、恥ずかしいのだけれど、一度見てみたいというような感覚がお父さんたちにもあるのだなと思います。マタニティ企画は夫婦で参加という感じになっているのです。男性のそういう意味での参加というか、直接的ではなくても、関心度という面ではすごく高いのだなということは分かります。

(E) 　　うちは、「パパびーの」に関係しているので、「パパびーの」の話をする、みんな忙しい旦那さんばかりなのです。昨日も集まろうとしていたのですが、ある方が試験の監督官でだめで、結局時間が合わず流れてしまいました。そのように忙しい人たちが時間をやりくりしながら集まっているのですが、かれこれ1年近く活動をして、お互いに状況が分かってきました。もちろんフィリピン人の旦那さんなんかもいたりして、英語で話さなければいけなかったりします。そうして、コミュニケーションが取れてきたり。パパたちが初めに集まったときには、ビールで釣ったというところがあつたりするのですが、とてもチームワークが取れてきて、お互いをカバーしています。

お父さんたちはすごく和んでいるのですが、やはり時間の制約はあるので、うちも含め、家庭の中でダイレクトに子育てに関して手伝われているかということ、やはりそうでもなかったり、時間の制約はあります。でも、こうやって「パパびーの」の活動を通して、この間も秋祭りで演目をやったのですが、一つ家庭から出たところで、地域の子供たちを楽しませるという部分での子育て支援という形もまたあつたりします。なかなか家でできないことも、そこで、うちの子だけではなくて、地域の子供に向けての新しい子育て支援の形になるのかなと思います。ここのお母さんスタッフも皆一芸はあるのですが、やはりお父さん方も一芸があつて、ピアノが弾けたり、ものすごく深い演劇の知識を持っていたりしていますので、プロフェッショナルな集団には遠く及びませんが、知恵だけはすごくあつたりして、面白い活動をしていると思います。夫婦で「ここの今の状況はこうだよ」とか、うわさ話ではなくて、お互いを思いやるというところで話ができるのは、本当にありがたい活動だと思います。

ほかの施設・団体を見たりしていて、ここの広場を見ますと、これだけ普通に人が入ってきているところはないなと思っています。学生もそうだし、シニア世代もそうだし、ごく当たり前に町の中に人が存在するように、いらっしゃるのです。この当たり前の状況がどうしてできたのか、本当に他の団体は一生懸命作りたいたいと思って作れないところを、何かこう簡単にできたのはなぜなのかいつも考えています。

一つだけ今感じているのは、シニアの女性のかたは非常に自分自身セーブして、ここに関わることで、自己制御しながら関わってくださっているなと思います。つい「私の子育ては」とか、「こんなことをしちゃだめよ」とかいうことを言いがちです。しかし、やはりうちの母の世代ですと、お嫁さんにとっても遠慮するといいますが、何かしら一つここに関わってくださることで、若い世代におもしろさを与えてはいけないなということ、考えつつ関わってくださっているなと、シニアの女性のかたと会うときは感じます。シニアのかたには、子育て経験者ではない方も関わってくださっていて、本当にありがたいことだと思います。

(F) 　　Eさんの発言で思い出したのですけれども、今関わっておられるサポーターさんが、「どうしてそんなに外に出て活動できるの?」と言われたのです。ご自分のときは、洗濯も手で洗っていたし、子供も抱えて、とにかく外に出られなかった。それから、夫がまず「出歩くな」ということだったが、やっと今になって、こういうボランティア活動ができるようになったとおっしゃっていました。そういうことを聞きますと、それほど遠くない前に、女性の生き方がだいぶ違っていったのだなと思います。自分の親を見ていても、そう思います。私たちは、恵まれている分というのも、確かにありますが、それでは、恵まれて家電がそろったから幸せかといいますが、そうでもないと思います。そういう今の60歳近くくらいの人たちと、自分の子育ての話と一緒にしてみると面白いなと思いました。でも、聞いてみると、退職した旦那さんに対して、すごく不満があつたり、いろいろとそういうことをおっしゃるのです。「でも今は、とつても自由」とか。大体20年くらいしか変わらないのだけれども、子育ての状況もとらえ方も夫婦関係もだいぶ違います。そういう話をもうちょっとじっくりしたら面白いだろうなと、この間、あるサポーターの人と話をしていた思い出です。

私たちの活動にも、うらやましいと思う部分と、支えてあげたいという部分と、きっといろいろとあるのだろうなと思います。

(E) 今をエンジョイしていらっしやいますよね。だから、年金制の問題などになってしまいますが、ご主人がサラリーマンで円満退職されて、退職金を当てに暮らしていて、「びーの」の活動をしながら、「旅行に行ってきたのよ」とかいう話をよく聞きます。「今度は、京都に行くの」とか「ちょっと海外へ行ってくるわ」とかいう話は聞いたりします。シニア世代は、今をすごく楽しんで生活していらっしやいます。でも、それまでは、Aさんが言ったように、耐える生活というか、いろいろなしがらみがあったのかなと思ったりします。

(F) あと私自身は、学生さんが無償でボランティアをやることに対して「すごいな」といつも思うのです。みんなも、特に男の子とか、少しでもバイトして遊びたいという感じだと思うのに、お祭りのお手伝いなどもされているみたいで、ここにはいい雰囲気があるといつも感じています。

(E) 学生さん方は、一応バイトもしていて、家庭教師とかやっているのだそうです。大体今までは、夏の休み中が中心だったのですが、今年は秋にも授業の合間などにけっこう来ているのです。

「びーの」に来る時間をバイトに費やすこともできるのに、「びーの」に来てくれるということです。自分たちで自主的な活動を提案もしてくれるようになっていきます。あと運営にまで入ってきてくれていきます。積極的に「びーの」に関わってきてくれていきます。今までは、頼まれたからというか、ボランティアとして関わってきたけれども、今度は自分たちで企画して、よりボランティア活動を活性化するために、自分たちは何をしたらいいのかというところに来ています。

(C) 私たちも、子育てをしていて、シニアの方たちのいろいろなノウハウをお聞きして、安心して子供を預けたり、いろいろと教わったりという関係を好むというか選ぶ人がいますし、逆に、学生さんみたいに、ちょっと未熟でも教えながらやりたいというか、気が楽というように思う親子など、いろいろいるのです。それがいろいろ選べるというのはすごくいいのではないかと思います。

(G) 去年は、学生ボランティアさんもほとんどが女の子で、男子学生さんがたくさん入ってきてくれたのは今年からなのです。やはり去年と比べますと、広場の雰囲気ももっとこう元気というか、パワーにあふれるような感じがしています。女の子は、たいてい男の人が苦手で、男の人を見ると泣いてしまうことが多いのですが、「びーの」で遊んでいる子は、そういうことがないように思います。逆に、男の子のほうがいいという感じで、男の子にくっついて遊んでいる子がたくさんいます。

サポーターさんで、一人シニアの男性のかたで、最初に話をしたときに、すごく印象に残っているのですが、そのかたは、最初は老人介護の施設にボランティアで行っていらしたのです。そうしたら、とても気持ちが暗くなってしまったそうです。自分とそれほど年が違わない人たちのそういう姿を見て、つらくてたまらなくなってしまった。それで、『『びーの』はいいよ。元気をもらえるからね』とおっしゃられたのです。確かに、子供の笑顔を見ていたりすると、そうなのかなと思いました。なかなかそういう世代の人とお話をする機会があまりないので、重く身にしみた一言でした。親以外のそういう世代の人と、子育てについて話し合えたりというのは、とてもありがたい環境で、「私はこういうふうで育てられたけれども、こういう考え方もあるのだな」など、いろいろと教えていただいています。ただ、その方が、前に、「おれはもう母ちゃんに任せっきりで、何もしてこなかったからなあ。ここに来るのは、罪滅ぼしなんだよ」と、おっしゃっていました。ほかにも、今はお弁当も作ってらっしゃるんですよね。変わられましたよね。シニアになってから、成長したのでしょうか。

(C) 自分の息子たちも結婚して、お嫁さんがいたりすると、いろいろと言いたいこともあるのだろうけれども、「こういうところが信じられないのよね」とかいうことを私たちにおっしゃられて、「でも、気持ち的には分かります」と言うと、「そうかしらね」という感じで、自分たちも親に直接言えないようなことを、お聞きしたりして、「そういう思いもあるのか」ということがあったりします。なかなか親族的に直接言えないようなことをこういうところで言って、お互いの気持ちをなだめたりしています。ワンクッションを置くということでしょうか。

あとは、シニアのサポーターさんたちは、ここで覚えた遊び方とかを、お孫さんに実践しているようです。逆に、お孫さんが使わないおもちゃを、寄付して下さったりもして下さいます。

(E) だから、シニアの方は、地域との繋がりで重要な役割をしてくださっています。ここだけではなくて、ほかのところにもボランティアで行ってらっしゃって、地域の橋渡しのような存在で、本当にありがたいと思っています。

やはり、女性の方は、比較的意識改革ができるのかなというか、この間びっくりしたことは、男性の方は、会社組織

みたいなものを、ボランティア組織に入ってもちょっと引きずっているかなということがあったりします。ちょっとした企画物があつたときに、どここの何とかさんは、何とかの支店長までしたかたですからというように、ちょっとした発言の優先順位ができたりするのです。その点、女性の方は、年齢などもあまり関係がなく、一緒にボランティアをしている仲間という感じで、女性ボランティアさん同士の会話を聞いていても、「けんかをしているんじゃないの」というくらいの本音と本音のぶつけ合いがあるのですけれども、お二人ともあとはケロッとしていて。けんかではなく、意見交換なのです。あれは、面白いなと思いました。

●活動を通じての自分自身の存在感

(司会：河野) 最後にここでの活動が、皆さんにとって、どういう存在なのかということと、今後この団体を越えてでも構いませんので、やってみたいことなどがありましたら、一言ずつお願いします。

(A) 一応代表としての発言ですが、まだ団体として安定感もないですが、皆に支えてもらいながら4年目を迎えたと感じています。先程この活動を通じてお金がもらえるというのはすごいことというお話がありましたが、やはり子供を抱えていると中々フルタイムでは働けません。自分の子供も地域で育てながら、少しは小遣い稼ぎができる程度の仕組みが作ればとか、もうちょっと在宅で働ける環境を作り出すなど、今後少し担いたいという部分が一つあります。

ただ本来的には、親が就労するということに関係なく、地域のどこでも育てられる環境をどう作っていくのかということが、私たちの第一の使命だと思っています。そういう意味で言うと、子供たちが地域で育っていく環境を、親が働いているとか働いていないとかいうこととは関係なく、どのように作っていくかということです。だから、「びーのびーの」の活動を中心にですが、地域の子育てのいろいろなことを底上げしていかなければいけません。

今、社会福祉協議会(以下、社協)とは、行政と民間の間くらい的位置づけにあるので、一緒に活動を進めていくことがやりやすいのです。子育て支援プロジェクトや広場、サロンの連絡会などを作りながら、区内のいろいろな子育ての情報提供や連絡会などが社協を中心に動き出しています。私たちも、事務的な機能を担えるような形に今年くらいからなりそうなので、さらに進めたいと考えています。

第3の道でもないのですけれども、フルタイムで女性も男性並に働くということとは別に、地域の中で子供たちの息遣いを感じながら、社会的な活動ができるというような場を作りたいということで、今はまだ始まったばかりだと思うのです。だから、今の日本の男性の働き方と同じように、女性も働いてもいいのですが、専業主婦とはまた別に、そうではない道もあるのではないかと思います。そういう形が作ればいいなと思います。そこに、女性としてライフステージの中で、そういった地域活動もできるし、子供が育っていく間に一緒にできる活動というのがもう少し職業としてできてくると、もっと地域が変わってくるのではないかなと思います。

だから、行政の力も借りながら、お母さんたちも生き生きできるように、それが結果として、子供たちのいい発達につながり、エリアを作っていくというようになっていくといいなというのが希望です。まだまだそれに対しては、いろいろなネックがあります。そういうシステムができるまで、どれだけスタッフがついてこられるかということころです。今はかなり経済状態も悪いですし、お父さんの稼ぎがあるからできているという部分もまだまだあります。もうちょっときちんとした経済活動の一つに、この活動も位置づけられるように、社会にも行政にも働きかけていきたいと思っています。

(B) とりあえず、今の子供の首が据わったら広場に参加しようと思っています。方向性としては、代表と似ているかもしれませんが、子供とともに、母親自身の能力をもっと出してもらえるような企画を、もっと考えていきたいなと思っています。今自宅にいて、メールを見ているんですが、私は取り残されていくという感じがしています。追いつくために、もうちょっと頑張らなければと思っています。

(D) 来年は小学生企画を充実したいですね。そうすると、この団体の年代が揃うかなと思います。それがまた、小学生が中学生になり、高校生になって、青年になって帰ってきてくれる場所、またここを卒業していった子供たちが帰ってきてくれる小学生講座が続けられればいいなと思っています。

あと、広場でお母さん方とつきあっていますと、お子さんの体調に関するお話とかしていたのですが、子育てのサポートのシステムはできているのですけれども、やはり、お母さんたちが安心して預けるというまでにはなっていない部分もありますので、そのあたりの環境作りのお手伝いできればと思っています。

(C) 私もある意味で代表と同じ意見なのですが、NPO自身がきちんと地域活動として職業に結びついていけるかということは、大きな課題だと思っています。

私の原点は、特に娘を持ったときに、彼女が今度子供を育てるときに、自分が感じたようないろいろなハードルを選択しなければいけないというような状況をいかに緩和するかということです。20年か何十年か後になりますますが、そのときに、もう少し楽な選択肢があるようにしたいと思います。自分は、働くか、やめるかというどちらかをやるしかなか

ったし、夫とのバランスも、すごく話し合いながらやってきました。そういうものも、もう少しスムーズに彼女の時代にはできればと思っています。そのために、自分は今何ができるのか。財産は残せませんので、それぐらいしかやってあげられないかと思っています。

あと、この団体を通じて、今やっている活動が、財政的にも運営的にもフラットに色々な人が関わりを持てるようになっていたり、通常では重要なこと当然のようにやっていることが、もう少し科学的に実証していける仕組みを作りたいと思います。

だから、例えば本当に男の人が、育児休暇を取って、それが企業にどれだけのプラス効果をもたらすとか、私たちが今行っているような三世代交流が、いかに地域のためになっているかということ、きちんと科学的に実証していけるような、体力やノウハウを身につけていきたいなと思います。これは、定性的に「いいんだ、いいんだ」と言っているだけではなく、どれだけ本当に社会にインパクトがあったのかということもきちんとやっていけるようにです。でもそれは、私たち素人では無理なので、いろいろな立場のかたを交えてやっていかなければいけないことだし、NPOの公益性ということも併せて、自分たちの成果というものを、きちんと実証していくようなシステムを作っていきたいなと思います。

あとは、世代間など色々な立場の方たちが集うような場所を、ここだけでなく全国レベルで、色々なことをやっている方たちとネットワークを組み、少しずつ刺激を受けながら、マスとしての成長も少ししながら、ともにどれだけのことをこれから一緒に生み出していくかということも、一つ課題だと思います。

(E) 今おっしゃったように、ここでの活動がなぜここまで多様な人たちを巻き込んで、お互いが育ち合う場になってきているのかということを検証していくことが大事で、行なう必要があると思います。先日、集いの広場の第2回の実務者研修会がありまして、その場でも集いの広場というもの、ここでの子育ての広場のようなものが、非常に曖昧な感覚でとらえられていて、各々の広場によって非常にばらつきがあると感じました。それは地域事情などを鑑みて当然なのですが、やはり基準を作らなければ、心が交流する場が反対に人を傷つける可能性や、子供の育ちや大人の育ちにとりマイナスの場になることも十分考えられるということを思いました。

ここが頂点にあるわけではないけれども、やはり今まで私たちが培ってきたものを、研修などで広く提供していくことが大事ではと思います。ただ、それを無償でということは、また違う観点になるのですが、団体としての財源の確保などもありますので、その辺を一緒に考えていく必要があります。

私はボランティアスタッフですが、このごろは、代表や副代表と同席することが多くて、「びーの」のことについていろいろと言われたり、「びーの」のことを考える場に行くときに、私自身が「びーの」の中のことは自分が関わっている一部しか分からないということに、ジレンマも感じます。仕事で行っている人は、多分24時間仕事のことを考えて、右から攻められても左から攻められても上から攻められても答えられるようにしているのが仕事ではないかと私は思うのですが、私はボランティアスタッフで、自分の中の空いた時間を「びーの」に費やしているという部分で、そここのところのギャップを、右からも上からも分かりません、この角度だけしか分かりませんというところを、補っていくべきなのかどうか、ボランティアスタッフとしてどのようにやっていくのか私自身がその辺の関わり方を考えていかなければいけないなと思っています。職員という形もあると思うのです。職員になれば、そのように全活動的に一日中仕事としてとらえることもできると思うのですが、私自身のライフサイクルと、果たして今合っているかどうかなども考えていきたいと思っています。「びーの」に関わると、どの人もそうだと思うのですが、非常に魅力的で、どんどん自分の能力を生かしてくれるので、のめり込むのです。けれども、振り返ってみると、自分の一日の使い方が粗雑になっていたり、何をやってたのだろうとかもあるのです。そのバランスを取るためにはどういう働き方がいいのかということも考えていきたいなと思います。

(F) 来年、子供が幼稚園に入園することになり、自分の時間が少しできるようになるのですが、今本当に中途半端なこの団体に関わり方をしていますので、ちょっと手伝おうかなと思いつつも、もうちょっとお金になるものを手伝ったほうがいいのかと迷っている最中です。

(G) 私は、Cさん以外の有償スタッフとして、ここに入った初めてのケースだったのですが、入ってみて、こんなに大変だったと思うことがたくさんあります。事務局に求められているものは高いものなのに、私はここまでしかできていないというプレッシャーがありました。本当に求められるもの、必要なものが自分にも分かってきて、あとから自分がついていっているの、本当に申し訳ないと思っています。でもこのスタッフがすごいのは、本当に自分の得意な分野で関わっていることです。それだけではなくて、ほかの世界を持っているのです。私は、そういうすごい女性集団の中にいますので、1人ではできないことも、このスタッフとなら実現できるのではないかと本当に思います。

(司会：河野) 本当に、いろいろと個人的な活動に参加され、いろいろなこともやってらっしゃることがわかりました。今日は、どうもありがとうございました。

NPO法人 NALC本部 インタビュー

日時：平成15年11月21日（金）

場所：大阪府大阪市

NPO法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ（NALC）

- ・全国的な規模をもった時間預託制度を利用した会員相互扶助のボランティア団体。
- ・同団体は、超高齢化社会を乗り切ることが主な目的とし、会員相互による時間預託活動により都市部を中心に発展、全国に88の地域支部、16,500名の会員数（平成15年9月現在）。
- ・全国1,000ヶ所の拠点、全国ネットでのNPO活動ボランティア体制を確立すべく活動中。

● 自己紹介

（A：男性・常務理事） 私はNALCの常務理事という形で、主に組織関係全般を担当しておりますが、いろいろな拠点を立ち上げるときに説明に行く必要があるため、役割分担をして、私が理念、Bが具体的な活動をやっています。

（B：男性・常務理事） 今、説明がありましたが、私も常務理事として、組織を担当しています。少ないスタッフで全国のマネジメントをやっているため、他にも担当分野がありますが、メインは組織のいわゆる具体論で、実際に動き出したときにどのような活動をしていくかを軌道に乗るまでサポートをしています。あと、問題が起きたら、両方で対応しています。ちなみに、私どもは「生活研究アドバイザー」という名前です。

（C：男性） 私は、奈良が拠点で活動しております、平成14年から本部へ来てお手伝いを始めていますが、今は専らBをサポートする立場で働いています。

●組織全体について

（司会：福地） NALCさんというのはどういった社会を目指していらっしゃるのかということをお聞かせ頂きたいと思います。特に理念として掲げていらっしゃる自立と奉仕と助け合いという部分について、少し説明いただけたらと思います。

（A） これは、一口で言えば簡単なのですが、これから訪れるであろう超々高齢社会に向かって、皆が助け合いながら乗り切る。だから、私たちというよりも、私たちの孫の世代、団塊の世代が高齢者になるのが2015年ですから、ピークは2050年です。そういった中で、QOL（Quality of Life）とよく言われますが、いわゆる人間らしい、人間の高い質を保ちながら、一言で言えば、自分たちが幸せで健康でという生活が出来るように、時間預託制度などを一つのツールにしながら、目指していく。したがって、私たちの考える自立というのは、これはあくまで介護保険のお世話にならずに死ぬまで元気で生きていくということです。

それから奉仕というのは、これは「ボランティア」という言葉を使う人にとって皆意味が違うので難しいのですが、いわゆる慈善や慈悲というイメージではなく、自分が社会のため人のためにサービスを提供することが自分の幸せだということです。だから、奉仕はあくまで完全な無償ボランティアです。阪神淡路大震災のときNALCはありましたから、手弁当で、旅費も自分持ちで全員行って応援しました。

また、今いろいろな奉仕をやっていますが、主なものは、町や公園の清掃を年に2回やっています。市町村によっては毎月のところもあります。それも社会貢献、皆がそのことによって喜ばれることが自分の喜びである。だから、相手からお礼を言ってもらおうという気持ちを持ったら奉仕ではないですね。こちらからやらせて頂くということです。「ありがとうございます。ごみを拾わせて頂きます」ということで、そういう人間関係社会を作っていく。

助け合いというのは、後ほどBさんより説明しますが、いわゆる会員同士。今言った奉仕は、会員もですが社会一般ですね。それから、今、清掃の話をしてきましたが、特別養護老人ホームなどにボランティアで行きまして、おしめをたたんだり、話し相手になったり、お遊びの相手をしたり、これも奉仕です。そして、助け合いは会員同士ですから、会員預託で会員同士が出来ることを何でもやろう。何をやっても1時間1点。草取りから家事援助、介護介助等出来ることをやる。我々のモットーは、「自分の出来ることを、出来る時間に、自分の出来る方法でやろう」というものです。

しかも、ボランティアが原則ですから、強制はしない。例えば、一人の会員である利用者の方が、「助けて」と言った場合は、一人では行けず、必ず5～6人をコーディネートして、この人が行けないときはこの人が行くという形で、考え方は先ほどの奉仕と一緒にですが、助け合いをしようということで、やらせて頂いています。人材派遣業ではありませんから、必ず助けて頂いた人は、今度は自分の出来ることで助けよう。だから、寝たきりで何もすることが無いとい

う人には、テレホンサービスという形で、日にちを決めて電話をかけ、「今日はいい天気やね」と言う。返事がない場合には119番に電話をする。また、極端に言えば、寝たきりになって口も利けない。それで、介助に来てもらった。そうしたら、にっこり笑顔で、「ありがとう」という気持ちを示す。極論ですが、これでも1点ということになります。このように、幾ら寝たきりであっても、何か相手に対してサービスが出来るはずで、助け合いは一方通行ではないのです。双方向性、お互いが助け合っていく。高齢者が増えていく中で、NPO、ボランティアの力を出すことによって乗り切っていくと言うことです。

こんな話をすると、理屈は分かるが、要はイメージとして、私なりにイメージとして二つ挙げました。

一つは、江戸時代の長屋です。「今日、あそこのおばあさん、えらい出てけえへんな。ちょっと障子に穴空けて覗いてみ」。覗きますと、「ああ、引っくり返っているわ」「障子破れ、破れ。お医者さん、呼んでこい」。「どこどこで赤ちゃんが生まれるらしい」「ああ、産婆さん、呼んでこい」。これは別に制度を作ってやるものではなく、助け合いが自然に行われていたということです。

もう一つは、部落という言葉を使うと非常に誤解があるのですが、小さい村です。村八分、それ自体は村から追い出されるというイメージに使われていますが、あれはももとの言葉は村全体なのです。村の中で、お互いがお金をもらわずに十の助け合いをやる。この十とは何かというと、一つは、赤ちゃんが生まれた時のお手伝い。二つ目は、成人式。昔の成人式というのは、今の成人式と違って非常に重要な行事でしたので、皆がご馳走を持ち寄りたりして、これもボランティアでした。その他に結婚式、病気、お葬式、法事など、これはみんなボランティアです。八分というのは、村の中で泥棒をしたり、不倫をしたりしたときには、「お前は、悪いことをしたから十分はボランティアが出来ない。二分だったらやってあげる」と。この二分は何かというと、火事と葬式なのです。火事は放っておいたら、延焼したら困る。お葬式は、もう亡くなったのだからということです。

これからの新しい日本の中で、お互いがボランティアでという助け合いを目指そうということです。「長屋イズム」という言葉である人は言っていました。

その基本は、自立、奉仕、助け合いをすることによって、自分の生きがいになる。そのことが自分の喜びだと。あとの話にもつながりますが、初めは会社人間で仕事ばかりやっていた、家庭のことも省みなかった。会社を辞めたら奥さんと二人でNALCに入って、今のような活動で、生きがいを感じる。生きがいを感じるによって、自分自身の健康と幸せと長生きを作り出して行く。こういう理念です。

(司会：福地) 従来、コミュニティ作りとは、時代が進んでいくと、国というものがすごく大きくなり、市民が介入する部分がなくなってしまい、公共性のようなものが徐々に失われて行く。そして、人との絆も弱まって行く。そういった中で、新しい地域、社会の中のコミュニティですか。

(A) 本来、特別非営利活動法人(NPO)が法律として衆議院を通ったときは「市民活動法人」でした。ところが、市民活動というのは、何でもかんでも反対というイメージがしたのではNPOを作っても意味がない。だから、「こうやってほしい」と政策提言をする。そのために、議員づくりも出来るだけの力を持つ。選挙運動や政治活動はやりませんが、政策活動をやる中で、私たちの主張する政策を実行してくれる党に対して政策活動をやる。そして、出来上がったいい法律を我々の手で施行して行く、そういう流れなのです。だから、私たちのイメージモデルは、アメリカのAARP(世界最大のシニア向けNPO)なのです。そういう力を我々自身が持って、そういう社会を作って行きたい。

(司会：福地) そういった意味では、政策というものを自分達で作って言って、それを我々が実行しようと言う考え方自体も自立の考え方ですね。

(A) もちろんです。本来、政治や経済と言っても、突き詰めれば我々の毎日の生活です。その生活の中から、特に高齢者を中心にした、アクティブライフを作ってくれているのですが、いわゆるシニア(高齢者)がもっと声を出そうということなのです。今回の総選挙でも、年金に関して経済界から「反対」とか反応ありましたが、高齢者の声は何処からも出ていないのです。高齢者の声を出す団体は、あっても小さな団体ばかりですから。それをNALCは今1万6000と数は少ないものの、全国ネットですから、その中心となり他の団体にも呼びかけて、高齢者の声を、団塊の世代も含めて我々の声を出して行く。出すことによって、先程言ったような社会を作り上げるということなのです。

(司会：福地) 活動を始めたきっかけとして、「自立」「奉仕」「助け合い」といった理念がありますが、Aさんきっかけについてお話ししたいとおもいます。

(A) 現在の会長の呼びかけがきっかけです。会長が退職後、大学でちょっと教えられていたことがありますが、会社人間、特にモーレツ社員を卒業した人たちがこれからどうなるのかと考えたのです。今までは、平均寿命が低かったので、定年後4~5年も生きればとのことでしたが、今は平均寿命が大体男性で78歳、女性で85歳ですから、65

歳定年としても20年ぐらい生きていくのです。毎日ゴルフばかり、植木いじりばかりでもしょうがない。ご存じのように、定年後必ずかかる病気が三つあります。それは、一つには不眠症です。会社で働いていたときとリズムが変わるからです。2番目がうつ病、そして3番目が痴呆です。

キッチンドリンクという言葉は本来女性をさした言葉です。男性は、会社へ行ったら朝から飲みませんが、退職すると、キッチンドリンクになるのです。テレビを見ながら酒を飲んでごろ寝をする。そうすると、いわゆる粗大ごみ、濡れ落葉と。最近では、「いるか族」というのです。いるか族というのは、奥さんから見て旦那が「今日もいるか、明日もいるか、まだいるか」と思われている。去年1年間の離婚数は30万組でしたが、そのうちの35%が熟年離婚、その大部分が定年離婚です。定年して、「今から旅行でも行こうか」「いや、それより先にこれに判を押して下さい」ということで、離婚届、協議離婚です。それは、濡れ落葉で、お酒を飲んでごろごろしていたら、当然そうなります。では、そうならないためにはどうしたらよいか。しかも、夫婦の会話というのは、子供を卒業させてしまうと、本当に喋ることがありません。だから、「よくペットを飼え」と。うちでも犬と猫を飼っていますが、犬や猫の話はできるが、政治や経済の話は、奥さんのほうがレベルは高い。毎日、竹村健一さんや田原総一郎さんを見ているからね。旦那は会社で、会社の専門的な仕事の知識は高いが、そういう全体的な社会常識は奥さんのほうにあつて、話が合わないのです。

それではいけないから、二人そろってボランティアをやろうと。それで、ボランティアの組織を作って、ボランティアをやったら共通の話題ができる。また、研修会へ一緒に行こうとか、どこどこの利用者を助けに二人で行こうとか。奥さんは、洗濯物や食事をして、旦那は重たいものを動かしたり、草むしりをしたりということに生きがい求めれば、定年後20年間というのは生きがいを持ってられる。しかも、それをすることによって夫婦も離縁せずに、しかも健康に円満になるのではないかと。そう会長が昔の仲間呼びかけて立ち上げたのです。

しかし、当時NPO法はなかったもので、初めから法人格を取っていません。でも法人の肩書きがないと行政に相手にしてくれません。そこで、長寿社会文化協会(WAC)の軒先をお借りし、団体名を「WACアクティブ・クラブ」としていました。しかし、「WACアクティブ・クラブ」はWAC内にありながら、会長も規約も別にあるのでおかしいではという話が出てきて、そのとき、たまたまNPO法が出来たので、現在のNPO法人になったのです。

●活動を始めたときの問題点

(B) 何しろ、皆初めてのボランティアなので、まず自立が一番頭にある。自立というのは、シニアが社会のお世話にならずに、子供のお世話にならずに自立していくということです。そう言うのはよいのだが、要するに遊んでいるわけです。そういうことをやる自立したクラブ活動みたいに。ただお互いに親しくなった上でないと活動が出来ない部分がありまして、つまりボランティア団体は、平等だから命令は出来ないということです。コーディネーターは必要ですし、誰か代表がいて決断をしなければならぬけど、「あなた行ってくれ」という命令は出来ません。そういう意味では、阪神淡路大震災のときなどは、皆自動的に全員自分から申し出て行ったわけです。黙っていても、そういうときは当たり前だという感じで、自ら自分の出来ることで走り出した。それをコントロールしたということです。震災当時、NALCはできて1年目でした。おにぎりを運ぶことがありましたけど、作ったものの、どこへどれだけという統制がとれてないために、本当に困った人々には行き当たらず、翌日おにぎりが野晒しになっているということがありました。結局、司令塔があつて、組織立ててやらないとボランティアもうまくいかないということが、あの阪神淡路大震災で分かりました。組織が立ち上がった当初のことで、NALCにとってのすごい原動力になりました。あそこで皆がボランティア意識を持ったと思います。

(A) ボランティアというのは、目の前の人を助けるので、極めて不公平なのです。行政の場合は平等にやらねばならないから遅くなってしまいます。神戸で揉めたのはそれです。公的機関へ、我々が援助物資を持って行っても、「まず調査してから」「平等に」とのことでしたから、すぐには配らないのです。我々は我々で持って行き、置いていったということなのです。要するに、行政から見たら不公平なのです。不公平だけど、困っている人が目の前にいて放っておくわけにはいかない。ボランティア団体も組織立てて、一つの形を持たないとうまく機能しないことが分かったのです。

だから、日本というと語弊がありますが、ボランティアの意識を持ったのは、近畿では阪神淡路大震災からです。NALCの会も増えました。しかし、皆さん、自分の出来ることでやろうということが始まりのきっかけです。

(司会：福地) 阪神淡路大震災のあたりまでは明確な組織というのは？

(B) ありました。私が所属したところは、既に立ち上がっていましたが、そのときは運営方法を作っている最中でした。だから、その段階では、自立奉仕程度で、まだ助け合いまでいっていません。というのは、「会員の中で困った人が出来たら助け合う」というのが当初の考え方でした。阪神淡路大震災以後は、「NALCさん、助けて下さい」という方々が増えました。ここは会員組織ですから、「入会して下さい」と言う。すると、会費を払って頂けないといけません。相互援助ですので、Aさんが言ったように、受ける側も、出来ることで助け合いをして頂くということ

です。それは各支部、拠点で皆考えています。

例えば最近の例としては、寝たきりで頭脳明晰のおばあちゃん。息子夫婦は共稼ぎで、お一人で残っている。だから、NALCの会員さんがお昼前に行って昼食を準備し、一緒にお昼を食べて、夕食の準備をして帰られるのです。その人は体が動かないだけです。何か出来ることはなのかと、その拠点の皆さんが考えて、学童保育を考えたのです。小学校1～3年生までは組織立てて学童保育をしているが、4～6年生になると中々ない。それで、そのかたの自宅で4年生の男の子を学校帰りに預かってもらうことになりました。学校が終わって3時頃から両親が帰るまで居る。つまり、「ただいま」と帰ってきたら、おばあちゃんが、「冷蔵庫に何かあるから食べなさい」「勉強しなくちゃだめよ」と言うわけです。それで1時間、お互いに1点ですね。お昼に2点、おばあちゃんが払い、4時、5時、6時で3点を受け取る。そうやって点数のやり取りで増える。

そのように、今、Aさんが言った、極端なのは笑顔だけれど、モーニングコールもあるし、それから、寝たきりの男性の場合は、ホームヘルパー2級、3級のモデルになる。実際に介助でそこに行って、何でも出来ることをやって頂くという考え方です。独居老人のかたは、特に夜が寂しいので、寝たきりの女性へ電話して、雑談をする。いわゆる社会性を持つという形です。可能な限り必ず相互援助出来るようなシステムをやっています。

●活動の内容と概要および時間預託制度・生活アドバイザー制度について

(A) 概要といいますと、アメリカの「タイムダラー」がモデルです。タイムダラーも、今だにぶ軌道に乗ったようなのですが、最近エコマネーなど地域通貨と言うことがよくあります。あれは我々では「時間通貨」という呼び方をしていますが、いわゆるドル、円など、お金という発想は、あくまで物質文明から生まれてきたものです。だから、お金と発想するとインフラも含めて、資産、土地、建物などが必ず絡んできます。

でも、これからの人間世界はそれだけでは非常に貧しくなるのではないかと。あるいは、ある意味ではちょっと行き詰っているのではないかと。円そのものが株や何かで売買され、円が上がったり下がったりしている。だから、そこで一つの、円ではない通貨、タイムダラーというものを考え出そうではないかと。人間の生活、資産というものは物質だけではない。だから、親が子供を育てるのも、これは仕事ではと考えるのです。普通、仕事は会社で働いて給料をもらうことだけれど、そうではなく、親が子供を育てる、友達同士が遊ぶ、それから、ボランティアがサービスを提供する、これは全部仕事ではないか。しかも、本来の資産というのは、道とか家、橋ではなく、人間そのものが資産なのではないか。そのためには、先ほど言った長屋イズムはいいのだけれど、一つの形というものがいるのではないか。それで、アメリカで生み出されたのがタイムダラーです。だから、タイムダラーというのは、ドルではなく、円でもなくて、やはり人間という資産、そして仕事やサービス精神、助け合い、また、先ほど言った援助がタイムダラーで出来るようにしようというのが一番の基本理念です。そのうえに、地域通貨との関係が出てくる。

だから、我々も当初言っていたのと変わってきたのですが、私どもが初めに考えたタイムダラーというのは縦型と呼ばれるタイムダラーです。これは縦型と横型があり、縦型のタイムダラーというものは、今NALCがやっておりますように、会社を卒業して、夫婦で加入して、60～70歳代でサービスを提供して点数を貯め、体が動けなくなった80～90歳代でその点数を使う。しかしこれには条件がありまして、後の世代が入ってこない、点数が貯まったけれど、助けてもらおうにも誰もいなくなる。それで、団塊の世代に対する呼びかけを今盛んに考えています。これは縦型で、NALCは縦型が基本なのですが、それに地域通貨、エコマネーと言われている横型を絡めようと言うことです。横型というのは、NALCの場合は時間預託という制度ですが、一般的に地域通貨は3か月しか使えません。しかも、それは今現在、もらって「自動車も掃除して」「今度は、あなた、子供のお守りをして」ということで使われ始めている。それから、それに今の会社支援制度を絡めて、文楽を見に行く時、点数を持っていったら1000円割引があるという現状型で使っていく。NALCの場合には、期限を設けず点数を貯めていくので、将来使うのもよし、今使ってもよしなのです。そのためには、商店街などとも提携が必要になってきます。

具体的にはシニアにターゲットを絞ってきている企業です。例えばカルチャーセンターで、入会金の数千円免除をしています。またそれと同時に、カルチャーセンターに賛助会員になってもらい、うちの会員はシニア60歳代以上、平均62歳ですから、いろいろなキャリアの人がいまして、講師可能な人は申し出てもらい、参加することもあります。

それから、社会貢献活動とのことで、例えば奈良の大仏さんの掃除をしています。これは、掃除をするのと同時に住職さんの話を聞いて、一つのイベントみたいにする、一般のかたも参加出来ます。そのバスの往復は旅行会社が持つわけです。両方がタイアップして、社会貢献活動をする。タイアップをして、いわゆるコラボレーションになりますが、ただの割引だけではなく、我々の趣旨に沿った何かが前提なので行っています。

一つの商店街として来るケースとして、初めに事務所提供です。今、駅前商店街はだんだん空きが増えてきて、活性化しなければいけない。そのために、エコマネーで一生懸命活性化しようとしています。続かないでしょう。だから、NALCに事務所を提供して、または事務所を提供したくないときは自分の事務所内に一緒に居てくれとか、そうすると、会員さんの出入りがあると、ついでに買い物をするではないですか。また毎月イベントをやっていますので、その弁当は商店街の弁当屋さんが売る、のぼりはのぼり屋さんがやる、カバンはカバン屋さんがやる。そのようにして活

性化していきます。あるいは、その空き商店街を借りて学童保育をすれば、いわゆる三世代の交流をすることにつながります。だんだん人が集まり、お互いにメリットがあるのです。

(司会：福地) エコマネーというと、どちらかというと地域に根ざしたお金というイメージが強いのですが、NALCの場合だと、長距離介護のような形で全国ネットの強みを生かせるところがありませんか。

(A) 一つの目玉ではあるのですが、現実にはそうたくさんは出来ません。ただ、何かのときには助けになる。というのは、自分が貯めておいて、田舎の親が困ったときには使えるなどという安心感につながります。全国ネットで「点数は全国で使えますよ」というのがエコマネーと違うところです。

ただ、その地域に時間預託制度をつくっている団体があつたりすると難しいのです。全国的には、日本海側が、一部山口とかあるのですが、ほぼだめなのです。それは今までの伝統文化で、先ほど私が言った、村の制度が発達していて、村の中でお互いが助け合いをしているから、我々のような団体は必要ないとのことです。

(司会：福地) こういう形での遠距離介護のほうは利用者の方が増えていますか。

(B) 非常に増えています。ロンドンやチューリッヒから来ます。本当は、あちこちに支部を作りたいのです。しかし、権利義務等の関係で、外国の保険は怖いので、出来ないのです。それで、点在会員として会員さんはいらっしゃる。やっぱりご両親のことは心配になるし、年に1回ぐらい帰ってきているけれど、それでも心配だそうです。

それと、チューリッヒに素晴らしい日本人の団体が、丸ごとNALCに入会したいという申し入れがあつたけれど、ボランティア保険が効かないので断っているのです。万が一のとき、莫大な損害賠償でしょう。それで、点在会員としては認めましょうということになったのです。だから、日本から会員さんが行ったら、案内してくれたり、宿の世話をしてくれたり、それは点数をつける。そして、その点数を日本に送ってくると使える。

(司会：福地) 時間預託で利用できるサービスの内容についてお聞かせください。

(B) いわゆる精神的援助、家事援助に限られます。いわゆるプロがやる、寝て食べて排泄することはやりません。また、医療行為にかかわることも出来ません。それ以外の出来ることだったら何でもやります。

家族はお医者さんから言われてやるのは出来るけれど、我々は出来ない。昔はレスパイトケアなどもやりましたが、今はショートステイがあるから要らなくなりました。

(司会：福地) どのようなサービスでも1時間1点というように細則のほうにも書かれていますが、これはどういった理由ですか。

(A) これは、一つはタイムダラーがモデルですし、私どもは人材派遣業ではありませんから、飽くまでサービス提供ということです。しかも先程言いましたように、自分の持っている力、持っている能力でやるのですから、何をやっても1時間1点です。

(B) エコマネーがうまくいかないのは等価価値ではないからです。相互に決めるわけですから。例えば、学生が農家に農作業に行ったとします。そこで、エコマネーをもらうとき、「今日は、あんたたちの働きが悪いから3点だ」と言われる。そこでもめるわけです。その点、我々は誰が何をやろうが、例えばお医者さんの会員が200人ぐらいいますが、医者であろうが弁護士だろうが1時間1点です。ここが会員さんの増える理由でもあるのではないかと思います。皆さん平等に、過去など問わず、現在が重要ですから。かつ、善意ですから、そこに価値観をつけられません。

(司会：福地) 特定の時間や場所で利用者が非常に集中するときと、逆に、ボランティア希望者のほうが非常に多かった場合、都市部ならあるのかもしれませんが、そのような場合は、どうなりますか。

(A) 拠点によって非常に差があります。利用者は非常に多いですが、行く人がいない。それから、ボランティアをしようと思って入ってきたのに、何もするところがないということもある。前者は、正直言ってお手上げです。そこで、サービスできる会員を増やしていく。逆に、サービスを提供したいが行くところがない。介護保険ができてから、実はそちらのほうが増えてきました。今まで我々が行っていたことは介護保険である程度できますからね。そこは、最近我々もNPOだから収益事業をやってく方向でして、例えば高齢者住宅や特別養護老人ホームなどに我々のほうから出向いて、いろいろなサービスを行う。会員同士ではないですから、個人サービスではありません。例えば売店のお手伝いというようなことで、相手の企業からお金をもらう。これは運営費です。行った人には時間預託をつけてあげる。当然、

売店ではなく、行ったら、高齢者の人に対する話し相手とか何とかも出てきます。そうすると、サービスを提供したいという人も生きがいを感じるわけですね。

そういう形で、今まではハイキングや料理を作るだけでしたが、そういうところと提携をして収益事業を始めることにより、逆に増えてきたのです。だから、いちばん初めに我々の理念を言いましたように、自分がサービスを提供することによって生きがいを感じないと意味がないのです。利用者のほうは、どちらかというと、困っているから助けてくれと。だから、「うちは行けないが、こういう有償ボランティアがありますよ」「介護保険、受けておられますか」「お宅も認定を受けて介護保険でいったらいいですよ」というアドバイスをする。

(B) それから、隣の支部で相互にやります。例えば豊中で人手が足りなかったら、吹田が応援に行く。足りないところは越境して、例えば朝から晩までとか、月火水木金とずっと来てくれといたら、一つの拠点では対応出来ないから一緒にということになる。そこで、ローテーションを組み、両方のコーディネーターが行って話し合いをします。こちらは人手が余っている、こちらは人手が足りない。そういう横の連絡はしているのです。独立しながらも、運営のうえではお互いに同じことをやっていますからね。それで、平等に預託点数をつけるようにしています。

●介護保険について（現状の制度）

(A) 私たちの活動は、いわゆる我々は介護保険ではできない枠外、「上乗せ、横出し、下支え」と言っていますが、そこをやっています。下支えは自立ですから、自立は当然やる。それで、横出しにポイントを置こうと。上乗せの方は、我々が行くほうでは限界があります。介護保険の場合、個人負担が1割あります。もし会員さんで点数を持っている人ならば無料なのですが、点数がないと500円程度の寄附ということになります。500円は高いですよ。それで、介護保険でやっていく。だから、介護保険ではできない、あるいは介護保険を満杯使い切って、さらにプラスアルファを希望されるかたはやっています。だから、介護保険ができ、いわゆる介護保険でも行うような家事援助はやっていますが、介護助的な仕事は減ったことは事実です。そこで余力を奉仕活動と収益事業に向け、特に団塊の世代に魅力のある活動をやっていくと。ただ、具体的にそれをやっていくというのはまだまだ普遍化はしていません。一部の拠点では非常に活発に収益事業などやっていますけどね。

介護保険制度で、現状の制度の一番のウイークポイントはケアマネジメントだと思っています。まず、ケアマネージャーの問題がある。これも言われているとおりです。NALCなどがいちばん紹介したりして困っているのはケアマネージャーです。在宅のほうは市場価値ができてきていますが、施設のほうはまだ数が少ないから市場競争ができていないでしょう。だから、そういう施設を増やす。しかし、2015年問題で厚生労働省が出しましたが、今までのような施設の数ではだめなので、ユニットケア、あるいは小規模のことも考えていかなければいけない。お金の問題も考えなければなりません。また、いちばん大きなテーマは、厚生労働省の取り掛かっている痴呆です。だから、我々は痴呆には手がつけられていません。

(司会：福地) では、全般的に理念的な面で、行政との関係というものをどのように考えていらっしゃるかと。と、実際にパートナーシップを組むに当たって問題だと思われること、もしくは、実際に起こった問題であるとか、課題点であるとか、そういったことをお伺いしたいと思います。

(A) すでに行政から委託を受けて、街角のデイサービスや行政がやっていた高齢者研修の事務方、あるいは、変わっているのは大阪狭山の図書館のお手伝いなどをやっています。ただ、まだまだ定着してないのが現状です。飽くまでNALCとして対等の契約を結び、しかも、NALCの展開に基づく我々の目的、いわゆる福祉を中心にした環境問題など、そういうことに合致した問題でなければならぬという点が難しい点の一つです。

中身については、収益事業ですから、ある程度NALCの運営費というのが見込まれるような契約にします。非常に理解のある行政、例えば枚方などは非常に理解があり、NALCの会長は、枚方の社協と枚方市の合理化委員会の顧問をしています。そういう格好で、NALCに対する理解というのは非常に枚方市も持っています。それでも、契約を結ぶまでにはいろいろな議論がありました。だから、我々は、先ほど言ったように将来の超高齢社会に向かって、NPOの持つ役割として社会貢献、困った人が他人に対してどれだけの貢献ができるかということを見極めて、行政に対して協力をする。社協も行政のようなものだが、社会福祉協議会と行政との協力が必要です。これは、はっきり言って各地バラバラです。行政もバラバラ、社会福祉協議会もバラバラ。だから、ケース・バイ・ケースでいい。

(司会：福地) 委託という形と、補助金を行政からもらうほうと、どちらがいいと思われませんか。

(A) それは、補助金としてもらうほうがよいですよ。自由に使えますから。委託だったら、与えられた仕事を責任もって果たさなければいけない。だけど、NALCは原則ボランティアですから。委託された場合は、「今日は、やれま

せん」というわけにはいきませんから、相当の人数を集めて、交代でも何でもそれに対するペイはしなければいけません。これは助成金、補助金でもらうほうがありがたいです。

●行政と取り組んでいる事業について

(B) 各拠点皆やっています。ここへよく相談にきますが、全部契約書を結ぶようにと条件づけている。というのは、就業規則のようなものでは、ボランティア保険の対象でないから困る。だから必ず契約を結べということなのです。それで本部の了解と、理事会の承認を得ることにしています。そして、応分の寄附を頂く等、中身を吟味して、そのうえで初めて時間預託をつけるということをしています。ただ、お金をもらったから時間預託をつけるということはしません。飽くまでもNALCの定款の趣旨に沿ったものでないとやらないというように歯止めをかけています。全国の拠点の半分の30か所以上ぐらいあると思います。今、リストラだから、雇用関係までできています。

今は、介護保険マネージャー研修で、もう3回目になります。ハローワークから来た失業者に介護保険のマネージャーの養成講座を3か月やっています。私もガイドヘルパーだから、車椅子の講座のコーチをやっています。

例えば、ある市から、「この人とこの人を採用してくれ。その費用はうちから出すから、仕事はお宅の仕事をさせてくれ。拠点の事務所で事務所当番、運営をしてもらおう」と言われます。その日当は行政から入るのです。若干うちに出た余力は運営費でもらえますし、そのうえ人を派遣してくれるし、いろいろながあります。だから、枚方市がやっているシニア向けのカルチャーセンターを受けることができたわけです。しかも、市がやっていたときの雇用している人をそのまま残してです。行政は財政的に厳しいから、よく話しはありますけど、趣旨に反するものはお断りしています。

(司会：福地) 行政委員会の関係機関との連携ということで、例えば企業のことは生活アドバイザー制度と連携なされているということがいえますね。そのほか保育所や幼稚園、児童館といったようなところと連携しているような拠点というのもあるのですか？

(B) ありますよ「子育て支援」で行っています。保育所や幼稚園・乳児院。NALC大阪ですが、乳児院に行っていて、人手不足をカバーしています。子育て支援をやり出してから、あちこちで向こうから声がかかってきます。「夏はプールの手伝いに来てくれ」など、いろいろ。それから、若いご夫婦のお子さんの保育所の送迎をやっています。そうすると、NALCは入れ代わり立ち代り保育所とか行くではないですか。だから、相手の園長さんや皆に一応全部そろって挨拶して、互いの面識を持ちます。でないと、誰が持って帰られるか分かりませんから。

我々が年配の団体ということで、興味を持ってくださり、お呼びがかかっています。

(司会：福地) どんどんネットワークが広がっていくというのですか。

(B) そうです。それを行政でやっているのが浦安で、施設で空き家を改造して託児所のようなものを造られた。三世交流の場所としてやっています。シニアが中心の我々が下の世代に向けて活動するというのは、「福祉で経済を活性化する」というのがよく言われますが、そうなると思っています。幼稚園などだったら、みんな喜んで行きます。相手も初めは慣れないけれど、慣れると、街中で、親は知らないのだから子供は知っているのです。ただ、NALCはまだ人数が少ないので、なかなか対応はできません。

学校では、いわゆる社会体験活動の一環として学校へ車椅子と高齢者疑似体験と一緒に研修として持っていくのです。そうすると、また広がっていきます。

(司会：福地) もう一つ、生活研究アドバイザー制度についてお聞きしたいのですが、まず企業へは、NALCさんに「こんな制度がありますよ」ということをどのように伝えるのですか？

(B) ホームページです。NALCの会長の関係で、平成8年頃からある電機メーカーと始まった。いわゆるシニア向けの製品開発のモニターをNALCの会員さんにして頂いた。それから口コミで業界に広がっていきました。私は、平成9年から生活研究アドバイザーをやっていますが、各業種大転換で、あらゆる業種になっています。

シニア向けの商品というのは、シニアの世界を作るため、シニアの社会を作るためのマーケティングです。それ以外、やっていません。だから、福祉とシニア以外はお断りしています。

それによって高齢者の製品を開発してくるならば、我々の社会のために役に立つではないかということで、若干の手数料、寄附を頂いて、運営費にしている。そして、会員を出してくれたところにそれを送る。

今後についても、この制度は拡大したいと思います。というのは、これはうちの収益事業でもあるわけです。ただ、ここの新聞が効いているのか、行政やあちこち配っているのか、これを見てときどき来ます。電力会社や、大きな企業がこれを見て来ますよ。

(司会：福地) 何か活動をするとき、それは個人でやられるのですか。

(C) これは個人です。女性しかできない活動もあれば、一緒にやれる場合もありますし。先ほども話がありましたが、東大寺の掃除に行ったりするのは、一緒にできますが、庭木の剪定、これは男性の仕事ですからね。

定款には原則として夫婦で入会とありますが、結局、旦那はリタイアすると、濡れ落葉だとか粗大ごみになって、ほとんど家に要らないもののようにされてしまうが、女性の人は世間の付き合いもそれまでのベースがありますから、ちゃんと生きていける。お互いの話がほとんど何もない状態から、同じようなことを一緒にやることによって、うまく平和にいくのではということも一つの目標と会長の話がありました。例えば、ペットを飼うとか、共通の話題をお互いに持つことでうまくいくというのものもあるし、また、年をとって高齢者社会になり、一緒に生活するのであれば、元気なうちに一緒にやるというのも、これは大事なことでしょね。

(B) ボランティア団体はほとんど女性でしょう。ここは男性で始めましたが、やはり女性がいなくてはだめだということに気付き、ご夫婦で入会いただいたほうがよいのではと。それで活動も、男性と女性のすみ分けができるでしょう。家事援助では、男性はどうしても庭掃除などになってしまう。だから、女性がいるから活性化しているような気がします。それで、初めは、ご主人がお入りになってあとから奥様、またはその逆ケースが多いです。初めから夫婦というのは、割と少ない。

●本部と各拠点との関係

(司会：福地) 拠点についてですが、本部が主導で地域に拠点を作るといった形なのか、それとも、もともと地方に別のNPO組織としてあったような組織を編入していくというような形をとっていらっしゃるのか。

(B) 新規です。もともとNPOがあつて入ってくるというケースはほとんどありません。ほとんどは新聞で見るか、放送で聞くか、マスコミを通じて知り、問い合わせがあるのが始まりです。それで、こちらからいろいろな資料をお送りして説明している間に、作りたいという人がNALCへ大概訪ねてきます。作る方法は「設立と運営のマニュアル」というのがあります。その立ち上げの間、その「設立の運営のマニュアル」に沿って、私が電話、メール、ファックスでやり取りをして、説明会にはNALCの会長に行ってもらいます。

今月24日に立ち上げる旭川の方は、札幌郊外の江別にNALCの拠点があるのですが、そこで去年、私がコーディネーター研修会をやっているときに聴きにこられたのです。「旭川に作って頂けますか」と言ったら、いろいろ話を聞いた中で、「『ボランティアは人にして差し上げる』その言葉だけ、その一言だけでOKです」と言われた。「『する』ではなく『して差し上げる』。自分のためにするのだ」というその言葉を聞いたから、旭川に作る」と言われました。それで、会長が先月に説明会へ行きまして、立ち上げることになりました。その間、約30数人位の会員が入ったので設立、そして、3か月以内にコーディネーター研修をします。そこで私がコーディネーターマニュアルと設立と運営のマニュアルを持っていき、明日から何をするか、どうやって運営していくかを、皆さんを集めて説明するのです。

会長は本を出していますので、その本や、会長の講演会やテレビが、きっかけのようです。ほとんど興味は、全国ネットでの時間預託制度ということですよ。

旭川の横に深川市というところがあるのですが、そこに大きな施設があります。その常務理事が時間預託制度といつて入ってきました。何もないのに入会してきたのです。「お一人では何も活動できませんよ」と言うと、「いや、いずれ私が作りたい」ということで、お入りになった。そこで今度、旭川と一緒に合流して頂いたのです。ここは施設にボランティアがいっぱい来ています。それにエコマネー、地域通貨をつけてあげました。ところが、そこには工場や学校等があつて、みんな転勤族なのです。それで、一生懸命地域通貨をためても、行ってしまつたらそれで終わりでしょう。そこで、これだったら全国で使えるとってNALCにと、そういうケースが多いですよ。

最近珍しかったこととして、松井山手へ行って、八幡市と京田辺市のところに東ローズタウンというのがあります。ちょうど枚方市の南側です。現在1200戸ですが、でき上がると2400戸になる。その町全体が「NALCのシステムで地域コミュニティを作りたい」といつてきたのです。これは我々も願ってないことです。初めにその開発業者が来て、そして住民の人達が来ました。NALCも随分迷ったけど、やろうということで、一斉に新聞と一緒に3000枚ぐらいピラをまきました。すると、60人位集まってきました。Aさんと私の二人で説明会をしました。次に、編集長と京都の代表と三人で行って説明会をやりました。設立する意志があるので、ここで立ち上げましょうと。そうしたら3か月位で立ち上げたのですが、あとが大変です。我々はシニアの団体でしょう。コーディネーターの研修へいつて、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代と意見が合わなくて、擦れ違いになってしまい、我々が目をパチクリしてしまった。これは地域のコミュニティを作るのだから、シニアというのをちょっと引っ込める、NALCのマニュアルは使えないということですよ。そこで、今やっている最中ですが、それが我々の究極の目的なのです。校長先生から町内の会長、民生員から施設の施設長など、全員集合しているのです。まずは小学校で奉仕活動をしてもらおうという

わけです。

(司会：福地) こちらのスタッフの方々の名簿を見せて頂いたのですが、広報関係の方が大変多いですね。

(B) ここで新聞を作っているのです。朝日新聞のOBの方が主ですが、ここで全部編集して、日刊スポーツで印刷しています。日刊スポーツから全国へ発送してくれているわけです。(7万2000部位)
静岡のほうへ行くと、駅から郵便局から図書館からみんな置いています。地域によっては行政に置いています。

(司会：福地) ありがとうございました。

NALC丹波 グループインタビュー

日時：平成15年11月22日（土）

場所：兵庫県氷上郡

NALC丹波

- ・時間預託制度による全国規模のボランティア団体、NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ（NALC）の丹波支部。
- ・同団体は、超高齢化社会を乗り切ることを主な目的とし、人との関わり合いが比較的希薄な都市部を中心に発展してきたが、山村部においても同様に、高齢化、長距離介護等の問題が表面化している現状を踏まえ、同法人のモデル支部として、山村部にできた初の支部。

●自己紹介（きっかけ・活動内容）

（司会：斎藤） この2年前に発足したNALC丹波に参加されたきっかけとその時期を、今ご自身でいちばん取り組まれている活動と、一緒に暮らしている家族構成とか、実際にお孫さんの有無も含めて、そして以前お仕事をされていた、あるいは今お仕事をされているかも含めて、簡単に自己紹介をして頂ければと思います。

（A：男性・60代・事務局長） 事務局長をしています。私は今から5年前、定年を2年後に控えた58歳のときにNALCに入会しました。なぜNALCに入った理由は、実家が丹波篠山でして、定年と同時に篠山に帰って農業をしようという希望でいたわけです。

農業をするのはいいいけれど、篠山へ帰って一体何をするのだと、農業だけではつまらないと思ったときに、新聞でNALCの活動というのを知ったわけです。これは面白いなど、全国的にこういうボランティアのネットを作ろうとしている。これは定年後ひとつ丹波に作って、そこでボランティア活動をしようかなと思ったのがきっかけです。

NALC丹波自体は、平成13年に立ち上げています。今回はほとんどその時のメンバーです。私はNALCの本部の役員をしまして、それをきっかけに、丹波で作りたいという希望があったのですが、それと同時に、ここにおられるDさんとか他の方が、別のところでNALCを丹波に作る希望があることを、風の便りで私は知ったわけです。それで私に加わり、一緒に6か月かけて立ち上げたのです。

私は今年の8月迄勤務してまして、この9月から年金生活者になりまして、現在63歳です。

家族は二人の子供がいますが、一人は独立、一人は就職中という状況です。

（B：男性・70代） 今妻が入会してまして、ここの設立当初から参加させてもらいました。子供はおられません。子供の遊び場を利用し、文化祭などで、子供を遊ばせる活動をしています。他に近所に入会している方がいて、その方のお手伝いに妻が行ったり、それから草むしりをしたりしています。仕事は3年前に辞め、今は年金生活です。

（C：男性・50代） 私は地元ではありません、大阪市内です。それで事務長のAさんが勤務していた会社にて、NALCのことを知りました。私はずっとボーイスカウトをやっていたので、地域にそういうのを発足して、いろいろな遊びをして、お手伝いをしようと思って参加させて頂いているのです。

今は、私と妻と二人。子供は二人いますが、両方とも独立して、二人きりです。

（D：女性・60代） 私は平成12年に、Uターンしてきました。それまでは九州で看護師をやっておりました。定年後帰ってきたけれども、そのままぼけるような気がして、何か地域に役立つことはないかなという感じから、町の痴呆老人の託老所というのが、週に2回程回っているのですが、そこへ勤務させて頂きました。

その間に兵庫県の500人委員会というのに出席させて頂き、その中で老人問題というグループを作ったのです。ちょうど介護保険が始まる前のときでしたので、一応介護保険の勉強をするためです。そこで認定されていない方は介護保険の適応がなくどのようにすればよいか、というテーマでしたけれども、皆でそういう団体を作ったらよいなど意見が出ていたのですが、なかなか自分たちで作るというのは大変だったのです。

それでインターネットで探していたらNALCがあり、全国的なネットだから、それを立ち上げようと思い、本部の方と連絡を取らせて頂いて、いろいろな説明を受けたのです。なかなか難しかったのですが、農村ですので、誰かリーダー的な人がいないと、女性だけでは難しいと思っていた時に、ちょうどAさんがこちらに帰られるかもというお話を本部の方から聞きまして、それからコンタクトを取り、発足しました。しかし難しいです、場所柄として。

家族は夫婦二人暮らしです。子供は二人ですが、ともに独立しています。孫もおりますが、一緒に生活していません。

ちなみに心豊かな人づくりと500人委員会では、いろいろな講演を聞き、一つ一つのテーマがある分科会で自主研

究をやったのです。それぞれ皆さん地域に帰って活動をして下さいということで。1期が2年間です。

(E:女性・60代) 私もDさんと同じUターン組です。百貨店で平成7年まで勤めていました。5年以上前に家族に不幸があり、実家のある丹波へ戻ってまいりました。

仕事をしているときも、企業側のボランティアとか、近隣の地域のボランティアを40代ぐらいからしていたのですが、こちらへ帰ってきて、それこそぼーっとしていたら、うつ病とか、ぼけそうで、何かしたいなというときに、ちょうどこのNALCの設立者のメンバーの一人に誘われまして、私も思い切り忙しいところに身を置き、辛いとか考えないで自分を追い込んで、朗読ボランティアとか、いろいろなボランティアに首を突っ込んでいました。すけれども、当時80歳代の母親を抱えていましたので、数多くは無理とのことで、朗読ボランティアをやっていましたが、去年ぐらいいから母の介護がさらに必要となりまして、物理的にNALCの活動の朗読ボランティア、朗読ボランティアのテープ吹き込みとか、月に1回ぐらいですけれども、今は休眠状態で、活動はしていません。

この地域では、本当に地縁血縁意識が強い農村地帯で難しかったのですが、70歳代以上のお年寄りのサポートをするというお喜楽会というのが中心になり立ち上げました。結局私も先行き一人、父は2年前に亡くなりまして、今は母をサポートしていますけれども、私は先行きのことを考え、母と一緒にという形で、参加しております。

家族は子どもが1人、孫が4名おります。

(F:女性・50代) 参加した時期は、私は大阪におりまして、こちらには5年前に田舎生活がしたいということで、新聞広告を見て古い家があるということで移ってきたことがあり、NALCとの出会いは大阪です。

10年ぐらい前に、まだNALCの前身で、ワークアクティブクラブというのがあったのですが、そこに入っていました。そして活動としては、月に1回か2回2時間程度、お年寄りの男性の方のお食事の準備をすることを、丹波に来る1年ぐらい前までしていたのです。

こちらの田舎というか、こちらの方には支部も当時なかったもので、どうしようかなと思ったのですが、やはり情報だけでも欲しいなと思って、脱会しないで、そのまま引越してきたのです。そうしたら今おっしゃったDさんの方からお電話をいただいて、こちらでNALCを立ち上げるので、本部の方から紹介されたからといって訪ねてきてくださって、そして、では参加させてくださいということでした。

きっかけはそうなのですが、私は本当に40過ぎぐらいから老後のことがいろいろ関心がありまして、年を取ったら、やはり元気な年寄りが弱っておられる方の世話をするというふうになっていかないと、高齢社会がどんどん進んでいくので無理だろうなと思って、ヘルパーの3級の講習を受けたりとか、そういう準備だけはしていたのですが、なかなか機会がなくて、特に何もしていなかったのです。

こちらでNALC丹波に入って、現在の活動は、児童の送迎とか、ちょっとしたお掃除ぐらいです。

家族は主人と二人暮らしです。子供たちは独立して大阪におります。孫はおりません。

(G:女性・50代) この中で一応現役というか、社会福祉法人の知的障害の施設で現在働いています。ボランティアのきっかけは、職場と家との往復で、人との関わりがないので、地域の託老所にボランティアで行って、そのときにDさんと知り合い、お誘いを受け、このNALCに参加しました。

去年の4月から、私も勤めていますので忙しく毎月は来れないのですが、子育て支援のボランティア活動に参加させてもらっています。私は情報を得るために、やはりそういうことは全部私どもの施設でも生かしてもらえり、また私のところの施設のこともこちらで生かせるしということで、うまくかみ合っているなどは自分で思っているのです。将来的には本格的にしたいと思っていますので、その準備としてやらせてもらっています。

家族構成は、私は一人なので、母と二人暮らしです。

●人間関係(夫婦・家族・地域)

(司会:斎藤) 活動を通じて、人間関係のほか、あるいは活動を入られる前にこういうことをもっと変えたいと思っていたということでも構いませんけれども、活動に関して家族とか夫婦、あるいは親族で、自分の身の回りの地域の方々がどういう理解をされているのかということと、活動を通じてみて、夫婦関係や子供さんとかお孫さんとの関わりに変化があったか。あるいは地域との関わり、地域の受け止めとか、そのあたりで少しお話していただければと思います。

(A) 僕は5年前から、このNALC丹波を立ち上げる前から、神戸で月2回ほどボランティア活動を夫婦でやっていました。車椅子を押すとかという程度でしたが、今も夫婦でほとんどの活動をしています。

ボランティアばかりしないで、少しお金を稼いだらいいのと思っているだろうなとは思いつつ、ボランティアの時代が来るよというような話をしたりして、今やっているのです。

子供たちは、私と妻とで家にあまり気にかけていなくても、ボランティアをやっているということ自体を、喜んでく

れています。よいことをやっていると子供は言ってくれています。

地域との関わりということなのですが、僕は間もなく篠山の実家に帰ると思うのですが、実家の両親、5～6軒あるのですが、ほとんどが一人暮らしです。70歳代80歳代の一人暮らし、あるいは夫婦二人で住んでいても、どちらも老人だということで、近所回りの助け合いというのは、気持ちではみんな強いんです。あそこの方が倒れたら私が助けてあげる。倒れたら誰かが助けてくれる。そういうのは強いのですが、みんな年寄りばかりで、何も助けに行ってもボランティアできない、そういう状況なのです。

だけど我々が、赤の他人がよその家に行って、家事援助してあげる、あるいは寝ている人の背中でもちょっとなであげるというのは、やはり地域の方がよいのかなと思っている面もあるのですが、例えば僕の実家が篠山ですと、近所の人が玄関先までは来られるが、だけどそこから入れないです。幾ら隣近所の人が親しくても、玄関まではいらっしやいとか言いますが、そこから奥へは入れない。なぜかというと、やはり家の中を見られたくないというのがものすごく強いんです。この間もごちそうを作りましたのでどうぞともって来られる。だけど玄関入ってそれで終わり。そこから先へは入れないという感じで話をしていますから。だから我々赤の他人が入るといっても拒まれますけれども、地域で深いつながりがある人でも拒まれるのです。

いろいろところで送迎支援などをやっているわけですが、一人で病院に行けない人たちのためにやっているわけですが、その人たちの話では、やはり近くの人に来てもらうより、全く知らないAさんみたいな、何も知らない人にやってもらう方が気が楽だと言われます。だから近くの人にやってもらいますと、何かでお返ししなければならぬとか、何か買ってきてなければという気があります。我々のような組織でやっていると、そういう気がないから、気が楽でいいですよと言う人も結構ありまして、丹波でも我々NALCはやれるなという気はあるのです。

とにかく中にいれるというのを嫌います、どこもそうですけれども家の中が汚くなっていると、見てほしくないですから、同じようなことだともっています。

(B) 私の家族は夫婦二人でして、ともに活動を頑張っております。私の親戚がスーパーをしまして、NALCはこういうことをしておりますと言って宣伝してくれるので、割合助かっています。

みんながNALCの活動ということは、すごく理解してもらっております。

孫がいます。子供はみんなここへ参りました。

(C) 私の妻は子供をボーイスカウトに入れて、それから手伝いしました。やはり皆さんも自分の子供だけではなく、よその子供を見たら、こういうことを考えているのだなとかいうことが、やはり自分に返ってきて、自分の子供に反映してくるというか、よい点はありました。それからずっと続けていますが、もう年といたらおかしいけれども、リーダーを本当は辞めたのです。ボーイスカウトも若いリーダーを育成していかなければいけないということで。それからずっと私の妻も一緒に続けていますが、この土地に来ているのも何にも思いません。だから地域との関わりは、ちょっと持っていないです。

(D) 私は帰ってきてまだ5年です。いちばん感じたのは、私の家族は男性ばかりなのです。自分の老後考えたときに、男性の人はやっぱりあてにならない、それで助け合いといっても、なかなか田舎の方で人間関係の難しいように感じるんです。すごく排他的なところがあって。だからそういうこともあって、お互いに仲間同士でやったらいいかなというのもあったのです。

今、地元でもボランティアをやっているのですが、私たちがやっているボランティアとは違うのよという感じを受けることがあります。同じボランティアでも、特にたくさんボランティアをなさっている方がいるのです。その人たちのボランティアというのは、婦人会のOBとか、何とかの組織のOBとかいう、エリートさんなのです。だからあなたたちとは違うよというようなことを何となく感じるのです。だからその辺が一つのネックかと思うのです。

社会福祉協議会との関わりは、私たちは介護保険のないところのサービスをしてもいいよということも言っても、何か下請けになるような感じがして、あまり言っていないのです。だからその辺の兼ね合いが難しいですね。

夫婦関係は主人も会員ですけど、横の繋がりが欲しいものですから、今いろいろなことの世界役をやっています。

それと孫は5人いるのですが、たまにしか帰ってきませんので、その時にいろいろ教わった遊びで、コミュニケーションが取れると思います。

(司会：斎藤) 社会福祉協議会の話は、本部でも少し出ていて、難しいようですね。

(D) 送迎支援とか話しをすれば回してくれるかもしれないのですが、実際に社会福祉協議会の方がやっていたらいいと思います。それはあくまでタクシーを利用して、ヘルパーもついて、費用がかかると思うのですが。

それともう一つは、地域的に広範囲なので、動ける人がなかなかいないというのです。地域だけ活動するのではなく、全体的にするというようなことで、非常に郷土意識が強いものですから、あまり受けても回れないということ

もあります。

そしてまず受ける人、受ける側の方にとったら、ボランティアは無料という感じが強いのです。会員でない人はダメなのです。だから年会費を払って頂いてと言う事になると、ボランティアをするのにどうしてお金を払わなければいけないのかという考えもありますし、また会員になってもらって、それで自分の点数を持っていらっしやらない人は、1時間500円寄付して頂きますということでしょう。そうしたらまたそこでお金を払わなければいけないという感じがありますね。

だから今NALCの方で、そこで活躍をしてもらっている人たちも、地域のずっと地元の前からいた人というのは少ないのです。私はそこに少し壁があるかなという感じがします。

(司会：斎藤) 仕事を辞めて戻ってこられても。

(D) 根からそこにいらっしやると、もう少し入ってもらえば、その辺が少し混ざるかなということはあるのではないかなと。ちょっと難しいですね。

(司会：斎藤) 病院の通院介助とか、児童の送迎活動をされているということですが、この地域全体をできるだけカバーするということになるのですかね。

(A) 今は現実的には通院支援を篠山町の一部、子供たちの送迎は氷上町の一部というふうになって、全体をやろうとしているのですけれども、活動する者も今Dさんが言いましたように、そうたくさんいませんので、やはり限られてくるのです。だから通院は篠山市、子供の送迎は氷上町というふうになってしまっているのです。丹波といいますが氷上郡と篠山市と、大きな峠を越して二つに分かれますので、なかなか町の人、住んでいる人の行き来というのも少ないです。同じ丹波とはいっても、大きな山を挟んでこっちと向こうということになっていますから。活動もおのずとここから向こうまでというのは、なかなかできないですね。

(D) 会員が増えれば、地区ごとの活動ができるかという気はするのです。だからこちらの方から今児童送迎に行っています。いちばん端の方から氷上町まで行きますが、人数が少ないから行っています。

(E) 私の場合戻ってきました、婦人会にヤングミセスグループと、70歳代以上の老人会の間に、〇〇会といういわゆる働き盛りの世代に〇〇会という組織を、これは全体にあるのだと思います。それに入ってくださいと言われてきましたが、ちょうどNALCに入会させて頂いたときと同時期でした。NALCの活動は土曜日が多いですし、〇〇会も土曜日、日曜日出るということで、ちょっと物理的に不可能ですので、その理由で、NALCに入っているのもちょっと無理だからということでお断りしたのですけれども、そのときバッシングですね。やはり地域のことに力を入れずに、そんなわけの分からない、NALCというのがまだ皆さんご存じなくて、それでこれもちょっとNALCの方に力をいれて、PRして理解してもらわないと思わして動き出したのですけれども、やはりNALCという名称が、昔からの本当に農村地帯というのか、割と閉鎖的な地域なのです。いわゆる町ではなくて村的な、私の地域の住んでいるところは、だから昔から冠婚葬祭とか何とかいうことは、全部地域でしないと、やはり近隣でかちっと固めてしてしまいますので、そんなのは必要ないとおっしゃるのです。

また病気とかは、大体三世同居の家が割と多いのです。ぼつぼつ独居老人とか、年配のお年寄りの二人家族も出てきましたけれども、私が帰ってきて7年過ぎましたので、かなり状況は変わってきましたが、それでも今Aさんがおっしゃったみたいに、やはりよそからの人に入って欲しくないというのが強いので、必要ないとおっしゃるのです。もうちょっと風穴を開けるにはどうしたらよいかということ、ちょうど役場の福祉課長がご近所におりましたので、NALCとはというパンフレットを持っていき説明をしたら、それはいいことだ、PRしますということで、頑張ってお下さって、入会もして頂いたのです。私もやはりよそから帰ってきていますので、まずいろいろなことを私のことを理解してもらいたいから、もう少し村の中に溶け込みたいと思って、

社会福祉協議会でお料理でのふれあいの場の話がありましたときに出席しました。それで5人ぐらいで立ち上がったのですが、ボランティアも受ける方もする方も1回300円の会費で催すのです。そうしたらお料理を、普段の生活よりちょっと変えたものにしたら、お年寄り仲間が、私どももお手伝いしたいと入って来られたのです。

遊びの広場みたいなものですが、お年寄りを対象に、あまり子供さんみたいなことをしていたらお年寄りに失礼ですので、いろいろ考えて、遊び方とか体の動かし方とか、かなり興味を持ってきてくださって、この頃はご近所の方にも、若い方にはNALCに遊びにこんなものがありますよと言ったら、二人ぐらい、ぼつぼつです。本当に目に見えないのですけれども、少しずつ興味を持ってくださる方も、初めは急ぎましたので、はやく会員を増やしたいと思ったので、かなり私もちょっと強引だったかという反省をしたりするところもありますけれども、名前から新興宗教と間違われていたみたいな、そういう地域です。

(F) 活動に対して家族と親族といいましても、本当にこちらの方に、大阪を離れて、子供たちも言っていますけれども、特にかかわりはないですし、主人は夫婦単位ですので入ってはいますけれども、今のところあまり興味は示していません。ただ私がこうして活動をするといいますが、出ていくことが多くなりましたけれども、それに関しては何も一切言いませんし、よいことだと思っているのではないですか。

子供もいないので分からないのですが、地域はまだ5年めで、自分の方から溶け込むことの方が大切で、私からどうですかというのは、まだちょっと僭越な感じがしますので、地域の方には特に薦めたりはしていませんが、仲良くなった方が一人理解を示してくださって、入会されたのですけれども、車の運転とかもなさらないので、もう70歳過ぎておられて、だから活動は一切しておられませんが、情報だけでも知りたいというので、会員になってくださっています。

それでやはり地域の方ではありません。神戸の方から以前脱サラして引越してこられて、農業がしたいといって来られた方の子供さんと奥さんが、時々子供の遊びの広場に参加して下さっている程度です。

(G) 働くだけの生活で、地域との関わりもほとんどありません。挨拶程度です。

●三世代交流と子育て支援活動

(司会：斎藤) 世代交流活動を実際に通じて、皆さんがNALCの活動をされてみて、自分自身の子育てとか、あるいは孫との関わりについて、何か思ったことがあるか、この三世代交流の活動を通じて、少しお話をお願いします。

(A) 三世代交流、子育て支援活動というのを、このNALC丹波の活動の中心に今据えているわけです。それはなぜかといいますと、2年前にNALC丹波を立ち上げようとしたときに、6か月ほどかかったのです。立ち上げようと、今Dさんがいいましたように、何かしなければいけないねと思って、そこから立ち上がるまで6か月かかった。その6か月、なぜすぐに立ち上がらなかったかといいますと、ボランティア団体を作ったけれど、何を一体するのだというので、そこから動かなかったわけです。時間預託活動ということをやっていますので、自分が元気なうちにボランティアをして、ボランティアした時間を預託しておき、自分や将来だれかが困ったときに、その時間を出して支援をやるという活動をしようとしていましたので、一体NALC丹波を立ち上げて何をやるのだということで、そこから動かなかったわけです。車いすを押すといったって、どこの車いすを押すのだと、あるいはどこの公園を掃除するといったって、公園はどこかのお年寄りの老人会がやっている。それを楽しみにしておられるのに、その仕事を取れないというようなことで、なかなか立ち上がれなかったわけです。

そのときにWACが主催して、三世代交流子育て支援研修会をやるので、参加しませんかというのを、NALC本部へきたわけです。僕はNALCの理事をやっていたので、これは丹波に使えるなと思って参加して、そして2~3日やったのですが、そこで三世代交流の子育て支援のヒントをつかんだわけです。丹波だったらこれが使えると、よその事例発表を聞きながら。このNALC丹波の活動の柱に据えようということで、みんなそれだったらいいねということで、一気に立ち上がったのです。

今日みたいなことをやっているのですけれども、本当はもっと人数が集まる予定をしていたのです。子供30人ぐらいで、大人も20人ぐらいで、我々高齢者も20人ぐらい、いつも70名から100名ぐらいを集めて、そこで交流したいなという気がずっとあったのですけれども、そこまでなかなかいかないわけです。だからいつも30人前後。例えば夏休みとか春休みとか、そういう休みのときですと70人ぐらい集まったりするのですけれども、一般的にここを使ってやるということになりますと、20人ぐらいの子供が最高です。今日はまあまあいつものこんなメンバーになるのですけれども、そういうことです。

ずっと考えていることは、この丹波地方、篠山と氷上郡6町あるのですけれども、来年の11月にその6町で丹波市という市になるのですけれども、その丹波市になるところと篠山市とで、毎週どこかでこの三世代交流の遊びの広場を開きたいと、思っております。場所はどこにしようかと思えますと、お寺の境内を使いたいと思っているのです。

今は子供がお寺へ行くことは少なくなり、寂れていますし、お寺へ行っていろいろ学ぶこともないですから。そのためには活動する人も、5班ぐらい作り、今3人か4人かで1班作っていますけれども、20人ぐらいで、1班は今週どこそこ、来週は2班がどこそこというようにして、丹波地方全体に、土曜日はどこかで遊びの広場をやっている。その会場はどこかのお寺を順次回っていると、こういうことをずっとしたいと思っております。

そのネックになっているのが、活動する人が限られてしまうわけです。たくさん男性も入られたのですが、さっきEさんが言いましたように、地区の元区長さんのグループがあって、その人たちもそれはいい考えだということで入られたのですけれども、参加されないまま消えていってしまったわけです。それは趣旨が違ふとかいろいろあるのでしょうか、そういう期待していた人が外れていって、活動する人が限られて、今月に1回しかできないのです。本当はそういう気持ちで今やっています。

(司会：斎藤) 今やられている活動の中で気をつけていることとか、確認事項みたいなものはあるのですか。

(B) 私ら子供時分は、昼は親の手伝いをしたり、子供はみんな遊んでやっております、昼は自発的に勉強しておりましたけど、今の子は本当にかわいそうで、勉強ばかりで。遊びたい場を作ってから、喜んで遊ぶようになってくれました。それで地域でもそれを活用させて遊ばしているのです。お年寄りもそこで子供と交流するのです。喜んで来てくれます。

(C) 今はそういう遊び方を皆さんに理解してもらい、家に持って帰ってまた遊んでもらえたらなと思っています。現在の子供は勉強かテレビゲーム、バーチャルゲームというか、そういうゲームしかしていないので、実際に遊べる、体験できるという、実際に山の中を歩いて、食べられるものとか食べられないものとかを、食べてごらんとかというようなことをして、それで手で触ってみて、今はネーチャーゲームというのがあるのですけれども、自然を体験させるといふ、そういうネーチャーゲーム的なことをしているとういうような。それとお父さんは仕事をして、子供は勝手に遊んでいた。それで今のお父さんは勉強ばかりしていた。子供さんは放ったらかしで、テレビゲームをしているとういうような、私もここに参加させてもらって、さっきも親子、おじいちゃん三世代一緒に遊べるようなゲームということを考えて、だれでも引っぱり出して、楽しく遊べるよとういうような、体験できるゲームを主にして考えて提供させてもらっています。

気になることは自分も56歳ですが、坂で自分自身がゴロゴロと転がったら、転がったら面白いからやれと、自分がさあやいなさいとういふとだれもしない。自分から体験してやって、それでもやはり大人はしないで見ているだけです。本当は大人もみんな一緒になってやってほしいとういふようなことは、前回もここでネーチャーゲーム的なことをやったのですけれども、子供と私は一緒になって、ありさんをやったりするのだけれども、大人はやはり面白いと見ているだけとういふか、傍観者であるとういふか。本当は全体的に三世代交流といったら、みんなができるようなゲームとういふようなことを、いろいろ考えてはしているのですけれども。

さっきも最も楽しいこととういふのは、みんながやってくれて、みんなが喜んでくれたら、よかったなと、私らはそれがみやげなのです。そういうところを気をつけて参加させてもらっています。

(司会：斎藤) ボーイスカウトの経験が今役立っているということもありますか。

(C) ボーイスカウトや、他にもボランティアをしまして、私は当時31歳で大阪市の町会長をやりました。その全てを含めて、小さい子供に視線を下げての交流が必要だと思いました。ボーイスカウトだけでは視野が狭くなります。

(D) 私はまだ大人ばかりの社会ですので、子供と接するときは孫ぐらいしかないのですがご近所の子供さんまで、なかなかコミュニケーション取れないです。今児童の送迎をやっているときに、子供たちと接したりするのですけれども、何だか皆さん今の子供は大人っぽいですね。そんな感じです。子供らしさが無いとういふか、言葉遣いがすごく乱れているとういふか、そんなことを感じます。変な日本語を使ったり、変な大人っぽい言葉を使ったり、そういうことを感じて、そうではないよと注意するのですけれども、聞いてくれません。うわのそらでフンと言ったりします。今日も変なこと言っていました。

(司会：斎藤) 実際に活動されて見て、お孫さんとかかわりとかは変わりましたか。

(D) 接触する時間が短いですが、丹波に帰ってきたときにいろいろな自然と親しませたいと思って、努力をしているのですが何か虫とかすぐに怖がりますし、裸足で歩くとういふことは嫌がります。

その辺から改革していかないといけないなと思います。やっとカエルが掴めるようになったのですけれども、最初は見ていだけで、逃げ腰でした。生き物とういふのはすごく汚いとういふ感じがありますし裸足で土の上を歩きなさいとういふと、嫌と言って拒否反応を示します。何かその辺がすごく抵抗感があるようです。

(E) 私は仕事を長年やってきていましたので、育児を楽しむという気持ちのゆとりがなかったのです。だからNALCへ入会して、一緒に、私も先ほどお話したみたいに、本当に回数的には限られているのですけれども、たまにご一緒させていただいたときは、私自身が楽しいのです。私がかも育てていたとき、手後れですけれども、こういう育て方、こういうことを教えてやったら、どれだけ精神的にふくらした、子供にでき上がったのにも思うこともあります。一度包装紙とか新聞のチラシでお人形を作ったのですが、悪戦して子供さんが、「おばちゃんへたやな、僕できたで」「私できたで」って声がかかるぐらい下手でしたが、それを私の孫とかご近所の方に縁側で教えたら、私の孫もやはり隔世遺伝か下手ですけれども、ご近所の子どもは上手に作り出して、帰ってきたら教えてとその孫が言うから、おばあちゃんはだめだからお友達と一緒に連れておいでとういふことから、孫も今子供さんが少ないからお友達がいないのです

けれども、NALCで教えてもらったお人形がきっかけで、孫が帰ってきたら3人田舎のお友達ができています。これはNALCの功德だなど、紙人形だけではなくて、いろいろな遊びが、私などは全く欠落しているのですけれども、こういうことはやはり孫にできるだけ伝えたいと思っているので、できる範囲で教えていこうと楽しんでいます。

さっきもおばあさんと子供さん、お孫さんが参加されて、午前中裏の山を歩きながら、私たちは田舎にいますけど、子供たちをこうして外に連れ出して遊ぶということがないから、NALCさんの月1回が本当に待ち遠しい、孫たちも楽しみにしていると言って、私は大阪で少ない自然の中だったけれども、子供たちがまだ小さいときは、まだ少し自然があって、そこら辺で遊んでいましたけれども、こんな大自然の中だったらどんなにみんな幸せで、走り回っているのかなと思ったら、子供はそうでもないみたいで、今は田舎の子供もゲームとかで、割と家に閉じこもりがちなのかなと思っていました。遊びの広場をもっと発展していったらよいなと思うのです。

今、こういう広場で子供と接していたり、それから送迎で子供を送り迎えしている中で、やはり会話が楽しいですね。やはり子供というのはさっきもおっしゃったように、自分も子供の目線になってつきあうというか、それが大事なのだなということが分かります。そして子供の気持ちとか感情というのを大事にして、そのとき悲しかったねとか、そのときうれしかったのだねとか言う、話が盛り上がってくるというようなことを経験しています。それはすごく私にとっては楽しいことです。

気をつけていることは、やはり挨拶です。子供たちにありがとうと、降りるときには言ってほしいです。しかし言わないのです。こちらが黙っていれば、バンと戸を閉めて、車から我先にと出ていくので、だから「ありがとう」とか、こちらから「ありがとう」と言ったら、「ありがとう」と返ってくるのです。だからそれは忘れるのだと思うのですけれども。そういうあいさつとかはちょっと気にしてもらおうようにしています。

(G) 活動で最も楽しいことは、やはり子供たちと、環境的にも職場も大人の施設なので、かかわるときがないので、やはり子供というのは可愛いし、唯一かかわれる時間は、私は大人の施設だけ知覚障害なので、目線というか、知能は本当に3歳から4歳、もっとそれ以下、そういう職場でも目線というか、落ち着けない、そういうようなことはここでも通じることなので、やはり子供たちの目線になって、そしてやはりはっきりものを言って、明るく接するとか、子供たち以上に楽しむ、楽しいことが子供たちにも移ると、やはりこちらが楽しくすることが大事だなということで、職場と一緒にですけど、そういうことを心掛けて活動させて頂いています。

●今後のNALC丹波の活動について

(司会：斎藤) 皆さん自身にとってのここでの活動を続けている意味一言言っていただければと思います。

あと、今後NALCに限らず、これからの人生で是非これだけはやりたいということがあれば、ぜひお願いします。

(A) やはり定年後の生き方、生きがいというものを、このNALC丹波に置いています。一つはNALC丹波を地域に、NALCってすごいなと認めて頂くことです。いろいろな活動がすべてそこに集結しているのです。

もう一つは、NALC全体で全国約90の支部があり、会員1万6千人ほどですが、まだ少ないので、早く5万人、10万人になりたい。そのために丹波は一つのモデルとして、引っ張らなければという気持ちがあるのです。一つはこういう遊びの広場を、今やっているのは丹波だけです。それと、子供たちを送迎する、学童保育、この援助も、組織立ってやっているのは丹波だけということで、全国のNALCのモデルとして、今一生懸命取り組んでいるのです。

だから1か月30日のうち、NALCと関わっていない日は全くないです。児童の送迎などでも、今日は子供に学校を休ませますとか、私が残業になるので子供をお願いしますとか、ほとんど毎日やり取りがあるわけです。

現役で勤めていたときは、月曜から金曜までは一応NALCの方がお休みでしたが、今はもう、ものすごく忙しくなって、休む暇がないです。子供の送迎のやり取り、送る人は担当を決めていますが、子供とやり取りをするのは、今僕一人でやっていますから。というのは、事務所はあるのですが、私の自宅に連絡がくるのです。親からの連絡は夜中に結構ありますので。だから寝ているときに連絡がくることもあるのです。

(B) 私の地区はNALCの活動をよく分かっているものと思いますが、会員をたくさん集めたいと思っています。実行員がもっと増えたら嬉しいのです。

(C) 自分自身何をしようかということを目安として、それが自分自身の勉強になるし、忘れていたものがもう1回勉強になると思っています。

それと今の子供たちが、裸足で歩けないとか、虫が怖いとかというようなのは、私らの父親や母親はそんなことはなかったもので、親がそういう年代になっているのです。だから私らが小さいときにやってきたことで、休田に入れて泥遊びするとか、裸足で走らせるとか、多少怪我したって、それは痛いということが分かる。木から落ちたら痛いとか、人をたたいたら痛くて、自分の手も痛いということを、まず分かって欲しいと思います。危ないことをするなと思われる

かもしれないが、やっぱり体験させてやり、子供たちも含めて丹波がもっと発展したらいいなと思っております。

(D) だんだん会員の年もとってきましたので、子育ても大変よいことですが、また老人介護の方も目を向けねばならない時期に来ていると感じています。会員同士で将来グループホームをやるのが私の夢なのです。

今見ていて、やはり介護保険は、施設へ移すということを考えるでしょう。でも待ちがいっぱいある。でも、本人の意見では、行きたくないという人もいるのですよ。だからそういう人たちを元気な間に、グループホーム的なものを集め、そのようなのがたくさん出来たらよいなと考えています。会員同士の共同生活もよいかと。

(司会：斎藤) 長距離介護の依頼というのも、結構多いですか。

(A) まだないですが、丹波地方に親がいらっしゃる人は多いですから、受けなければとの意識はものすごく強いのです。

(D) 今のところ孫が三人いるのですが、ちょっと外出するのに、依頼しようかと思ったことはあるのですが、何とかが近所をお願いしているみたいですから、まあよいかと思ったりしています。

私がそういうとき本当に困ったのです。子供がちょっと熱を出して、下の子を連れて病院に行つて、長いこと待つのは大変かもしれないから、ちょっと預かってくれるところはないかなとか思ったりするのです。

以前に痴呆老人を預かっている時に、幼稚園や保育園に行く人のお母さんと一緒に行くところの方から、いざという時は1、2時間ならここへ連れて来ていいよ話をいただいたことがありますが、子供は子供、年寄りも年寄りというのではなく、もうちょっと交流がある方が、いろいろな意味で結果的にもよい結果が出ると思うのです。

今度、県立の特別養護施設が移転することになっているのですが、そのときにその特別養護施設などに、子供の遊ぶ場所を一緒に作ればと思っています。今学童保育が問題になっていますが、やはり大変なのです。狭いところで、幼稚園の2階をお借りするという感じです。そういうのではなくて、もうちょっと広いところに学童保育を設けてやると、子供も元気だし、お年寄りも自分たちの知識を教えたり、うまくいくのではと考えているのです。

(E) 実は私は今日ここに来るために、母をショートステイに預けようとしたのですが、手違いがあり、だめだったのです。親戚の若いお母さんに、そこのお子さんと一緒におばあちゃんを見てねということで頼んで来たのです。やはり私のような立場だと、こういう問題は私だけの抱えている問題ではなく、これから先にも出てくると思うのです。こういうときに近所でサポートがあればいいのです。私世代の人は、頭が固いので、十分自分の家庭で賄えるという考えになるので、このNALCをPRするのは、30歳代の子育て中のお母さん、余暇が出てきている世代だと思うのですが、彼女たちに焦点を絞りやっています。小さなステーションのような所で、お茶とお菓子があって、気楽に預けることができる、そういう場所が理想ですので努力していきたいと考えています。

NALCが出来た時、私も力みすぎて、一生懸命説明したのが、かえって新興宗教と間違われたかもしれないので、今は近所の子育て中のお母さん方に的を絞り、楽しいことを伝えて、急がず気楽に勧誘しようかなと考えています。

(F) 日本の高齢化率という点で、世界でも類を見ないぐらいの猛スピードで、高齢社会への街道を突進していて、これからどうなるのか、世界にも見本がないわけですよね。だから非常に興味があるのは、自分がどう関わっていくのかという興味と、その中で、丹波で私に何か出来ることがあればいいと思いますし、これからは個々の家が少し垣根を下ろさないで、お年寄りを抱えている家、お年寄りだけの家などは、大変なことにだんだんなっていくと思うのです。だからその中で、皆の意識もきっと変わって行かざるを得ないのではと思っています。

(G) 私も勤めているのでなかなか参加できませんが、出来るだけ参加させて頂き、皆さんから一杯学び、吸収したいなと思っています。それと将来的に私は母と二人なので、家に人が集まれる場所があり、私は多趣味なので、もっといろいろなことを身につけて、本当に皆が遊びに来られるような家にしようという計画があるのです。そういうのがあったらいいねとか、まわりの同世代でも言っていて、将来的に協力したいという方もいますので、多分実現すると思っています。そのためには、今は出来るだけいろいろなことを吸収して、NALCにも生かしたいし、自分のためにも生かしたいと思っています。

(司会：斎藤) 多分NALC自体は都心部を中心に発展してきましたが、日本のまだ多くの農村は過疎化の進む地域なので、ぜひNALC丹波に頑張ってください、活動が広がる突破口や、いろいろな仕組みを、ぜひ見いだしていただければ、ぜひまたいろいろお聞かせください。今日はありがとうございました。

NPO法人 流山ユー・アイネット グループインタビュー

日時：平成15年11月22日（土）

場所：千葉県流山市

NPO法人 流山ユー・アイネット

- ・主に高齢者の訪問介護を行うボランティア団体（任意団体）として設立し、平成11年にNPO化。
- ・拠点は、千葉県流山市。事業は、家事援助、介助援助、通院・外出の介助等。
- ・同団体の特徴は、介護系のNPOとしては、男性の職員が比較的が多い（約3割）こと。
- ・介護・介助サービスにエコマネーを導入し、点数預託制を実施。流山市からの委託事業（NPO実務研修等）も展開する高齢者介護の支援団体。

（司会：池田） 定年後のライフスタイルの築き方を考える上で、一人一人の生き方と、少子高齢化に対する社会の対応も考える必要があると考え、今日はインタビューを通じ、社会に参加して人と触れ合うなど、広い意味で“働く”ということについてお話を聞きながら考えたいと思います。

● 自己紹介（きっかけ・活動内容）

（A：男性・50代） 昨年までこの地で不動産・建築の会社を経営していましたが、環境が厳しくなり、社員の再就職を支援した上で事業をたたみました。その後、海外へ行き、仕事のネタを探していましたが、“稼ぐ”ということに疑問を感じるようになりました。そこでふと近所に目を向けると、高齢者が多いことに気づき、そうした高齢者はいろいろな面で生活が大変そうなのに気づき、自分の近所だけでもこうなのだから、流山にはもっと多くの人がいるはずだと考えるようになったのです。これまで“稼ぐ”ことしか考えてこなかったけど、何か社会に役立つことをしようと思ったのです。実際、自分の親も高齢で、よく考えると地域の世話になっていました。そこで、市役所をたずね、流山ユー・アイネットを紹介されました。

現在は、ふれあいの場のハード部分（工事の管理など）と病院への送迎などを担当しています。

（B：男性・50代） 今年の夏に電力系の会社を定年退職しました。以前より会社のボランティア派遣事業に参加していたので、前から関心は持っていました。その派遣制度の中で、NPO立ち上げに関する講習会に参加したときにDさんと知り合い、それが流山ユー・アイネットへの参加のきっかけとなりました。

事務局とデイサービスを担当しています。特にデイサービスでは、1対1のサービスの必要性を実感しています。

（C：男性・60代） 60歳まで企業で働いていました。定年になって、求職しましたが見つからず、地域へ貢献出来る事を探していたところ、自治会でDさんと知り合い、都内にあるNPOの中間支援団体を紹介してもらいましたが、勤務時間が長かったのと通勤が大変でしたので、辞めました。その後、職業訓練所の研修スタッフとして参加したのち、Dさんからこのファミリーサポートセンターのチーフアドバイザーとして依頼を受け、今に至ります。

（D：男性・60代） メーカー関連の営業をしていました。流山市で常磐道の住民運動を10年ほど、土日も殆ど費やしていたので、その運動が終わった後、日曜日にやるのがなくなり、そこで住民運動と一緒にやったGさんたちと高速道路上の公園を管理する有限会社を立ち上げました。地域活動については、住民運動と一緒にやった方が孤独死で数日間誰も気づけなかったことがあり、考えさせられまして、そこで市に相談し、代表とさわやか福祉財団の堀田力氏の協力を得て、この団体を私の退職前に設立しました。市は非常に協力的でした。2年前に完全に仕事から離れ、事務局長を引き受けました。

高齢者を対象とした福祉介護をする活動を中心に続けて行きたいと考えています。

（E：男性・60代） 母親の痴呆の在宅介護のために退職しましたが、徘徊などがひどく施設に入れました。それにより、今までかなり割いていた介護をする時間がなくなり、当時58歳でしたがやるのがなく、ゴルフや釣りするものの相手を探すのも大変になってきました。働いていたときは地域など仕事以外での付き合いもなかったので、その当時は孤独感を感じて、青年の家での外国人との交流もしましたが、納得感が得られませんでした。そしてデイサービスボランティアの募集を知り、そこでやっていたのですが、スタッフの人に「一度勉強をしては」と勧められ、短大で学び、介護福祉士の資格を取得しました。病院のボランティアなどで学んでみると、福祉の世話になるのは恥だと思っていたのが考えが変わったのです。そして若い人たちも一生懸命に取り組み、純粋で能力のある人が多いので、若い人に対する

考え方も変わりました。一緒に学んでいた社会人は3人いましたが、そのうちのひとりが地域で活動していました。

卒業後、2年間在宅のヘルパーをやり、グループホームに勤務していましたが、介護の実態を一般の人にもっと知ってもらふ必要があると感じ、ヘルパーの講師も務めることもありました。ただ介護を専門にしている若者は、まだ社会人として未熟な部分も多く、社会人を経験した人にもっと入ってきてほしいと思っています。あと一般的に、特に男性は弱者に対する認識が低いと感じます。

(F：男性・60代) メーカーの営業を定年退職しまして、都のボランティア紹介所で、歴史博物館での説明係を紹介してもらったのですが、月に3回程度で、もっと何かしたいと思っていました。母親の痴呆が悪化して、特別養護施設に入れ、その後に亡くなりましたが、定年後、福祉に携わりたいという思いがあり、ヘルパーの資格を取りました。そのとき同じ学校にいた方がこの団体に参加してしまっていて、その方に誘われたのがきっかけです。

現在は、高齢者の方の送迎や入浴、話し相手などをしてしています。あと、ホームヘルパー養成研修の窓口を担当しています。今後は、その研修を通じ、この団体にヘルパーを取り込むことが出来ればと思っています。

(G：男性・60代) 他の方と違い、ボランティアには関わっていません。金融関係に勤めていまして、転勤を繰り返してしまっていたので、定年は楽しみにしていました。のめりこみややすい性格で、先ほどもありましたが近所のDさんと住民運動に中心的に参加していました。私もその運動が終わると、やる事がなくなり、仲間と気軽に集まれる機会を作ろうと、日曜日のみ活動する高速道の公園を管理する有限会社をDさんと立ち上げたのです。自治会の仕事もやっていましたので、土日も忙しく子どもとの接点をあまり持てなかったことは反省しています。

先程もDさんからありましたが、この地域で孤独死がありましたので、高齢者の問題については気にしていました。広報宣伝に関わる業務をやっていたので、ここでの広報作りなどを手伝っています。母親の介護をやっていますが、ここのデイサービスも受けています。自治会の仕事は、今は若い人に任せるようにしています。

●フリートーク (能力発揮・参加による変化・今後について等)

(司会：池田) 仕事をしていたときは忙しい生活をしていたのが、定年で何もしない空白の時期があり、それが転機になったというお話がEさんやGさんのお話にありましたが、他の方も同じようなことを感じられましたか。

(B) 自分の時間を大切にしたいと思っていたが、やはり何もしないと楽な方へ行ってしまう、駄目になってしまうのではないかと、働きつづけることを選んだ。今後も無理をしない程度に働きたいと思っています。

(C) 毎日、目的が無いのは辛いし、何か自分が惨めに感じましたね。

(D) ここ数年、よく耳にするのは、定年後、自由気ままに過ごせるかと思うと、半年くらいで精神的、肉体的におかしくなってくるということ。何かをするときに、どうせやるなら社会のためになることをやりたい。

ここでの仕事は、プロジェクト単位で仕事を依頼し、そのマネジメントも含めお願いします。一概には言えないと思うのですが、女性の方は組織での活動経験が少ないことと、感情的に流されやすい部分もあるので、出来るだけ男性の方をお願いしています。Gさんがテレビ番組に出演し、「地域人間」という観点も必要と言っておられましたが、そこに共感しておりまして、そうなりたいと思っています。

(G) 私自身は、住民運動で地域人間になってしまいました。自治会の仕事もしてしまっていたので、地域の人は大体知っています。

(E) 世の中についてですが、女性への評価が低いと感じています。女性が縁の下の力持ちで、男性が良いところ取りをしているのではないのでしょうか。女性が活動を支えている部分が多いし、もっと発言の機会を与えた方が良いし、社会的に認めたほうが良いと思っています。自分もいつか世話になるかもしれないし、そういう気持ちが必要だと思います。

企業にいたら楽ですよ。私が会社を辞めたら、誰も相手にしてくれなくなりまして。それを自覚するのに2年かかりました。一つの案として、50歳になったら仕事を辞めて、介護の現場に入れて、今後の生活を理解させるようにしたほうが良いと思います。年金の変わりに10日間、介護の現場で強制労働をさせれば、介護のコストもサービスも良くなるのではないかと思います。

(司会：池田) 「会社人間」からのソフトランディングは、会社や地域などの社会的サポートがあることが重要だと思います。では会社員ではなく経営者だったAさんは、仕事を辞めることについてどのように考えていましたか。

(A) 自分で経営していたので、いつでも辞めようと思えば辞められました。会社勤めをしている人は尊敬しますよ。私自身は飽きやすいので続かないと思います。ボランティアも、もう少し先から始めようと思っていたのですが、早く始めた方が良くと考えが変わり、始めることになりました。

今、団体としての問題点は、ここにいる先輩たちとは10歳くらい差があるのですが、その間の人がないことです。5年刻みの年齢構成があれば、団体として次の世代への受け継ぎがスムーズに行くのではと思います。今、自分たちが頑張っ、今後の活動を支える人を作って行きたいし、ソフトランディングのために早く始めた方が良く、他の人にも伝えて行きたいです。

(B) 自治会でも同じ問題があり、下の年代の人がなかなか参加されないのです。

(E) これから年金の給付が、60歳ではなく65歳が区切りとなることを考えると、ますます若い人を取り込むことが難しくなります。それにしても、一般の人の年金や福祉など、老後に対する知識が少なすぎる。会社の中にそのような知識の普及をもっとやった方が良く、もっと福祉に対する意識を高めることが必要です。私も若い時からやっておけば良かったと今でも思います。

(G) 「地域人間」のことはマスコミに随分取り上げられて、隠していたわけではないのですが、それが職場にも知られてしまいましたが、会社に理解してもらい、そのうち会社でも講演をしてくれと言われるようになりました。そこでいつも言うのですが、「地域人間」になるには、まず自治会の役員になりなさいと勧めるのです。そこで地域への関心を持ち、何か仕事をするようになれば、地域に接することにつながるからです。最近企業もそこを理解し、力を入れるようになってきているようです。

(D) NPO等の団体に入るきっかけが見つけないということが言われていますが、そこできっかけをつかむ人は、個人の事情であることが多いです。でも私の持論は、自治会がNPOの原点だと思っていますので、NPOのようなことに触れることが出来る自治会に入ることをきっかけにしたらいと私は話しています。

(司会：池田) 在職中から、仕事以外に活動の場を持つことを勧めてはいますが、なかなか難しいという現状があります。在職中にやっていた方は、その活動がご自分にとってどのような意味をもっていましたか。

(G) 50歳を過ぎて、退職後のことを考えたときに、何かしなければと強く思うようになったのです。「濡れ落葉」にはなりたくなかったですし。そうならないためには、シニア層に対して、国や企業からもっと情報を発信していくことが必要なのです。

(F) そういう意味で、ボランティア派遣制度がある会社などは評価できる。だが、マスコミはあまりそういうことを取り上げようとしない。

(A) でも、そういう制度は、利益を上げている企業でないと出来ないのではないのでしょうか。

(E) 定年後のことは、やはり会社を離れて始めて分かります。自治会の総務をやっていましたが、ほとんど妻に任せきりでした。企業によって会社人間にさせられたから、会社が地域人間にするための支援や教育をする必要があると思うのですが。阪神淡路大震災があって、NPO・ボランティア活動に対して、企業も積極的になってはいますけどね。

(司会：池田) 定年後も雇用延長や再就職で仕事を続ける人もいますが、皆さんが“稼ぐ”人生を降りようと思われたのは、どのようなきっかけからですか。

(D) 満員電車で揺られて、会社では成績を求められ、そういう生活に疲れました。

(E) 定年になりこのままだと、社会に受け入れられなくなると感じたからですね。自分で人にPR出来るようにいろいろやっておいた方が良くと思うのですが。例えば手品など一芸を見につけていけば、どこにでも活躍の場を求めることができますでしょ。私はそういう自分なりの特技を持つことを勧めています。どこかに所属していないと自分の存在を説明できないというのでは駄目です。

(D) NPOが増えてきてはいますが、人材としても、特技を持っていた方が良く、それを活動に活かして、人に喜ばれて、自分の生きがいにもつながりますし。まさに「芸は身を助く」ということですよ。

(A) 私は地域との接点もなく、地理感覚さえなかったもので、最初は自分に何が出来るのかと思っていました。入会申込書に記入しているときに、何でもいいからできることを書いていたら、逆に自分にできることが少しわかりましたし、それから事務局が見合った仕事を探してくれたのです。

(F) でも仕事をマネージメントする立場としては、年長者としていろいろな社会での経験があるので、人を判断する能力もついていますから、それも考慮に入れます。大体少し話せばどういふ人かすぐにわかりますし、失敗がないですから。人と接することが多い福祉の仕事は、特に重要だと思っています。

(A) 現在は、仕事をしていたときよりも一生懸命やっています。今は、車での送迎介護をやっているのですが、まだまだ環境整備ができてないと感じるのが先日ありました。東京駅まで車椅子の人の送迎を引き受けることになったのですが、下見をしたときに、非常にわかりにくいことに気付きました。車椅子用の駅の場所の場所もわかりづらいですし、駐車する場所もJR東日本とJR東海で場合によって管轄が違うし、大変でした。

(司会：池田) 活動に参加して見て、自分の意外な能力に気づいたことがありましたか。

(F) 以前は体の不自由な人などに手を貸すこともなかったが、介護の知識がついて、あるとき車から車椅子へ母親を移動する人のやり方があまりにも下手だったので、教えてあげることがありました。

(D) 長年会社で培ったノウハウは何であり役に立つと思います。私の場合は企画などの仕事をやっていましたので、そのノウハウは今の仕事の企画立案などに役立っています。

(F) 取引先などを集めた研修会の講師とかをしていたことがありますので、それは今のヘルパーの研修をするとき役立っています。また、パソコンも少しやっていたので、それが大変役立っていますよ。

(C) 特に意識はしていませんが、不動産に関する仕事をしていましたので、人との接し方などが役立っているのではないかと思います。どの仕事でも共通するかもしれませんが、トラブルがあったときに、とにかく相手に誠意を見せることが重要なことを、身をもって体験していましたので、それは福祉にも同じことが言えます。

(A) でも、仕事では正直にやるともうからないからつらいが、NPOでは背伸びしないで活動に参加できます。そういう意識としての部分も含めて経験が無駄にはなっていないと思います。

(D) 参加して変わったことは、いろいろな人と触れ会えることが出来まして、多くのことを勉強出来ました。この学べる機会をこれまで逸していたと思っていますので、高齢者との接し方をもっと早く知っておけば良かったです。NPOは自分自身を考えるきっかけになっています。

(E) 仕事では人を押さえつけて引っ張っている部分がありましたが、いわゆる社会的弱者の方に接することが多いので、まず人の話を聞くという姿勢に変わりましたね。そのようになったと娘に言われて、感じました。

(A) 自分の心が穏やかになりましたね。貯えは減少しましたが(笑)、心の豊かさは確実に増えたと感じています。素直に人に感謝出来るようになったのも、心の変化としてありますね。

(B) 私は、定年前より地域は遠くない存在でしたから、変化というものは特にはないですね。最初は、少年野球のコーチをしていたのが地域に関わるきっかけで、それは自治会から誘われました。会社でもボランティア休暇制度があるので、地域と関わりをもって行くことが出来ましたですし。

(司会：池田) 何処かに所属したいという話や、集まるのが目的という話しも出ていましたが、会社での人間関係との違いがありますか。

(A) 利害関係がないので、言いたいことを言いやすいですね。

(C) 上下関係があまりないので、言いたいことが言えます。会社だとそうはいきません。

(E) 生活に支障がない状況ですので、気負いなく自分らしさを出せます。

(G) 日曜だけ活動する有限会社を設立したときも、出来る人が出来ることをやるということを中心にしましたので、現在15年続いているのです。そこが重要だと思います。NPOも同じことが言えると思います。

(D) NPOで分裂するのは、意識、価値観の違いで分裂することが多いですが、お金の問題で分裂することは殆どありません。ただ、この団体として介護事業での収入が入ってくるようになりましたので、少し変わってくるかもしれませんね。

(E) ただ、会社と違うのに、会社の感覚を引きずっている人もいましたね。驚いたことに、休むときに欠勤届を提出された人がいらっしやったのです。

(A) 仕事の評価が厳しくないなので、私としてはそのようなフエジーさが楽だと感じています。

(F) 若い人では、ケアマネジャーを職業としている人もいるので、福祉をやっていくことの意識は変わってくるかもしれないですね。ボランティアでやる人とそれで生活する人とは、違うだろうと思います。

(A) 事務局としても勤めている人の社会保障なども考えないといけないので、大変ですよ。

(D) 組織の維持と、若い人材の育成をしていくこと、雇用する側としての責任が課題になってきますね。

(司会：池田) ボランティアでの責任と仕事での責任は異なるか。

(C) やる以上はいい加減なことは出来ないなので、基本的には同じだと思う。

(E) 今後は、若い人の教育もしっかりやっついていかないといけないと思いますね。以前、若い人に亡くなった人の所へ行って頂いたのですが、社会的な経験が少ないのでしょうね、社会一般的な部分での対応が出来ていない部分もありまして。技術的なことについては出来るのですが、社会人としての教育が不十分ですので、若い人への社会人教育もしていかなければなりません。組織としての信頼を高め、若い人が他の組織に行き評価を下げられないように気をつけるようにと考えています。

(A) ボランティアの部分と事業の部分に分けるのは難しい。同じ人がやっている場合があるので、その区分は考えないといけないです。

(司会：池田) 参加に負担になっていることはありますか。

(D) 土日がつぶれることが多いので、時間がありませんので、妻に文句を言われます。

(F) 少し忙しくらいの方が良い。そう思っている人が参加していると思います。暇で良いと思っている人は参加していないと思います。

(司会：池田) 最後にまとめとして、こういう働き方が出来ていれば良かったと感じることがあるでしょうか。

(A) まず家族の中で必要である人間でいたいし、地域でも必要とされる人間で在りたいと思います。

(B) 公益事業に携わっているので、仕事柄、災害が起これば家を外出していることが多かったのも、地域のために役に立ちたい意識は会社にいるときから身についていたと思います。

(C) 活動に参加するようになって、地域の知り合いも増えました。NPOの活動の成果が身近で目に見えるのでやり甲斐があります。

(D) 最終的には自分のためですが、趣味の世界とは違い、人に何かしてあげたことで喜ばれ、自分も嬉しいという活動を続けて行きたいですね。自分や地域の子供たちが自分たちを見て、頑張っているなど感じてほしいです。

(E) 学校教育が重要だと思います。学校で実習など介護とか経験する場を作ってみれば、将来的な選択肢を増やす

ことに繋がりますからね。

(F) 私がヘルパーで訪問していて、その息子・娘さんが親御さんのお世話を消極的であることに驚きましたが、介護保険を使って世話をして頂ければ良いと割り切っている人もいるのも、介護保険の功罪ですね。やはり学校での教育を充実させるのが重要だと思います。

私自身は、活動に参加していて、定年後に何かをするという日程が入っていることが安心につながっています。

(G) これからも裏方に徹して活動していこうと思います。私自身、親の介護と孫の世話もあるので、時間の許す程度で、ぼちぼち手伝っていききたいと思います。

(司会：池田) 今日はどうもありがとうございました。

<リーダーへのインタビュー>

「活動内容・団体の概略・今後の方針等」

- ・活動収入の98%が時間預託として会計している。
- ・ふれあい事業では、子育てや障害など、様々なことからストレスをもった人が集まってくる場所で、介護と違い、1対1ではないサービスで、地域での助け合いの場での活動。
- ・友愛会員(929人)は、助ける人と助けられる人が半々くらいで、企業の賛助会員あり。
- ・常勤の方はケアマネージャーなど専門職の方が多い。
- ・入会のきっかけは殆ど人脈によるもの。自治会や趣味の友人の友人など。NPOなのでボランティアな気持ちがある人(波長が合う人)でないと困るので、公募はしていない。
- ・団体としてグループホームを立ち上げた経緯は、特別養護施設の機械的に人間を扱うことに疑問を持ったから。
- ・研修受入れも行っており、福祉専門学校、公務員の外部研修等も行った実績あり。
- ・地域に密着した支援団体として、県議、他のNPO等からの視察多数。
- ・団体内での能力開発については、年に3、4回、救急救命や講習会など行っているが、県の主催の人材育成講座に参加もしている。
- ・介護事業者とNPOとの違いをはっきり説明することは難しく、外部的にアピール出来るものはないが、現在考えていることは、体のケアは介護保険で行うが、心のケアをNPOなどで行っていくということではと考えている。例えば、介護が終わっても、掃除をしたり話し相手になったりするなど。今、実際にやっている活動としては、用がないときでも、近くを通ったら声をかける「ひと声かけ運動」をしています。このような点で事業者との差別化を図っていきたいと考えている。
- ・ファミリーサポートセンターは、公的機関の直営や紹介に比べ安価に設定している。サポートする人の家で、その人の子どもや孫と一緒に面倒を見ることで、世代を越えた交流も図れると考える。
- ・雇用の受け皿にNPOが期待されているような風潮もあるが、財政的な基盤のない現在のNPOでは何人も雇うような能力はない。雇われるよりも自分で立ち上げた方が経済的にも自立できるのではなかろうか。
- ・雇用するにしても、一つのNPO法人で抱えることは難しいので、複数のNPOで仕事をして、それぞれから給料をもらうような仕組みにすれば、一人の雇用が出来るのではないだろうか。ただ、公的機関に相談すると、雇用主体が誰になるのかという問題があるとの指摘があり。
- ・NPOの活動は、社会とのつながりを持てるという点で重要な活動だと考える。
- ・個人のアイデンティティとは、そのひと「らしさ」であり、私としては社会に貢献して、自分らしさを後世に残したいと考えている。
- ・関係団体との連携
財団法人 さわやか福祉団体、市民福祉団体全国協議会、流山市シルバーサービス事業者連絡会
各団体・行政の視察・見学対応

以上

川崎おやじ連 グループインタビュー

日時：平成16年1月31日（土）

場所：神奈川県川崎市

川崎おやじ連

川崎おやじ連は、1994年に川崎市内にあった、父親世代の男性達が地域への関わりなどを求めて結成された市民グループである各おやじの会、多摩区「いたか」、高津区「ま・いい会」、麻生区「おやじ考」が、地域での横の連体をめざして発足した地域ネットワーク。

1. おやじの会「いたか」

- ・川崎市・高津市民会館と菅生こども文化センター共催による父親家庭教育学級の受講生で、講座終了での解散に満足できなかった者が集まり、自主的に月に一度集う会として1983年に発足したグループ。
- ・活動地域は主に川崎市宮前区、多摩区。発足当初は父親のみであったが、現在は女性も参加。宮前区と多摩区に住む40代から60代の夫婦、約30名が所属。
- ・団体名の由来は、仕事で忙しく、留守が多い父親に対して、子どもの「お父さん、いたか!」との一言からきたもの。
- ・「夫婦のライフスタイル再発見と地域社会」を活動のテーマに、月一度の定例会の他、ガレージセール、野菜づくりなどの自主活動や、区民祭りへの参加、会報の季刊発行などを行う。

2. おやじ考

- ・1991年、川崎市麻生市民会館が主催した家庭教育学級が終了後、解散を惜しんだメンバーが、自主的サークルとして継続する形で発足したグループ。
- ・活動地域は、主に川崎市麻生区。会員は、30代から60代で約40名。
- ・発足当初は、グループ名を「おやじと男の家族考」としていたが、1993年に講座終了し、「おやじ考」として自主活動開始。
- ・活動は、月に一度で、区民祭りや福祉祭りでの出店、講演会の開催、ハイキング、花見などイベント。

3. ま・いい会

- ・1987年～1988年に高津市民会館で行われた「お母さんの教育講座」での合宿に少数の父親が参加し、それが予想を越えた盛り上がりを見せ、翌1989年に「お父さんとお母さんの教育講座」に発展。その講座が終了し、物足りなさを感じる有志が集まり、自主サークルとして1990年に結成した。
- ・活動地域は、主に川崎市高津区。会員は、40代後半が中心で約30名。
- ・同会のコンセプトは、「肩ひじを張らずに、自分に素直に率直な書見を言い、行動が出来て結果を求めず、プロセスを大事にし、家族と地域について考えるグループ」。
- ・月に1度の定例会を市民館等で開催し、講習会、講演会、バザー、料理教室等のイベントを行っている。

4. なごみ中野島おやじの会

- ・川崎市多摩区の中野島小学校で、学童保育にいた子供の父母が中心となり、地域での子育てを行うことを目的に結成された自主グループ。
- ・活動は、主に学童保育にいる子供を対象にした活動で、花見、魚釣り、小学校ふれあいまつりでの出店、親子スキー、クリスマス会等を行っている。
- ・活動は、同区の「なごみ中野島学童ホール」を拠点に行う。
- ・同会とは別グループに「ちちパパの会」があるが、学童保育に入らない同小学校に通う子供の親にも間口を広げる意味で、同小学校の全保護者を対象に結成されたグループ。ただ会の目的、活動については、「なごみ中野島おやじの会」と大きな区別はない。

●自己紹介（活動を始めるきっかけ・活動内容等）

(A: 男性・40代・なごみ中野島おやじの会) 私は「なごみ中野島おやじの会」で、JR南武線の中野島駅の近くにある「なごみ中野島学童ホール」、小学校の1年生から3年生までの学童保育を行っている所なのですが、その親たちが集まり出来たおやじの会で活動しています。仕事は活動を始めた時と変わっていません。おやじの会自体はまだ10年経っていません、活動を始めるきっかけは、親たちの親睦会で、母親たちから「お父さんたちも、もうちょっと子供たちのために何かできない？」ということが、おやじの会のはじまりでした。とは言え、実際に何をやるべきか全然分からない状態だったので、母親たちの強いサポートもあり、出来る範囲でやってきました。

活動の中心は学童ですので、学童の行事のサポートが主で、他にも、おやじの会主催の行事もやっています。例えばクリスマス会、ホテルを見に行くことや、3月には親子スキーなど活動しています。あと、地域の中で、小学校や中学校のバザーとかに行き、チョコバナナを作って子供たちに販売するようなことを続けています。

担当は、一応私は事務局長でして、あと、おやじ連に参加して、いろいろな繋がりをもち、活動しています。

(B: 男性・50代・おやじ考) 私たちの会は12~13年やっております。現役で働いております。入るきっかけは妻の強烈的な後押しですね。最初に市の主催で、会社人間だけではなく地域を見直しましょうということで講演会があったのですが、ほとんど人が集まらず、市が、市民館に集まる奥様たちに働きかけて、父親たちが集まったのが始まりです。

最初は皆さんとりあえず1回だけはとのことでしたが、やってみたら意外にうまく話が進みまして、2年間市の指導でやりましたが、このまま別れるのは惜しいとのことで、自主的なグループを立ち上げ、今に至るのです。

(C: 男性・60代・おやじの会) 私が「いたか」に入ったころは、仕事は事務系の仕事をしていました。

入るきっかけは、高津市民館での父親学級に女房から勧められたことです。学級でいろいろ講義を受けた後のほうがけっこう面白く、いろいろな話で盛り上がりまして、講習会が終わり、このままではということで、月1回、第2土曜日に集まりましょうということで集まったのが始まりです。今はこのグループの事務局をやらせていただいています。

(D: 男性・60代・おやじ連世話人) Cさんと同じですが、父親家庭教育学級というのに2週間に1回、妻からの勧めで、1回ぐらい行ってみるかなというのが始まりです。僕はそのころ土曜日は休みではなく、今までにない習慣のことを始めるだけでも非常に抵抗があったし、きつかったですね。でも全部で10回ありましたが、行っているうちに、4~5回目あたりから面白くなり、今までと全く違ったことが始まりだったなという印象が生まれました。

これは、何か新しい世界に入っていく感じですかね。仕事して飲んで帰って寝たらまた仕事に行くというだけの生活からは、非常に新鮮でした。仕事を離れておやじたちとつきあうのはとても面白くなり、それでのもり込んでいきました。今、世話人という形でいろいろ段取りなどさせていただいています。

代表とか会長ではなく、いろいろあっていいと思うのですが、私は世話人ということで、いろいろな段取りをすることをしています。具体的には、仕事が編集関係なので、会報を作ったりしています。

(E: 男性・50代・ま・いい会) 高津区の「ま・いい会」に入っています。私たちのグループも、出来て15年ぐらいになります。

最初は市のお母さんの教育講座でして、約1年やったのですが、子供は母親だけでは育たないということで、父親も入ることになり、妻に連れてこられたのがきっかけです。

そのとき、合宿も年2回ぐらいあったのですが、夫婦と子供たちで、70~80人集まるのですよ。すごく面白くて、父親は、普段仕事は一生懸命やるけど主役になる場がないのですが、そこでは皆横の繋がりで、父親の誰かが主役になっていくのです。今求められているのは男を主役にする場で、それが少ないから今のおやじは元気がないのだと思います。

私たちのグループはほぼ夫婦単位で、12組ですかね。あとの方も含め、全体で30人ぐらいです。子供が小さい頃は子供中心に活動をしたのですが、子供たちも成人、社会人になり、構成メンバーが夫婦という形になっているのです。

私は一応代表という形になっているのですが、実際は世話係ですね。

(F: 男性・40代・おやじの会) 「いたか」に入ったのは4年ほど前です。

「いたか」の活動で、地域のお祭り行事に参加しているのですが、その催し物に子供を連れて行ったときに、「いたか」の打ち上げが公園で始まったのです。そのときその場で打ち上げに誘われたのがきっかけです。皆さんが全くの初対面ということではなく、家内から幼稚園や保育園などで父親を呼んで講演しているとのことで行ったことがあったのですが、たまたま公園で飲んだ時に講演をやられたDさんがおられて、何かの縁かなということで、入っています。

会自体20年続いています、メンバーの年齢的に私がいちばん若手になってしまいます。子育ても現役でやっている方はほとんどいないですね。「いたか」では畑仕事や、竹細工の竹の切り出し、餅つきもやっています。あと、子育てについて話をしてくれないかという依頼が会にあると、現役に近いこともあって、経験談を話したりしています。

(G : 男性・60代・おやじ考) おやじの会の活動を始めた時の仕事は、研究職でした。定年は60歳ですけど2年延長しまして、62歳の時に辞めました。半年後ぐらいに川崎市から声が掛かりまして行ったら、川崎市の麻生区をテリトリーにしている、正式にいうと「川崎新都心まちづくり財団」という、小さなところではほぼ毎日勤めています。

おやじの会の活動を始めるきっかけは、人に誘われたことです。川が好きなので水辺の会というものを作り、地域のいろいろな方を知っていたものですから、その人から誘われたのです。おやじの会の活動で担当していることは別にありません。月に1回イベントがありまして、そのときに何か一つ担当する、それだけです。

活動し始めて会社との関わり方は変わってないです。おやじの会は前の会社の時から続けて、今の会社になりましたので。ただ、変わったことはないのですが、今の仕事にとっては役に立っています。地域の仕事をやっているものから、関係することが多いです。前は全く別の仕事でしたから関係なかったですね。

今の仕事は地域の仕事ですから人の付き合いがものすごく多いのです。まちづくりですから年齢では子供からおじいちゃん、おばあちゃん世代まで、横ではサラリーマンから役所の関係、農業の関係等のお付き合いがあります。

例えば、今でもまったくの会社人間がいるわけですが、それはそうではなく、私たちの仲間にはこういう人たちがいますよと言えるだけでも非常に役に立っています。ただ、会は会社のために入っているわけでもないのですけどね。でも、おやじの会に入ってプラスはあってもマイナスはありません。

● 会社人間か家庭人間か？

(B) 会社人間ではなかったのですよ。今でもないのですけど。でも、家庭人間ではなかったですね。家庭へは親としてこれでいいだろうという感じで関わっていたのですよ。家事や育児も、人並み以上に関わっていたつもりでしたが、女房に言わせると、ほとんど何もやっていないらしいですね。子供たちも、そう思っているようで。

自分の考えていたレベルはかなり低かったのかなという気が、今になってします。ですから、「おやじ考」をやって、周りの人からいろいろな刺激を受けて、料理なんかはかなりやりだしました。

家庭への接し方が変わったのは、自然に自分の意思でなったと思いたいですが、入会のきっかけだと思います。

(A) 私は何が会社人間なのかよく分かりませんが、確かに昔の残業時間だけ比較すれば、どちらかという会社人間だったと思います。ただ、私の場合、おやじの会が家庭人間に変わるきっかけと言うより、子供ができ、共働きですので、家事育児を分担しなければならぬ状況もあったのです。でも、家で家事などに参加しているかという、育児はやったと思うのですが、あまりその貢献度はないかもしれませんね。

(E) 会社人間ですけど、30歳ぐらいまで夜遅くまで仕事していたから、自分の時間というのは、無我夢中でなかったかもしれませんね。でも子供が、少年野球を小学校からやっていたので、ずっと日曜日は付き添いしながら見ていました。そう考えると、会社人間ではなかったなと思いながら、個人的に何かやる時間はなかったかもしれません。

それから、40歳になった時にこういうグループというか、教育講座に入って、その時がやはり一番楽しかったですね。仕事もしていますけど、それ以外での人との付き合いというのが非常に新鮮でした。月1回の講座が、終わって自主グループになったのですが、最初の頃は子供たちがいながら大人もいて、いちばん生き生きしていたと思います。

(C) 私は会社までが遠く、仕事も忙しかったので、子供と遊べるのは日曜日しかなかったというのが現実です。そのうち、子供が野球部でお世話になって、日曜日だけでも顔を出したことが、地域の中に入るきっかけでした。

あとは、「いたか」に入ってから、昔やっていた写真をまた始めて、始め出したら、今度は地域の中で自然を守ろうとかいう会があって、興味を持って入ったら記録写真だけでもとのことで、それから輪が広がりました。

ただ、良かったことは、仕事とのけじめがつけられるようになったことです。以前は仕事だけに流れていましたが、土曜日は何、日曜日は何と、予定があると、切り替えが出来るようになりました。それと、ここのグループには、かつて仕事で体を壊されたことがある方がいらして、自分だけではないという共感できたところがありました。

考えが変わったことは、ある行事をやるときに、それぞれ提案が出るのですが、そのとき、ここのメンバーというのは面白いのですよ。(何かをしようと提案したときに) 否定がないのですよ。「いいじゃない、やってみようよ」とどんどん盛り上げてくれる。会社だとまず否定して、「こういう問題があるからもうちょっと考えたら？」という話になりますよね。それが無い。問題があっても何とかするという感じでやると、今までは何とかなっているのです。会社の中でそれが生かせるようになったと思います。

(F) 私は絶対会社人間ではないと思います。確かに独身のころは、会社も遠くて、帰るのが面倒な時は、そのまま会社にいる、会社にいるか帰って寝ているかの生活でした。でも、ほとんど会社にいるから会社人間かと言うと、仕事で扱うことは全部新しいものばかりで、楽しかったのですよ。

そして、結婚後職場を替わるとシフト勤務になり、夜仕事に行くと朝帰ってくる。昼に仕事に行くこともあるのです

が、平日休みとか、夜勤前は休んでいる、お昼ぐらいには帰ってきているような状況だったのです。そういう意味では、子供が寝ている時間に会社に行っていたりして割と接する時間は多かったのですが、仕事は一生懸命やりますが、だからといって会社人間というくりににはならない。家事もやりますし、最近ちょっと違うのですが、以前は、週末は多分いちばん先に起きてコーヒーを飲んで、することないからホットケーキでも焼くかなとか。じっとしてられないとか(笑)、貧乏性なのですかね。だから、子供とは割と接するし、家のことも、奥さんいないから言うのですけども割とやっていたかなと(笑)思うのです。

ここに入っても会社との関わりは変わってないです。会社は会社で仕事を一生懸命やり、それはそれで関係を切ってしまうんですけど。

(E) 私も別に仕事との関わりは変わってないですね。Fさんのように、仕事は仕事というのがはっきりしているからね、その辺できちっとやって。そうじゃないと次のことができないという感じになっているから。メリハリを持っているのですよね。きちっとしないと。

(A) 私も同感でして、仕事だけはちゃんと、やることだけはやっておかないといけませんし、ただ、そこと私生活、家庭のことはまた切り離していかないよね。

(D) 私は編集の仕事なので、会社という場所で自分の仕事をしているような感じなのですが、時間的な拘束という面で会社とあまり変わらないですが、僕は古いタイプの人間なので、僕にとって会社がすべてだったのではないのでしょうか。自分の生きること即仕事という一本道で、それ以外のことは考えられなかった。こう言っちゃ何だけど、ついでに家族があるみたいな感じで(笑)、そういうところがありました。僕らの世代はみんなそうでした。

それで、「いたか」に入り、別に人生仕事だけじゃないと気づいたのは大きかったですね。かといって仕事の拘束時間や仕事の面白さは変わってなくて、のめり込んだりしてやっていますけども、もう一つの道があるのだと。

ちょっと教訓めいて恐縮だけど、僕は思うに、忙しいからこそもう一つあえて持つべきだという気がとことんするんですよ。20年やっていて先輩風吹かせるですとそういうことですね。よく、「忙しいから地域のこともなんかできないよ、暇になったらやるから」と、「おまえさん、暇になったらもう60過ぎてるじゃないか、もう出し殻になって何にもできないよ」と。忙しいからこそ自分を保つためにあえて違う世界を持っておく。バランスをとる。仕事がつい時はみんなと一緒にやりながら何とか自分を立て直すことができるでしょう。一本だと、きつくなったらそれっきりじゃないですか。そういうことを地域の仲間に教わったような気がします。もう一つのよりどころができたことが大きかったと思います。

● 仕事と活動との関係

(司会：藤本) Bさんの場合は、会の活動などで多くの人と関わりあってリフレッシュできる、そういう機会もあって、働くことも新鮮になるとか、元気に働けるようになったとか、活動が仕事にいい影響があったことはありますか。

(B) 皆さんとは違い自営業ですので、比較的自分の時間は都合がつかます。

仕事自体には、どういう形で生かされているかとか、実感したことはありません。地域、家庭に対して(費やしている時間を)、皆さんが電車に乗っている時に費やしているとのこと。皆さんのように仕事の時間が長いと、どうしても地域、家庭に入り込むことになるかもしれませんが、僕の場合はその時間的な余裕が少しあるということです。

(司会：藤本) Fさんの場合、イベントで準備する時や実際イベントがある時などに、例えば仕事が忙しくて何かやらなければいけないことがあるような場合はどうされるのですか。

(F) できる範囲での活動をさせてもらっていますので、そういう意味では楽をさせてもらっています。会や、学校のイベントなどもそうですが、仕事で都合がつけば休暇を取って行きますが、都合がつかない場合は止むを得ないです。

(A) 基本的に行事は土曜日や日曜日なので、土日は休むようにしていますので参加できますが、行事と仕事が重なり、都合がつかなければ、割り切って仕事を優先しますね。代わりのメンバーがいるというのが前提ですけどね。

ただ、おやじの会の行事は、事前に年間行事と、その行事の基本的なアウトラインは決めるので、そこで急に仕事が入ったりして行けない人が出ても、それは仕方ないですね。

(E) たまたま私は、今日突然仕事が入ったのですが、何とかこの場に来られました。私自身は、仕事とこういう活動との関係というのは大事だから、周りに話をし早めに帰してもらいましたが、その辺のやりくりは自分が動け

ば何とか物事は動いていくなと思っているのです。誰かで補えることもありますし。仕事優先で来られないというのは、自主的に動かないだけであって、目的を持ってやれば、周りに影響を与えるけど、何とかあります。

行事は年間スケジュールを決めて、それに沿って進みますが、急に仕事が入れば難しい面もあるけど、それなりの努力をしていけばと思います。仕事をないがしろにする訳ではないけど、やはり地域のことを優先したいです。

(C) やはり時代というか、社会の、一般の人たちの認識が変わってきているのだと思うのですよ。行事が平日にぶつかって、どうしても休みを取らなければいけない時は、何かと家庭の事情でと休暇をとっていましたが。

今、私は会社の中では、活動についてアピールしているのです。新聞の記事に載ったりしたら、上司にも見せて、回覧します。周りに、だんだんと私の活動自体を認識させていっているのです。最近、周りも認めてくれて、ここでの活動のための休暇を取りやすい雰囲気会社が会社の中にできまして、他の職場環境でも結構あるのではないかと思います。

以前だったら、休みを申し出ても、上司よりどっちが大事なのだと絶対言われて、仕事優先にせざるをえなかったと思うのですけど、世の中自体が変わってきていると感じているのです。

(D) 関連して、他のおやじの会もそうだと思いますが、「いたか」の場合、会としての参加の強制は一切ないのです。個人個人の判断で、持ち寄れる時間を持ち寄ってやるので、来られなかった人は一切弁解する必要もないのです。来られなかった人はそれだけで、ペナルティーも一切ないですし。

もう一つ、テレビで3回ぐらい取材されまして、非常に印象深かったのですが、最初の時に、ここでの活動をいっぱい撮りますが、職場の絵を撮りたいと、この人の仕事は何なのかが分からないと番組にならないというわけです。でも当時は、仕事以外のことにうつつを抜かしてとか世間的な見方がありまして、まだ地域活動とかボランティアとかいう言葉がなく、社会的な市民権を得ていない時代でしたからね。結局、ビルから出たところを撮ってもらいました。

2回目は、夜道を歩いているところを撮りました。そのときは、最近では企業の社会貢献とか、会社のメセナ活動とかやっていますが、その始まったばかりの時代だったのです。今は会社で仕事しているところを撮って、昼間は仕事して夜は活動をして。会社や職場の認識が変わってきたのですね、むしろ、社員が社会貢献、地域活動、ボランティアをしていることが会社にとってもプラスイメージになるというか、そこまでは言い過ぎかもしれないけど、底流が変わってきている、風向きが変わってきているというのを感じます。

(司会：藤本) では、逆に会社で培った能力が、会の活動に役に立ったことはありませんか。

(E) 私の職場では人と話すことが多く、年齢層も高い人や若い人もいるのですが、ここでは同じ年代で話ができて、うちのグループは大体団塊の世代なのですが、夫婦ともほとんど50代なのです。共通の話題もありますし、非常に溶け込みやすいです。あまり人に言えないことでも話せる場所は、少なくなるではないですか。そういう面では自分にもプラスだし、多分周りもそうではないかなという感じがしています。

(F) 仕事の関係と会では、全然関係ないので、ほとんど役に立っていないと思います。仕事や会社の経験が役に立っている方も確かにいらっしゃいますが、私の場合、会でやっている内容と自分の仕事は繋がりがほとんどないですからね。

ただパソコンに関して、私は詳しくないですが、通信という仕事柄、周りに知っている人間がいたり、たまたま知っている内容程度は教えたりはありますけど、あまり役には立っていません。でもこのメンバーの方は、会社でインターネット、電子メールが普及しはじめて、一般家庭にも普及した頃に、私よりも10歳以上の方が、「連絡はほとんどメールだから、アドレスは？」と聞かれて、驚いたのが最初の印象でしたから、私以上に皆さんのほうが詳しいですよ。

(C) 僕は会社の仕事と活動がそれほど関係ないですね。会が出来た頃は自分の会社に関連した知識をお話ししたことや新聞に載せたことはありますが、今は全くないですね。逆に知識をもらって、会社の中で、人とのつきあい方とかで使わせてもらっているほうが多いのではないですかね。

(F) でもCさんは仕事が金融関係ですから、イベントで必ずある経理関係の仕事には、「いたか」の行事だけでなく、他のグループが参加する行事でも、Cさんが頼られますよね。これは仕事上のことが生きているのではないかな。

(A) 私も仕事と会の活動を見たとき、直接の繋がりはほとんどないです。先ほど言ったように、資料を作るのにパソコンを駆使して、Excelで会計の表を作るとかは仕事でのスキルの延長線上でやることはありますけどね。

(B) 個人の持っている資質というか、会社で培ったノウハウとかを会で生かすのはどこの会でも比較的多いと思うのですが、会社で生かすというのは、Gさんは特例で、ほとんど意識の問題とか、考え方とかが反映されるわけで、具体的に成果があったというのではないと思うのです。

● 地域とのコミュニケーション

(司会：藤本) 地域の関わりということで、Cさんの場合、ここを出発点にして地域活動に広がっていったという感じでよろしいでしょうか。それとも、もとより地域の自治会活動などに関わりがあった延長線上みたいな形でしょうか。

(C) 「いたか」に入る2~3年前から野球部に関わっていたというのがまず一点で、活動をはじめて、バードウォッチングや、歴史散歩をやっている中で、自分が興味を持っていた写真をもう一回始めてから、もっと自然を残そうというような形のイベントがあると、それに参加し出したというのがもう一点です。

あとは、まちづくりや、自然保護とかは、Gさんがやっている中の一部になるわけですね。そこに参加したときに、自治会の活動をやるようになり、今、そちらの方にけっこう重きを置いていまして、四苦八苦しています。

(E) やはり地域というのは、子供がいなければ地域のことはほとんど知らなかったですね。少年野球のコーチをしながらまず子供たちを知ったりして、何を言わんとしているかを考えながらやっていました。やはり子供と接しながら、子供の目線が考えるようにもなりまして、目線の位置が違くと人間も変わってくるなど感じます。

その経験があって、地域の関わりの中にすんなり入れたのではと思っています。今もそうなのですが、やはりそこが出発点です。もっと幅広く、多くの人に、地域には楽しいことがいっぱいあることを知らせてあげたいですね。

(A) 私は、全然意識はしていないのですが、おやじの会があって地域か、それともその逆か。全然連動して動いているわけではないと思うのです。たまたまそういう時期におやじの会ができて、その中でいろいろな地域との関わりが発生して、その中でやれることをやっていくというのと。おやじの会というよりタイミングではないですかね。

以前、マンションに住んでいたのですが、やりたくはなかったのですが約150世帯のマンションの理事長を1年間やったのですが、150世帯という狭いエリアなのですが、地域との関わりを経験しました。それは全くおやじの会とは関係ないのですが、たまたまそういうタイミングで、地域との繋がりを体験することができました。

あと、来年度から、それはおやじの会と深く関係しているのですが、おやじの会のメンバーが中学校のPTA会長をやるということで、そのメンバーからぜひ副会長にとやるのです。そこでまた地域との太いパイプができますね。

(B) 地域活動の泥沼化というのですかね。おやじの会は自主的な参加ですから、興味のないテーマであれば不参加でもよいとの自由がありますが、私も自治会長を何年かやりましたが、なかなか辞められませぬ。7年間やり、辞めたいと申し出たのですが、後任を見つけてくれとのことで、同じ団地に住んでいるGさんにお願ひしました。今までの自治会経験者にもお願ひしたのですが断られまして、全然自治会経験のないGさんにお願ひしたのです。

(司会：藤本) 自治会、地域活動の泥沼化というのはかなり象徴的な言葉だと思うのですが、例えば商店街、町内会、PTAなどについてお聞かせください。

(B) やりたくてやっている人は少ないのですね。そういう方は、浮いていますから。PTAや自治会長に、そういう候補がいればいいですけど、私が見た限りではなかなかやる方がいないという現象が起きています。やむをえず引き受けて、しょうがなくやって、誰かにお願ひしないと自分が抜けられないというような現象です。

女性は、次の方へというのは割とうまく立ち回れるのですよ。だけど、男は普通、地域の繋がりがありません。ですから、なかなか次に渡せられないのですよ。

結局、Gさんもその次のなり手がなくて、おやじの会の関係の方にお願ひした経緯があるのです。

(F) 会社に行って帰ってきて隣のお父さんが何をしているのか、話をすることもあまりないし、こういう会に入っていて話せる人で、どういふ方だから頼めるなという部分がないと、やはりお願ひできないですもんね。

(G) 僕はBさんから引き受けたのですが、マイナスばかりでなく、むしろプラスが多かったのです。というのは、隣近所に知り合いが出来たのです。本当に今まで顔だけは見るけど挨拶はなかった方が、5年間やり去年引き継いだのですが、今も特に奥さんから「おはようございます」と言われ、それが非常にうれしいですね。多くの人と知り合えた。

(C) 私も、今、自治会の副会長をやって8年になるのですが、抜けられないですね。知り合いが町内にいればお願ひすることは出来るのですが、その役員を選考委員会というのがあり、次期役員になって頂きたい方にお願ひするのですが、選考委員の方も、周りにいる方が分からないのでお願ひに行けず、結局役員へ逆に相談に来られて。

8年もやると、Gさんのように、こちらは知らなくても相手は知っているわけです。すると、あの人がいいと、こんな感じです。そういう意味では、自治会活動はだんだん難しくなっていますね。言いたいことを言う人は言いたい

ことだけ言う人、協力する気持ちが全くない人たちが多くなってきている。皆さんのためと思ったことが逆にお叱りを受けるし。他にも最近、常識や、マナーがすごく曲がってきているのを、ものすごく感じます。明るい町にしようと互いにやっていますが、人によっては、隣近所のこと、昔で言う向こう三軒両隣ということが、仲良くできないのです。隣は関係ないと。協力が本当に少なくなってきて、すごく寂しい思いをしています。

(F) 私どもも、PTA会長になると大変で、父親も出なければなりません、家内は高校の役員と小学校のPTAの副会長と兼務しているようです。先ほどの話じゃないですけど、言いたいことだけを言うだけの方はいるようです。

以前に住んだ団地では、順番に、あとから入ってきた2年目の人がやるのでしたけど、私も自治会の役員を計2回ぐらいやりました。ただ、任期は1年間と決まっているので、次の方へ渡せました。

そのときの活動で、ほかの自治会と交流も時々はありましたが、継続しないので人の繋がりまでは出来なくて、ただ自治会対抗バレーボール大会に何年か続けて出たのですが、ほかのチームで顔見知りになったというのはありません。

(司会：藤本) 今、親どうしの関係、大人どうしの関係、そういう連携がいろいろ地域の活動などを通じて顔見知りになる子供というのがあると思うのですが、地域で、他人の子供でも悪いことをしたら叱るとか、ありますか。

(E) 下の子は少年野球で上の子はバレーをやっています、そういった面ではかなり知り合いが幅広かったのですが、皆悪いことをしていればきちっと言うし、やはり自分の子供だけじゃなく、率先してやるようになりましたよね。

(A) 私たちは学童保育という母体があるので、その中で子供が毎年、入れ替わり立ち替わり、常時約40人いますけど、今は自分の子供が出てしまい、たまに行事の時に行く程度です。学童保育の子という意識があるので、一緒に行事をやっている、ふざけていけないことをやるというのは皆で注意する、それは誰がというのではなく、目についたら誰でも止めなさいと言える、そういう関係にはなっていると思っています。ただ、本当にそうかと言われるとどうかという部分もあるのですが、そのように子供たちと接することができるおやじの会でありたいなと思っています。

(B) 地域活動を通じて子供と接する機会は、それ程多くないですが、叱ることはないですね。叱ったほうがいいだろうなどはよく思います。私自身、子供を叱るということに慣れていない部分もあるので、叱ったことはないですね。

(F) 叱るって難しいですよ。言葉の定義の話ですけど、叱るというのは、叱られた側が自分のために叱られたと思った場合が「叱る」なですよ。恐らくそういう関係ができていない中で注意すると、怒られたと思ひ、叱られたとは思わない。だから、本当に自分のために、悪いことしているから注意してくれたのだと子供が思ってくれるような関係、子供とおじさんとの関係は、少年野球の、「ばかやろー、何やってんだ」と言っても、「おーい」と声を返してくれるような関係でないと本当は難しいのではないかな。だから、本当に子供を叱るというのは難しいと思います。

学童保育とか少年野球の関係は確かにそういう関係があると思うのですが、おやじの会はどちらかと言うとイベントに子供たちが集まるような場所でやるので、なかなか名前と顔が一致しませんので。近所の子供全ては難しいですね。

● 介護の問題について

(D) 特別養護老人ホームが近くにありまして、「いたか」でも介護の学習のようなことをやろうと、社会福祉法人を訪ねたりしています。まず、相手のニーズがこちらと合わないことが結構あるのですよね。

そこで、拠点に使っている文化センターの館長を以前やっておられた方で、特別養護老人ホームの事務長の方がいらしたのです。話をしに行き、「いたか」の何人かが土曜日朝の朝食介助に行くことになったのです。非常にいい経験になります。自分たちもやがて年を取るのだし、地域の高齢者の福祉もやはりやるべきではないかと話が出たのが発端です。

全員という訳にはいかないので、今は個人の資格で行っているのです。朝7時頃から9時ぐらいまでですかね。1食食べるのに40分ぐらいかかるのですが、それと掃除して帰るということをやったことがありますけどね。

(E) 私は個人的にやっているのですが、世間は老老介護ですよ。今2級ヘルパーを取ろうと思ひ勉強しているのですが、退職したら学校へとも考えています。これから自分たちが自分たちを守るという意識を持たないといけないと実感しています。具体的に今なら、話し相手や力仕事などしか、それ程は出来ないと思うので、介護全般に関わるにはまず資格を取らなければと考え、少しずつ勉強しながら、あと3年程で定年になるので、準備しているのです。

(B) 「おやじ考」はボランティア団体との位置づけではないですが、年間の行事で約4分の1はボランティアに関わるもので、特別養護老人ホームや精神障害者施設での祭りの手伝い、区民福祉祭りの模擬店出店などをやっています。

(D) それで、地域からお父さんたちの会が区とかの行政関係から頼りにされている面もあるようです。精神障害者の福祉祭りでも、女性の方が多いのですが、男性のグループがないので、テント張りとかの力仕事は任せられますね。

(A) 私たちの場合は、年間の行事が子供中心になっているのですが、世の中当然、子供もいれば年寄りもいるので、そちらも考えなければならぬ時期とは思いつつ、具体的に見学に行くとかは実際にはまだですね。

(司会：藤本) 「ま・いい会」ではパートナーホームを考えているという話ですが。

(E) 10年ぐらい前に、そういう話を打ち上げて、将来的にはと考えていました。今、女性のグループでは一緒に住むというのは多いですが、夫婦で住むのは少ないからやってみようとのこと。私たちが今のまま生活していけるかということ、実際は無理なのですよ。だから、セカンドハウスのように考えているのですが、今の時代で自分たちがその中で私たち自身が溶け込めるかということ、無理かなという気がして、発想はよかったのだけだね。

● 活動と今後について

(E) これでずっと続くつもりです。好きにやりながら、引退しても仕事もするだろうし、元気で動けるうちはずっと続いていくのだろうという気がして、この態勢で活動しようと思っています。

(B) 「おやじ考」のことだけをとると、多分最後の人が残るまで続くだろうと感じています。なぜなら、みんな喜んでやっているし、好きでやっているから、嫌なことは別にありませんね。

やはり地域の繋がりとして、地域での友達はこの年になるとできないのですよ。地域で、僕とかは若手になりますが、一回り二回り上の人たちも肩書きがないので、友達感覚で付き合ってくれますし、こちらも同じような言葉づかいでして、この友達付き合いが心地よいのですよね。それがあって、ずっと続けていこうなと感じます。

ただ、非常に難しいのは会が出来上がっているのに、新しい人が入ろうとするのですが、仲が良過ぎて入ってこれない。会のメンバーは現役の時代から培っている仲ですから、リタイアしました、入れてくださいとは難しいかもしれませんね。最近、実際何人か入ってきて、続けている方もいますが、やめていく人が多いのが現状です。

(F) 私は定年まで時間があるので、定年後については決めてないです。今忙しいのでのんびりしたいなどは思っています。ただ、「いたか」のメンバーのいろいろなライフワークを具体化されている方がおりますので、非常に参考になりますし、皆さんの考え方もためになりますので、非常にいい刺激をもらっています。

(A) 私の希望もリタイアしたらのんびりしたいという程度しかイメージがないのですが、昨年9月におやじサミットを開催した時に、私たちのグループで、将来の我々のおやじの会の姿について皆で意見を出し、それを題材にお芝居をやったのですが、やはり、山の中で、いつでも自由に、野菜作りや魚釣りなど出来る拠点が欲しいという結論で。

あのときはログハウスのような家を造ったのですが、のんびり出来て、命の洗濯をしてまた都会に帰ってきたり、そこに永住してみるとか、最終的にそれが理想だという皆さんの意見になりましたけどね。

(G) 私はもう一回引退したのですが、元会社の同僚からは、ソフトランディングしていると言われます。友人のご主人を見ると、引退した後ずっと家にいるそうです。確かによく聞く話ですけどね。

私の場合は、おやじ考に入った時も、その後も地域活動をずっとやっていました。最初は20年前に川崎市の地域セミナーに行き、歩く会から始めまして、その後「おやじ考」、「水辺の会」など、会社を引退する時よりもかなり忙しい。この前数えてみたら、20ぐらい肩書きがあるのです。ほとんど好きでやっているのですがね。

僕は時々言うのですが、前の会社に時々集まりがあり、ちょっと話す機会があったのですが、「二兎を追う者は一兎をも得ず」というけど、年を取ったら三兎も四兎も追え」と僕は言っているのです。「一兎だけを追ってだめだったら次何をしようとするから、何兎でも追いなさい。趣味をいっぱい持ち、次から次へと入れ替えてもいいのではないかと」言っているのですよ。いい加減なのかもしれないのですが、もとより肩肘張らないのがおやじの会ですから。

(司会：藤本) Fさんは働き盛りで育児も大変ですが、Dさんのお話で忙しい時こそ何かもう一つとありましたが。

(F) 忙しいですね。でも、他の方の話を聞いて参考になることも聞かせてもらって、今これだけではなく、確かに、やりたいことをどんどんやっていけばいいなと思いました。

無責任な意味の「いい加減」ではなく、自分のよい適度である「いい加減」を探すには、最初からやらずに無理と言うより、いろいろやってみないといけませんね。随分やっていないけどテニスやりたいとか、パソコンをもうちょっと

と勉強しなくてはとか、いろいろ思って止めている部分を、今の話でもう一步踏み出そうかなと思っていました。

(A) 「おやじ連」への加入は、3年目ぐらいになります。その前は自分たちの中でいろいろ活動していたのですが、おやじ連に入れていただいて、皆さん多方面に活躍していらっしゃるの、全然違う世界の話の聞いたり、サミットに参加させてもらったりで、我々の活動の幅を広げるヒントがいっぱいあり、そこは吸収したいと思っています。

(E) 私も個人的に忙しいのですが、やはり忙しいほうが面白いというか、無駄なことを考えなくて済むからね(笑)。次から次へと何かやらなければいけないと思っているから、計画的というのか、次はこうやろうああやろうと考えているから非常に面白いなどと思って。だから、あつと言う間に十何年間過ぎてしまった。人生80年だから、50代から60代までが、子供も成人しているし、自由に時間が使えるので一番いい時期だと思います。

私は今、第二の青春時代を楽しんでいるのですが、この時代を楽しまないと、70代になったら体力的なところも分からないですから、今から助走期間というのをもちながら、どんどんやっっていこうと思っています。何かやっていると、つらい部分もあるのだけど、楽しさもすごく多いですね。

他の男性を見ていると、自分のやりたいことをやれているのかと疑問を持つことは多いのですよ。そこは自分なりに体験しながら人に話をしながら、もっと好きなことをやりなさいと勧めています。

(司会：藤本) おやじの会の中で、夫婦で地域に生きるということ、Dさんが新聞の記事に書いていらっしゃるんですが、参加は父親のみではないのですか。

(D) 「いたか」の場合は夫婦で参加しています。「ま・いい会」も同じですね。

(B) 「おやじ考」は、奥様も一緒に参加する月のイベントはありますが、原則、男だけの集まりです。

(A) 「なごみ中野島」は、必然的に学童の親が会員なのですが、代替わりするのではなく、固定メンバーがずっとやっていますね。毎年、行事とか案内を出して、新たに来られる人は来られますが、強制も何もしていません。夫婦か、おやじかについても厳密な決まりもなく、一応おやじの会ですが行事にはお母さんも来られます。大体父親が一生懸命やっている人は奥さんも一生懸命積極的に参加されます。背中を押してくれるお母さんたちが中心になっていますね。

(司会：藤本) 会の運営状況をお聞きます。先ほど、Dさんには会員の入会、脱退や定員についてお聞きして、Bさんは新しい人はなかなか定着しないとののですが、会員の数はどのような状況にあるのですか。

(B) 微妙に減ですね。大体、活動する人は決まってしまう。一応、メンバーが30人ほどいるのですが、主に動く人は大体半分ぐらいの、10人~15人。たまに活動する人が10人程。そういう人たちが年々1人、2人減っているような感じです。それで、毎年1~3人ぐらいは入ってきますのでね。

加入のきっかけは、イベントを行っている時に、会を知り参加を申し込まれる方や、会員の友人に誘われなどです。

(A) 私どもは、勧誘はしていません。ただ、4月はメンバーの切り替え時期ですから、新しい人たちとの親睦を深めるために、桜が咲いていけば花見、桜が終わっていればバーベキュー大会のような形で毎年イベントをやっています。そこで呼びかけをしています。特に初顔合わせということで意識はしているのですが、新しい方は次回から来られない方が多いですね。何回か行事を重ねていき参加することが定着することが多いです。

(司会：藤本) 学童以外の、例えばご父兄に声をかけて一緒にということ、

(A) 「なごみ」の場合、小学校には学童に行っていない子も当然いるので、学童とは別に小学校のおやじの会を作ろうというので、「ちちパパの会」というグループが出来たのです。先ほど言った行事で小学校のバザーはそこが主体になってやっています。ただ、主体と言っても、「おやじの会」がベースで、そこに元PTA会長の人や、お手伝いを募集した人たちが参加してくれています。けれども、やはり「おやじの会」の母体は学童なので、そこを広げるかというのは、ちょっと悩みどころです。ただ、両方のグループはほとんど重なっていますけどね。

(E) 私たちもかなり新たに入っていなかったのですが、昨年の秋に友達の紹介なのですが、1人入ってきました。でも、参加の問い合わせではリタイアした方が多いのですが、グループがみんな現役なので、どうしても躊躇される部分があって、入る決心ができないようですね。ここ1年のうちに2人新しい人が入りましたが、会員数としては難しい状況かと思います。私がリタイアしない限りは入ってこないのだろうなと思います。

(D) 僕が思うのは、人数の面で見ると30人を超えると、機動力としては難しいと思います。やり取りが自然体でばつとできないと思うのです。そういう点では、たくさん出来て横に繋がる、おやじ連というのはいいと思います。「いたか」は今まで見てみると、ちょっと停滞気味、マンネリかなと思ったときに人が入ってきてくれるのです。従来にない持ち味の人に来て、それで活性化するのですよ。今まで途中で来てくれた人が、皆、これまでにないものを加えてくれています。Fさんなどもそうです。小学校に一日講師で行っていきまして、こま回しをしたり、竹馬を作ったり、竹ぼうきを持っていくのですが、Fさんはヨーヨーなどがすごくうまいのです。子供たちはまずそれで感動するわけです。

それから、畑作業もするのですが、新たに入ってきたが畑を非常に一生懸命やってくれる人でしたりして、ジャガイモを作っては地域の子供たちに収穫してもらおう活動があります。

● 行政とのかかわりについて

(司会：藤本) 最初は父親学級とかで、行政が用意した場がきっかけになったというお話でしたが、川崎市や高津区など、区や市単位の行政とのかかわりはけっこうあるのですか。

(D) 「いたか」の場合は、5回シリーズの講座を企画して、川崎市から資金援助もあり、川崎市教育委員会との共催で「お父さんのための地域塾」で、「今、父親力とは何だろう」などのテーマで、公民館で一般公募してやっています。

(B) このおやじの会自体で「いたか」が、お手本として、先駆者として先にいるので、まねておけば間違いないですね。私どもが立ち上がったときも、Dさんが講師で来られて参考になりましたね。

(司会：藤本) 例えば川崎おやじ連は、一応、神奈川県サミットも企画されていますね。横浜の「じゃおクラブ」などと一緒に、そのネットワークは広げていく予定ですか。

(D) 今、神奈川県では、「おやじサミット連絡懇談会」、略称「おや懇」というのがあります。去年は9月に「おやじサミット in 神奈川」を11団体でやり、川崎5団体、他6団体ですね。その5年前に「おやじサミット in 川崎」を我々が事務局になってやりました。1回目は横浜で、あと2回は川崎で開催したのですが、そのネットワークがあるのです。それで、年に4回ぐらい集まろうということが3~4年続きました。それで、私たちのおやじの会「いたか」がちょうど20周年だったので、それでは一緒にこのことで開催したのです。ちょっと「おや懇」の活動を復活して、県下の情報連絡をやらうとしているのです。神奈川県は意外とそういうことをやっているのですね。文部科学省は最近「おやじの会」の補助や、援助をはじめていますが、「神奈川県は自立しているから援助できません」という状況です。

(司会：藤本) 神奈川県の他の地域でも市民活動が非常に盛んだなという印象があります。川崎市はどうですか。

(D) 川崎市は割と市民活動が多いのではないかと思います。横浜も風土性があるって、新参者とか何とか言わない世界なのですね。海外からも多くの人がある。開かれた港の街ですからいろいろなことが出来て、自由なのです。川崎も北のほうも圧倒的に新参者の世界ですから。

(司会：藤本) 全国各地に「おやじの会」はできていますが、その所の交流というのは、

(D) 「全国おやじサミット in 香川」というのがありまして、それは文部科学省が支援してくれましてね。東京都も「おやじの会」が全面的に立ち上がりますよ。つまり、中高年と子供を繋ごうという趣旨ですね。それはさわやか福祉財団と東京都と進めているようですね。「おやじの会」は本当にここ1年で増えてきましたね。「おやじサミット」も年々開いていき、やがて全国規模になるかもしれませんね。今PTAを母体にして、そこに「おやじの会」を作ろうという動きが、各県で多いのですね。すぐ出来ますけど、子供が卒業するから長続きしないところも多いのですがね。

98年の新聞に「おやじの会」が、「学校介さず子らを結ぶ」という見出しで掲載されたのです。ここは皆、学校を介さず、地域で生まれたおやじの会です。その言葉はまさに川崎の「おやじの会」の特徴ですよ。だから続くのです。

(A) そういう意味では私たちは皆さんとは異質かもしれませんね。学童という中での結びつきなので、地域を前面に出している部分は弱いかもしれません。けれども、学童というのは、皆同じ環境なので、共通の話題もあるし。

(D) あと続くかどうかは、子供がいる間に、おやじ同士がいかに早く親密になるかです。そうしたら、子供がいなくなっても、あと自分でできますし。でも時間的に間に合わないことが、一般論としてそういう傾向が多いですね。

(A) 私たちは、今は40人規模ですけど、スタートしたときには学童も10人弱だったので、親たちも小ぢんまりとして、みんな仲良く誰かの家に集まってお話とかしていましたが、今ではできないけれどね。必ずそういうところにおやじ達も参加したので、おやじ達の繋がりが最初に出来上がりましたね。今、その人たちが中心になっています。

でも最初は奥さん達が、がっちりスクラムを組んで、そこについていくおやじ達が酒を飲みながら仲良くなると。

(B) 「おやじ考」は、本当は市民課の人が熱心に、奥さん達が参加している講座で話をされましたね。女性たち、奥さん方は、お子さんがなくても初対面で比較的スムーズに打ち解けたりするのですが、男性は名刺がないと、何していいかわからない。「おやじ考」のいちばん最初の集まりのときは、はじめは皆無言でしたが、市民課の人が一通り趣旨を説明された後、これは驚きましたね、アルコールを出されたのですよ。画期的ですよ。それで、皆一口飲むと自己紹介になったのですが、もう止まらない。やはりすぐく求めていて、自分をアピールしたいのです。会社以外でやっていることなどで盛り上がりまして、非常に成功でしたよ。スタートはそうのように行政から指導いただいたのです。

あれは恐らく、2~3回で我々にお任せになっていたら駄目でしたでしょうね。やはり2年間、一応面倒みてくれました。市の人が毎月行事を設定してくれて、段取りをしてやってくれた。それが終わりになろうとして、非常に仲のよい状態で、このまま別れたくないという状況までなったから、そのあと続いているのですね。

(司会：藤本) 活動の中で、トラブルとか、困ったことはあまりありませんか。

(D) 入ってきて辞めた人ももちろんいます。いろいろなケースがありますが、私が共通点を見出したことは、「いたか」に入るときに過大な期待をして、ここでは何でも出来るし、「かくあるべきだ」という理論を述べられる人ですね。でも「かくあるべきだ」を実現するためには、会員各々が相当の時間を割かないと出来ないのです。でも、皆現役で仕事をしているので無理なのです。期待されることは分かりますが、出来ない。そこにギャップを感じて、辞めることになる。けれども我々の基本は、自分の持ち寄れる時間を持ち寄ってやれることをやろうという、それしかないのです。

「会の目標はこうすべきだ」というのが最初からないのです。つまり、個人が自分のできることを持ち寄って、そこから発想して会の活動にしていく、下からのボトムアップで、会の活動にしていこうというスタイルです。

例えば、海外で長年暮らしてきた方がいらっしゃるのですが、その人はガレージセール（不要になった家具などを、自宅のガレージに並べて売ること）を体験してきて、日本にまだガレージセールがないときで、「これは地域社会の中で人々をつなぐのに非常にいい手法だ」と。物を持って行って文化の交流が一段と深まるという発想でね。彼が「やる」と言うのでやってもらったのです。それで「ガレージセールとは何ぞや」と、彼は資料を持ってきて勉強会をして、それでやったのです。

(E) 実際にやっっているながら、何が楽しいのだろうなど。人との関わり方が引き付けるものだろうと思っているのです。人と人との触れ合いが一番大事なのではと思います。いろいろなことをやっても、真正面を向いて話ができるということが非常に最近には少ないからとってしまうのですね。それがあから人間は親身になって話せますし、ついてきます。私はこの月1回を楽しみにしているのです。自分のグループは自分の空気があるのだけれども、ここはまた違う雰囲気があって、とにかく何でも好き勝手に言えるので、いいなと思っています。

(司会：藤本) これからこういうイベントとかをやってみたいということは何かありますか。

(D) 僕らは1月にこの1年間の活動予定を立てるのですが、既に決まった行事があるので、それ以外でどうするか。基本的には、毎月例会を開くのですが、特に予定がない場合、外から講師を呼び話を聞くということにしています。その講師を呼ぶにも会員が「私はこういう面白い人、変わった人を知っている」ということで連れてくるのです。

(F) でも、呼ばれる人がすごいですよ。ニューヨークのテロがあったときにニューヨークにいた人や、日航機の御巣鷹山の後処理をした人とか。テーマとしても、介護の話ならば介護の方を呼んで、介護保険が出来たころに、この制度を説明できる方とか。他は、その先の痴呆や、その関係の薬品などの医療関係の方を呼んで説明を受けるとか。非常にためになり、面白いです。とにかく、人の繋がりが、ネットワークというのはなかなか探り切れないですね。

(D) 僕らは講師を呼んで勉強会をするのをベースにしていまして、その他は行事の打ち合わせなどで、一年の半分ぐらいやっています。ただ、それも続けているとマンネリ化するかなと悩むときに、誰かが入ってきてくれて、会が活性化するのは。何か不思議ですが、それでうまい具合にもっていますね。

(G) でも、やはり楽しさがなくなかなか続きません。使命感だけでは。

(F) 楽しいというのが大前提にないと面白くないし、続かない。義務となると苦痛ですよ。その辺で、上下関係の会社とは違って、横の繋がりという意味の延長線でどんどん広がっていったのですね。

(司会：藤本) 本日は長時間お付き合い頂き有難うございました。

調査データ

1. NPO参加に関する意識調査 調査票

「高齢化社会におけるサラリーマンシニアの社会参加に関する研究」

1.調査票 特にことわりのない場合 n=1,351。 NAは無回答。 本調査票 1/15 ページ

N P O 参加に関する意識調査

平成 16 年 1 月

- 財団法人 シニアプラン開発機構では、おおむね 50 歳以上の企業在職者や退職者を「シニア」と位置づけ、シニアの豊かで実りある生活の実現のため生活と生きがいに関してさまざまな活動・調査研究を行うとともに、企業の賃金・退職金などの雇用諸制度に関する調査研究活動を進めています。
- 本調査もその調査研究の一環として行うもので、NPO 法人ニッポン・アクティブライフ・クラブの皆様にご協力をいただき、実際に NPO 活動をしていらっしゃる方の活動の様子やふだんの生活、意識などをうかがい、少子高齢化の進展する中で多様化するシニア像を捉えることを目的としています。
- この調査は、個人の方を対象としています。お送りした封筒の宛名の方ご自身がご回答ください。
- 調査は無記名で実施し、ご回答は細心の注意を持って取り扱い、結果はすべて統計的に処理いたしますので、1 人 1 人のお名前やお答えが公表されるようなことは絶対にございませぬ。また、ご回答を、本調査以外の目的に使用することもございませぬ。ご多忙中とは存じますが、ぜひご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
- 調査票へのご記入が終了しましたら、調査票を返信用封筒に封入し、1 月 19 日（月）ごろまでにポストにご投函くださいますようお願いいたします。

記入上の注意

- 1) 回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。
- 2) 問 1 から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるところと、具体的に文字や数字を記入していただくところがあります。
- 3) 質問によっては、一部の方だけにおたずねするものがあります。この場合は、おそれいりませんが指示に沿ってお答えください。
- 4) とくに断りがないときは、1 問につき○は 1 つだけです。
- 5) 「その他」を選んだときは、番号に○をつけたうえで、() に具体的に記入してください。
- 6) 調査内容について、ご不明な点がございましたら、下記の 財団法人 シニアプラン開発機構までお問い合わせください。

〔調査企画〕

財団法人 シニアプラン開発機構

〒160-0023

東京都新宿区西新宿 4-3 4-1

東京年金基金センター 2 F

電話 03 (5371) 2022

〔調査実施協力〕

特定非営利活動法人

ニッポン・アクティブライフ・クラブ (NALC)

〒540-0028

大阪市中央区常盤町 2-1-8 親和ビル 4 F

電話 06 (6941) 5448

● 日頃の活動のようすについておうかがいします。

問1. あなたはNALCで活動を始める前に、参加するNPOを探していましたか。あてはまる番号に○をつけてください。(○は1つ)

1. はい	23.4	2. いいえ	74.4	NA 2.2
-------	------	--------	------	--------

問2. では、現在のNPOで活動し始めた直接のきっかけは何ですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

1. 家族や親戚・縁戚関係からの紹介	16.2	6. 地域雑誌や新聞広告などを通じての公募	17.3
2. 職場や仕事を通じた友人・知人からの紹介	18.1	7. 大学や専門機関などを通じての公募	0.1
3. 学生時代の友人・知人からの紹介	3.3	8. ハローワークを通じての公募	0.2
4. 近隣の人、地域での友人・知人からの紹介	19.0	9. インターネット上の公募	0.3
5. 趣味やサークル・クラブを通じた友人 知人からの紹介	10.6	10. その他(具体的に: _____)	13.0
			NA 1.7

→ 【問3へ進んでください】

【問2で「1～5. 紹介」と答えた方に】

付問(1) あなたにNALCを紹介した方は、NALCにおいてどのような立場の方でしたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=909)			
1. NALCの役員	35.1	4. NALC関係者の知り合い	8.7
2. NALCの一般職員	4.1	5. 支援団体や企業の人	2.2
3. NALCの会員(一般職員以外)	41.5	6. その他(_____)	6.9
			NA 1.5

(2) NALCを紹介された頃、紹介した方とあなたとは、どの程度会う機会がありましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=909)					
1. ほぼ毎日	19.0	4. 月に2～3回	16.0	7. 年に1回	3.4
2. 週に2～3回	7.4	5. 月に1回	17.3	8. 年に1回未満	7.4
3. 週に1回	9.7	6. 年に2～3回	17.8		NA 2.1

(3) NALCを紹介された頃、紹介した方とあなたには、共通の知人・友人が何人くらいいましたか。下の枠の中に人数を数字でご記入ください。

--	--	--

人 平均=16.2人

【全員の方に】

問3. あなたのNALCにおける活動のようすをお聞きします。

(ア) あなたの所属しているNALCの支部では、どのような活動をおこなっていますか。
(○はいくつでも)

1. 高齢者の介護・介助・家事援助	75.6	4. 学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	85.3
2. 子育て支援	32.6	5. その他 ()	21.2
3. 会員による相互扶助のボランティア	76.8		NA 1.6

(イ) そのうち、あなたが参加している活動はどれですか。(○はいくつでも)

1. 高齢者の介護・介助・家事援助	33.6	4. 学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	65.4
2. 子育て支援	10.3	5. その他 ()	18.0
3. 会員による相互扶助のボランティア	45.3		NA 10.3

(ウ) あなたが参加している活動のうち、あなたにとって最も重要な活動を1つあげてください。
(○は1つだけ)

1. 高齢者の介護・介助・家事援助	20.0	4. 学習・健康づくり、趣味の会、親睦・交流の行事	30.9
2. 子育て支援	3.7	5. その他 ()	10.1
3. 会員による相互扶助のボランティア	24.1		NA 11.1

問4. あなたがNALCで行っている活動には、どのような能力が必要ですか。次の(ア)～(オ)のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

必要である	やや必要である	あまり必要でない	必要でない	
-------	---------	----------	-------	--

(ア) 活動分野の専門知識や技術 (介護や育児に関する知識や技能など)	29.5	34.5	15.7	9.6	NA 10.7
(イ) 事務的能力 (経理、書類作成、パソコンの技術など)	19.8	32.0	21.7	13.8	12.8
(ウ) 管理的能力 (人事・労務、組織運営、人員の統括など)	18.4	28.6	22.9	16.1	13.9
(エ) 企画的能力 (計画、立案、提言など)	24.9	32.5	17.5	12.0	13.1
(オ) 対人関係に関する能力 (交渉、営業、礼儀、サービス、人脈など)	32.5	36.1	13.8	6.5	11.1

問5. あなたが参加しているNALCの活動について、次の(ア)～(ク)のようなことは、あなた自身にあてはまりますか。それぞれについて1つずつ○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

大いにあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
----------	---------	------------	---------	--

(ア) 活動内容にやりがいを感じている	22.8	43.7	16.5	7.3	9.8
(イ) NALCの理念や活動目的に共感している	37.4	44.0	8.1	2.4	8.1
(ウ) 自分の経験や能力が生かされている	12.6	33.5	30.2	14.0	9.8
(エ) 新しい知識や技能が身についている	6.0	27.8	36.3	19.0	11.0

(オ) 私生活でもスタッフやメンバーと交流がある	14.3	35.2	23.5	18.2	8.9
(カ) 活動時間が自分の生活スタイルに合っている	12.1	40.6	22.1	15.5	9.6
(キ) 事故やトラブルへの対策が組織できている	10.7	32.6	27.5	16.4	12.7
(ク) 自分が地域や社会の役に立っている実感がある	12.7	39.0	26.1	13.5	8.8

問6. あなたがNALCに参加するにあたり、困っていることはありますか。次の(ア)～(カ)のそれぞれについて、あなたのお考えに近い番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

大いにあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	該当しない	NA
----------	---------	------------	---------	-------	----

(ア) 経済的に余裕がない	2.5	10.6	26.2	24.9	28.6	7.2
(イ) 職場の理解が得られない	0.8	3.6	9.5	15.7	60.5	9.9
(ウ) 家族の協力が得られない	2.0	5.3	13.3	34.6	37.5	7.3
(エ) 健康に不安を感じている	6.3	18.9	17.2	27.4	24.1	6.2
(オ) 十分に参加する時間がない	20.6	27.7	17.3	16.7	12.3	5.4
(カ) NALCの人間関係で嫌なことがある	3.0	10.2	19.8	29.3	30.8	6.8

問7. あなたにとってNALCでの活動はどのようなものですか。次の(ア)～(エ)のそれぞれについて、あなたのお考えに近い番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

そうである	どちらかといえばそうである	どちらかといえばそうでない	そうでない	NA
-------	---------------	---------------	-------	----

(ア) 生活にとって重要な収入源である	0.1	0.6	4.1	87.8	7.4
(イ) 人とのつながりや関係を得る活動である	26.0	45.8	13.5	9.6	5.0
(ウ) 自分の個性を発揮する活動である	8.4	35.1	29.2	20.7	6.7
(エ) 地域や社会における責任を果たす活動である	18.5	48.3	15.7	11.1	6.4

問8. あなたの今後の活動についてお聞かせください。次の(ア)～(カ)のそれぞれについて、あなたのお気持ちに近い番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

そうしたい	できればそうしたい	あまりそうしたくない	そうしたくない	どちらともいえない	NA
-------	-----------	------------	---------	-----------	----

(ア) できるだけ長くNALCに参加し続けたい	30.9	46.9	4.9	1.9	11.5	3.9
(イ) 自分で新しいNPOをつくりたい	1.2	3.8	12.2	62.3	14.1	6.4
(ウ) 企業での仕事や自営業など、収入を得る仕事にNALCの経験を生かしたい	1.6	8.4	15.2	49.1	18.1	7.5
(エ) 町内会や自治会など、地域の活動にNALCの経験を生かしたい	7.6	38.6	14.0	14.1	18.9	6.9
(オ) 育児や介護など、家庭生活にNALCの経験を生かしたい	11.9	44.4	9.1	7.7	20.1	6.7

● ふだんの生活のようすについておうかがいします。

【配偶者がいらっしゃる方にお聞きします。いらっしゃらない方は問 10 へ進んでください】

問 9. 日頃の配偶者との生活についてお聞きします。次の(ア)～(エ)のそれぞれについて、あてはまる番号 1 つに○をつけてください。(○はそれぞれ 1 つずつ)

	よくある	ときどきある	ほとんどない	全くない	NA
(ア) 食事をともにする……………	90.7	5.9	1.2	0.5	1.6
(イ) 配偶者にありのままをみせる……………	81.1	13.9	2.6	0.4	2.0
(ウ) 悩みや心配事を話し合う……………	63.7	28.6	4.4	1.3	2.0
(エ) いっしょに外出する……………	57.8	33.3	5.6	1.1	2.2

【全員の方に】

問 10. 夫婦の関係に関する次の意見について、ご自身のお考えに最も近いものはどれですか。(ア)～(エ)のそれぞれについて、あなたのお考えに一番近い番号 1 つに○をつけてください。

(○はそれぞれ 1 つずつ)

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	NA
(ア) 強い愛情がなければ、夫婦とはいえない……………	34.2	42.5	16.5	3.0	3.8
(イ) お互いのことをよく知らなければ、夫婦とはいえない……………	35.7	41.7	16.9	2.2	3.6
(ウ) 自分を犠牲にしても、相手に何かをしてあげたいと思うのが夫婦というものだ……………	28.3	41.7	20.7	5.1	4.2
(エ) 夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ……………	25.1	34.0	28.1	8.5	4.3

問 11. あなたはお孫さんがいらっしゃいますか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。(○は 1 つ)

1. いる	59.7	2. いない	37.3	NA 3.0
-------	------	--------	------	--------

→ 【7 ページの問 12 へお進みください】

【付問 (1) ～ (14) は、お孫さんのいる方におうかがいします】

付問 (1) お孫さんは何人いらっしゃいますか。下の枠内に数字をご記入ください。

<div style="border-bottom: 1px dashed black; width: 100%;"></div>	人 平均=2.8 人
---	------------

(2) お孫さんと過ごす時間と、NPO活動の時間配分に関する次の意見の中で、あなたご自身のお考えにもっとも近いものはどれですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

(○は1つ)

(n=806)	
1. 孫と過ごす時間は、NPO活動の時間を削っても、出来る限り多くしたい	17.7
2. 孫と過ごす時間は、どちらかという、NPO活動の時間よりも多くしたい	35.6
3. 孫と過ごす時間よりも、どちらかという、NPO活動の時間を多くしたい	29.3
4. 孫と過ごす時間を削っても、出来る限り、NPO活動の時間を多くしたい	5.7
	NA 11.7

(3) あなたの、(a)最年長のお孫さん(初孫)、(b)最年少のお孫さんについて、それぞれ年齢と性別をお答えください。枠内に数字をご記入いただき、あてはまる性別の番号に○をつけてください。お孫さんがお1人の場合は、最年長のお孫さんの欄にご記入ください。

(a) 最年長のお孫さん → 歳 → [1. 男 2. 女] 平均=9.4 歳

(b) 最年少のお孫さん → 歳 → [1. 男 2. 女] 平均=5.1 歳

(4) 最年少のお孫さんは、あなたの息子さんのお子さんですか、それとも娘さんのお子さんですか。あてはまる番号に○をつけてください。(お孫さんがお1人の場合、そのお孫さんについてのみお答えください。以下も同様です。)

(n=806)			
1. 息子の子ども	46.7	2. 娘の子ども	50.0 NA 3.3

(5) 最年少のお孫さんは、どなたと一緒に住んでいらっしゃいますか。次の人たちの中で、一緒に暮らしている人すべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

(n=806)			
1. 孫の父親	81.8	4. あなたの配偶者	5.6
2. 孫の母親	82.8	5. もう一方の祖父	4.5
3. あなた自身	6.3	6. もう一方の祖母	5.3
		7. その他の親族	5.8
		8. 親族以外の方	0.5
			NA 8.9

(6) 最年少のお孫さんは、あなたからみて、どこにお住まいですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=806)			
1. 同居している	6.3	5. 交通機関を使って1時間未満のところ	18.4
2. となり・同じ敷地内の別棟	3.0	6. 交通機関を使って2時間未満のところ	15.3
3. 歩いていけるところ	8.3	7. 交通機関を使って2時間以上のところ	28.7
4. 交通機関を使って30分未満のところ	16.9		NA 3.2

(7) ここ1年くらいの間に、あなたは最年少のお孫さんとどれくらい会いましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=806)					
1. ほとんど毎日	8.7	3. 週に1~2回	13.4	5. 年に数回	42.3
2. 週に3~4回	5.0	4. 月に1~2回	24.7	6. まったく会わなかった	3.2
					NA 2.7

(8) ここ1年くらいの間に、最年少のお孫さんの日常的な世話をしたり、預かったりしたことはどれくらいありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=806)					
1. ほとんど毎日	5.5	3. 週に1~2回	8.8	5. 年に数回	34.6
2. 週に3~4回	2.1	4. 月に1~2回	12.7	6. まったくなかった	33.1
					NA 3.2

(9) 最年少のお孫さんのお母さんは、働いていらっしゃいますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=806)					
1. 正規の社員・従業員	13.6	5. 働いていない			57.4
2. 派遣・嘱託・パートタイマーなど	19.7	6. その他(具体的に_____)			0.9
3. 内職	0.7	7. わからない			0.7
4. 自営業・自由業・家族従業員	4.2				NA 2.6

(10) 最年少のお孫さん、その親御さんとあなたとの関係はいかがですか。(ア)~(ウ)のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

非常に親密	まあ親密	あまり親密でない	全く疎遠
-------	------	----------	------

(n=806)					NA
(ア) 最年少のお孫さんとあなたとの関係	39.0	49.6	6.9	1.4	3.1
(イ) 最年少のお孫さんの母親と、あなたとの関係	40.8	47.0	7.2	1.7	3.2
(ウ) 最年少のお孫さんの父親と、あなたとの関係	26.6	57.6	10.2	1.4	4.3

(11) 最年少のお孫さんのことで、そのお孫さんの親御さんに、経済的な援助(お孫さんの教育や習い事・遊びの費用などの援助)をすることはありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=806)					
1. しばしばする	9.4	2. たまにする	50.5	3. 全くしない	37.6
					NA 2.5

(12) あなたは、ここ1年くらいの間に、最年少のお孫さんに対して次のようなことがらをどれくらいしましたか。(ア)～(ウ)のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

	しばしばあった	たまにあった	全くなかった	NA
(n=806)				
(ア) 助言を与えた……………	10.8	45.0	37.7	7.4
(イ) ご自身の子どもの頃のことを話した……………	6.8	39.8	45.7	7.7
(ウ) 友達や仲間のようになって、遊んだ……………	25.7	43.7	25.1	5.6

(13) あなたは、ここ1年くらいの間に、最年少のお孫さんと次のような活動をどれくらいしましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

	2回以上行った	1回行った	1度もない	NA
(n=806)				
(ア) 一緒に買い物や食事などに出かけた……………	61.8	17.0	17.0	4.2
(イ) 学校の行事や習い事の発表会、試合などを 見に行った……………	19.9	17.5	54.0	8.7
(ウ) 一緒に泊りがけの旅行に行った……………	13.9	21.6	57.7	6.8

(14) 最年少のお孫さんの育て方について、孫の親(自分の子ども)夫婦と、意見が対立することがありますか。(ア)～(オ)のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

	よくある	ときどきある	ほとんどない	全くない	NA
(n=806)					
(ア) 進学や勉強など子どもの教育について……………	0.9	9.3	34.2	50.2	5.3
(イ) 子どもの基本的な生活習慣などのつけ方について……………	3.0	24.4	36.1	31.5	5.0
(ウ) 子どもの健康管理について……………	4.2	27.3	36.0	27.3	5.2
(エ) 子どもの遊びについて……………	1.6	16.5	42.6	33.6	5.7
(オ) 子育て全般について……………	3.1	23.4	39.8	28.5	5.1

【全員の方に】

問12. 日常生活で困ったことが起きたとき、家族以外に信頼して相談できる人は何人くらいいますか。また、そのうちNALCで活動している人は何人ですか。下の枠内に人数をお答えください。

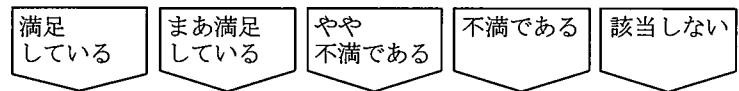
人 → そのうちNALCで活動している人

 人

*日常生活で困ったことが起きたとき、家族以外に信頼して相談できる人 平均=4.8人

*日常生活で困ったことが起きたとき、家族以外に信頼して相談できる人のうちNALCで活動している人 平均=1.1人

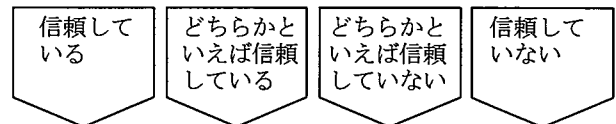
問13. あなたは、現在の生活にどの程度満足していますか。次の(ア)～(オ)のそれぞれの項目について、あなたのお気持ちに一番近い番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)



	満足 している	まあ満足 している	やや 不満である	不満である	該当しない	NA
(ア) 家庭	41.4	49.4	6.4	1.2		1.7
(イ) NALCの活動	6.6	49.3	26.6	9.7		7.8
(ウ) 仕事	13.2	26.4	4.8	1.0	48.7	5.9
(エ) 近隣関係	15.0	65.0	14.6	3.0		2.4
(オ) 生活全体	26.4	64.3	6.6	0.8		1.9

問14. 政治や行政についてお聞きします。

(1) あなたは次にあげる組織・制度・メディアを信頼していますか。次の(ア)～(コ)のそれぞれについて、あなたのお気持ちに一番近い番号1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)



	信頼して いる	どちらかと いえば信頼 している	どちらかと いえば信頼 していない	信頼して いない	NA
(ア) 国会	2.2	31.2	47.3	16.5	2.8
(イ) 政府・中央官庁	1.3	30.6	47.0	18.1	2.9
(ウ) 政党	1.4	24.4	49.8	21.0	3.4
(エ) 大企業	2.5	44.4	39.1	9.6	4.4
(オ) 地域の役所	4.7	59.5	27.8	4.8	3.3
(カ) 警察	8.5	58.5	24.6	5.5	2.9
(キ) 学校	5.4	57.5	27.6	4.8	4.7
(ク) 年金・保険制度	3.8	41.3	36.9	15.1	2.9
(ケ) 新聞	6.2	66.8	21.7	2.7	2.5
(コ) テレビ	3.4	54.0	33.5	6.6	2.6

(2) あなたは普段支持している特定の政党がありますか。(○は1つ)

1. 支持している政党がある	37.4	2. とくに支持している政党はない	59.9
			NA 2.7

→【問 15 へお進みください】

【「とくに支持している政党はない」と答えた方に】←

(3) あなたが特定の政党を支持していない理由は何ですか。次のなかから、あなたのご意見に近いものを2つまで選んで、あてはまる番号に○をつけてください。(○は2つまで)

(n=809)			
1. どの政党を支持しても、政治が変わりそうもないから			56.9
2. 政党の特徴がはっきりしないから			32.4
3. 政党というものがうまく機能していないから			49.1
4. 政治には関心がないから			3.8
5. 政治のことはむずかしいから			9.1
6. その他 ()			7.0 NA 1.7

【全員の方におうかがいします】

問15. あなたは、職業(収入を得るための仕事)についてどのような考えをお持ちですか。次の(ア)~(オ)のそれぞれについて、あなたのお気持ちに近い番号1つに○をつけてください。

そう思う	どちらかといえば そう思う	あまり そう 思わない	そう 思わない	どちらとも いえない	NA
------	------------------	-------------------	------------	---------------	----

(ア) 男性には自分の収入で家族を養う義務がある	43.4	39.5	10.2	2.5	1.8	2.6
(イ) 組織や企業に頼らず、自分の職業キャリアは自分自身で切り開くべきである	23.2	48.4	16.7	2.7	5.0	3.8
(ウ) 賃金や報酬は低くてもやりがいのある仕事をしたい	18.7	53.1	15.7	4.6	4.2	3.7
(エ) 職業に就いていない人は人間として一人前とは言えない	15.2	26.9	23.2	24.1	6.5	4.0
(オ) 高い収入や社会的地位を得るよりも、社会の役に立つ仕事をしたい	18.7	52.6	15.6	2.4	7.3	3.4

● 最後に、今までお聞きしたことを分析するために必要なことをおうかがいします。

F 1. あなたの性別を教えてください。あてはまる番号に○をつけてください。(○は1つ)

1. 男性	42.6	2. 女性	57.4
-------	------	-------	------

F 2. あなたの年齢を教えてください。枠内に数字をご記入ください。(平成16年1月1日現在)

<div style="border-bottom: 1px dashed black; width: 100%;"></div>	歳	平均=63.8歳
---	---	----------

F 3. あなたのお住まいはどちらですか。枠内にご記入ください。

	都道府県		市区町村
--	------	--	------

*居住地

北海道・東北 関東 中部 近畿 中国・四国 九州

9.5 36.1 6.5 43.7 3.0 1.1

*市郡規模

23区・政令指定都市 その他の市 郡部

24.3 68.2 7.5

F 4. あなたは週にどのくらいの時間NALCに参加していますか。枠内に数字をご記入ください。

1日		時間		週に		日
平均=1.7時間			平均=1.0日			

F 5. あなたのNALCでの位置づけは次のうちどれでしょうか。主なものの番号に○をつけてください。(○は1つ)

1. 理事・役員	7.6	
2. 事務局スタッフ(職員・会員)	9.8	
3. 現場スタッフ(職員・会員)	66.0	NA 16.7

F 6. NALCでのあなたの活動形態は次のうちのどれでしょうか。あてはまる番号に○をつけてください。(○は1つ)

1. 専従・フルタイム	2.8	2. 非専従・パートタイム	71.5	NA 25.7
-------------	-----	---------------	------	---------

F 7. あなたが最後に卒業された学校は、次のどれですか。あてはまる番号に○をつけてください。(○は1つ)

1. 旧制小学校・高等小学校・新制中学校	8.0	4. 大学・大学院	22.9
2. 旧制中学校・高等女学校		5. 専門学校・専修学校	8.4
旧制実業学校・新制高等学校	47.9	6. その他()	0.1
3. 旧制高等学校・高等師範学校・新制短大	11.0		NA 1.7

F 8. あなたが次のような出来事を経験したのは何歳のときでしたか。それぞれの枠内に数字をご記入ください。あてはまらない方は「該当しない」に○をつけてください。

(ア) あなたが(最初に)結婚したのは..... 歳のとき x 該当しない
平均=25.8歳

(イ) あなたの最初のお子さんが生まれたのは..... 歳のとき x 該当しない
平均=27.5歳

(ウ) あなたの一番下のお子さんが生まれたのは..... 歳のとき x 該当しない
平均=31.3歳

(エ) あなたが最初にボランティア活動に参加したのは… 歳のとき

平均=51.8歳

(オ) あなたがNALCに参加し始めたのは… 歳のとき

平均=59.2歳

F 9. あなたがNALC以外に所属して、実際に活動しているグループ・団体はありますか。次の中からあてはまるものすべてに○をつけてください。(○はいくつでも)

1. 趣味やスポーツのクラブ・サークル	55.4	8. 老人クラブや地域の同好会	18.2
2. 学習・研究の会や教養教室	24.2	9. 消費団体やボランティア、NPOなどの社会活動団体	22.4
3. 職場・職域関係の団体・グループ	9.5	10. 宗教団体・政治団体	7.2
4. 定年退職者の会など、旧職場の集まり	21.2	11. その他 (<input type="text"/>)	4.1
5. PTA・父母会や子供会・青少年団体	2.9	12. 所属していない	13.1
6. 難病や障害児・者を持つ家族の会	3.5		NA 4.6
7. 町内会・自治会や防災協会	24.6		

F 10. あなたは、現在、収入を伴う仕事に就いていますか。(○は1つ)

1. 就いている	35.8	2. 就いていない	60.5	NA 3.8
----------	------	-----------	------	--------

↓
【「就いている」方にお聞きします】

→【下のF12へお進みください】

F 11 (1) あなたの就業形態(正規の社員、嘱託、自営業など)は次のどれですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=483)			
1. 正規の社員・従業員	24.2	5. 自営業・自由業・家族従業員	26.1
2. パートタイマー	28.2	6. シルバー人材センター(高齢者事業団)	4.8
3. 嘱託	12.4	7. 内職	1.9
4. 派遣社員	1.0	8. その他 (<input type="text"/>)	0.6
			NA 0.8

(2) あなたの職種は次のどれですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=483)			
1. 専門技術職(研究職・技師等)	12.2	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業員	29.0
2. 管理職(役員・課長以上の管理職)	16.8	6. サービス職(添乗員・ホテルマン等)	7.5
3. 事務職(一般事務・営業・経理事務等)	20.9	7. その他 (<input type="text"/>)	4.8
4. 販売職(店員・セールス等)	6.4		NA 2.5

(3) あなたのお勤め先全体(本店・支店・工場なども含む)の従業員数はどれくらいですか。自営業の方は、業主自身のほかに家業を手伝っている家族も含めます。(○は1つ)

(n=483)					
1. 1~29人	41.6	3. 100~299人	9.5	5. 1000人以上	8.1
2. 30~99人	17.6	4. 300~999人	10.4	6. 官公庁・公務	6.6
					NA 6.2

4) あなた自身の労働時間はどれくらいですか。残業時間を含めてお答えください。休憩時間は除きます。小数以下は四捨五入してください。

(a) 1日の労働時間は。 平均 時間 平均=6.6時間

(b) 週に何日勤務していますか。 平均 日 平均=4.2日

【全員の方にお聞きします】

F12. あなたはこれまでに何回勤め先を変えましたか。最初の仕事をやめ、その後1度も仕事に就いていない方は「1回」とお答えください。1度も仕事に就いたことがない方は「0回」とお答えください。

※ 出向や転籍は転職に加えないでください。自営業からの転身や商売変えは転職に加えてください。

回 平均=2.3回

【引き続き、全員の方にお聞きします】

F13. あなたは定年退職を経験しましたか。(○は1つ)

1. 定年退職した(自営業で後継者に経営を譲った場合も含む)	36.9
2. 定年前に退職した・定年はないが退職した	35.6
3. 定年前で仕事に就いている・定年はない	→【F15へお進みください】 15.5
4. 収入を伴う仕事に就いたことがない	→【F15へお進みください】 3.9
	NA 8.1

【退職している方に。退職する直前のお仕事についてお答えください】

F14 (1) あなたの就業形態(正規の社員、嘱託、自営業など)は次のどれでしたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=979)			
1. 正規の社員・従業員	77.1	5. 自営業・自由業・家族従業員	4.1
2. パートタイマー	11.2	6. シルバー人材センター(高齢者事業団)	0.2
3. 嘱託	3.0	7. 内職	0.3
4. 派遣社員	0.3	8. その他()	0.2
			NA 3.6

(2) あなたの職種は次のどれでしたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=979)			
1. 専門技術職(研究職・技師等)	9.9	5. 技能職・技術補助・生産工程従事・作業者	15.0
2. 管理職(役員・課長以上の管理職)	31.7	6. サービス職(添乗員・ホテルマン等)	2.9
3. 事務職(一般事務・営業・経理事務等)	31.5	7. その他()	0.6
4. 販売職(店員・セールス等)	4.6		NA 3.9

(3) あなたのお勤め先全体（本店・支店・工場なども含む）の従業員数はどれくらいでしたか。自営業の方は、業主自身のほかに家業を手伝っている家族も含めます。（○は1つ）

(n=979)					
1. 1～29人	13.7	3. 100～299人	10.4	5. 1000人以上	37.9
2. 30～99人	12.0	4. 300～999人	11.2	6. 官公庁・公務	10.7
					NA 4.1

(4) あなた自身の労働時間はどれくらいでしたか。残業時間を含めてお答えください。休憩時間は除きます。小数以下は四捨五入してください。

(a) 1日の労働時間は。 平均 時間 平均=8.3時間

(b) 週に何日勤務していましたか。 平均 日 平均=5.3日

(5) あなたが退職したときの年齢はおいくつでしたか。定年退職した方は定年の年齢をお答えください。

歳 平均=52.8歳

【全員の方にお聞きします】

F15. あなたの世帯の主たる収入源は何ですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。（○は1つ）

1. 自分の仕事の収入	14.0	4. 不動産収入	1.7
2. 自分以外の家族・同居者の収入	18.1	5. 利息・配当金収入	0.3
3. 年金収入（公的・企業・個人年金）	61.9	6. その他（ <input type="text"/> ）	0.4
NA 3.6			

F16. 昨年1年間のあなたの世帯の年収はいくらくらいでしたか。年金や副業も含めて、税込みでお答えください。（○は1つ）

1. 200万円未満	6.4	6. 600万円以上700万円未満	9.1
2. 200万円以上300万円未満	14.7	7. 700万円以上800万円未満	5.6
3. 300万円以上400万円未満	18.2	8. 800万円以上1000万円未満	8.2
4. 400万円以上500万円未満	14.7	9. 1000万円以上1500万円未満	7.1
5. 500万円以上600万円未満	11.3	10. 1500万円以上 → (具体的に <input type="text"/> 万円)	1.6
NA 3.1			

F17. 現在、あなたとご一緒にお住まいの方をすべて選んで○をつけてください。（○はいくつでも）

1. 配偶者	82.5	6. 配偶者の父	1.0	11. 配偶者の祖母	0.1
2. 子ども	35.2	7. 配偶者の母	3.5	12. 兄弟姉妹	1.0
3. 子どもの配偶者	5.2	8. 自分の祖父	0.0	13. 孫	5.7
4. 自分の父	1.2	9. 自分の祖母	0.1	14. その他（ <input type="text"/> ）	0.3
5. 自分の母	3.8	10. 配偶者の祖父	0.0	15. なし（一人住まい）	9.8
NA 0.7					

F18. あなたには、配偶者がいらっしゃいますか。あてはまる番号に○をつけてください。(○は1つ)

<u>1. いる</u>	83.9	<u>2. いない</u>	15.5	NA 0.5
--------------	------	---------------	------	--------

→【以上で質問は終わりです。
どうもありがとうございました】

【配偶者のいらっしゃる方におうかがいします】

F19 (1) あなたの配偶者は、NALCの活動に参加していますか。(○は1つ)

(n=1,134)				
1. 定期的に 参加している	23.7	2. ときどき 参加している	22.5	3. 以前に参加 したことがある
				12.1
				4. 参加 していない
				40.7
				NA 1.0

(2) あなたの配偶者は、NALC以外でボランティアや地域の活動など、何か社会に役立つ活動に参加していますか。団体活動でも個人の活動でもかまいません。(○は1つ)

(n=1,134)				
1. 定期的に 参加している	28.2	2. ときどき 参加している	22.8	3. 以前に参加 したことがある
				11.3
				4. 参加 していない
				36.5
				NA 1.2

(3) あなたの配偶者は収入を伴う仕事に就いていますか。(○は1つ)

(n=1,134)				
<u>1. 就いている</u>	38.8	<u>2. 就いていない</u>	59.8	NA 1.4

→【以上で質問は終わりです。
どうもありがとうございました】

【現在、配偶者が収入を伴う仕事に「就いている」と答えた方に】

付問. あなたの配偶者の就業形態(正規の社員、嘱託、自営業など)は次のどれですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

(n=1,134)				
1. 正規の社員・従業員	36.1	5. 自営業・自由業・家族従業員	25.5	
2. パートタイマー	20.2	6. シルバー人材センター(高齢者事業団)	3.4	
3. 嘱託	10.7	7. 内職	1.4	
4. 派遣社員	1.1	8. その他()	1.1	
			NA 0.5	

◎ ご記入もれがないかお確かめのうえ、回収用封筒に封入してご返送ください。
ご協力どうもありがとうございました。

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生労働省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により昭和62年（1987年）11月に設立された財団です。当財団では、概ね50歳以上の企業在職者および企業退職者の方々を〈シニア〉と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム〈シニアプラン〉を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

- サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
- 年金生活設計（PLP）セミナーの研究開発
- 企業福祉に関する調査研究
- シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

この調査研究事業は、独立行政法人 福祉医療機構（長寿社会福祉基金）の交付金により財団法人長寿社会開発センターが助成したものです。

高齢化社会における

サラリーマンシニアの社会参加に関する研究

平成16年3月

財団法人 シニアプラン開発機構

Research Institute for Senior Life

〒105-0011 東京都港区芝公園1-8-21 芝公園リッジビル6階

TEL：03-5401-5600（代表）

FAX：03-5401-5610

<http://www.senior.or.jp>